

# 九州横断自動車道関係

## 埋蔵文化財調査報告

—15—

小郡市所在大板井遺跡の調査

上 卷

1988

福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—15—

小郡市所在大板井遺跡の調査

上 卷



## 序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、九州横断自動車道建設地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施しております。その間、小郡市所在の第3・4地点（大板井遺跡）については、調査を小郡市教育委員会にお願いしたもので、この報告は「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査第15集」として刊行します。

発掘調査から整理・報告書作成に日夜、御努力いただきました小郡市教育委員会ならびに関係者の方々に対して心より感謝申し上げます。

なお、本報告書が本県の埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、学術研究上でも貴重な報告となることを確信する次第であります。

昭和63年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 竹井 宏

## 序

小郡市大板井は、南部の水田地帯と北部の丘陵地帯の間に位置し、ゆるやかな低台地が広がっています。この低台地では、<sup>いにしえびと</sup>古人から現在我々の時代に至るまで、活発に生活が営まれており、近年の発掘調査によりその一部が明らかにされています。今回、この地に九州横断自動車道が建設されるに至り、道路下に埋没、もしくは工事に伴い破壊される箇所の埋蔵文化財調査を実施する運びとなりました。調査期間は昭和60年1月から12月までの丸一年に及び、各時代にわたる多様な古代人の生活の跡を我々は目にすることができます。

限られた期間と人員で行った調査故、充分な報告ではありませんが、本書が古代の小郡を考える上での糧となれば幸いに存じます。調査にあたりましては、福岡県教育庁文化課、日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所、アイサワ・岡崎共同企業体、地元大板井の皆様をはじめ関係各位の御理解と御協力を得ました。心から感謝申し上げます。

昭和63年3月31日

小郡市教育委員会

教育長 福田 大助

## 例　　言

1. 本書は、昭和59年度と昭和60年度に小郡市教育委員会が福岡県教育委員会から委託されて、九州横断自動車道建設のため破壊される、小郡市大板井に所在する埋蔵文化財を発掘調査した報告書である。
2. 遺構実測は、速水信也・柏原孝俊・池田栄史・山田あや子・岡村正子が分担して行い、遺物実測は、土器を速水・山田が、石器を柏原が主に行った。整図は芳野和代による。
3. 掲載写真のうち、遺構は主に速水・柏原の手により、一部を空中写真稻富に委託した。遺物は岡紀久夫による。
4. 出土した陶磁器の鑑定は、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課大橋康二資料係長にお願いし、詳細な御教示をいただいた。
5. 本書の執筆は、石器・土製品を柏原が担当し、他は速水が行った。
6. 本書の編集は速水が担当した。

# 本文目次

Iはじめに	
1. 調査に経る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の方法と経過	2
II位置と環境	6
III大板井遺跡VI区西の調査	11
1. 調査の概要	11
2. 遺構と遺物	11
(1) 弥生時代の住居跡	11
(2) 弥生時代の土壌	14
(3) その他の遺構	64
(4) 溝	69
(5) 石器・土製品	82
IV大板井遺跡VI区東の調査	89
1. 調査の概要	89
2. 遺構と遺物	91
(1) 弥生時代の土壌	91
(2) 中世から近世にかけての土壌・井戸	142
(3) 溝	157
(4) 石器・土製品	163
以下、下巻に掲載	

# 挿図目次

第1図	小郡市周辺の主な遺跡 (1/50,000)	4
第2図	大板井遺跡VI区・VII区周辺の地形図 (1/5,000)	5
第3図	大板井遺跡VI区西遺構配置区割図 (1/400)	10
第4図	1号住居跡実測図 (1/60)	12
第5図	1・2号住居跡・出土土器実測図 (1/4)	12
第6図	2号住居跡実測図 (1/60)	13
第7図	3号住居跡実測図 (1/60)	13
第8図	1号土壤実測図 (1/20)	14
第9図	1号土壤出土土器実測図① (1/4)	15

第10図	1号土壤出土土器実測図② (1/4) .....	16
第11図	2号土壤実測図 (1/20) .....	16
第12図	2号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	17
第13図	3号土壤実測図 (1/20) .....	18
第14図	3号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	19
第15図	4号土壤実測図 (1/20) .....	20
第16図	4号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	21
第17図	5号土壤実測図 (1/30) .....	22
第18図	5号土壤出土土器実測図① (1/4) .....	23
第19図	5号土壤出土土器実測図② (1/4) .....	24
第20図	5号土壤出土土器実測図③ (1/4) .....	25
第21図	6号土壤実測図 (1/30) .....	26
第22図	6号土壤出土土器実測図① (1/4) .....	27
第23図	6号土壤出土土器実測図② (1/4) .....	28
第24図	7号土壤実測図 (1/20) .....	29、30
第25図	7号土壤上層出土土器実測図① (1/4) .....	32
第26図	7号土壤上層出土土器実測図② (1/4) .....	33
第27図	7号土壤上層出土土器実測図③ (1/4) .....	34
第28図	7号土壤上層出土土器実測図④ (1/4) .....	35
第29図	7号土壤上層出土土器実測図⑤ (1/4) .....	36
第30図	7号土壤中層出土土器実測図 (1/4) .....	38
第31図	7号土壤下層出土土器実測図① (1/4) .....	39
第32図	7号土壤下層出土土器実測図② (1/4) .....	40
第33図	8号土壤実測図 (1/20) .....	41
第34図	8号土壤出土土器実測図① (1/4) .....	42
第35図	9号土壤実測図 (1/20) .....	43
第36図	9号土壤出土土器実測図① (1/4) .....	43
第37図	12号土壤実測図 (1/40) .....	44
第38図	12号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	44
第39図	13号土壤実測図 (1/60) .....	45
第40図	13号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	46
第41図	14号土壤実測図 (1/40) .....	47
第42図	14号土壤出土土器実測図① (1/4) .....	48
第43図	14号土壤出土土器実測図② (1/4) .....	49
第44図	15号土壤実測図 (1/40) .....	50
第45図	15号土壤A出土土器実測図 (1/4) .....	51
第46図	15号土壤B出土土器実測図 (1/4) .....	52
第47図	16号土壤実測図 (1/40) .....	52
第48図	16号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	53
第49図	19号土壤実測図 (1/40) .....	54
第50図	19号土壤出土土器実測図 (1/4) .....	55

第51図	21号土壤実測図（1/60）	56
第52図	21号出土土器実測図①（1/4）	57
第53図	21号出土土器実測図②（1/4）	58
第54図	24号土壤出土土器実測図（1/4）	58
第55図	11・17・18・22号土壤出土土器実測図（1/4）	59
第56図	24号土壤実測図（1/40）	60
第57図	25号土壤実測図（1/40）	61
第58図	25号土壤出土土器実測図（1/4）	62
第59図	26号土壤実測図（1/40）	63
第60図	26号土壤出土土器実測図（1/4）	63
第61図	10号土壤実測図（1/20）	64
第62図	10号土壤出土遺物実測図（1/2）	65
第63図	20号土壤実測図（1/40）	65
第64図	20号土壤出土土器実測図（1/4）	66
第65図	23・27号土壤実測図（1/60）	67
第66図	27号土壤出土遺物実測図（1/3）	69
第67図	2号溝出土遺物実測図（1/4）	71
第68図	9号溝出土陶磁器実測図①	73
第69図	9号溝出土陶磁器実測図②	74
第70図	13号溝出土陶磁器実測図①	75
第71図	13号溝出土陶磁器実測図②	76
第72図	18号溝出土陶磁器実測図	77
第73図	VI区西出土石斧実測図（1/2）	83
第74図	VI区西出土石庖丁・石鎌・石剣実測図（1/2）	84
第75図	VI区西出土スクレイパー・錐実測図（1/2）	85
第76図	VI区西出土砥石実測図（1/3）	86
第77図	VI区西出土石製品・土製品実測図（1/2）	87
第78図	大板井遺跡VI区東遺構配置区割図（1/400）	90
第79図	1号土壤実測図（1/40）	91
第80図	1号土壤出土土器実測図（1/4）	91
第81図	2号土壤実測図（1/40）	92
第82図	2号土壤出土土器実測図（1/4）	93
第83図	3号土壤実測図（1/40）	93
第84図	3号土壤出土土器実測図①（1/4）	94
第85図	3号土壤出土土器実測図②（1/4）	95
第86図	4号土壤実測図（1/40）	95
第87図	4号土壤出土土器実測図①（1/4）	96
第88図	4号土壤出土土器実測図②（1/4）	97
第89図	4号土壤出土土器実測図③（1/6）	98
第90図	5号土壤実測図（1/40）	99
第91図	5号土壤出土土器実測図（1/4）	99

第92図	6号土壤実測図(1/40) .....	100
第93図	6号土壤出土土器実測図(1/4) .....	100
第94図	7号土壤実測図(1/40) .....	101
第95図	7号土壤出土土器実測図(1/4) .....	102
第96図	8号土壤実測図(1/40) .....	102
第97図	9号土壤実測図(1/40) .....	103
第98図	9号土壤出土土器実測図(1/4) .....	104
第99図	10号土壤実測図(1/40) .....	105
第100図	10号土壤出土土器実測図(1/4) .....	105
第101図	11号土壤実測図(1/40) .....	106
第102図	11号土壤出土土器実測図①(1/4) .....	107
第103図	11号土壤出土土器実測図②(1/4) .....	108
第104図	11号土壤出土土器実測図③(1/4) .....	109
第105図	11号土壤出土土器実測図④(1/4) .....	110
第106図	12・23号土壤実測図(1/60) .....	111
第107図	12号土壤出土土器実測図①(1/4) .....	112
第108図	12号土壤出土土器実測図②(1/4) .....	113
第109図	13号土壤実測図(1/40) .....	114
第110図	13号土壤出土土器実測図(1/4) .....	115
第111図	14号土壤実測図(1/40) .....	116
第112図	14号土壤出土土器実測図(1/4) .....	117
第113図	15号土壤実測図(1/40) .....	117
第114図	15号土壤出土土器実測図(1/4) .....	118
第115図	16号土壤実測図(1/40) .....	119
第116図	16号土壤出土土器実測図(1/4) .....	119
第117図	17号土壤実測図(1/40) .....	119
第118図	17号土壤出土土器実測図(1/4) .....	120
第119図	18号土壤実測図(1/40) .....	120
第120図	18号土壤出土土器実測図(1/4) .....	121
第121図	19号土壤実測図(1/40) .....	122
第122図	19号土壤出土土器実測図(1/4) .....	123
第123図	20号土壤実測図(1/40) .....	123
第124図	20号土壤出土土器実測図①(1/4) .....	124
第125図	20号土壤出土土器実測図②(1/6) .....	125
第126図	20号土壤出土土器実測図③(1/4) .....	125
第127図	21号土壤実測図(1/40) .....	126
第128図	21号土壤出土土器実測図①(1/4) .....	127
第129図	21号土壤出土土器実測図②(1/4) .....	128
第130図	22号土壤実測図(1/60) .....	128
第131図	22号土壤出土土器実測図(1/4) .....	129
第132図	23号土壤出土土器実測図(1/4) .....	129

第133図	24号土壤実測図（1/20）	130
第134図	24号土壤出土土器実測図（1/4）	131
第135図	25号土壤実測図（1/30）	132
第136図	25号土壤出土土器実測図（1/4）	133
第137図	26号土壤実測図（1/20）	134
第138図	26号土壤出土土器実測図（1/4）	135
第139図	27号土壤実測図（1/30）	136
第140図	27号土壤出土土器実測図①（1/4）	137
第141図	27号土壤出土土器実測図②（1/4）	138
第142図	27号土壤出土土器実測図③（1/4）	139
第143図	27号土壤出土土器実測図④（1/4）	140
第144図	28号土壤実測図（1/40）	141
第145図	28号土壤出土土器実測図（1/4）	141
第146図	29号土壤出土土器実測図（1/4）	142
第147図	30号土壤実測図（1/20）	143
第148図	30号土壤出土遺物実測図（1/3）	144
第149図	31号土壤実測図（1/20）	145
第150図	31号土壤出土遺物実測図（1/3）	147
第151図	32号土壤実測図（1/20）	148
第152図	32号土壤出土遺物実測図（1/3）	149
第153図	33号土壤出土遺物実測図（1/3）	149
第154図	33号土壤実測図（1/20）	150
第155図	34号土壤実測図（1/30）	151
第156図	35号土壤実測図（1/20）	152
第157図	36号土壤出土遺物実測図（1/3）	152
第158図	37号土壤出土遺物（1/2）	152
第159図	36号土壤実測図（1/30）	153
第160図	37号土壤実測図（1/20）	154
第161図	38号土壤実測図（1/20）	155
第162図	39号土壤実測図（1/20）	156
第163図	14号溝出土陶磁器実測図①	158
第164図	14号溝出土陶磁器実測図②	159
第165図	14号溝出土陶磁器実測図③	160
第166図	14号溝出土陶磁器実測図④	160
第167図	VI区東出土石斧実測図①（1/2）	164
第168図	VI区東出土石斧実測図②（1/2）	165
第169図	VI区東出土石庖丁実測図（1/2）	165
第170図	VI区東出土石剣実測図（1/2）	166
第171図	VI区東出土石鏃実測図（1/2）	167
第172図	VI区東出土スクレイバー・錐実測図（1/2）	168
第173図	VI区東出土砥石実測図（1/2・1/3）	169

第174図 VI区東出土紡錘車実測図 (1/2) .....	170
第175図 VI区東出土土製品実測図 (1/2) .....	171
第176図 VI区西・東出土旧石器実測図 (1/2) .....	172

## 表 目 次

表 1 小都市周辺の主な遺跡 .....	3
表 2 VI区西 9号溝出土陶磁器一覧 .....	77
表 3 VI区西13号溝出土陶磁器一覧 .....	79
表 4 VI区西18号溝出土陶磁器一覧 .....	81
表 5 VI区西出土石器・土製品重量石材一覧 .....	87
表 6 VI区西出土石器・土製品器種別数量一覧 .....	88
表 7 VI区東14号溝出土陶磁器一覧 .....	161
表 8 VI区東出土石器・土製品重量石材一覧 .....	172
表 9 VI区東出土石器・土製品器種別数量一覧 .....	173

## 付 図

付図 1 大板井遺跡VI区遺構配置図 (1/200)	
付図 2 大板井遺跡VII区遺構配置図 (1/200)	
付図 3 大板井遺跡 I～III区・V～VII区の位置と遺構配置略図 (1/1,000)	

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

長崎と大分を結ぶ九州横断自動車道は昭和44年に基本計画が決定され、佐賀県鳥栖市～大分県日田市間については昭和48年に建設大臣の施工命令が発せられている。福岡県教育委員会では昭和44年度に、路線内の分布調査を実施し、この結果を一部受けてルート決定がなされ、昭和51年度の段階で60ヶ所前後の要調査必要箇所があげられている。路線内の発掘調査は昭和54年度に開始され、以後昭和62年3月の鳥栖～朝倉間の供用開始に向けて発掘調査、工事とも本格的に行われることになった。

このうち、小郡工事区(7.5km)については、第1～7地点の7ヶ所について発掘調査の必要が生じ、昭和58年度に福岡県教委による第1地点(正尻遺跡)の調査が完了している。昭和59年度には、工事の猛烈な進捗状況に対応するため、福岡県教委から小郡市教委へ発掘調査の一部委託の要請がなされ、昭和59年4月より両者で協議を重ねることになった。この結果、第3、第4地点の調査を小郡市教委が担当することになり、福岡県知事と市長との間に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が締結され、同年12月から第4地点の調査を行う運びとなった。

## 2. 調査の組織

調査に携った機関、個人は次の通りである。

小郡市教育委員会	教育長	福田大助
	教育部長	安永茂歳
	社会教育課長	藤田静生(前任) 平山稔(前任) 松尾友喜
	社会教育係長	出利葉哲也(前任) 永田真二
	埋文センター所長	藤江忠男
	庶務	高倉秀雄(前任) 米倉百合子
	技術職員	速水信也(調査担当) 柏原孝俊

### 調査協力

池田栄史(当時琉球大学法文学部史学研究室助手)

日高正幸(福岡県教育委員会文化課臨時職員)

調査補助員 山田あや子、岡村正子

参加学生 豊見山禎、行時志郎、長谷部洋一、名取伸幸、八木沢一郎、藤田正人、吉満庄司、江藤和幸、酒井いずみ、玉城守、宮崎俊孝(以上琉球大学)、吉村靖徳(別府大学)、

深江英憲（奈良大学）

調査・整理にあたっては、宮小路賀宏課長技術補佐、栗原和彦参事補佐、井上裕弘技術主査、木下修技術主査をはじめとする福岡県教委文化課甘木調査事務所の方々、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課大橋康二資料係長に適切な指導、助言を賜った。心から感謝申し上げます。

### 3. 調査の方法と経過

調査地は通称第3地点、第4地点の2ヶ所にわたる。小郡市教委では、昭和55年より大板井地区の調査を進め、既に調査した箇所を大板井Ⅰ～V区と呼称している。よって、今回の対象地域も、第3地点を大板井VII区、第4地点を大板井VI区としてあつかい、第4地点については中央を道路により分断されている関係上、便宜的にこれを大板井VI区西、大板井VI区東と区分して以下ではあつかう。

調査は、第4地点（大板井VI区）の通称大板井高架橋の橋梁工事を先に着手したいという日本道路公団の要望により、第4地点の西半部（大板井VI区西）から開始することが県教委、市教委、公団の三者協議で決定していた。この為、昭和59年12月よりその準備にとりかかり、昭和60年1月8日より現地での発掘調査を開始した。この間、重機による表土剥ぎや県教委日高正幸氏による座標からの杭起こしを行った。また、工事用車輌通行のため、第4地点西、東は調査区北側を幅15m前後残してこれを工事用道路とし、残りの部分の調査を先行させる手順となった。従って、第4地点西→第4地点東→第4地点北側工事用道路部分の順で調査を行い、第3地点はその後に調査にはいることになる。

1月より開始した大板井VI区西の調査では、住宅立退き時に掘られた廃棄物用の大穴がいたるところに存在し、そこから出る住宅の基礎に使用されたと考えられる大量のブロック等や瓦の除去が、作業進行にとって大きな妨げとなった。また、長年居住地であった為か、地盤、埋土とも異常と思える程硬く、アルミ製の手スコ等は3日ともたず、密集した遺構や先のゴミ穴とともに調査員、作業員泣せの現場でもあった。実測は、土器溜め土壙、井戸等は1/10で個別に作成し、全体は2m×2mのメッシュを全面に組み、遺構の重複度に応じてこれを2度、3度と組み直し1/20の実測を行った。2月14日には、大板井VII区の東側に建設されるカルバートボックスの部分の試掘を、工事担当者アイサワ・岡崎共同企業体の要請により実施、遺構が存在しないことを確認の上これを伝える。この企業体の方々には、調査終了時に至るまで、排土搬出や調査事務所の移転、その他色々な助力をいただき、調査の進行に協力していただいた。

4月16日には、空中写真撮影を終了し、大板井VI区西の調査は完了する。

4月18日には、大板井VI区東に着手する。既に4月1日からは福岡県教委柏原孝俊調査補助員（現小郡市教委技術職員）の来援を得てVI区東にのぞむことになる。遺構はVI区西と同様に、弥生時代土壙、中世と考えられる井戸、江戸～明治にかけての溝等変化に富む。6月中旬に至

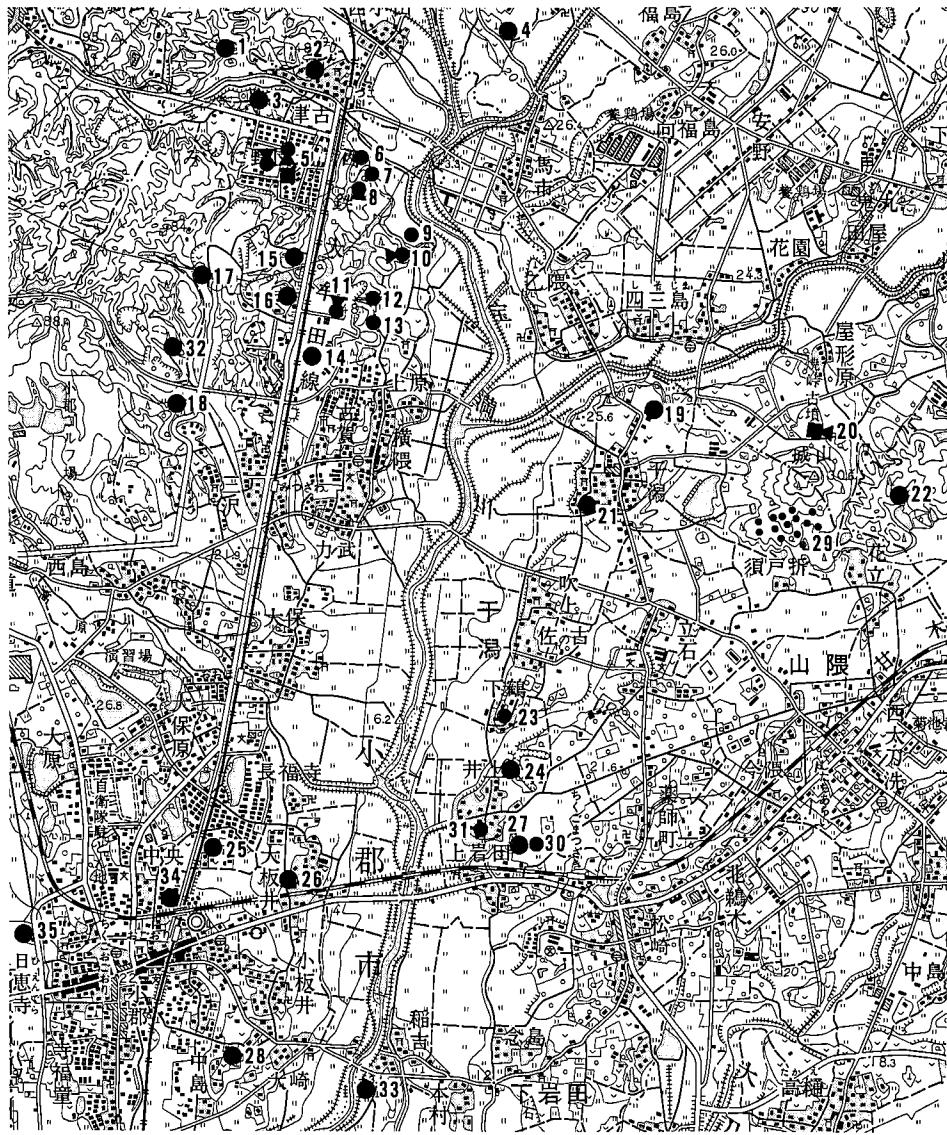
り、作業員を増員し、南側を走る大溝の掘り下げにあたらせる。この頃から、工事用道路を通過する車輛が増加し、その騒音、振動、砂ボコリに悩まされる毎日となる。同時にVI区西においての橋梁工事も本格的に始まり、安全面には一層の神経をとがらせることになった。8月上旬にはVI区東の調査は終了し、明け渡し後公団により工事用道路を南側へ付け換える工事が行なわれる。その間調査は一時休止し、工事終了を待って旧工事用道路の表土を除去し同時に杭も移設する。

8月22日旧道路部分の調査を開始。東側については、橋梁工事開始前に調査を終了しないと極めて危険なため、これを先行することにする。いずれにしろ、大板井VI区は工事に追いまくられ、窮屈な調査日程になったことは否めない。

10月15日大板井VII区の調査を開始する。すでに周囲は盛土工事により高く埋めたてられ、排土搬出が困難なため、ベルトコンベアを使用し作業を行う。VI区では認められなかった、弥生・古墳時代の住居群を検出する。反面、VI区を縦横無尽に走っていた近・現代の溝は姿を消し、地点によって様々な変化をみせる。祭祀とも考えられる、弥生時代の土器溜め土壙が数多く存在し、その実測に調査員、補助員が追われる日が続く。そして12月28日午前、調査終了間ぎわに搅乱と考えていた土壙下より小児用甕棺墓を検出、一同大いに驚き、作業を午後まで延長する。同時に、今まで祭祀土壙と考えていた長方形土壙の存在に疑問を生じ、墓としての検討を今後必要とするようになった。このVII区の調査をもって、小郡市教委が委託した九州横断自動車道関係の調査は終了することになった。調査は昭和60年1月から12月末日までの丸一年に及び、雨天の日を除いてほとんどを現場での調査についやした。事故なくして終了したのは作業員、関係各位の協力によるところが大きい。なお、出土品は、昭和61年3月15日から甘木市歴史資料館で催された、横断道関係の出土品展「いま掘りおこす朝倉路」に出品し、一般に公開された。

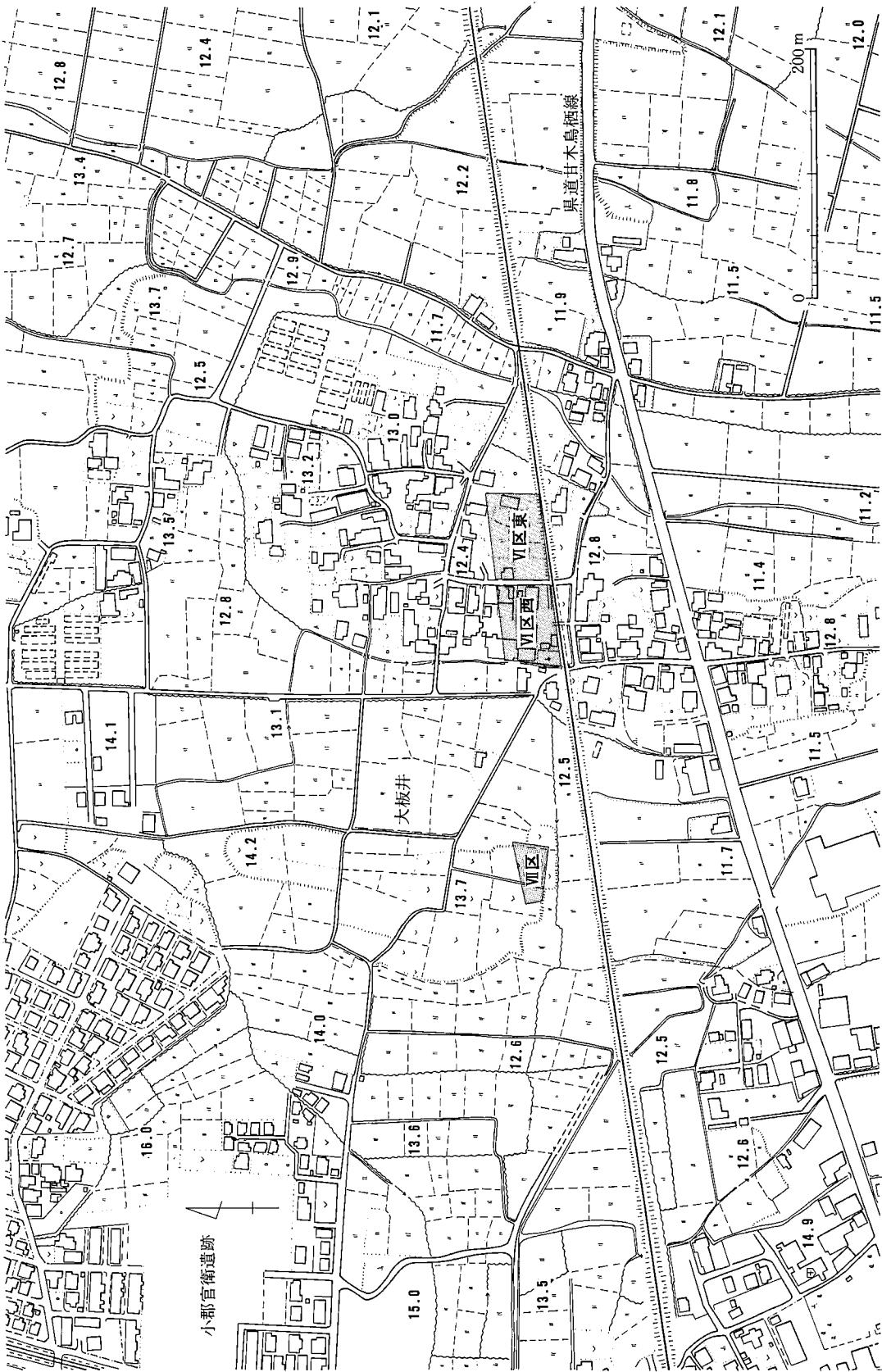
表1 小郡市周辺の主な遺跡

	遺跡名	時代	概要		遺跡名	時代	概容
1	津古牟田	弥生	集落	12	横隈鍋倉	弥生・古墳	集落
2	津古内畑	弥生・古墳	集落・墓地	13	横隈狐塚	弥生	甕棺墓地
3	津古東宮原	弥生	甕棺墓地	14	横隈山	弥生	集落
4	東小田峰	弥生	甕棺墓地	15	三沢	弥生	集落
5	津古古墳群	古墳	前方後円墳	16	三沢蓬ヶ浦	弥生	集落
6	津古土取	縄文・弥生・中世	集落・墓地	17	ハサコの宮	弥生	甕棺墓地
7	津古生掛	弥生・古墳	階段状集落	18	三沢栗原	弥生・古墳	集落
8	津古生掛古墳	古墳	前方後円墳	19	干潟	弥生・歴史	墓地・集落
9	三国の鼻IV区	古墳・中世	集落・水田	20	焼峠古墳	古墳	前方後円墳
10	三国の鼻1号墳	古墳	前方後円墳	21	干潟下屋敷	弥生	甕棺墓地
11	横隈山古墳	古墳	前方後円墳	22	山隈窯跡	古墳	須恵器窯



第1図 小都市周辺の主な遺跡(1/50,000)

	遺跡名	時代	概要		遺跡名	時代	概要
23	下鶴古墳	古墳	円墳	30	高松家墓地	江戸	庄家の墓
24	井上北内原	弥生・古墳	墓地・集落	31	井上廃寺	歴史	寺院址
25	小郡官衙	弥生・歴史	集落・郡衙	32	三沢北松尾口	弥生	集落
26	大板井	弥生・古墳	集落	33	稻吉	中世	集落
27	井上薬師堂	弥生～歴史	集落	34	小郡前伏	歴史	集落
28	大崎小園	弥生・古墳	集落	35	正尻	弥生	集落
29	花立山古墳群	古墳	大群集墳				



第2図 大板井遺跡VI区・VII区周辺の地形図(1/5,000)

## II. 位置と環境

大板井遺跡VI区は、福岡県小郡市大字大板井字屋敷、同VII区は同じく大字大板井字原口、字松本に所在し、そこは現在の行政区小郡市のほぼ中央に位置している。小郡市は市域を南北に流れる宝満川によって東西に分断され、さらにそれに付随する小河川によって区分され、場所によって様々な地勢をみせている。

宝満川西岸では、北部に、背振山塊から東へ派生する三国丘陵が広がっている。この丘陵は標高30m～80mの起伏に富んだ地形を呈し、小河川により場所によっては奥深い谷を形成し、それは現在の三沢の地名の由来ともなっている。三国丘陵の中央を東西に流れる宝珠川により、この丘陵は南北に分かれ、地勢としては大差ないものの北側では標高100mに近い箇所もある。

南に下ると、現在の西鉄大保駅、小郡駅を中心として、標高15～20mの低台地がゆるやかな起伏をみせて広がっている。この低台地は西を秋光川、東を宝満川と比較的大きな河川によって東西から区分され、独立した観が強い。秋光川西岸の現在の鳥栖市域は、背振山塊につづく扇状地や独立した丘陵が広がり、小郡市域の地勢とは大きく異なっている。

宝満川東岸に目を移せば、それにそった低段丘が南北に広がり、その低段丘は草場川によって二分されている。標高20～25mのこの低段丘は、小郡市域では現在の県道鳥栖一甘木線を境にしだいに南へ標高を下げ、南部の低地へと続いている。

小郡市域南部では、標高7～10mの低地が広がり、現在はそのほとんどが水田となっている。しかし、詳細に見わたすと、微高地が点々と存在し、それは現在の居住地とほぼ一致している。このように、小郡市域では、北部、中部、南部、さらに宝満川東、西岸でそれぞれ特色のある地勢を呈している。

歴史的な環境については、小郡市既刊の報告書や片岡宏二氏<sup>(1)</sup>、小池史哲氏<sup>(2)</sup>によって、各時代の詳細な記述がなされているのでそちらを参照願いたい。以下では、弥生時代から江戸時代にかけての最近の傾向を時代を下りながら述べる。

近年の調査は、北部の三国丘陵に集中する傾向にあり、特に第9学区県立高等学校建設や中九州ニュータウンみくに野第二地区の施工等に伴う大規模な調査が増えている。この為、その肯定は別として、遺跡の全容をほぼ明らかにしうる例が多く、小郡の古代史を組みたてる上では非常に貴重な資料を提供しているといえる。

この北部丘陵地帯の、横隈鍋倉<sup>(3)</sup>、横隈北田<sup>(4)</sup>、三国の鼻<sup>(5)</sup>の3遺跡からは朝鮮系無文土器を多量に出土している。さらに、すでに調査されたみくに野東<sup>(6)</sup>、横隈山<sup>(7)</sup>の両遺跡出土のそれを合せるとその量は国内一になり、この周辺が「渡来人の集落跡とは言わないまでも、渡来人に関する何らかの集落跡」ととらえる見解がある<sup>(8)</sup>。この傾向は西側に位置する、谷を隔てた、朝鮮系無文土器を伴出しうる時期の集落跡と考えられる三沢蓬ヶ浦<sup>(9)</sup>には現在のところ指摘すること

ができない。しかし、今後は一見して弥生土器と見分けがつく口縁部はともかく、底部に関しては従来の弥生土器とは異なる成形や調整をもつものについて注意すべきであろう。

集落については、横隈北田で弥生時代前期の環濠集落が検出されている。環濠をもつ例は、横隈山第7地点が前期の所産ととらえられ、環濠内にはその時期の住居跡や袋状竪穴が検出されている。同じく前期の墓地では、横隈狐塚II区<sup>(10)</sup>、三国の鼻遺跡で甕棺墓が初めて確認され、甕棺墓出現の上限を前期前半にまでさか上らせうるに至った。ただし、両者とも小児用と考えられる小形棺のみで、福岡県筑紫郡那珂川町松木<sup>まつのき(11)</sup>に存在するような成人用大形棺はいまだ出土していない。三国の鼻の墓地構成をみると、前期の段階では成人用としては組合せ式木棺が使用されており、成人用大形甕棺の出現は前期末、中期初頭を待つ傾向にある。

三国丘陵での人間の活動は中期初頭を境にして断絶する傾向にある。これは調査域の拡大とともに今後変化する性格のものであるが、現在の中期初頭以後の主体は南部の大板井遺跡<sup>(12)</sup>周辺の低台地上にある。この低台地上では、中期代の住居跡が密集する傾向をみせ、中期前葉以降の丹塗り土器を出土する、祭祀土壙とも考えられる土壙が多数検出され、今回の大板井VI、VII区も例外ではなく当地の特色といえるものである。中期前半代の甕棺は、三国丘陵内でも出土しており、近い将来この時期の集落跡がかの地でも発見される可能性は大で、その内容の比較検討が待たれるところである。また、市域南部の標高わずか7mの低地にも、中期代の集落が進出しており<sup>(13)</sup>、低地の中の微高地に点々と集落が営まれていた可能性は大きい。現在は低地の水田下についても厳しいチェックが必要となっている。宝満川東岸では、前期末から中期後半代にかけて、ほぼ間断なく集落は営まれ<sup>(14)</sup>、安定した様相を呈している。

中期代の甕棺墓地は、市域や周辺の隨處に見受けられる。しかし、中期全般を通して継続的に墓地が営まれる例は少なく、中期中頃、具体的にいえば須玖式の古い段階までに墓地を終了する例が多く、千鶴<sup>(15)</sup>、津古東宮原<sup>(16)</sup>、ハサコの宮<sup>(17)</sup>、北牟田<sup>(18)</sup>、正原等<sup>(19)</sup>はそれに含まれる。対して、須玖式の新しい段階以降に新たに墓地は営まれ始め、横隈狐塚II、井上北内原<sup>(20)</sup>はその例である。このように、須玖式を境として甕棺墓地の終了と開始に一線を画す傾向は、当地のみならず周辺地域や福岡平野にも広く認められる。加えて、この時期の前後では、墓地構成の面でも大きな相異が伺える。中期前半代が春日市門田、筑紫野市永岡に代表されるような二列埋葬やそれに近い配列をとつて比較的整然と並ぶのに対し、中期後半代ではいくつかの小群が集合して混沌とした墓地構成を呈す。甘木市栗山遺跡<sup>(21)</sup>では、その両者が墓域を異にして展開している様が見事に伺える。

中期甕棺墓の副葬品としては、三国丘陵上の墓地よりも、夜須町東小田峰<sup>(22)</sup>や大板井<sup>(23)</sup>（銅戈7口）のように低段丘や低台地上にて発見される例が多く、丘陵上の甕棺墓地は物質的に貧弱である。最近、筑紫野市隈・西小田地区の丘陵上の甕棺墓地から細型銅剣1例を伴出したが、現時点で1,500基の甕棺を調査済、もしくは調査中と聞く<sup>(24)</sup>。

弥生時代後期の集落は、三沢栗原Ⅲ・Ⅳ区<sup>(25)</sup>の調査以降例を増している。三国の鼻一号墳の墳丘下には、環濠を伴う後期の集落がある<sup>(26)</sup>。これらには鉄器、特に工具類が伴出する例が多く、三沢栗原Ⅲ・Ⅳではその数は40点余を数える。

同時に、鏡片を伴出する例<sup>(27)</sup>も多い。後期の墓地は横隈狐塚Ⅱがほぼ全容を知りうる例であり、横口式や足元掘込等多様な土壙墓が存在している。また、集落と同様に多くの鉄製の工具をそこには認めることができ、その普及の度合いを物語っている。

古墳時代にはいると、三国丘陵には津古古墳群、三国の鼻1号墳<sup>(28)</sup>、津古生掛古墳<sup>(29)</sup>等が築造され、前期古墳の集中する地域となり、その地理的な重要性を伺い知ることができる。津古生掛古墳は庄内式併行期の新しい段階の所産ともいわれ、その年代とともに特異な墳形、周溝墓を伴う集団墓地的な墓地構成は、九州における前方後円墳の出現期やその在り方に問題を投げかけている。これに続く三国の鼻1号墳は全長66mを測る筑後地方最大の前期古墳で、その墳形や大量の二重口縁壺の出土は、まさにこれをもって定形化された前方後円墳の出現としてとらえることができよう。

集落では、大崎小園<sup>(30)</sup>で庄内系土器が認められ、搬入土器こそないもののその器形、技法に庄内式土器の影響を色濃く認めうる。

後期古墳に関しては、盗掘や石抜きによってその全容を知りうる例は少ない。三国丘陵内には3～6基を単位とする小群集墳が点在する程度であるが、横隈狐塚Ⅱ区1号墳は径25mの円墳で馬具や金銅品等を出土している。群集墳の主体は、宝満川東岸の花立山山麓に求められ、総数500基ともいわれる大群集墳群が存在している。この時代の集落は、南部の低地から北部の丘陵上にまで普遍的に存在する。このうち、津古生掛遺跡<sup>(31)</sup>は時期幅をもつ百数十軒の住居跡で構成される集落跡で、自然地形の斜面をL字形にカットして造成を行い集落を築くという特異な例である。そこには、カマド祭祀と考えられる例が多く認められ、手捏ね土器・臼玉等を出土している。前後するが、三国丘陵の急斜面には、バイラン土地山をくり抜いた横穴が近年徐々に検出され、それは5世紀後半～6世紀末と幅広い年代を呈している<sup>(32)</sup>。

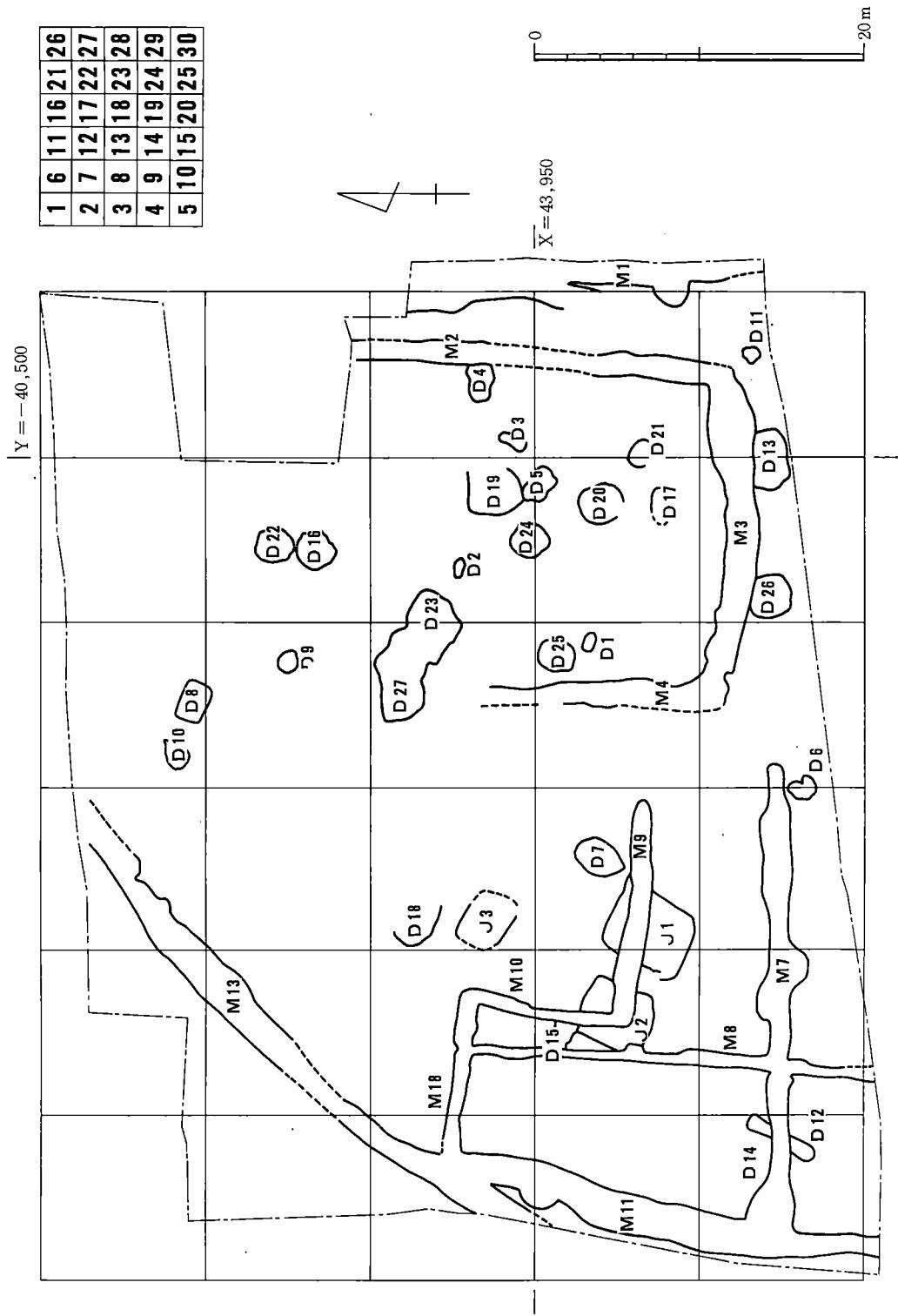
歴史時代では、井上薬師堂遺跡<sup>(33)</sup>で木簡・墨書土器・山田寺系瓦が出土している。横隈狐塚Ⅲ区<sup>(34)</sup>、津古中勢<sup>(35)</sup>では9世紀前半の蔵骨器を認めることができる。

津古土取<sup>(36)</sup>では、方墳状の中世墳墓の調査が行われており、その実態が明らかになる日は近い。江戸時代の墳墓としては、宝暦の百姓一揆の罪で処刑された高松八郎兵衛一門の墓地が井上薬師堂に所在し、九州横断道関係の調査でその全容が明らかになった。

## 註及び参考文献

- (1) 小郡市教委「三国の鼻遺跡 I」小郡市文化財調査報告書第25集 1985
- (2) 福岡県教委「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 7」 1986
- (3) 小郡市教委『横隈鍋倉遺跡』小郡市文化財調査報告書第26集 1985
- (4) 昭和60年度小郡市教委調査
- (5) 昭和60年度小郡市教委調査
- (6) 福岡県教委調査
- (7) 小郡市教委「横隈山遺跡」 1974
- (8) 中島達也「横隈鍋倉遺跡出土の朝鮮系無文土器について」(3)に同じ
- (9) 福岡県教委「三沢蓬ヶ浦遺跡」福岡県文化財調査報告書第66集 1984
- (10) 小郡市教委「横隈狐塚遺跡 II」小郡市文化財調査報告書第27集 1985
- (11) 那珂川町教委「松木遺跡 I」那珂川町文化財調査報告書第11集 1984
- (12) 小郡市教委「大板井遺跡 I ~ V」小郡市文化財調査報告書第11・14・13・22・30集 1980~1985
- (13) 小郡市教委「八坂石塚遺跡 I ~ III」小郡市文化財調査報告書第19・21集 1982~1983
- (14) 小郡市教委「井上北内原遺跡」小郡市文化財調査報告書第20集 1982
- (15) 小郡市教委「干潟遺跡」小郡市文化財調査報告書第16集 1982
- (16) 小郡市教委「津古・東宮原遺跡」小郡市文化財調査報告書第18集 1982
- (16)~(19) 福岡県教委「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI」中巻 1979
- (20) (14)に同じ
- (21) 甘木市教委「栗山遺跡」甘木市文化財調査報告第12集 1982
- (22) 昭和61年夜須町教委調査、現在も継続中
- (23) 小郡市教委「大板井遺跡 IV」小郡市文化財調査報告書第22集 1984
- (24) 草場啓一氏御教示
- (25) 小郡市教委「三沢栗原 III・IV」小郡市文化財調査報告書第23集 1984
- (26) (5)に同じ
- (27) 小郡市教委「三沢栗原 V」小郡市文化財調査報告書第28集 1985  
同「みくに保育所内遺跡」同第10集 1980
- (28) 小郡市教委「三国の鼻遺跡 I」小郡市文化財調査報告書第25集 1985
- (29) 昭和61年度小郡市教委調査
- (30) 小郡市教委「大崎小園遺跡」小郡市文化財調査報告書第24集 1985
- (31) (29)に同じ
- (32) 小郡市教委「横隈狐塚遺跡 II」(10)に同じ  
同「横隈鍋倉遺跡 II」小郡市文化財調査報告書第34集 1986  
津古生掛遺跡にも 2 基存在する。
- (33) 昭和59年~60年福岡県教委調査
- (34) 小郡市教委「横隈狐塚遺跡 III」小郡市文化財調査報告書第29集 1986
- (35) 小郡市教委「津古中割遺跡」小郡市文化財調査報告書第33集 1986
- (36) 昭和61年度小郡市教委調査

第3図 大板井遺跡VI区西遺構配置区割図(1/400)



### III. 大板井遺跡VI区西の調査

#### 1. 調査の概要

VI区の中央を南北に走る道路より西をVI区西とする。調査面積は約2,500m<sup>2</sup>で、検出した遺構は弥生時代中期から後期の住居跡3軒、同じく中期の土壙22基、歴史時代の土壙1基、中世から近世と考えられる井戸2基、中世から現代までの溝24条が主なものである。近世から現代に至る攪乱が著しいため、時期を限定できる遺構のみを以下では掲載する。この点はVI区東も同様である。以下巻末まで、J=住居跡、D=土壙、M=溝の略号を使用する。また、各遺構の調査区内での位置は第3図を参考にされたい。石器・土製品については、各調査区ごとにまとめて掲載を行っている。従って、各遺構の出土遺物のページには掲載されていない。

##### ※ 遺構番号の変更について

本書では、調査時の旧遺構番号を報告書掲載時には下記のとおり新番号に変更している。尚、遺物の保管は旧番号のまま小郡市埋文センターで行っている。VI区東・VII区も同様である。以下、旧→新。

D100→D 8	D101→D 9	D110→D10	D47→D12	D48→D14
D53→D15	D95→D16	D27→D17	D82→D18	D96→D22
D31→D23	D32→D27	D15→D28	D16→D29	D23→D30

#### 2. 遺構と遺物

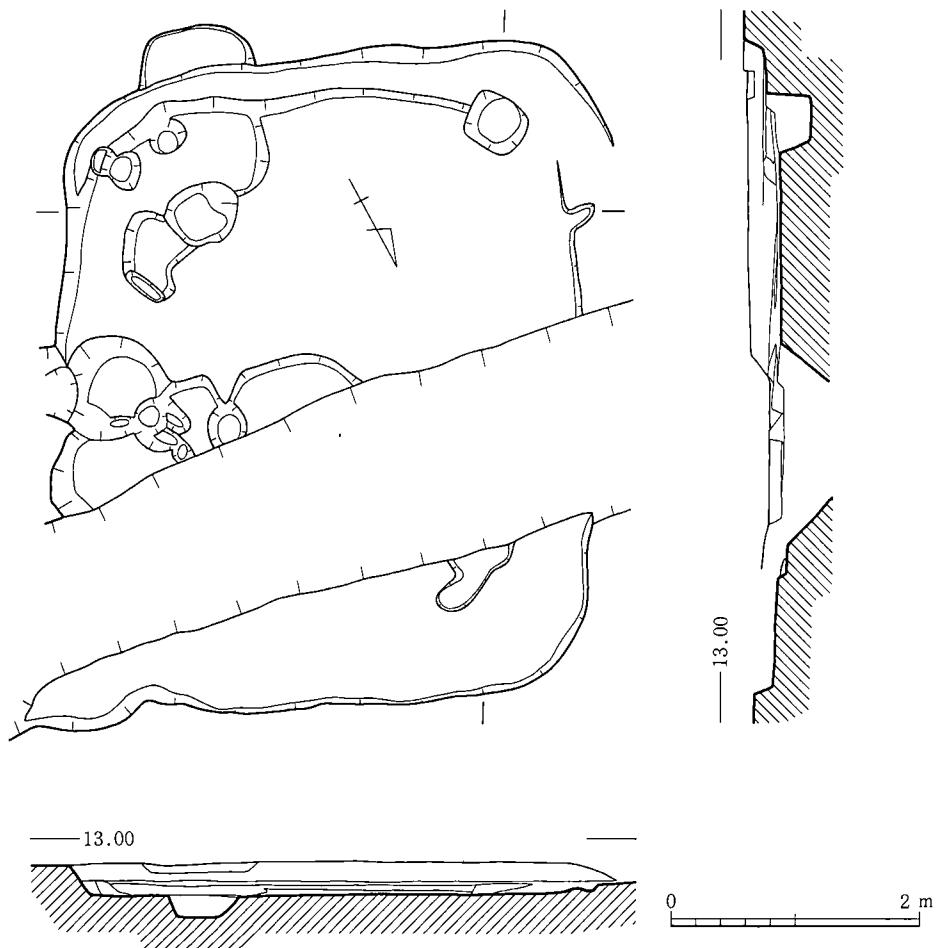
##### (1) 弥生時代の住居跡

###### 1号住居跡（第4図・図版3）

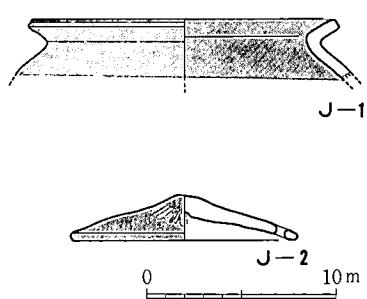
14区に位置する住居跡。中央をM9により切られている。規模は下端で519cm×406cmを測り、深さは26cmが残存する。床面には多数のピット、土壙が存在するが、柱穴配置は判然としない。南壁にそって、3～6cmの比高差をもつ一段の高まりが存在する。また、南壁から西壁へと屈曲する部分と西壁とがかみ合わない状態から、この西壁は南壁に存在するのと同じような高まりの段落ち面である可能性は強い。この場合は住居内にL字形に高まりが存在したということになるのであろう。2軒の住居跡が重複している可能性は全くない。床面に焼土、炭化物の類いは検出されない。

###### 出土土器（第5図）

短頸壺の口縁部で、く字形に屈曲する。内外ともヘラミガキ、丹塗りが施される。



第4図 1号住居跡実測図(1/60)



第5図 1・2号住居跡・出土土器  
実測図(1/4)

## 2号住居跡（第6図）

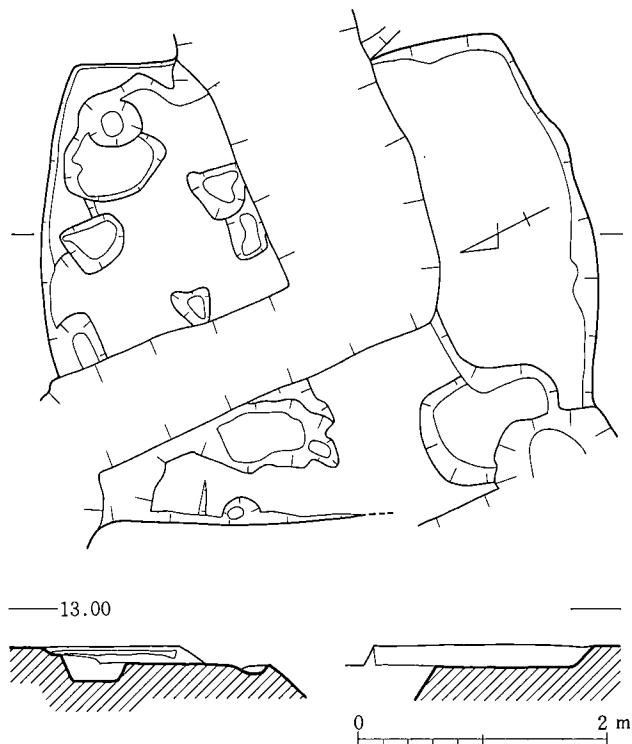
9区に位置する、住居跡と考えられる、ほぼ正方形の竪穴。M8、M9に切られている。下端420cm×362cmを測り、深さは15cm。柱穴の配置は判然としない。南側の床面には段落ちが認められるが、ベッド状遺構と考えるには高低差がなさすぎる。方柱状石斧が出土。

## 出土土器（第5図）

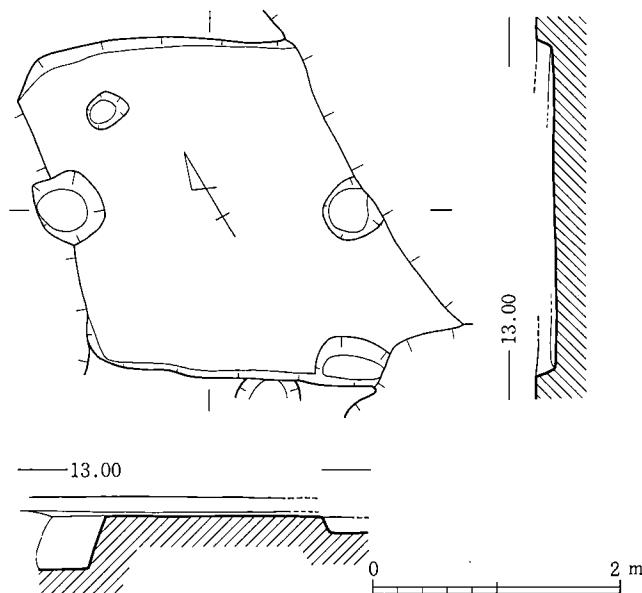
穿孔付きの蓋で、口径12.0cmを測る。内面ナデ、外  
面ヘラミガキ、丹塗りが施されている。

### 3号住居跡（第7図）

13区に位置する、住居跡と考えられる長方形の竪穴。下端は短軸で261cmを測り、深さは15cm。両端を搅乱に切られ規模は不明。柱穴と考えられるピットが2基存在し、その間は両ピットの中心から約230cmを測る。深さは均一ではなく、柱穴間には焼土の跡は存在しない。



第6図 2号住居跡実測図 (1/60)



第7図 3号住居跡実測図 (1/60)

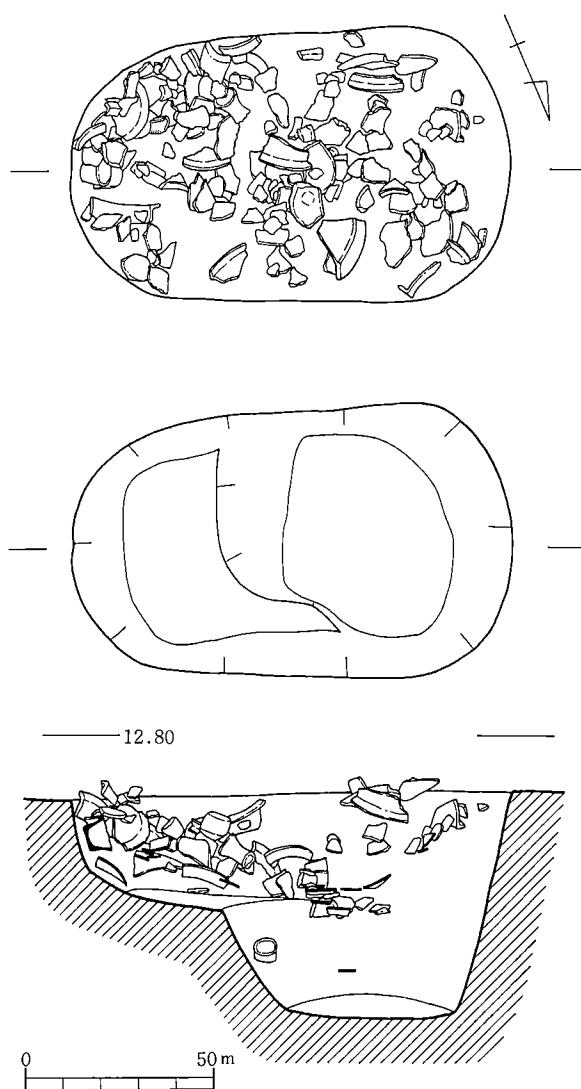
## (2) 弥生時代の土壙

### 1号土壙 (第8図、図版3)

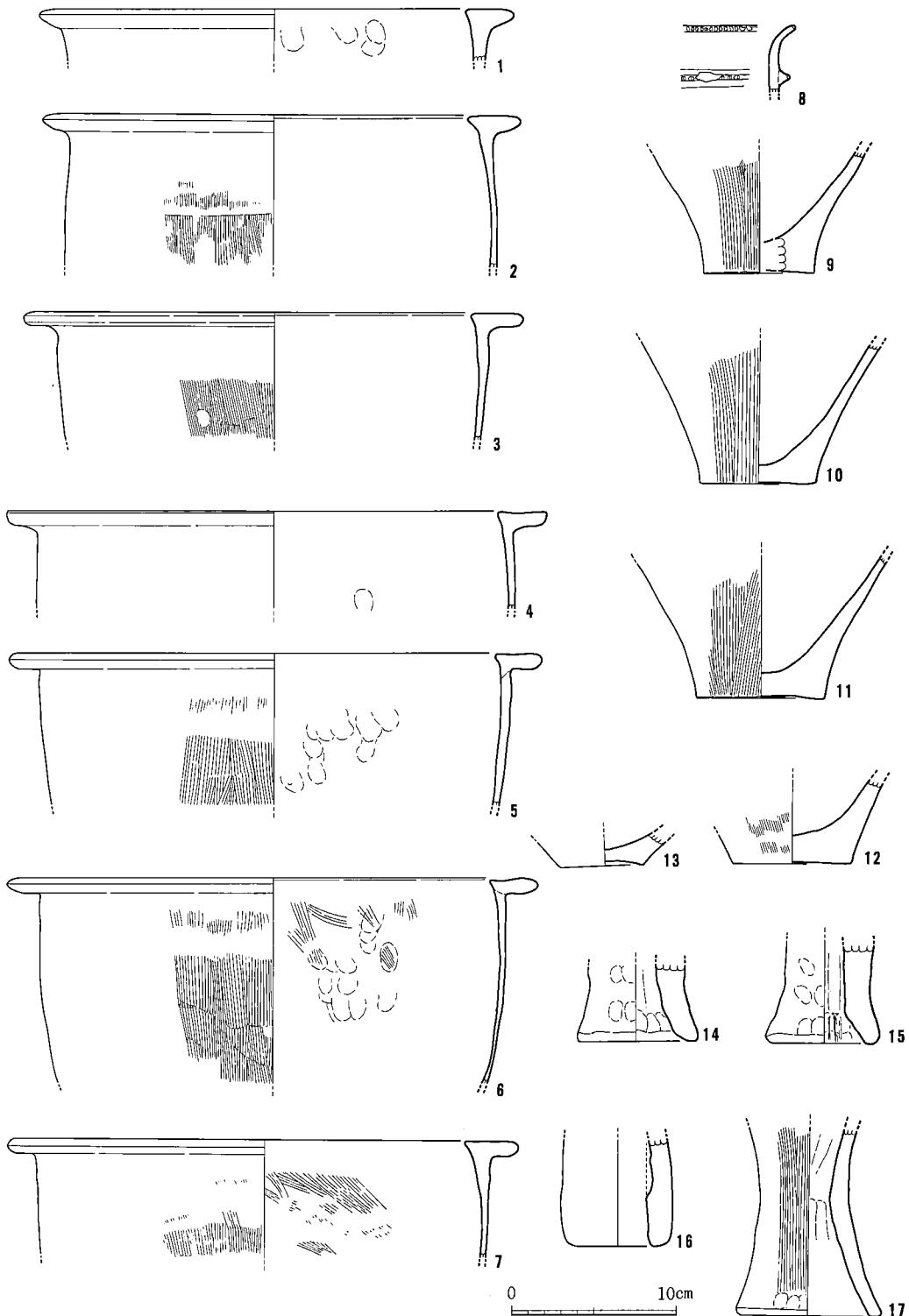
19区に位置する長楕円形の土壙。116cm×73cmを測り、深さは61cm。内部に一段のテラスを有し、土器のほとんどはテラスのレベルより上で検出され、土壙底には認められない。従って、土壙がやや埋まりかけた状態で土器の廃棄が行われたと考えられ、断面図の弓状に堆積した土器の出土状態もそれを表わしている。

### 出土土器 (第9・10図)

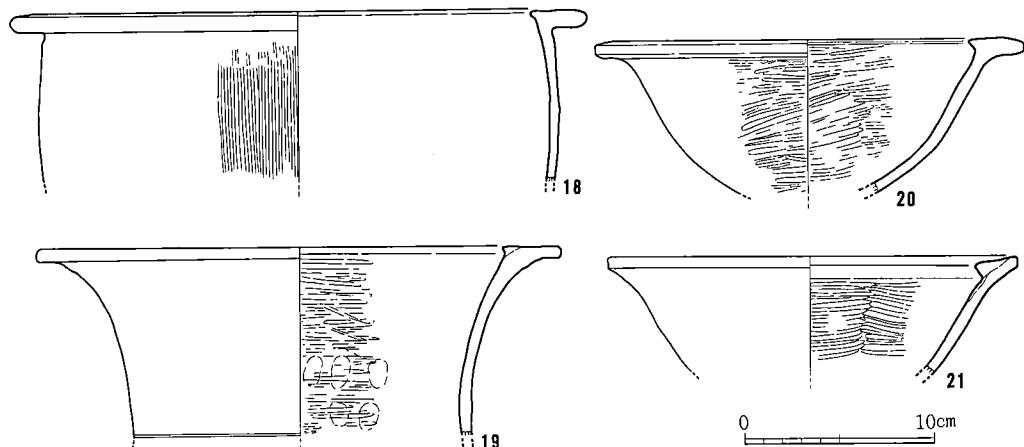
1～7・18は甕の口縁部片である。逆L字形を呈し、いずれも内面がやや発達し特に2では顕著である。形態は1・2が丸みを帯び、他は横に直線的に発達した逆L字形を呈す。口縁下凸帯はいずれも無く、胴部は2・18のように口縁下でややすぼまるものもある。調整は共通して、口縁周辺横ナデ、内面ナデ、外面ハケ目で仕上げられている。口径は28.0～32.8cmを測る。8は如意形口縁で混り込みと考えられる。9～12は甕の底部片で、底径6.8～7.6cmを測る。底部は小さくすぼまらず、内面はわずかな平坦面を有す。内面ナデ、外面ハケ目調整。13は甕の底部片で、やや上げ底を呈し外面はヘラ磨き。14～16は支脚片で、指頭による整形痕が多く残りナデ仕上げ。17は器台片で、上半部に炭化物の付着が著しい。19は甕の上半部で、口縁内面は鋸状を呈す。内面横方向のヘラ磨き、外面はナデ。口径27.6cmを測る。20・21は高坏で、



第8図 1号土壙実測図(1/20)



第9図 1号土壙出土土器実測図①(1/4)



第10図 1号土壤出土土器実測図②(1/4)

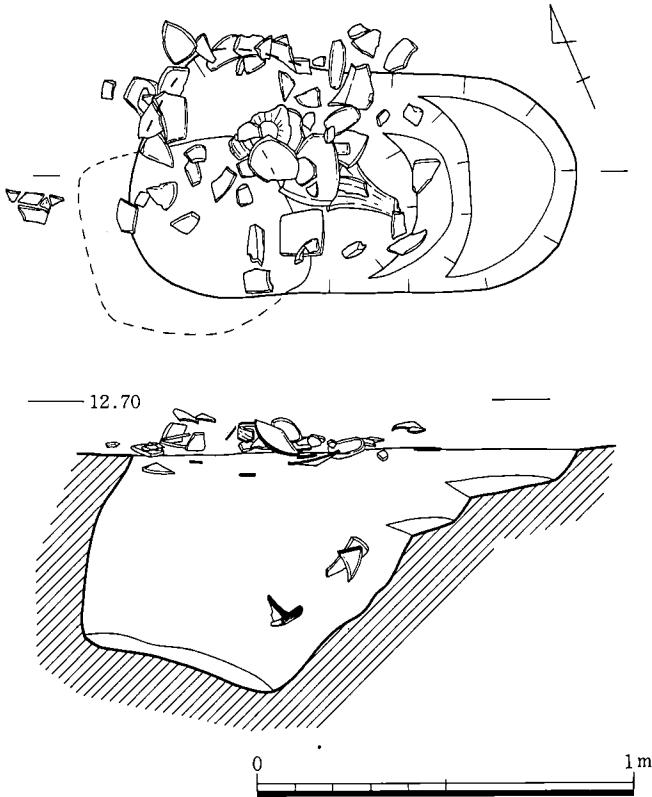
21は内側に発達し、や  
や内湾する形状を呈す。  
いずれも部分片のみで  
完形品は無い。

**2号土壤 (第11図・図  
版3)**

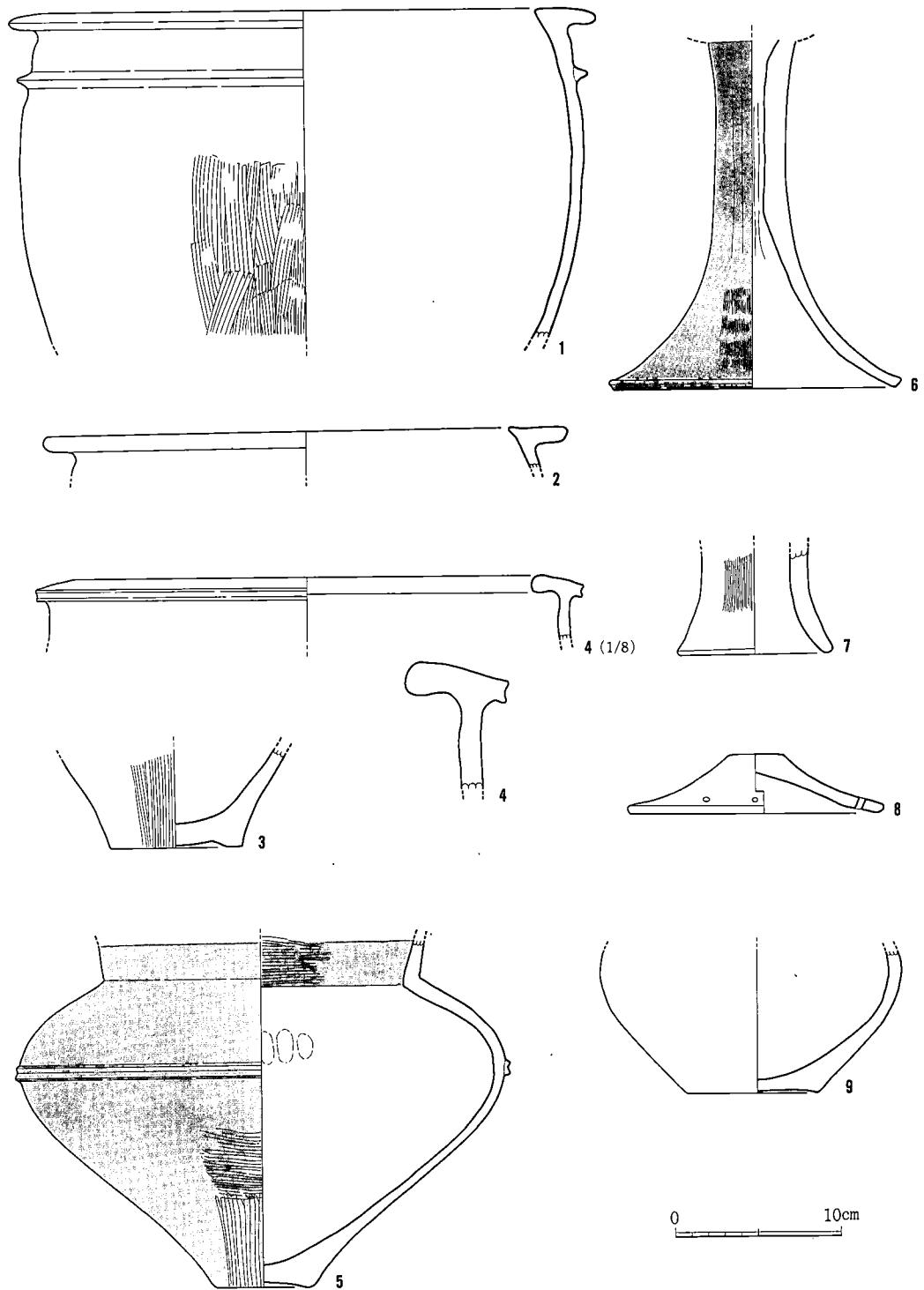
23区に位置する長楕  
円形の土壤。117cm×59cm  
を測り、土壤底までの  
深さは61cm。東側には  
二段のテラスをもつ。  
土壤底はほぼ方形を呈  
し、西から東にむかって  
傾斜している。土器  
は遺構確認面のレベル  
に集中して認められ、  
そこより下では数点を  
数えるにすぎない。

**出土土器 (第12図・図  
版23)**

1・2は甕の口縁部

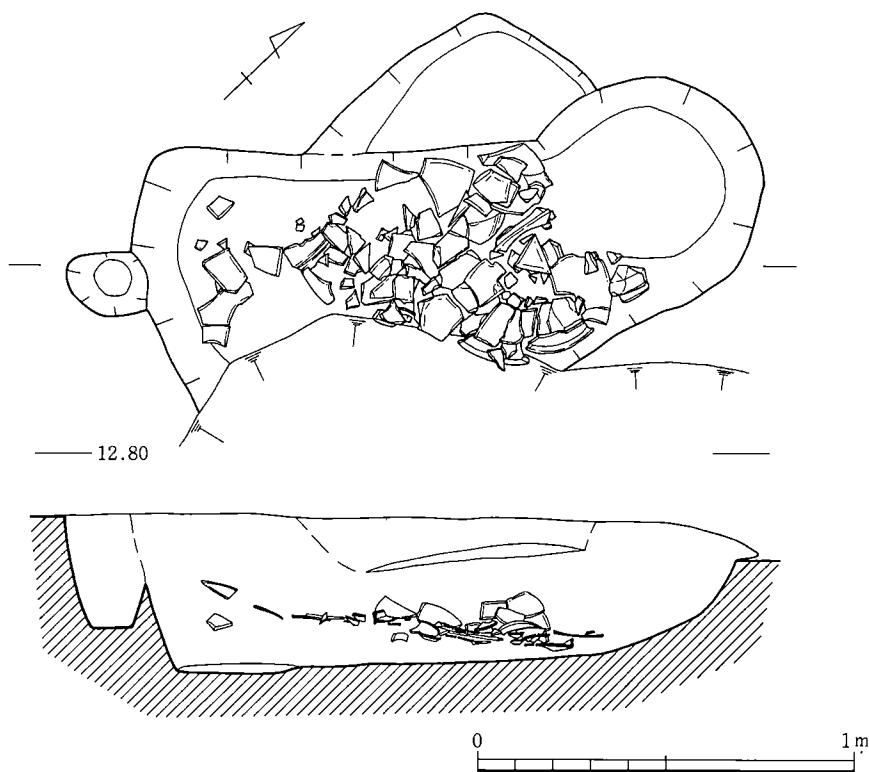


第11図 2号土壤実測図(1/20)



第12図 2号土壤出土土器実測図(1/4)

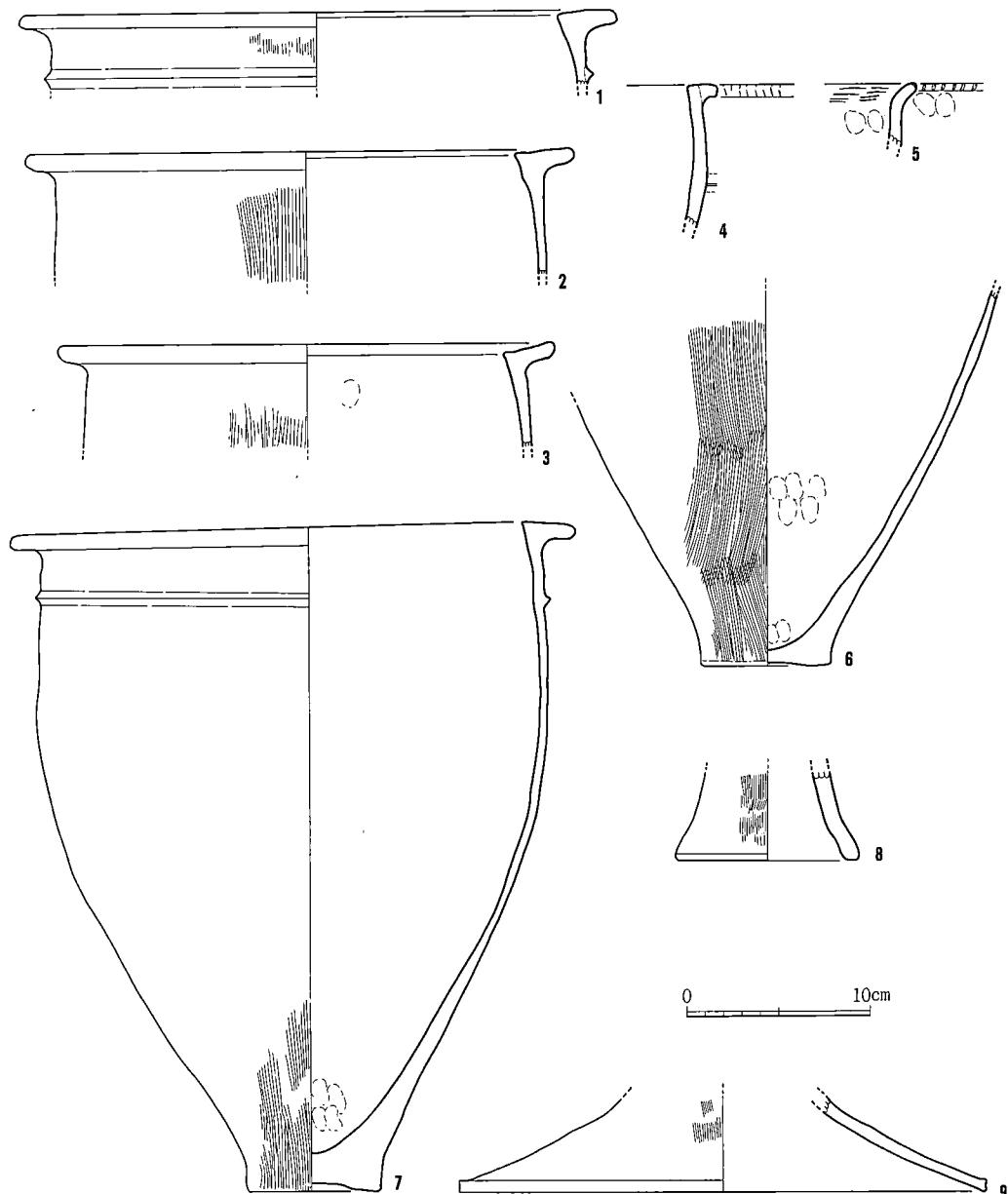
片。1は端部が丸みを帯びる逆L字形を呈し、やや外傾する。内面は粘土貼付のため、やや肥厚し現状では内側への発達はみられない。しかし、全体的に内湾する傾向をみており、これも内側への発達と考えてよからう。口縁下には一条の凸帶を有し、胴部は口縁にかけてややすぼまる形態をとる。2はやや内側に発達した逆L字形を呈す。胴部はやや張る形態をとると考えられる。口径はそれぞれ35.2cm、31.7cm。3は甕の底部片。径8.0cmで、胴部から比較的直線的に底部に至る形態をとると考えられ、小さくすぼまらない。内面はなだらかに湾曲する。4は大形甕で、口径65.9cmを測る。外傾したT字口縁を有し、内側への発達が顕著である。口縁下に凸帶は無く、内外とも丁寧なナデ仕上げで、ハケ目は残存していない。外面に黒塗り痕が認められ埋葬用土器の可能性もある。5は壺の部分片を復元したもの。胴部が鋭角に張り、造り一条の二条三角凸帯が貼付される。頸部内面と外面全体に研磨と丹塗りが施される。6は高壺の脚部で、外面ハケ後ナデ、丹塗りが施される。9は短頸壺の下半部。



第13図 3号土壙実測図(1/20)

### 3号土壙（第13図・図版4）

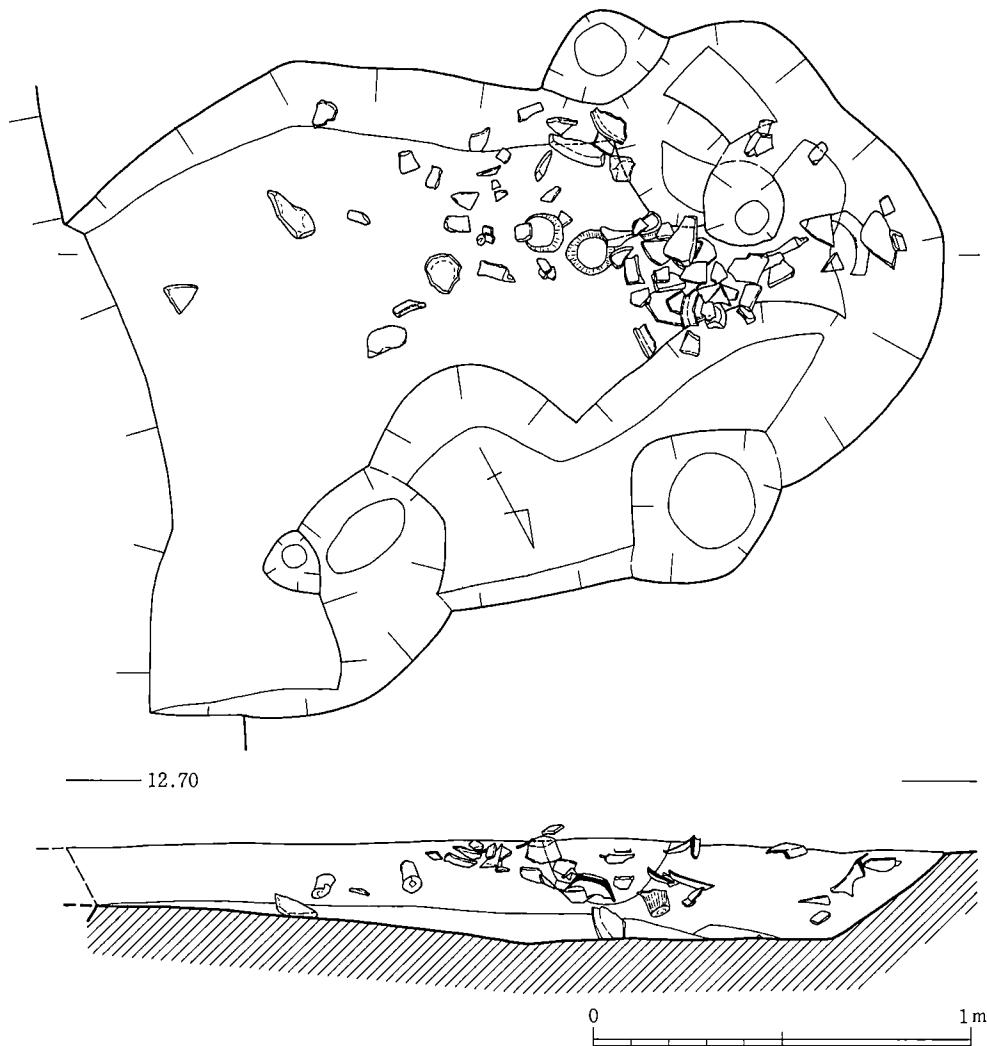
28区に位置する不整形の土壙。東側を土壙により切られ、その規模は不明。残存する下端は、144cm×43cmを測り、深さは40cm。南側のピットはこの土壙に伴うものではない。土器は土壙中央に多く認められ、若干土壙が埋まって土器廃棄が行なわれたことが断面図より看取しうる。石器出土。



第14図 3号土壙出土土器実測図(1/4)

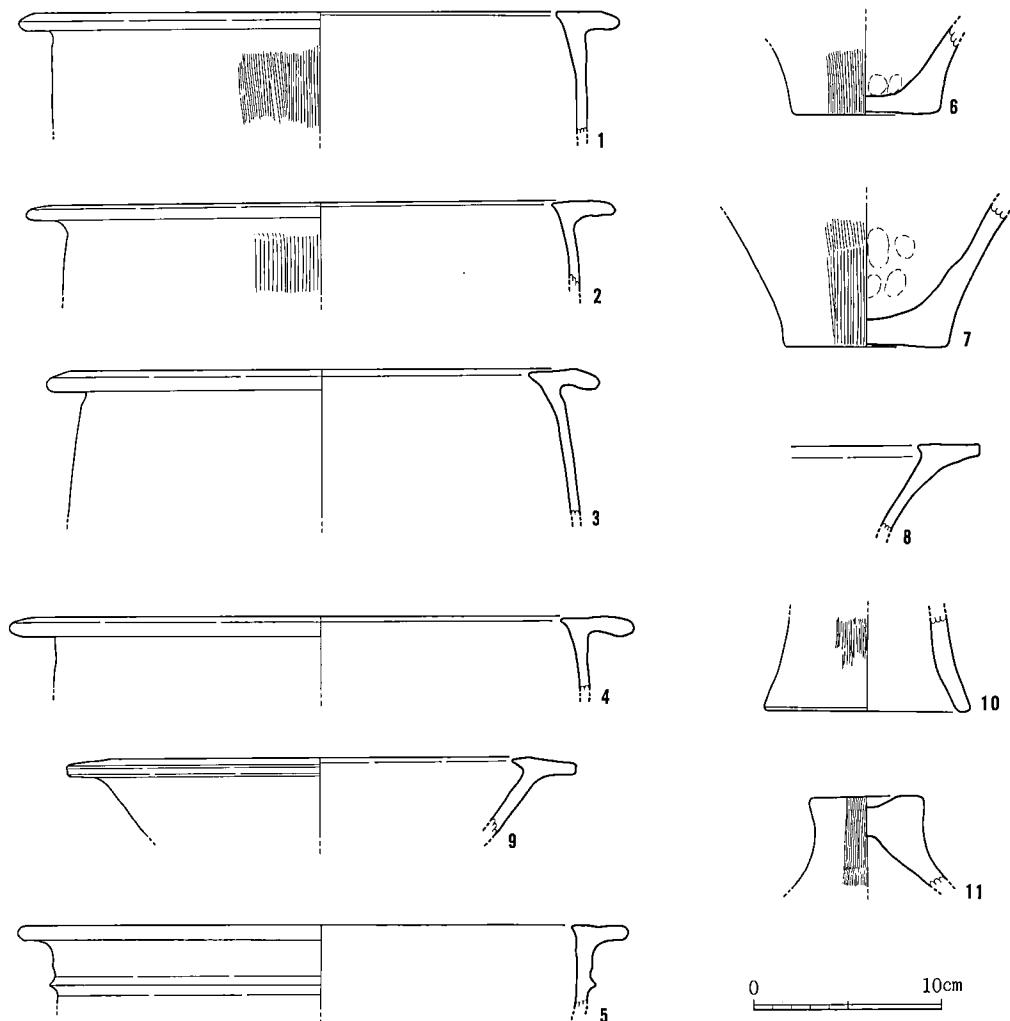
### 出土土器（第14図・図版23）

1～5は甕の口縁部片。1～3はやや内傾した逆L字形口縁を有し、2・3でわずかに内側への発達が認められる。1は口縁下凸帯を有し、3はやや内湾した形態を呈す。いずれも口縁長はわずかに短い部類に属する。口径は27.1～32.8cm。内面ナデ、外面ハケ目は共通の調整。4は短い貼付口縁を有し、その上端、下端にはキザミが施されている。口縁下には凸帯が剥落した跡が認められ、そこには一条の沈線が施されている。5は如意形口縁片で、4・5とも混り込みの可能性が大きい。6は甕の下半部で、底径7.2cmを測る。底部はわずかに上げ底で、内



第15図 4号土壙実測図(1/20)

面は湾曲し平坦面は無い。7はほぼ完形の甕。わずかに短い外傾した逆L字形口縁を有し、口縁下には凸帯を有す。胴部は直線的で、底部に経ってすぼまり、そのため底部はやや小ぶりである。底部はやや上げ底を呈し、内面に平坦面は無い。器高36.0cm、口径30.8cm、底径7.2cmを測る。



第16図 4号土壙出土土器実測図(1/4)

#### 4号土壙（第15図）

28区に位置する不整形の土壙。東側をM 2に切られ、長軸方向の規模は不明。短軸は119cm～163cmを測り、深さは15～27cmを測る。西半部にある3基のピットはすべて後世のものでこの遺構には伴なわない。北部には、一段深く溝状の掘り込みがある。土器は土壙の南西部にやや集中する傾向をみせ、土壙底よりやや上のレベルで確認され、いわゆる床面直上には石が認められるのみである。また、東半部にはほとんど土器が認められないことから、西半部に集中して土器が廃棄されたことが推定される。

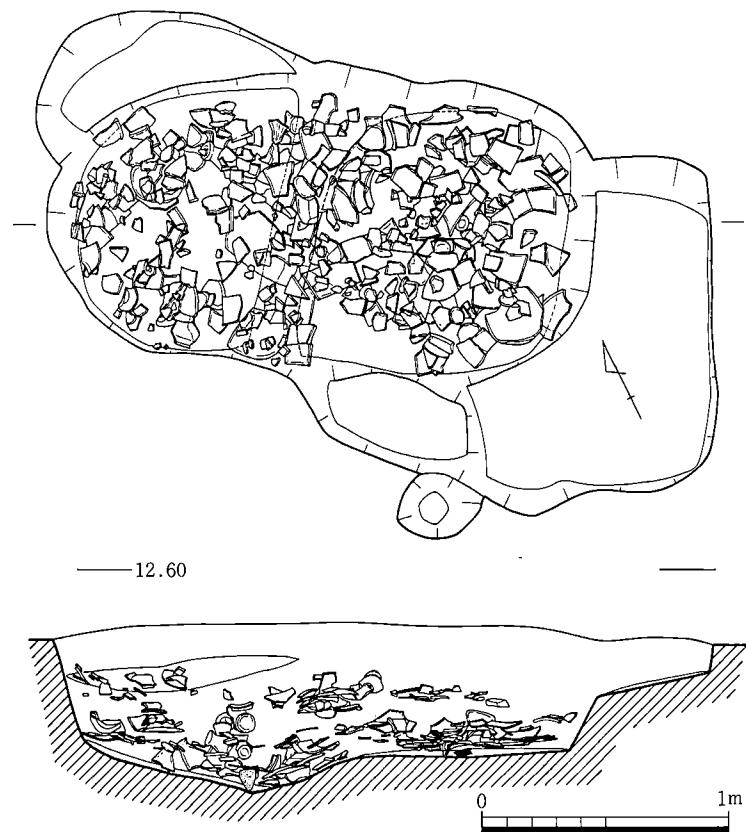
#### 出土土器（第16図）

1～5は甕の口縁部片である。いずれも、内側に発達した逆L字形口縁を有す。1～4は口縁端部付近がやや外傾する形態で、2～4は端部が肥厚する。5はやや短めで直線的な口縁を有し、1～4よりは形態的に古い要素のものであろう。胴部は2・3が張り、他は直線的な形態を呈すと考えられる。5はすばまり気味で鉢の可能性もある。6・7は甕の底部で径7.8、8.5cmを測る。内面は平坦

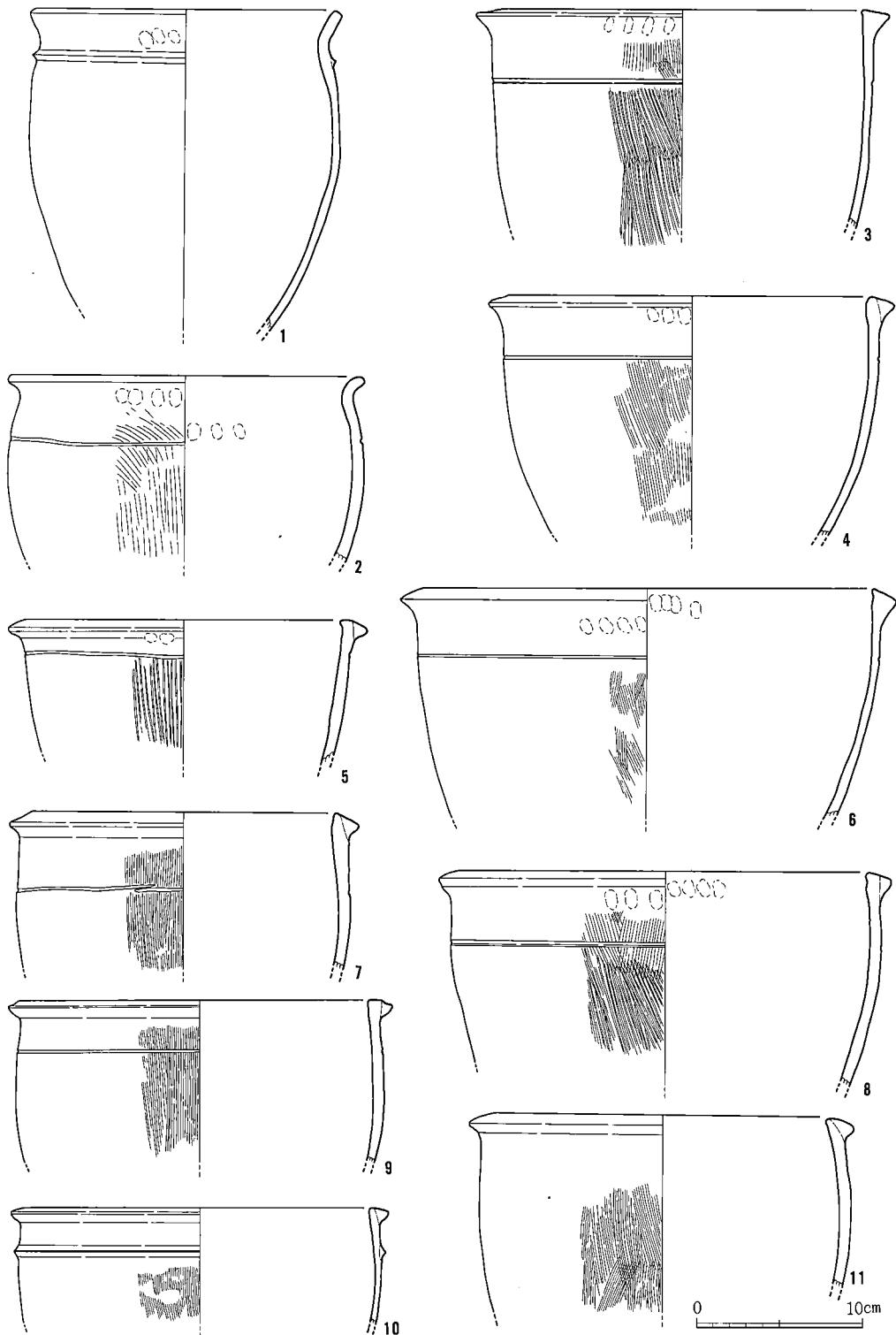
面があるが、全底面には及ばない。8は壺の口縁部片で、内面鋤先状を呈し、内外ともナデ仕上げ。9は高坏片で、内側に発達したT字状の口縁をもつ。

#### 5号土壙（第17図・図版4）

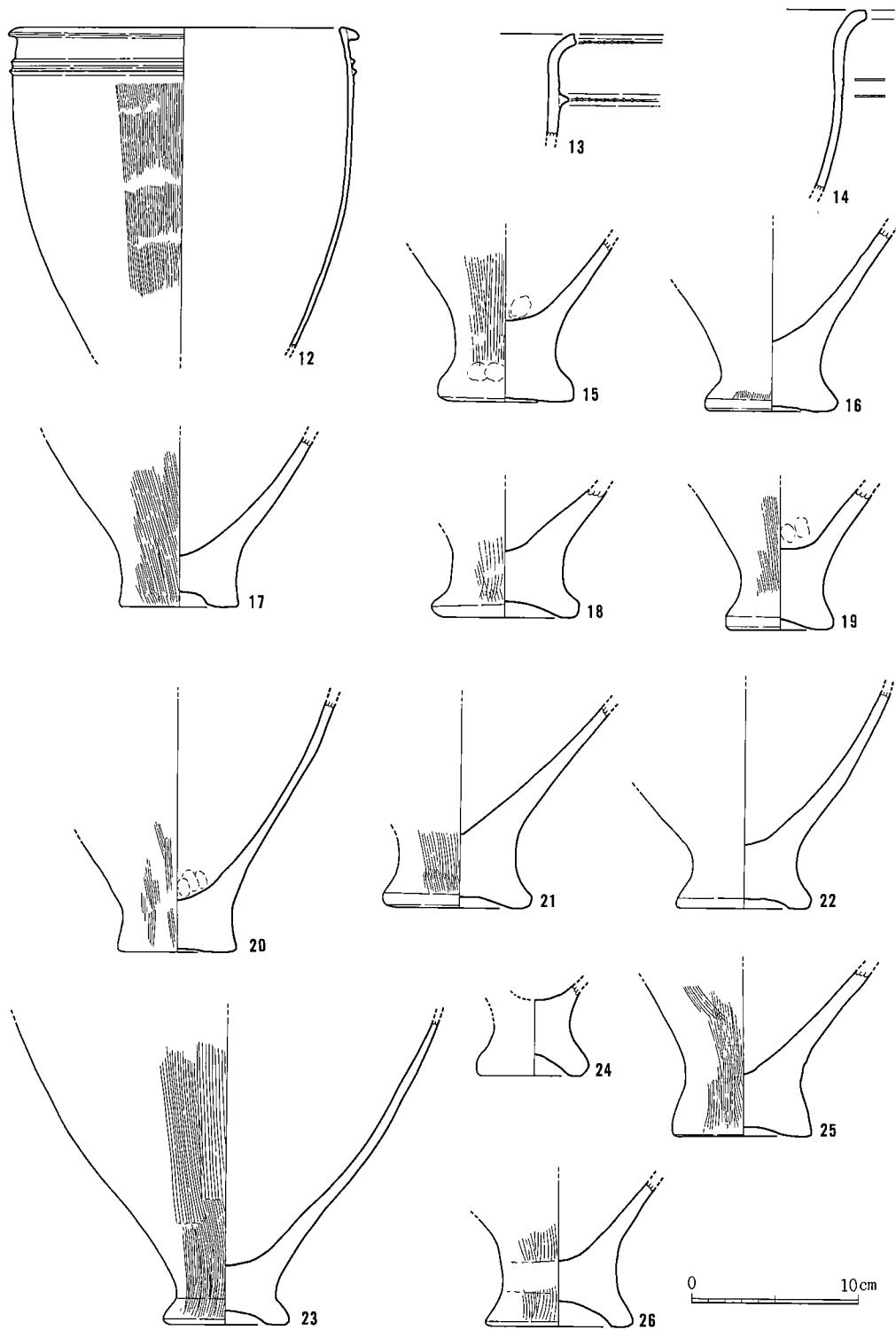
23・24区に位置する土壙。形状は不整形を呈するが、長楕円形の土壙に3段のテラスが付随している。しかし、搅乱のため充分に遺構確認ができなかつたことや、テラスの上端線のいずれもが長楕円



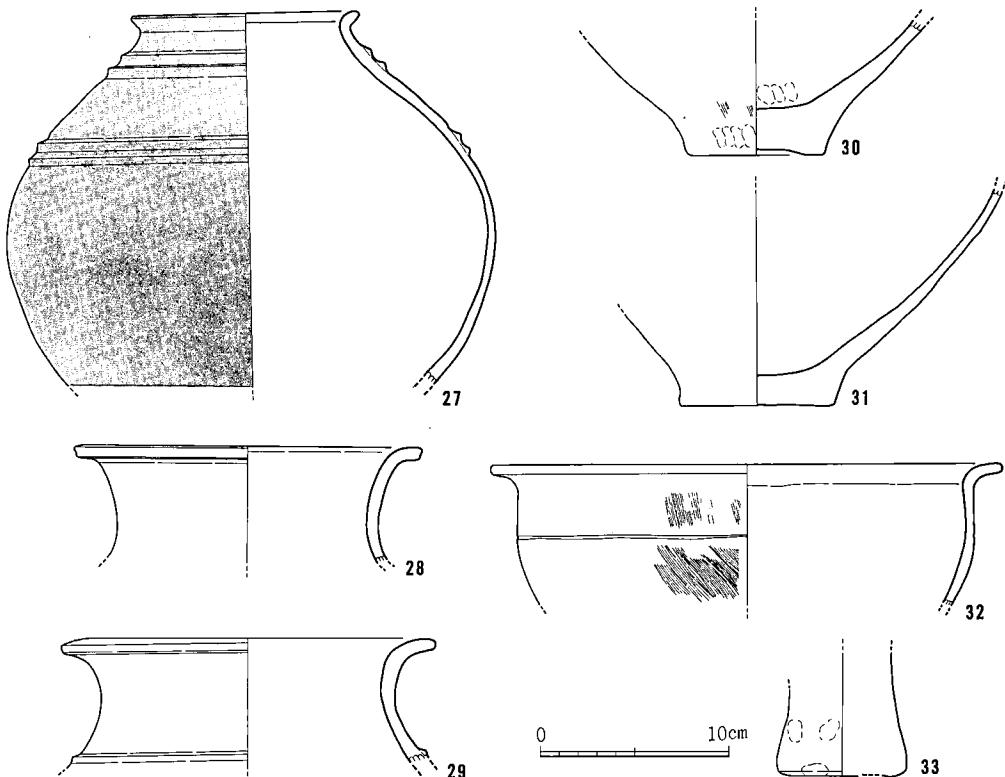
第17図 5号土壙実測図(1/30)



第18図 5号土壤出土土器実測図①(1/4)



第19図 5号土壤出土土器実測図②(1/4)



第20図 5号土壤出土土器実測図③(1/4)

形のプランから派生することを考慮すれば、このテラスはいずれもこの土壤に伴なわない可能性が強い。従って、旧状は長楕円形の土壤であったと考えるべき遺構であろう。土壤内の全体に土器片は確認され、レベルも土壤中位から底面直上までの幅広範囲で認められるが、土壤上面には全く認められない。特に、底面付近の集中が顕著である。土壤底面は、土壤の中央を境に西側に一段落ち、その比高差は13cmを測る。この段落ちは西から東に向かって傾斜し、現状では深さ66cmを最深部で測る。また、土壤の規模は上端で221cm×119cm（推定）を測る。石器出土。

#### 出土土器（第18・19・20図・図版23・24）

1～26は甕の部分片で、1～14は口縁部片。1・2・13・14は如意形口縁をもつもので、1・2・14は屈曲がゆるやかであり、口縁下に沈線や凸帯をもつ。3～12は三角状の貼付口縁を有する。いずれも横への発達は認められず、口縁下には沈線や凸帯が施されている。12は口径41.9cmを徑るやや大形のもので凸帯は2条貼付される。胴部はいずれも、直線的もしくは下へすぼまり気味で、極端に張る例は無い。15～26は甕の底部片。底部が横に張り出すもの（15・16・18・19・21～24・26）と小さく直線的にすぼまるもの（17）の2種に大別され、両者の中

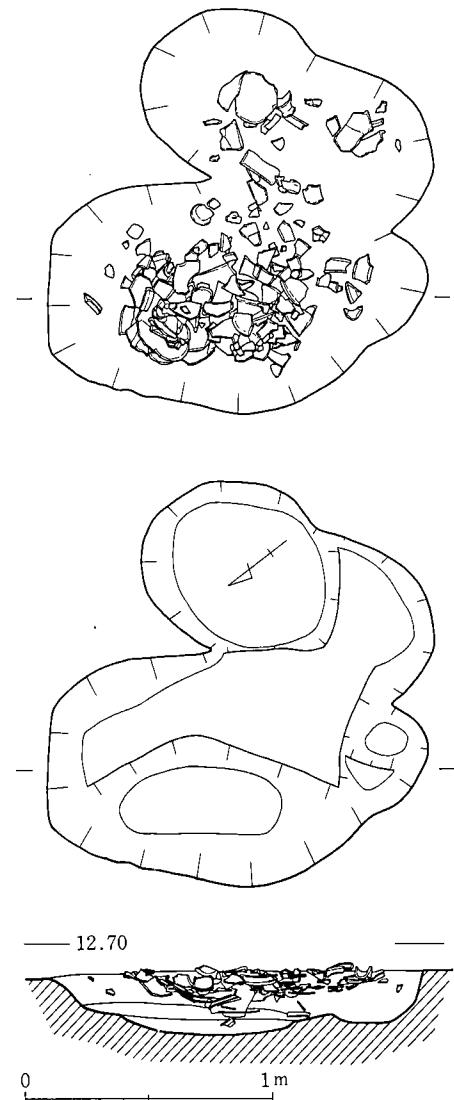
間形態をとるもの（20・25）もある。底面は上げ底が多く認められ、内底面との間はいずれも厚い。内面はすべて湾曲し、平坦な面は無い。28・29は壺の口縁部片。頸部は外反して立上がり、端部付近で外へ屈曲する。内外とも軽いヘラ磨き仕上げ。27は当地では認められない短頸壺で、東九州、西部瀬戸内の影響を受けたものであろうか。胴部（頸部？）には4条の凸帯が施され、外面は丹塗り、ヘラ磨きが施されている。

#### 6号土壙（第21図・図版4）

15・20区に位置する不整形の土壙。橢円形の土壙が2基切り合っている可能性もあるが、遺構検出時にはそれは確認されなかった。土壙内には3ヶ所に、底面からの深さ10～17cmを測る橢円形の掘り込みがある。土壙底は深さ20cm前後を測り、ほぼ平坦である。土器は、北西部に集中して認められ、そのレベルは土壙上位から中位の範囲にわたり、土壙底には数点しか検出されていない。よって、土壙がやや埋まった状態の時を土器廃棄の主体として求めることができる。石器出土。

#### 出土土器（第22・23図）

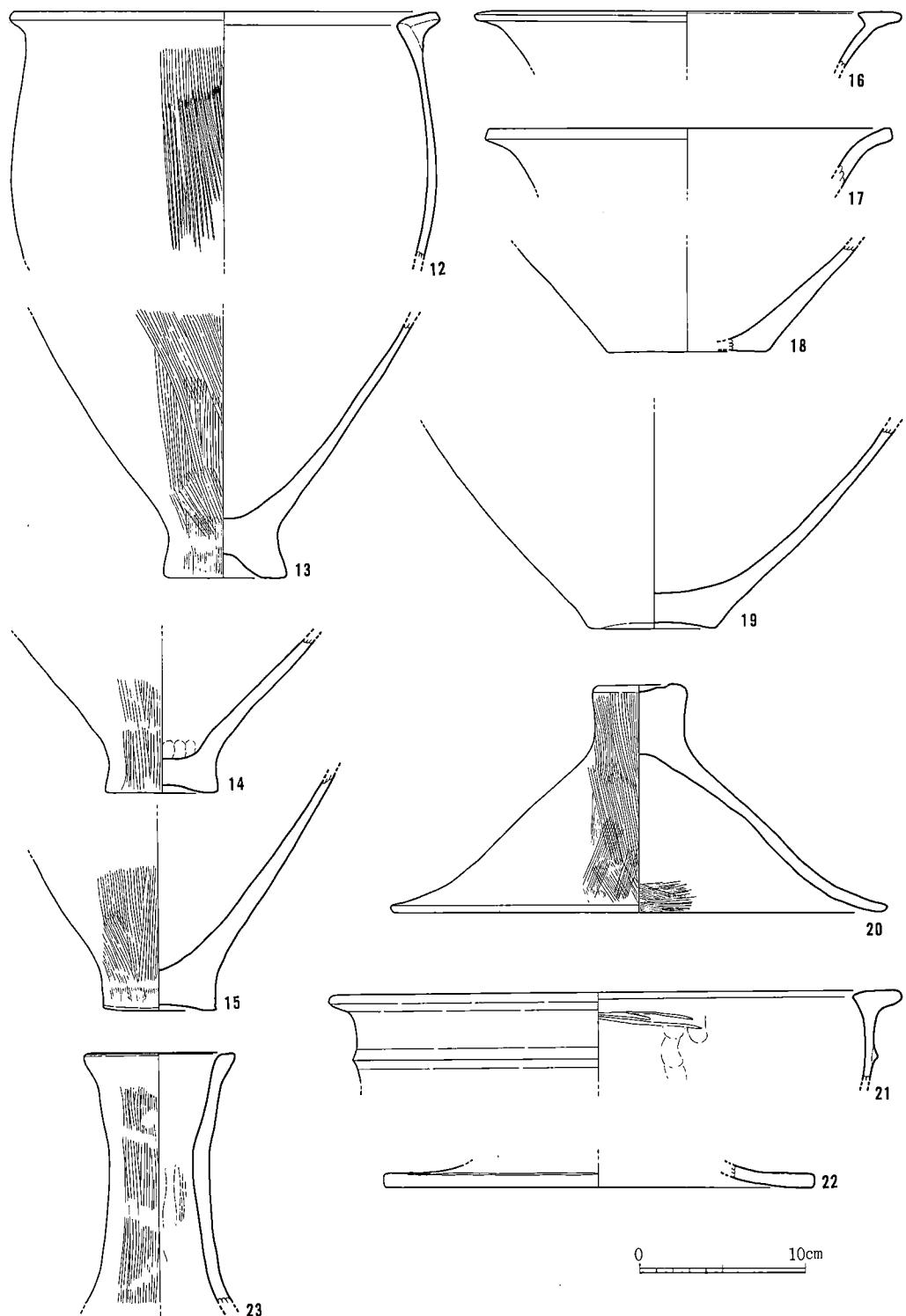
1～10・12は甕の口縁部片。1～4は三角状の貼付口縁を有し、4ではやや横方向への発達が伺われる。5～10・12は内傾した逆L字形を呈すが、8を除きいずれも短くかつ肥厚する。9は内側への発達が伺え、T字状をなす。胴部は、口縁下ですばまり、やや張り気味のものが多く、凸帯が口縁下に施される例もある。12は口縁の接合痕が確認できた例で、三角状貼付口縁のそれと異なり下部に補強帯を施すようになっており、これによって長い口縁の形成も可能になっている。1・2を除き、口径25.2～38.6cmを測る。10のみが内外ナデで、他は内面ナデ外面ハケ目仕上げ。11・13～15は甕の底部。11は横に強く張り出す上げ底を呈し、厚い。13～15は上げ底で小ぶりの底部。13は特に上げ底が顕著。16・17は壺の口縁部片で、16は口縁上面への粘土貼付により鋤形をなす。18・



第21図 6号土壙実測図(1/30)

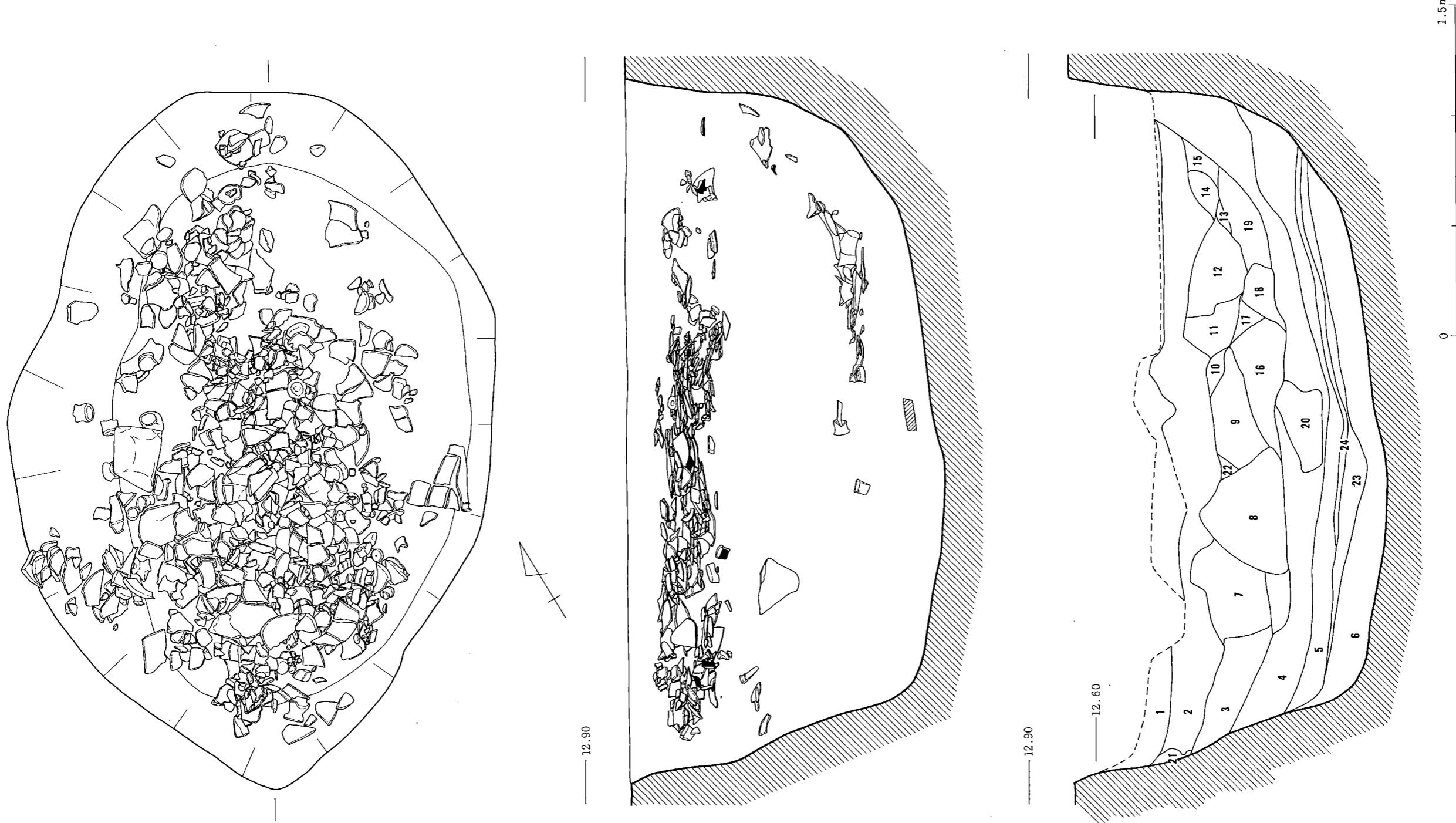


第22図 6号土壤出土土器実測図①(1/4)



第23図 6号土壙出土土器実測図②(1/4)

第24図 7号土壤実測図(1/20)



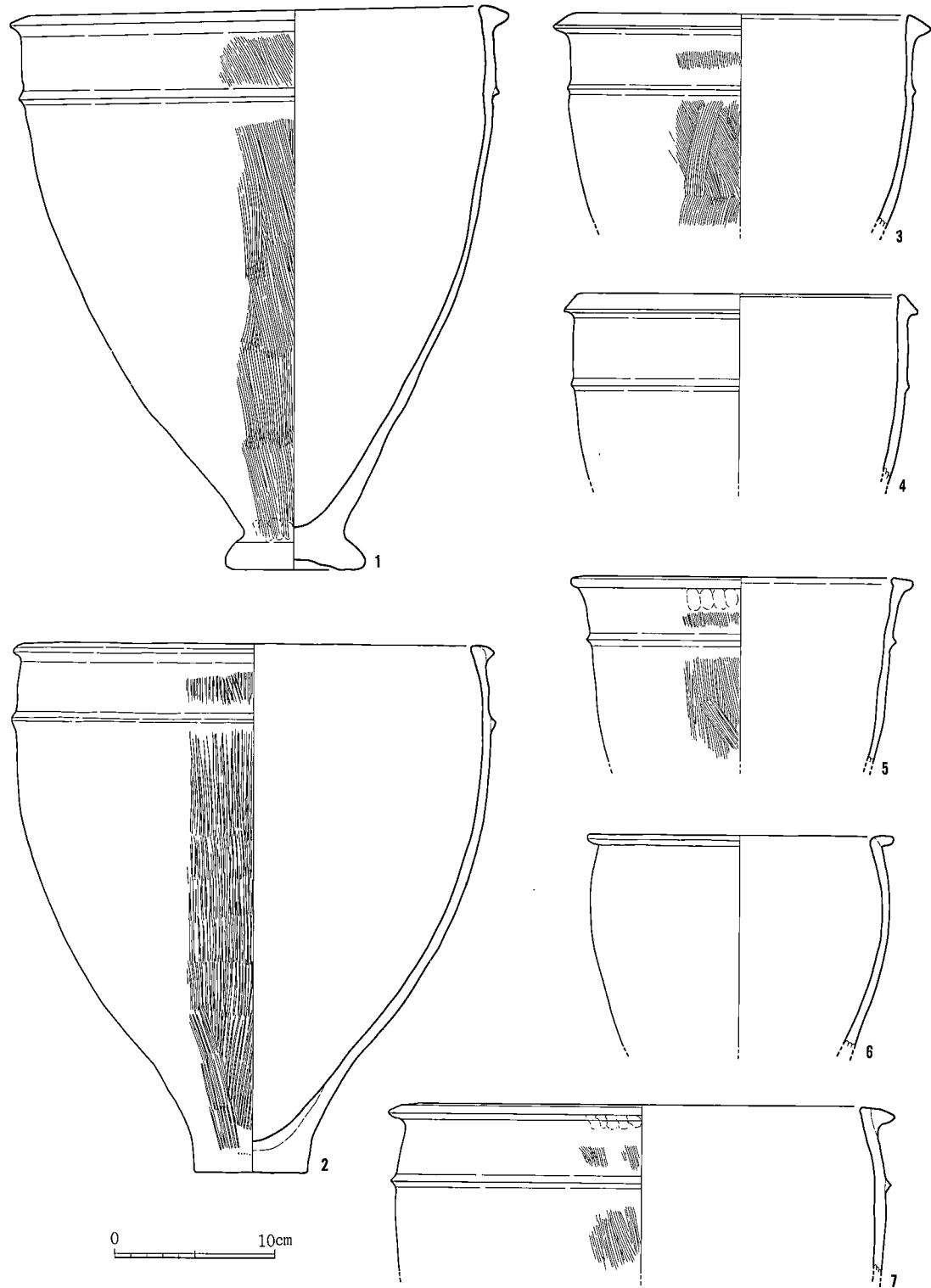
19は壺の底部片。胴部から直線的に底部に経り、底部付近での外反した屈曲はみられない。20の蓋は完形品ではない。21は鉢の口縁部付近と考える。口縁は横に発達するが、未だ短い。22は蓋の破片であろう。

#### 7号土壙（第24図・図版4・5）

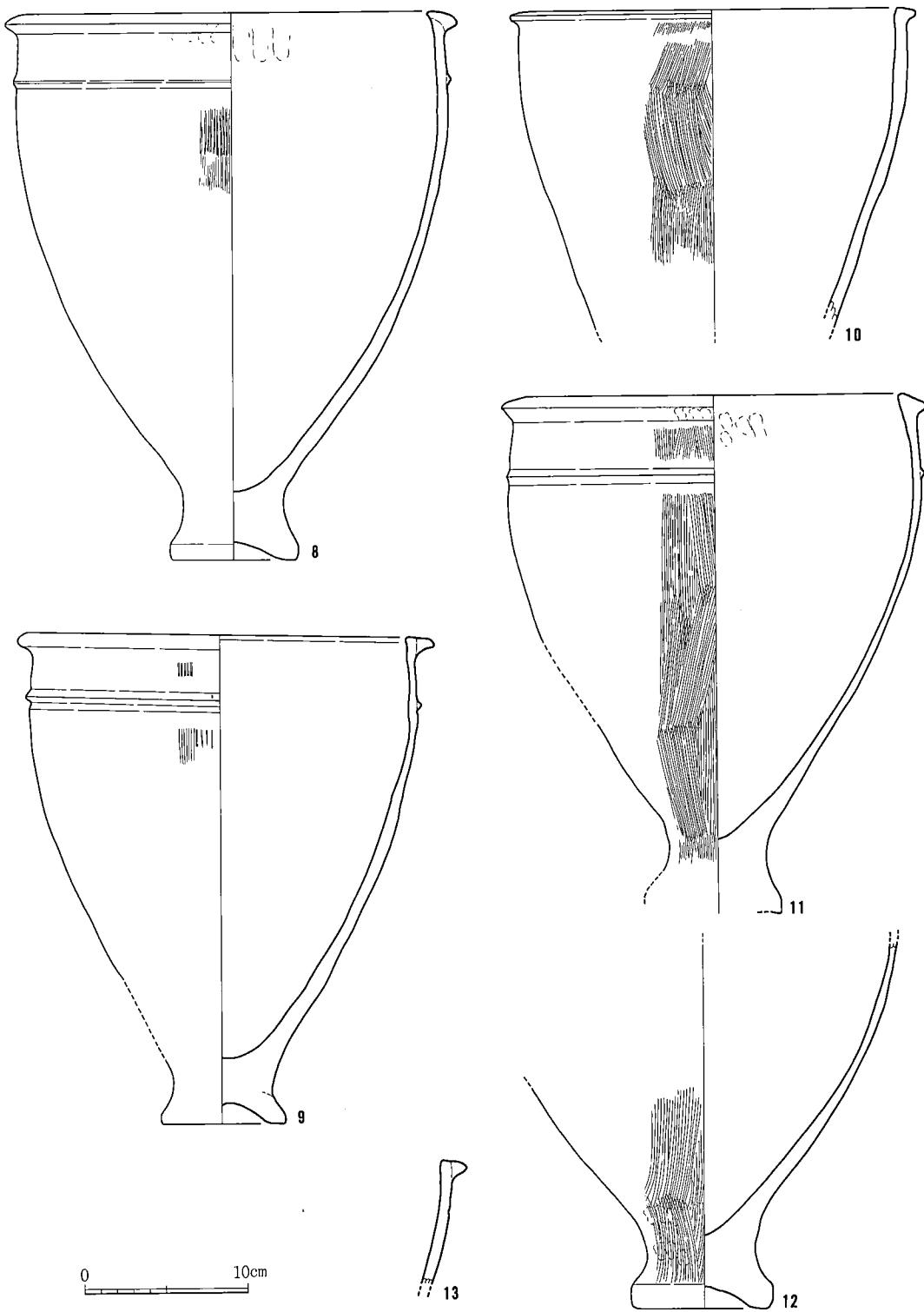
14区に位置する長楕円形の大土壙。規模は314cm×218cmを測り、底面は244cm×162cmの楕円形を呈し、やや起伏に富む。深さは130cm～142cmを測る。土壙上位のレベルに土器が集中して認められる。土器は厚さ約30cmにわたって堆積し、土壙の中央から南西部にかけての密度が特に顕著である。土壙中位のレベルでの土器の出土はわずかである。土壙下位の北東部には同じく土器群が認められる。この土器群は土層図の25番の層の上面にそって出土する状態をみせている。この土器群より下層では土器の出土は散在的であり、わずかな土器に混じって砥石が出土している。土層図をみると、この土壙は4番の層までが自然堆積（埋没）に近い状態を呈している。下層の土器群の廃棄は4番の層の堆積と同じか、それ以前に行われている。この層より上のレベルでは土層に乱れが生じ、特に7・8・9・22番は地山の大きなブロックと考えられる層である。これは土壙壁の一部が崩壊して落下したが、他の土壙を掘削した土を廃棄したものと考えられる。前者は、袋状豎穴の覆土にもよく認められる現象であり、その場合はこの土壙の壁は直立もしくはオーバーハングしていたことになろう。先にあげた土層に限らず、2番の層の以下ではブロック状の不自然な土層が多く認められ、そこからは土器の出土も顕著ではない。1・2番の層では再び安定した土層の状態をみせ、上層の土器群は主に1番の土層中に多く認められた。土器の堆積が著しいため土層図も点線より上のレベルでは取り得ていない。以上のような状態から、上層と下層の土器群には時間差を求めることが可能であろう。石器出土。土層図の説明は47ページに掲載。

#### 上層出土土器（第25～第29図・図版24～27）

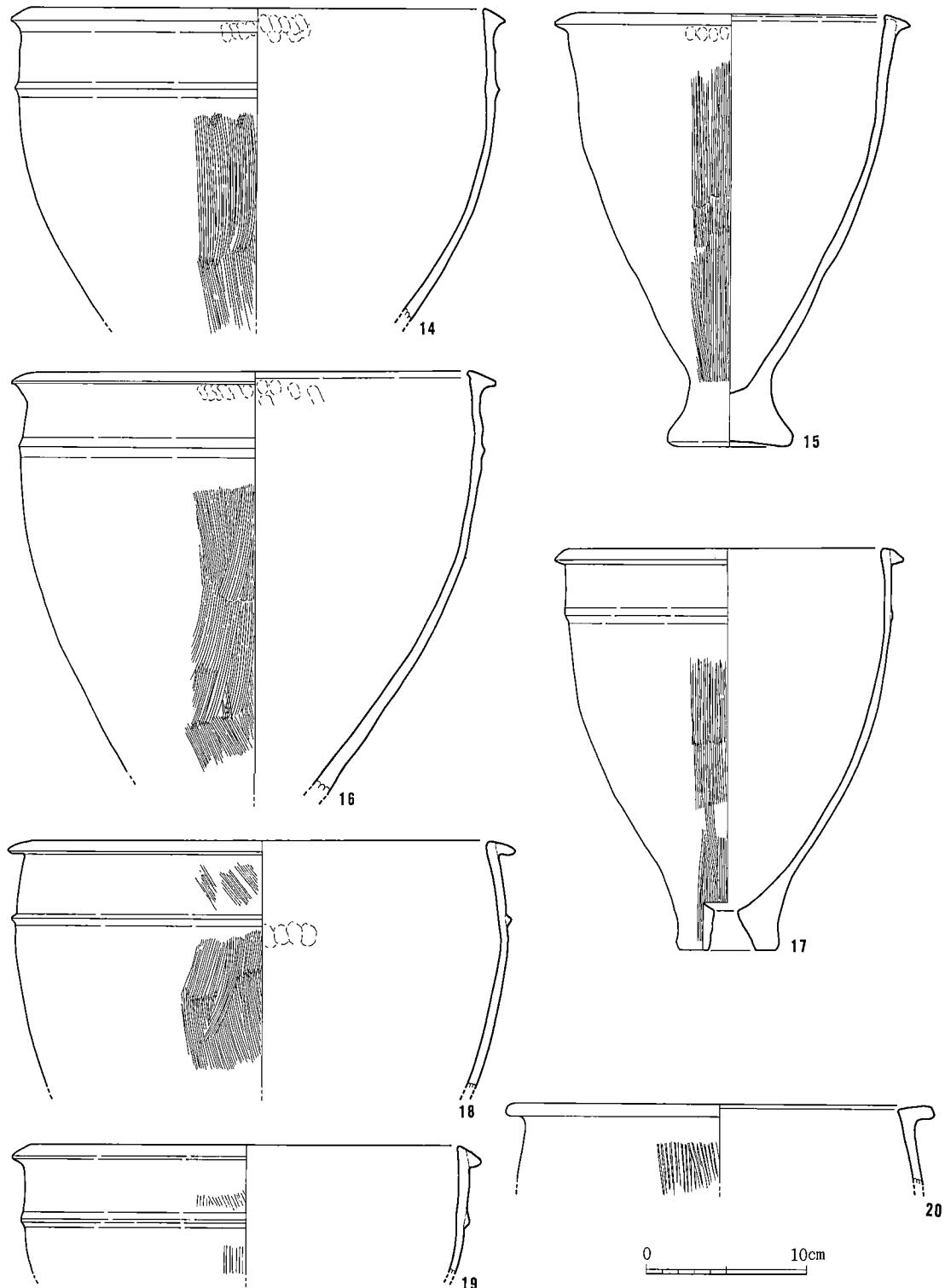
これらは土壙上位で密集して出土したもの。1～11・13～20は亀ノ甲タイプの貼付口縁を有す甕。6・20を除き、いずれも三角状の口縁形態を呈す。接合法はほとんどが胴部壁に対して横方向から行うが、8のように上に重ねて接合を行うものもある。15にもその傾向に少し認められる。口縁周辺はヨコナデで仕上げられ、その下には凸帯が貼付される例が多く、13例を数えている。13のみが沈線が施されている。6・20の口縁部は断面長方形を呈し、横への発達を始めており、逆L字形への変化の過渡的形態と考えられる。胴部はわずかに張る程度のものがほとんどで、新しい傾向が伺える6・20がやや張る形態を呈している。底部は2・17が直線的小さな底部を有し、2は平底、17はコシキ転用のため不明である。他は横に張り出す形態を呈し、1を除きその長さは長いものが多い。厚さは1で1.8cm、他は2.8～3.2cmと当然ながら長いものの方が厚い傾向が伺われる。いずれも外底は上げ底を呈す。内底は丸く湾曲し、平坦面を有す例はない。調整は内面ナデ、外面ハケメを基本とするが、7のように外面もナデて、ハ



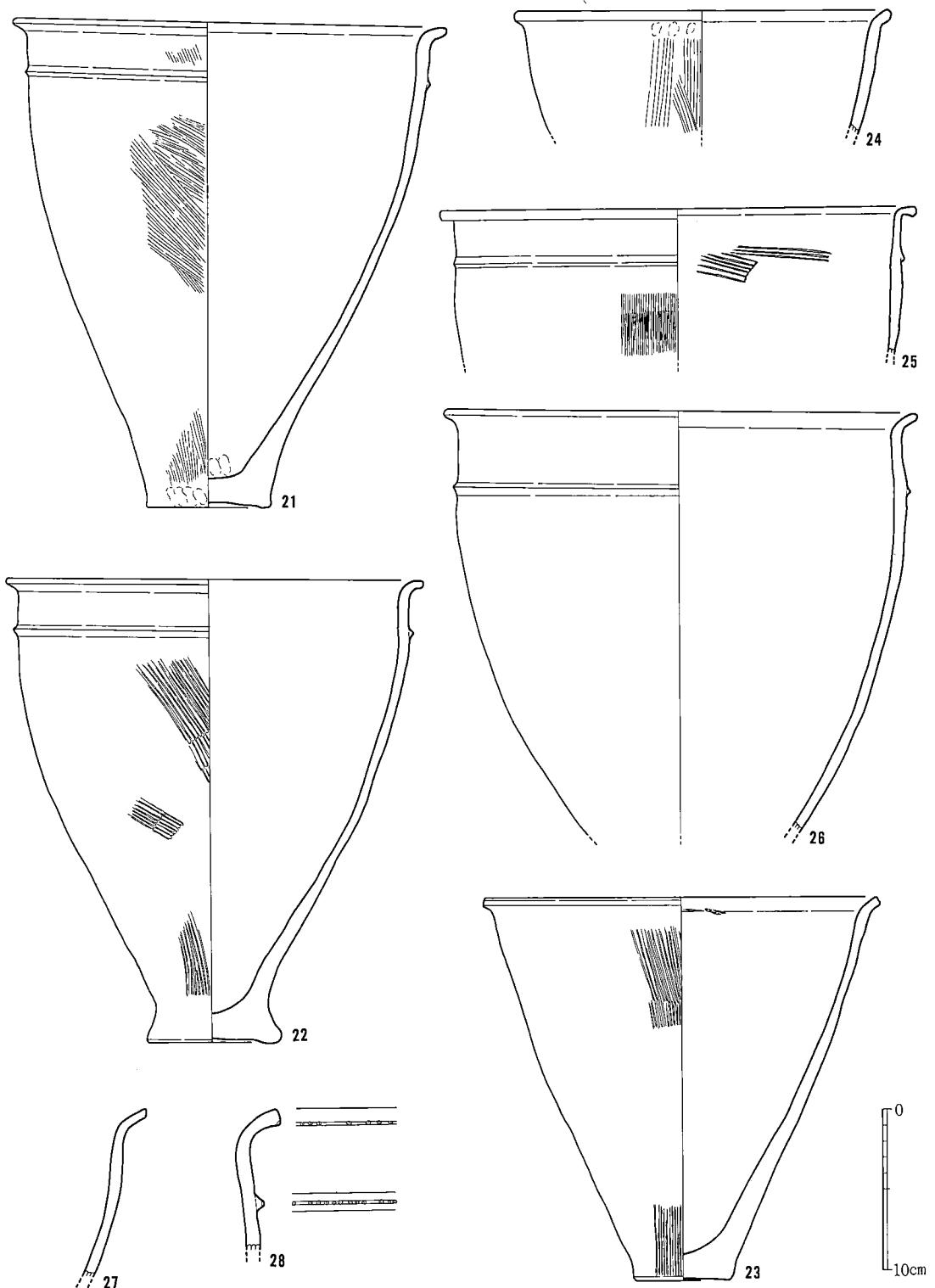
第25図 7号土壤上層出土土器実測図①(1/4)



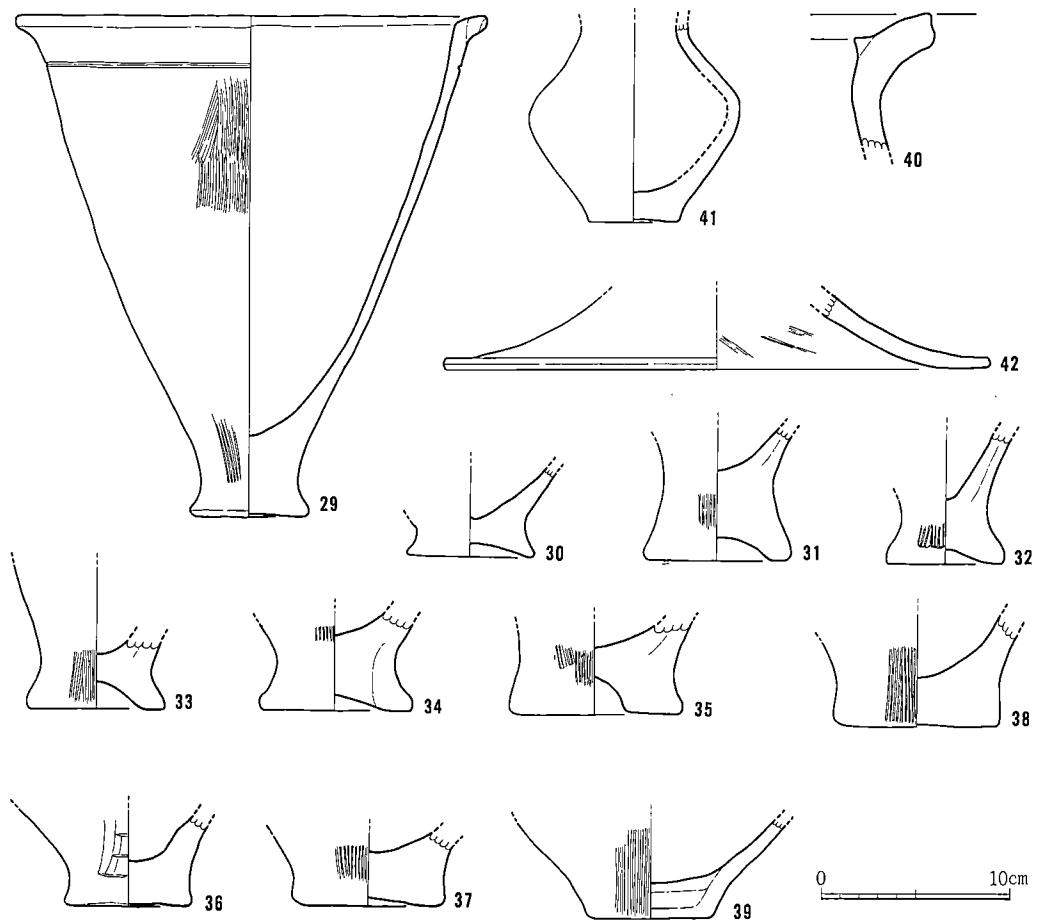
第26図 7号土壤上層出土土器実測図②(1/4)



第27図 7号土壤上層出土土器実測図③(1/4)



第28図 7号土壤上層出土土器実測図④(1/4)



第29図 7号土壌上層出土土器実測図⑤(1/4)

ケメをナデ消したと考えられる例もある。全体の法量（口径・器高・底径）を測りえる例は以下のとおり。1 (28.2・34.7・8.7)、2 (30.0・33.0・7.1)、8 (27.8・33.1・3.1)、9 (25.7・29.9・2.8)、15 (22.2・26.7・7.9)、17 (21.7・25.0・6.4)。他は口径が19.0～31.8cmの範囲を測っている。21～29は如意形口縁を有す甕。25を除き、口縁はゆるやかに外反する。長さは全体的に短く、端部は丸いものと角ばるもの (23・27・28) の2種がある。口縁下には亀ノ甲口縁と同じく、凸帯を貼付する例が多く5例を数え、沈線は1例のみである。胴部は、口縁下凸帯からすぼまって底部に至るものと、凸帯が無いものでは直線的に底部にかけてすぼまるものの2種がある。底部は21・23のような平底に近い形態と22・29の横に張り出すものがあり、後者の外底も平底に近い。29の底部は長く、かつ厚い。調整は内面ナデ、外面ハケメが基本で、28のように外面の一部をナデしているものも認められる。法量を測りえる例は21 (27.2・30.2・7.6)、22 (26.1・28.9・8.5)、23 (24.9・24.0・5.9)、29 (25.2・26.4・6.4)。他は口径23.6～

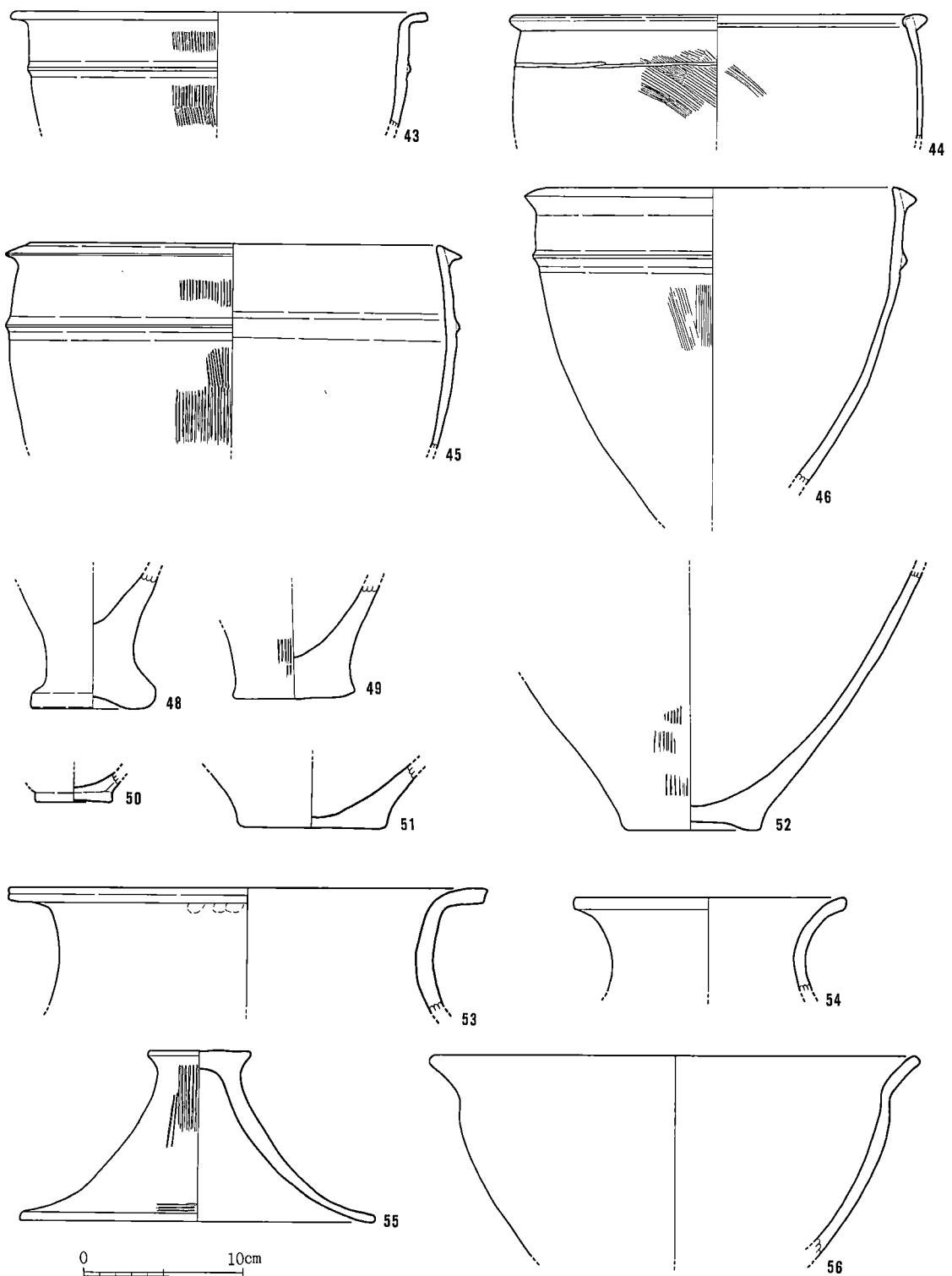
29.6cmを測る。30~38は甕の底部で、法量では長く厚いものと短く薄いものの2種、形態では横に張り出すものと比較的出ないものの2種が存在する。前者ではその比率はほぼ同じであるが、後者では比較的張り出さないものが3点を数えるにすぎず、張り出す底部が主流と考えられる。外底は上げ底のものが多くを占める。底径は6.8~8.1cmの範囲を測り、内底は湾曲するものがほとんどである。39は壺の底部で、丸い胴部から底部にかけてすぼまる形態を呈す。40は大形甕の口縁部片。外反した口縁の上面に粘土帯を貼付し、三角状の突出部をつくり出す。胴部はやや内傾して立ち上がるを考えられる。41は小壺で、内傾して立ち上がる頸部と鋭角的に張る胴部をもつ。外面ヘラミガキ。42は蓋で、外面はヘラ状工具によるナデがみられる。上層出土土器は比較的接合状況が良好で、完形に近いものをかなりの割合で含む。

#### 中層出土土器（第30図・図版25）

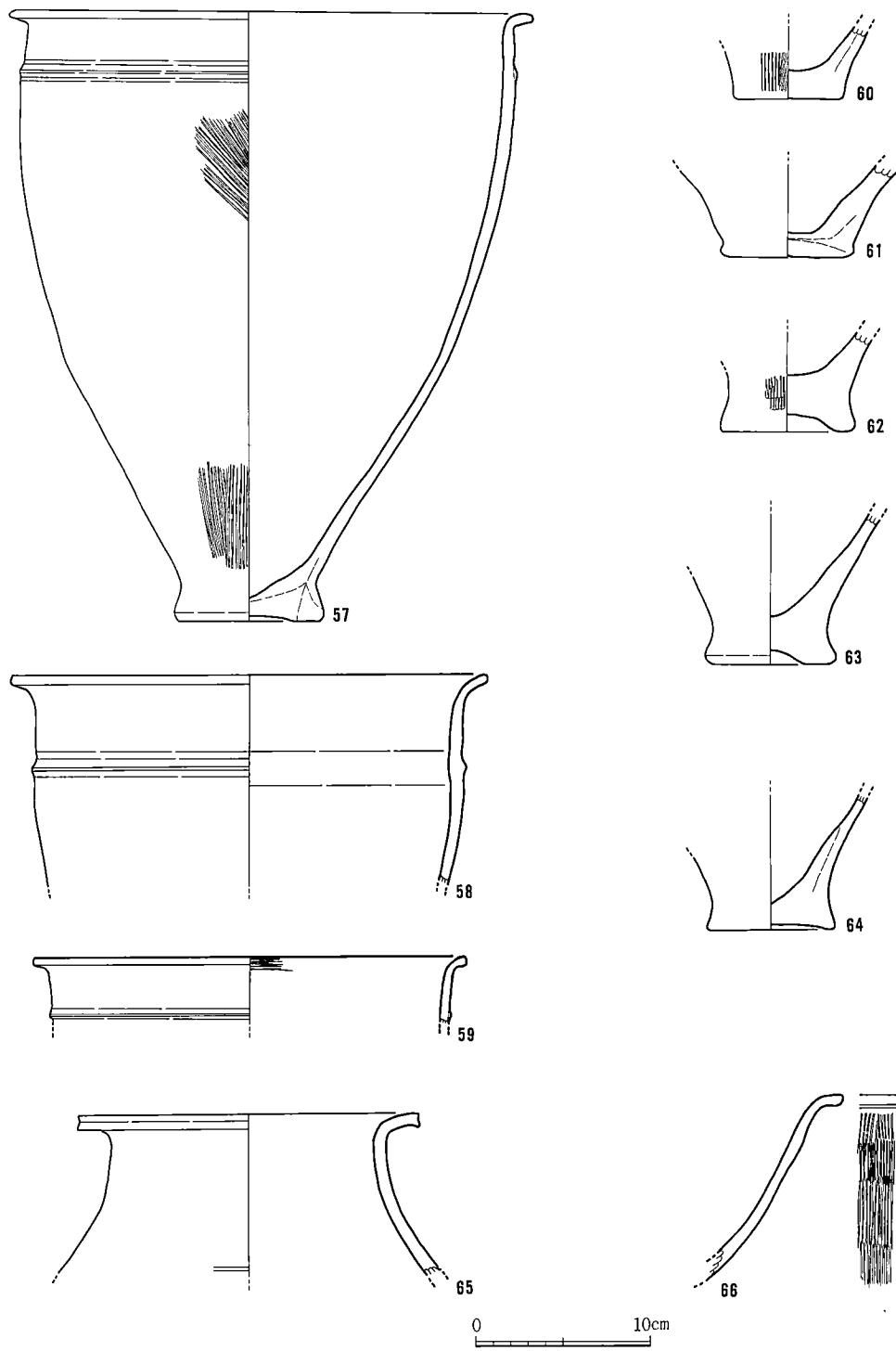
土壤中位から出土した土器の一群である。43は如意形口縁をもつ甕で、口縁は強く外反し口縁下には凸帯が貼付される。胴部はすぼまりながら底部に至ると考えられる。44・45は亀ノ甲タイプの口縁を有する甕。いずれも三角状の口縁が横方向から貼付されている。44は沈線で、他は凸帯が施される。46を除き、胴部はやや張る傾向をみせる。甕はいずれも内面ナデ、外面ハケメ仕上げ。48・49はそれぞれ形態の異なる甕の底部。48は横に張り出す上げ底のもので長く厚い。49は平底で、整形の為やや横に張り出す形態を呈す。50~52は壺の底部。50は円盤状の貼付部が認められる。52は外底が上げ底となっている。53・54は壺の口縁部で、ともに上半部は外傾して立ち上がる。53の口縁は強く屈曲し、口縁上面が平坦な面をなす。53は外面ヘラミガキ、54は内外ともヘラミガキ。55は横に張り出す取っ手をもつ蓋で、外天井部は平坦である。内面と口縁周辺の外面は横方向のヘラミガキ、他の外面は縦方向のヘラミガキが施される。

#### 下層出土土器（第31・32図・図版27）

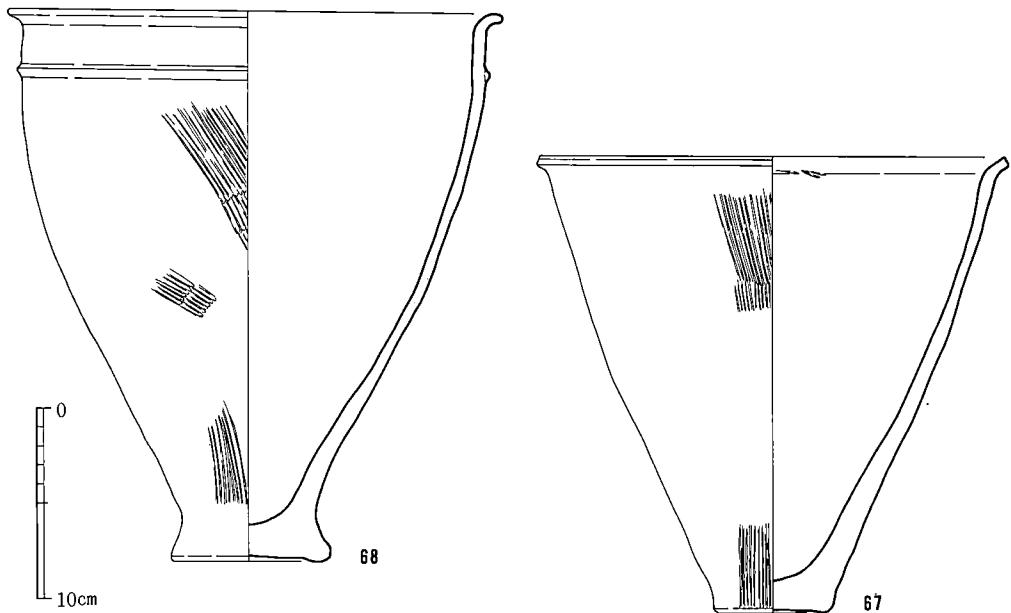
57は如意形口縁をもつ甕でほぼ完形。口縁は強く外反し、その下には凸帯が貼付される。胴部はわずかに張り、横に張り出した短い底部をもち外底はやや上げ底。内面ナデ、外面ハケメ仕上げ。口径30.0cm、器高34.6cm、底径8.5cmを測る。58・59も如意形口縁をもつ甕で、ゆるやかに外反する口縁の下には凸帯が貼付される。胴部はほとんど張らない。59は土壤底出土のもの。60~65は甕の底部片で平底（60・61）と上げ底の二種がある。後者は横に張り出す形態をとるものが多いが、上層・中層で多く存在した長く、底壁の厚い底部は無く、厚さ1.1~2.2cmと比較的薄手で長さも短いものが多い。平底では底部径5.8cmと7.6cm、上げ底では6.6~7.6cmを測る。65は頸部が内傾して立ち上がる壺。口縁は強く屈曲し、端部はシャープにつくられている。内面ナデ、外面ヘラミガキ。67・68は如意形の口縁をもつ甕。67はわずかに外反する口縁と直線的な胴部を有す。底部は小さく平底。内面ナデ、外面ハケメ。復元口径24.4cm、器高23.9cm、底径5.9cm。68は口縁下に凸帯が貼付され、胴部はほとんど張らずに底部に経る。底部は横に張り出すが、後のものに較べると高さが低い。内面ナデ、外面ハケメ。口径26.1cm、器



第30図 7号土壤中層出土土器実測図(1/4)



第31図 7号土壤下層出土土器実測図①(1/4)



第32図 7号土壌下層出土土器実測図②(1/4)

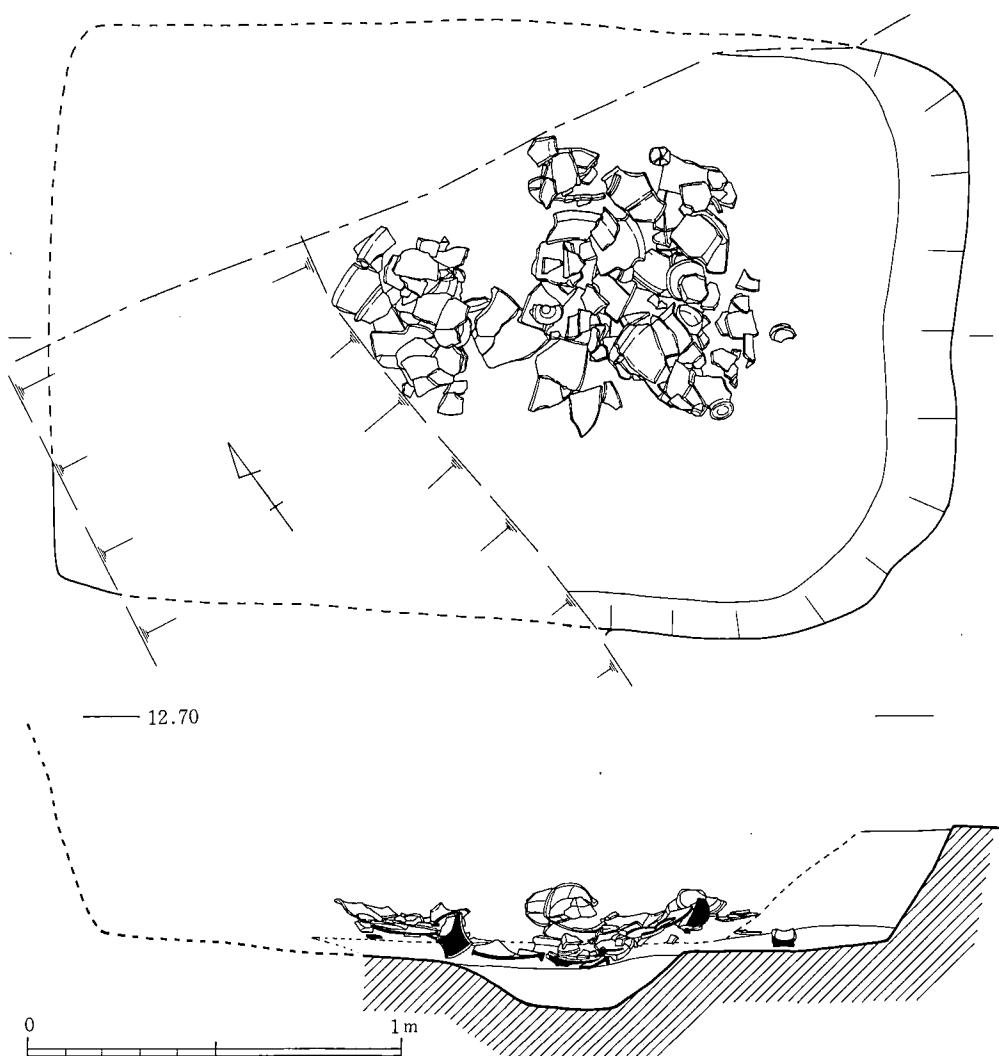
高28.9cm底径8.3cm。以上の土器は、土壌の下層及び土壌底から出土した一群である。

#### 8号土壌（第33図）

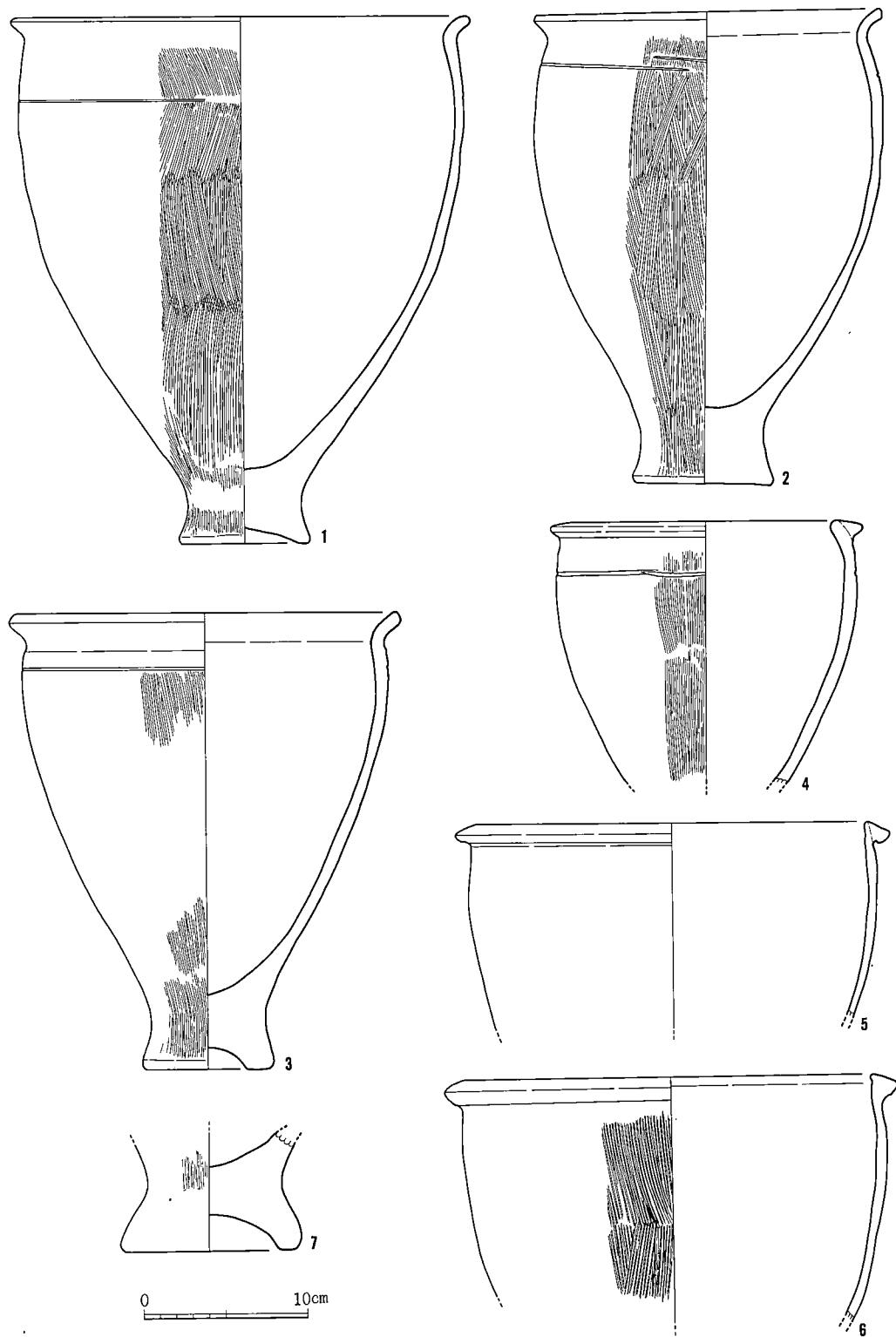
16区に位置する土壌。西側を溝及び攪乱により切られるが、遺構の残存から考えると、この土壌は長方形を呈していたことが推定できる。復元するならば、長軸239cm×短軸159cmの上端を測る土壌であろう。深さは現状で31cmを測る。土器は土壌のほぼ中央に集中して認められる。レベルは土壌底直上、もしくはやや浮いている。この土器群下には、径60cmを測る円形の小土壌が存在する。埋土は土壌内の黒色土とはやや異なる状態をみせ、その上面レベルは土壌底面と一致する。よって、この小土壌は土壌底面に合わせて埋めもどされた可能性をもつ。この小土壌内からも土器は出土しているが散在的である。

#### 出土土器（第34図・図版27・28）

1～3は如意形口縁を有す甕。器壁の厚いゆるやかに外反する口縁をもつ。口縁下には一条の沈線が施される。胴部は2がわずかに張るが、他はゆるやかに底部に経る。底部は長く、横に張り出した形態を呈し、1・3では外底の上げ底が顕著である。厚さは3.2～4.5cmを測り、厚い部類に属す。内面ナデ、他面ハケ目は共通の調整。4～6は亀ノ甲タイプの貼付口縁の甕。いずれも横に発達せず、三角状を呈している。4は口縁下に一条の沈線。内面ナデ、外面ハケメは共通。6は上げ底で、横に張り出す底部片で、1～3のそれに較べると厚さは薄い。1～



第33図 8号土壤実測図(1/20)



第34図 8号土壙出土土器実測図(1/4)

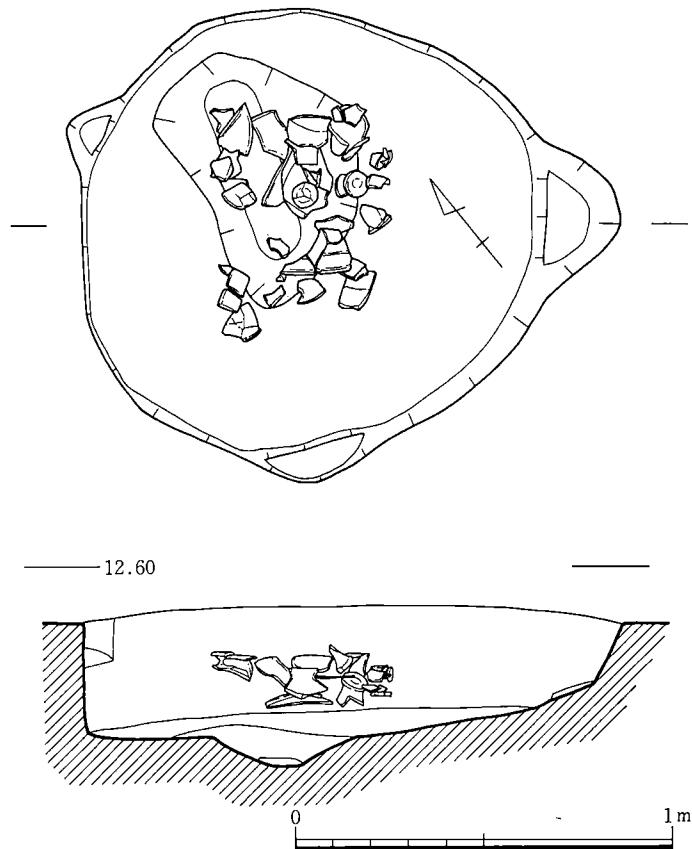
3は完形に近く、他も接合状況が良好な資料である。

#### 9号土壙（第35図）

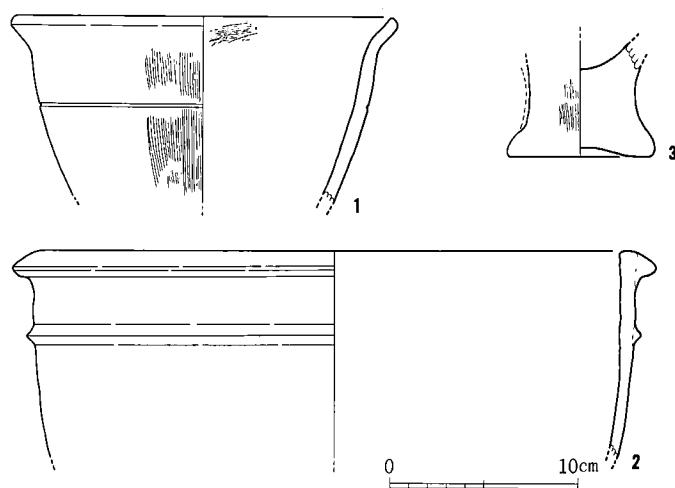
17区に位置するほぼ円形の土壙。径は下端で112～118cmを測る。深さは25～32cm。土壙底はほぼ平らで、さらに一段深く小土壙が堀り込まれている。小土壙は66cm×45cm、深さ10cmを測り、不整形の形状を呈す。土器片は土壙の中央付近にまとまって認められ、レベルは土壙内の中位で土壙底より浮いた状態で検出される。

#### 出土土器（第36図）

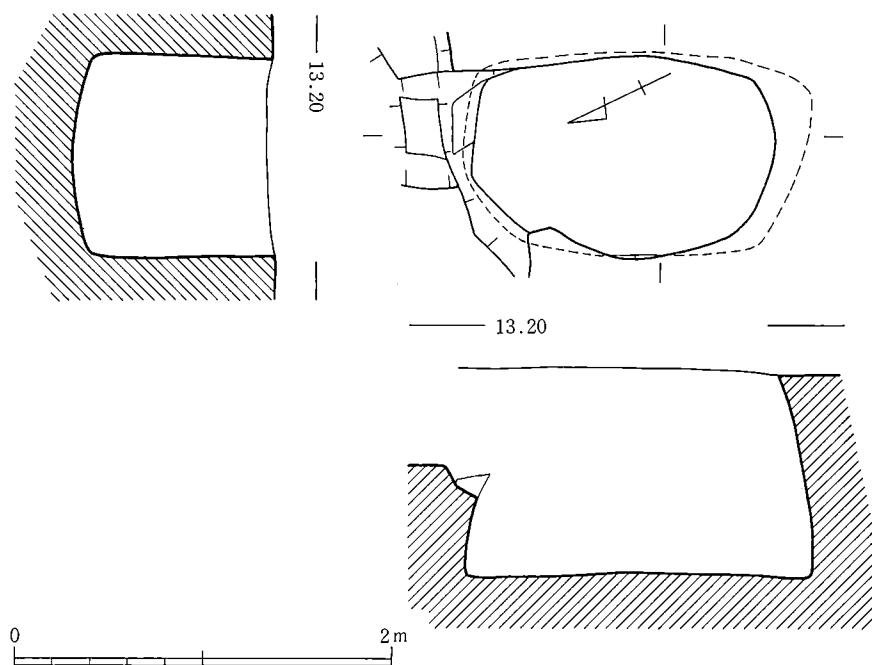
すべて甕の部分片。1はわずかに外反する如意形口縁をもつ。沈線が施され、内面ナデ、外面ハケメ。2は亀ノ甲タイプの口縁をもち、凸帯が貼付される。3は底部片。厚く、横に張り出した状態を呈し、外底は上げ底である。



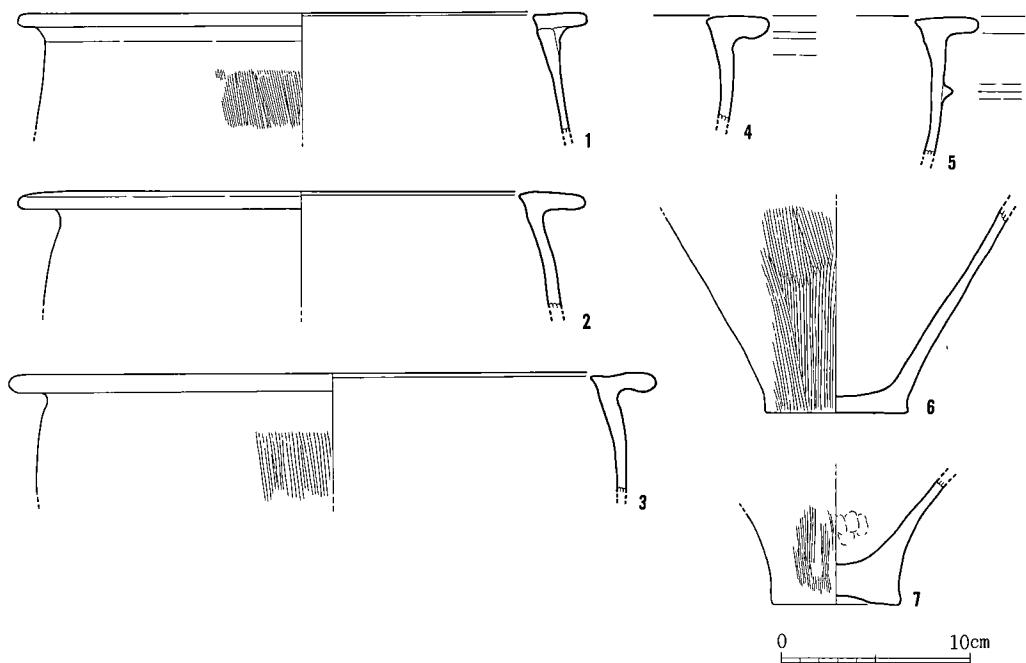
第35図 9号土壙実測図(1/20)



第36図 9号土壙出土土器実測図(1/4)



第37図 12号土壤実測図(1/40)



第38図 12号土壤出土土器実測図(1/4)

### 11号土壙（付図1）

30区に位置する径104cm、深さ33cmを測る不整形の土壙。

### 出土土器（第55図・図版28）

キザミ目のある如意形口縁を有する甕。口縁は短く、ゆるやかに外反する。胴部はわずかに張り、直線的に底部へ経る。底部端は指頭整形のため外反し、圧痕を多く残す。底部はわずかに上げ底で大きく、内面は平坦である。内面ハケのちナデ、外面ハケ目仕上げである。口径21.2cm、器高23.4cm、底径8.2cm。

### 12号土壙（第37図）

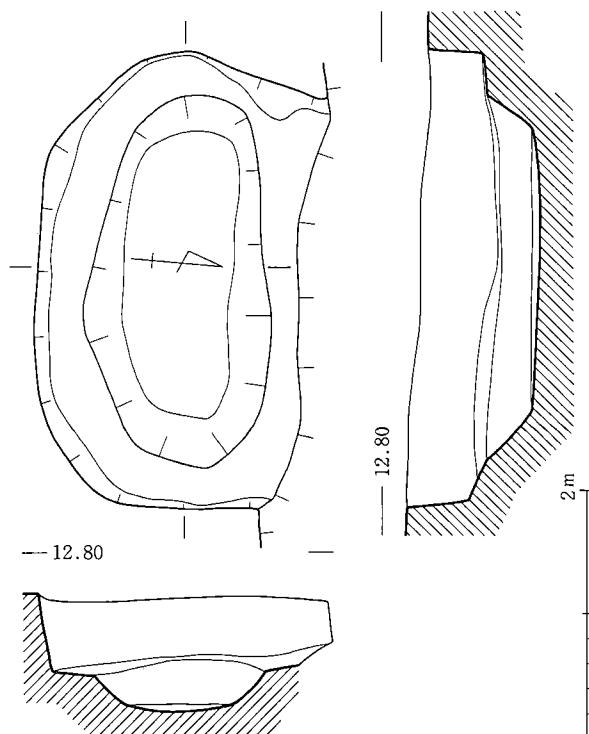
5区に位置する長方形の土壙。M7により北壁の一部を切られる。下端184cm×107cmを測り、深さは111cm。長軸の断面は、短軸と異なり、いわゆる袋状を呈す。北側のテラスがこの土壙に伴うものか否かは不明。

### 出土土器（第38図）

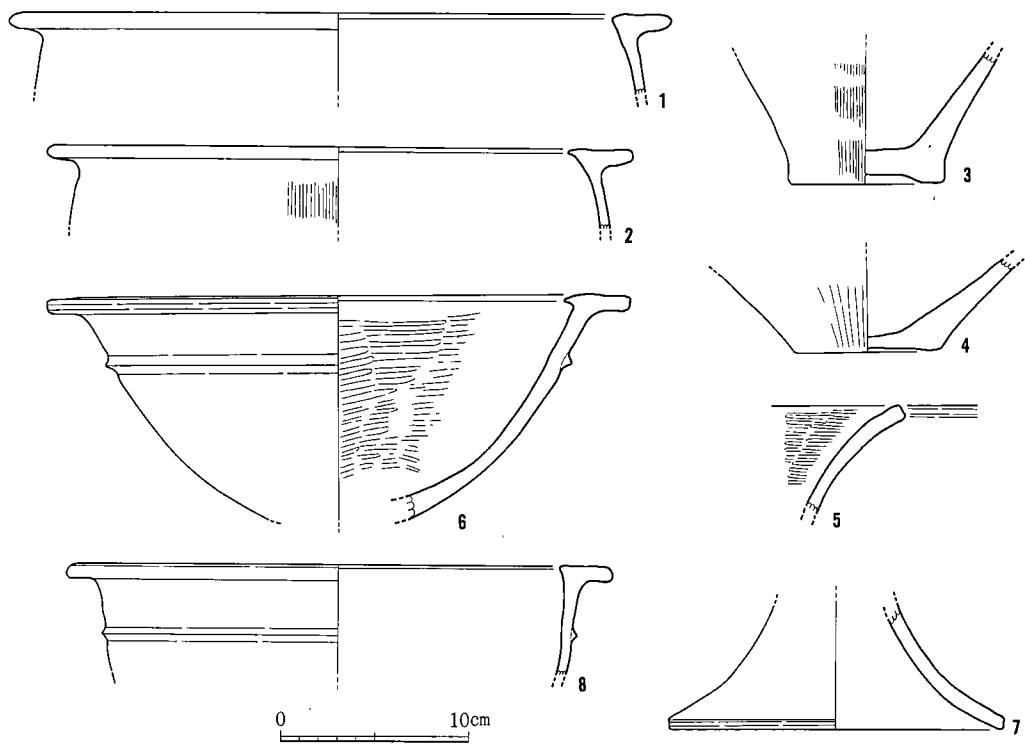
すべて甕の部分片。1～5の口縁は、すべて逆L字形を呈す。いずれも内側への発達がみられ、3・4は口縁端部が肥厚する。胴部は1～3で張る傾向が伺える。口径は1～3で30.0～34.2cm。6の底部は大きく、内面には平坦面がある。また、底面の厚さも薄い。7は古い様相を呈し、内面は湾曲し上げ底を呈す。あるいは混入かもしだぬ。甕の調整は、内面ナデ、外面縦ハケ目が共通。

### 13号土壙（第39図）

25・30区に位置する長方形状の土壙。北側をM3により切られている。規模は長軸で368cmを測る。土壙は、二段掘りの形態を呈し、二段目の掘込は302cm×153cmを測り、深さは土壙面から97cm、一段目から31cmを測る。土壙底は平坦であるが、一段目の底面はやや起伏に富む。二段掘りの形態から、この遺構は土壙墓と考えることも可能である。



第39図 13号土壙実測図(1/60)



第40図 13号土壙出土土器実測図(1/4)

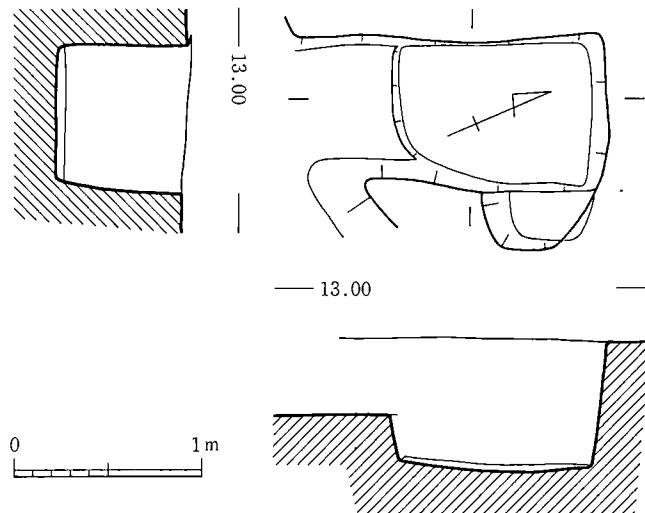
う。土器は散在して出土している。

#### 出土土器（第40図）

1・2は甕の口縁部片で、逆L字形を呈す。口縁端部にかけて丸みを帯び、2は内側への発達がみられる。胴部はいずれも張ると考えられる。3の底部片は上げ底を呈し、内面には平坦面をもつ。4・5は壺の部分片。4の底部にはミガキガ施されている。5の口縁部片は内外とも丹塗りで、内面横方向のミガキ、外面には暗文状のミガキガ施される。6・7は高坏の一部で、6の坏部は鋸形の口縁を有し深みをもつ。口縁下には凸帶が貼付され、内面ヘラ磨き、外面はナデ。7の脚部は外面に丹が施され、縦方向のミガキが施される。8は鉢の可能性をもつ口縁部片で、やや短い口縁をもつ。

#### 14号土壙（第41図）

5区に位置する長方形と考えられる土壙。南側をM7により切られ、南壁は存在しない。下端101cm×72cmを測り、深さは69cm。南側に一段のテラスがあるが、東西壁の状態から判断すれば、これはこの土壙に伴うものであろう。従って、一段のテラスをもつ長方形の形態がこの土壙の旧状を考えられる。主軸をD12とほぼ同じくするが、断面は袋状を呈さない。



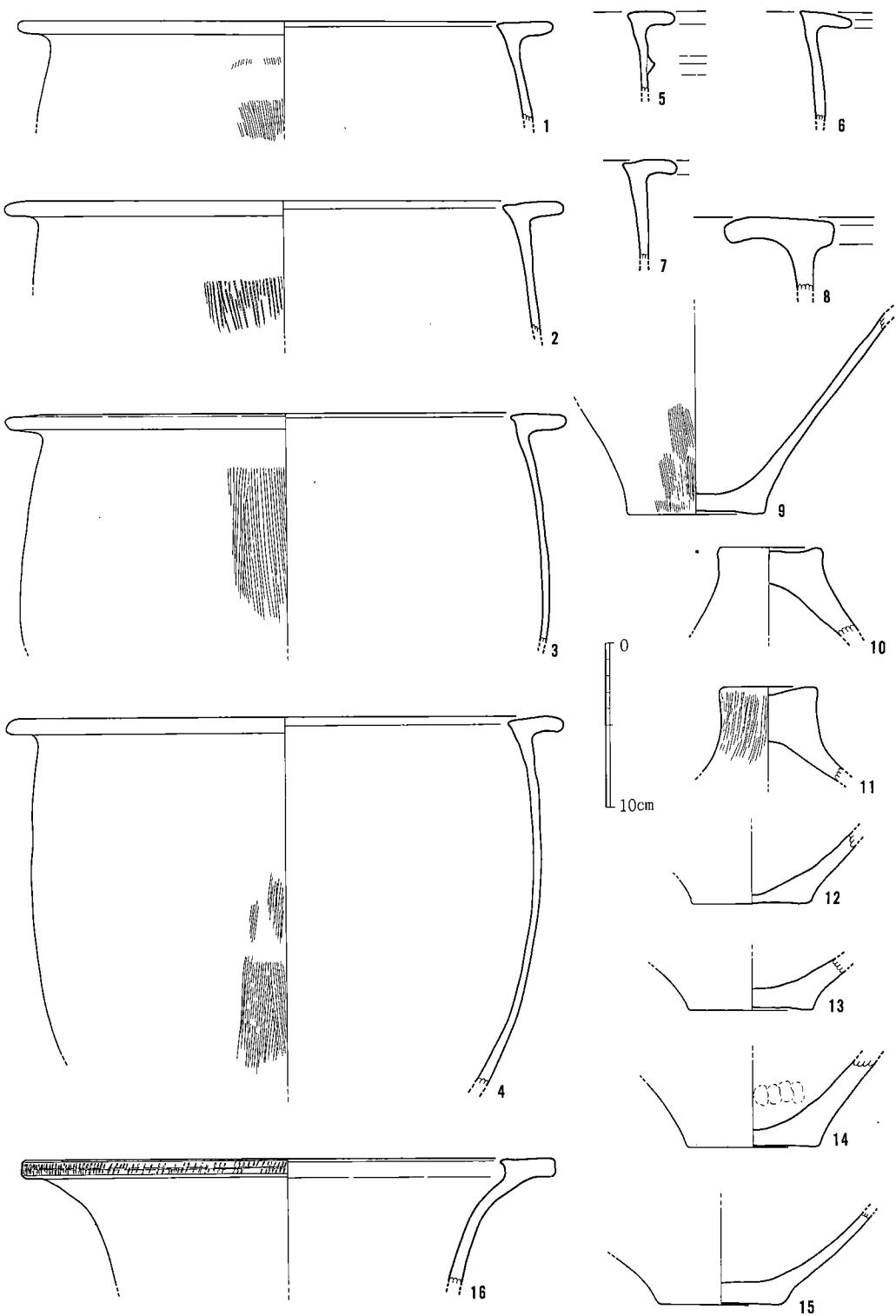
第41図 14号土壤実測図(1/40)

#### 出土土器 (第42・43図)

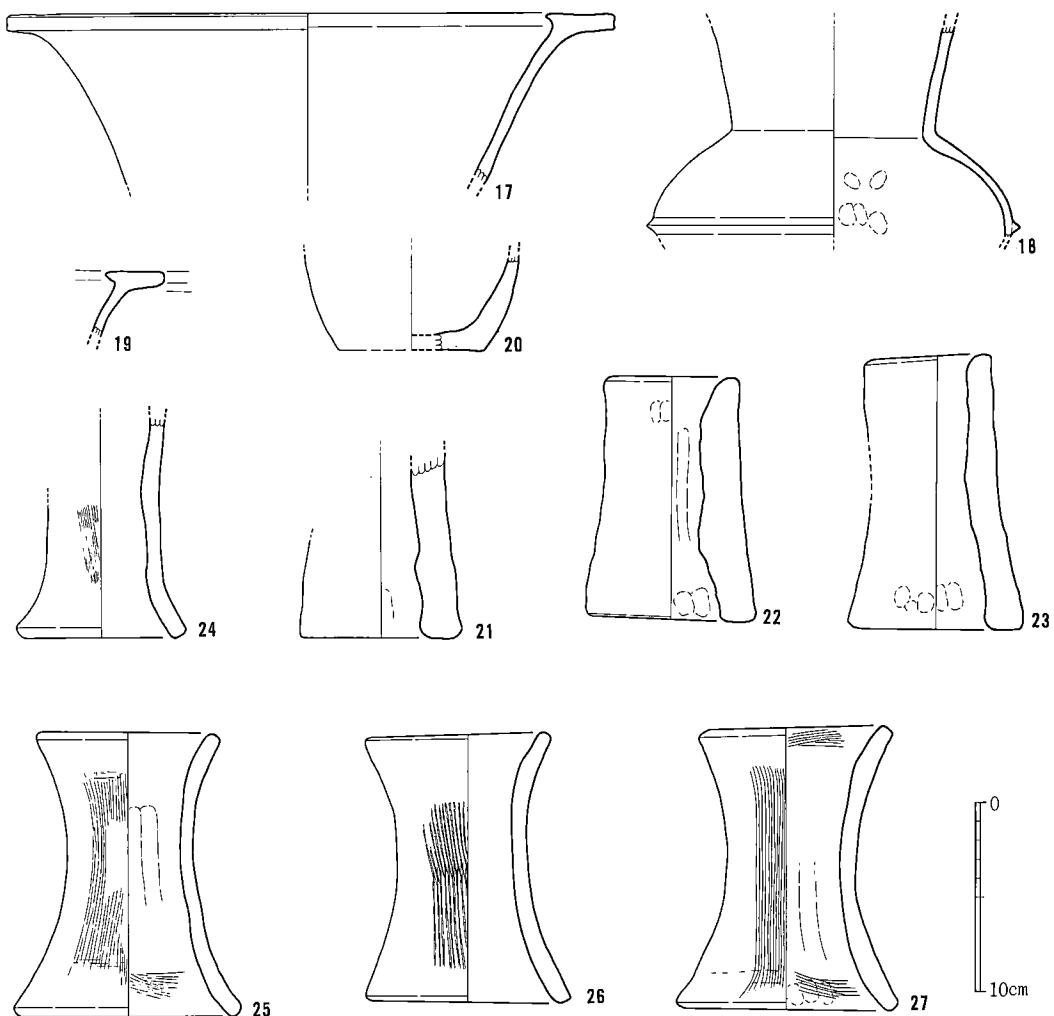
1～7は甕の部分片。口縁は内側に発達した逆L字形を呈し、6を除いて内傾する傾向をみせる。胴部はいずれもやや張る形態と考えられ、5のみが口縁下に凸帯が貼付されている。内面ナデ、外面縦ハケ目は共通。口径は30.6～34.1cmを測る。8は大形甕の口縁部片。内側に大きく発達した形態を呈し、やや外傾する。9は甕底部で、やや大きく内面平坦で上げ底を呈す。10・11は蓋の取っ手部と考えられる。12～19は壺の部分片。12～15の底部外面はナデやヘラ状工具によるナデが施される。16・17・19は鋤形口縁をもつ壺。16の端部にはキザミが施される。18は外反する頸部と張った肩部をもつ。凸帯は三角の一条を貼付。いずれもナデによって仕上げられ、ミガキはない。20は小形の甕の一部であろうか。大きな底部と丸みをもつ胴部を有す。21～23は支脚で器高12.7～14.6cm。形態は器台に似るが器壁は厚く、外面調節がナデるにとどまる。24～27は器台。基部の方が口径は大きく、器高は14.2～14.9cmを測る。

#### 7号土壤土層説明

1 黒褐色粘質土層(茶褐色土を少量含む)	10 暗茶褐色粘質土層	19 黒褐色粘質土層(茶褐色土を含む)
2 黒褐色粘質土層	11 黒褐色粘質土層	20 黒褐色粘質土層(茶褐色土を多く含む)
3 黒褐色粘質土層(茶褐色土を含む)	12 暗茶褐色粘質土層	21 茶褐色粘質土層(黒褐色土を多く含む)
4 黒褐色粘質土層(茶褐色土を多く含む)	13 黒褐色粘質土層	22
5 黄褐色砂質土層(青砂土・黒褐色土を含む)	14 茶褐色粘質土層(黒褐色土を少量含む)	23 黄茶褐色粘質土層
6 黒色粘質土層	15 黒褐色粘質土層(茶褐色土を少量含む)	24 黑色粘質土層
7 茶褐色粘質土層(黒褐色土を多く含む)	16 黒褐色粘質土層(茶褐色土を含む)	25 黄茶褐色粘質土層(5に同じ)
8 茶褐色粘質土層	17 黒褐色粘質土層(茶褐色土を少量含む)	
9 茶褐色粘質土層(黑色土を含む)	18 暗茶褐色粘質土層(茶褐色土を含む)	



第42図 14号土壤出土土器実測図①(1/4)

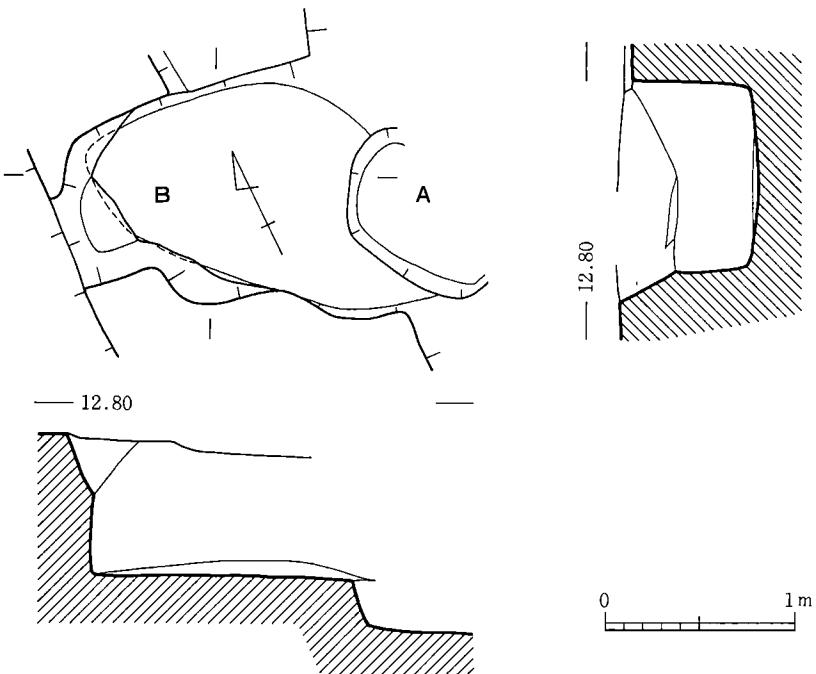


第43図 14号土壙出土土器実測図②(1/4)

### 15号土壙 (第44図)

9区に位置する不整形の土壙。東側をM10に切られ規模は不明である。当土壙は時期の異なる2基の土壙からなるが、調査時に誤って同時に掘り下げてしまったため、後出する土壙（第44図B）の一部が不明確となってしまった。以下15号土壙A、Bと称して各々の説明を記す。

15号土壙Aは95cm×65cmを測る、長楕円形の土壙である。15号土壙Bに切られ、深さは26cm前後を測る。土器は散在して出土し、甕・壺が器種として認められる。土器の年代からいふと、当土壙は貯蔵穴的な性格を与えるが、やや規模が小さい。15号土壙Bは、深さ69cm前後を測る不整形の土壙である。土壙底は長楕円形をなし、ほぼ平坦である。土器は散在して出土している。



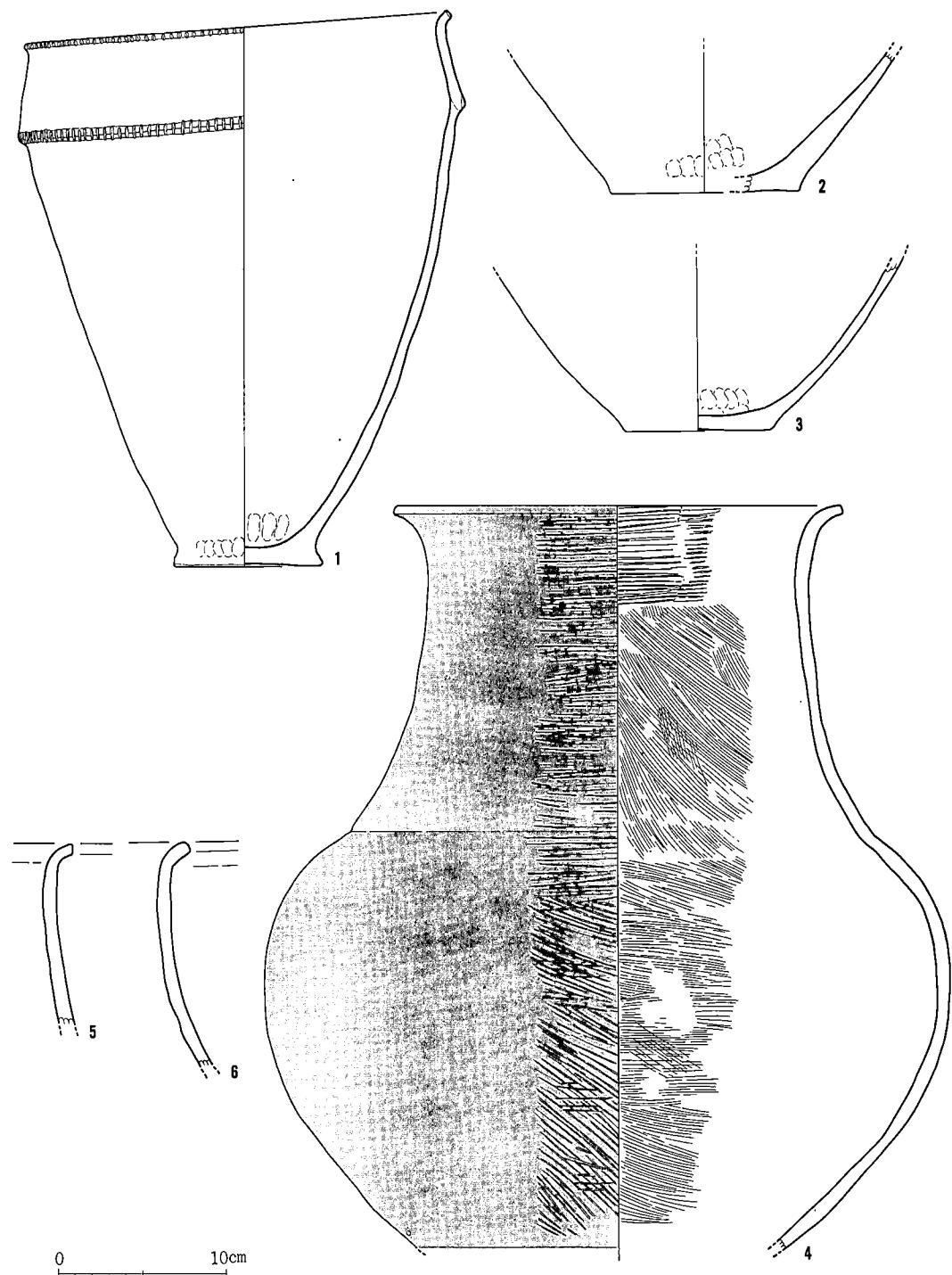
第44図 15号土壙実測図(1/40)

#### 15号土壙A出土土器 (第45図・図版28)

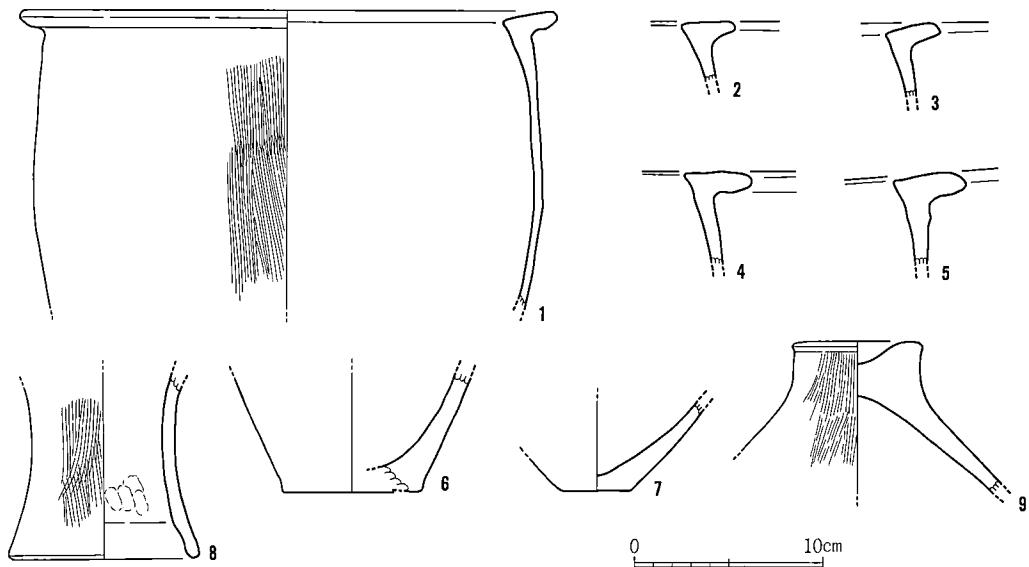
1はわずかに外反する如意形口縁を有し、キザミが施される。胴上位の粘土帯接合部は、凸帶状に突出し、そこにもキザミが認められる。そこから底部までは直線的で、底部は横に張り出す形態を呈し、わずかに上げ底である。内外ともナデ仕上げである。口径25.5cm、器高31.9cm、底径9cmを測る、ほぼ完形品。2・3は壺の底部と考えられる。2の外面はヘラミガキ、3は内外ともナデ仕上げ。5の壺は内傾して立ち上る、長い頸部をもつ。口縁はゆるく外反し粘土接合による段は認められない。肩部から胴部へは丸みを帯び、胴部は張るが極端ではない。内面上部と外面は主に横・左上がりのヘラミガキ、他はハケメ。5・6は壺の口縁部片。口縁はゆるく外反し、段は認められない。内外ともヘラミガキ、ヘラ状工具でのナデで仕上げられる。

#### 15号土壙B出土土器 (第46図)

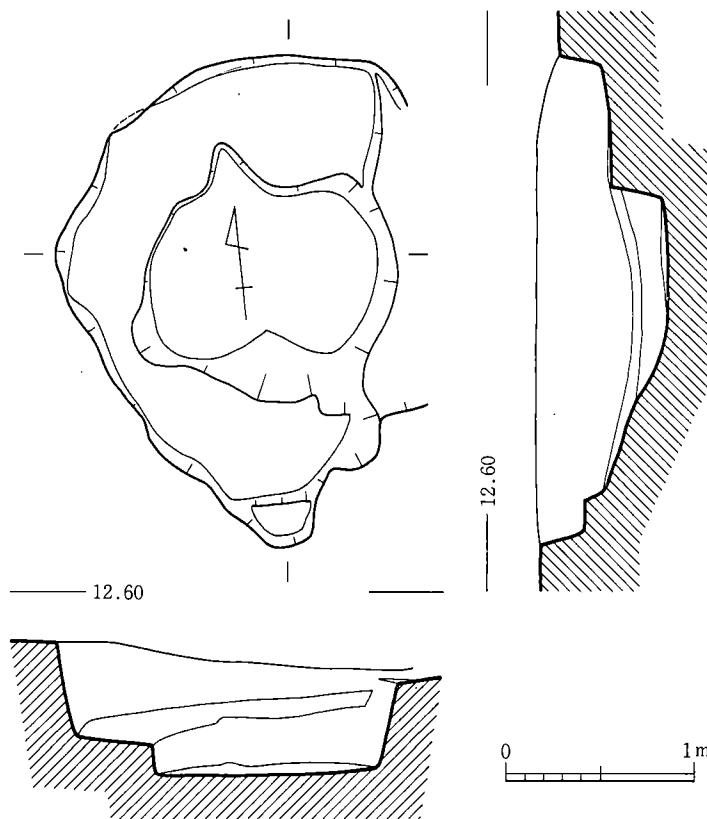
1～6は甕の部分片。1～5の口縁部は、やや内側に発達した逆L字形口縁をもつ。4を除き内傾気味で、端部が丸く長さはやや短い。1・4は端部付近が肥厚気味。胴部はいずれもわずかに張る形態と考えられる。6は底部と考えられ、わずかに上げ底で内面に少しの平坦面をもつ。内外ともナデ仕上げ。7は小壺の底部片か。9は蓋の取っ手で、外面は上げ底状の形態を呈す。



第45図 15号土壤A出土土器実測図(1/4)



第46図 15号土壤B出土土器実測図(1/4)



第47図 16号土壤実測図(1/40)

### 16号土壙（第47図）

22区に位置する不整形の土壙。コ字形のテラスの間には不整形の掘り込みがある。土壙底は深さ70cmを測り、甕1個体がほぼ完形で出土した。

### 出土土器（第48図）

如意形口縁を有す甕で、凸帯が貼付されている。両者の端部にはキザミが施される。胴部はわずかに張り、底部はやや直立する形態を呈す。内面ナデ、外面粗いハケ目仕上げ。口径25.4cm、器高27.2cm、底径8.3cmを測る。

### 17号土壙（付図1）

24区に位置する深さ20cm前後を測る不整形の土壙。

### 出土土器（第55図）

口縁は如意形を呈し、その上、下端には小さなキザミが施される。口縁下には横に発達した三角突帯が貼付され、その端部にもキザミが施される。胴部はわずかに張り、直線的に底部に経る。底部はやや上げ底で、内面は平坦。口径30.6cm、器高34.0cm、底径8.3cm。

### 18号土壙（付図1）

13区に位置する深さ10cm弱を測る不整形の土壙で、周囲を攪乱に切られ、規模は不明。

### 出土土器（第55図・図版29）

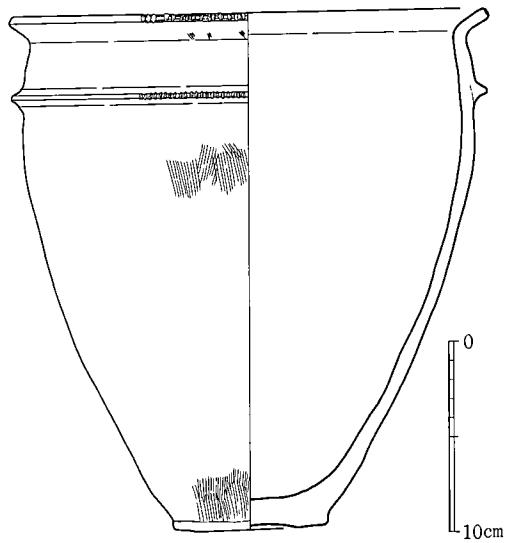
口縁は逆L字形で内側への発達がみられる。胴部は張り、中位には三角凸帯を貼付。底部はやや上げ底で、内面は平坦である。外面ヘラ磨き、内面ナデで仕上げられている。口径30.8cm、器高35.0cm、底径7.6cmを測る。

### 19号土壙（第49図）

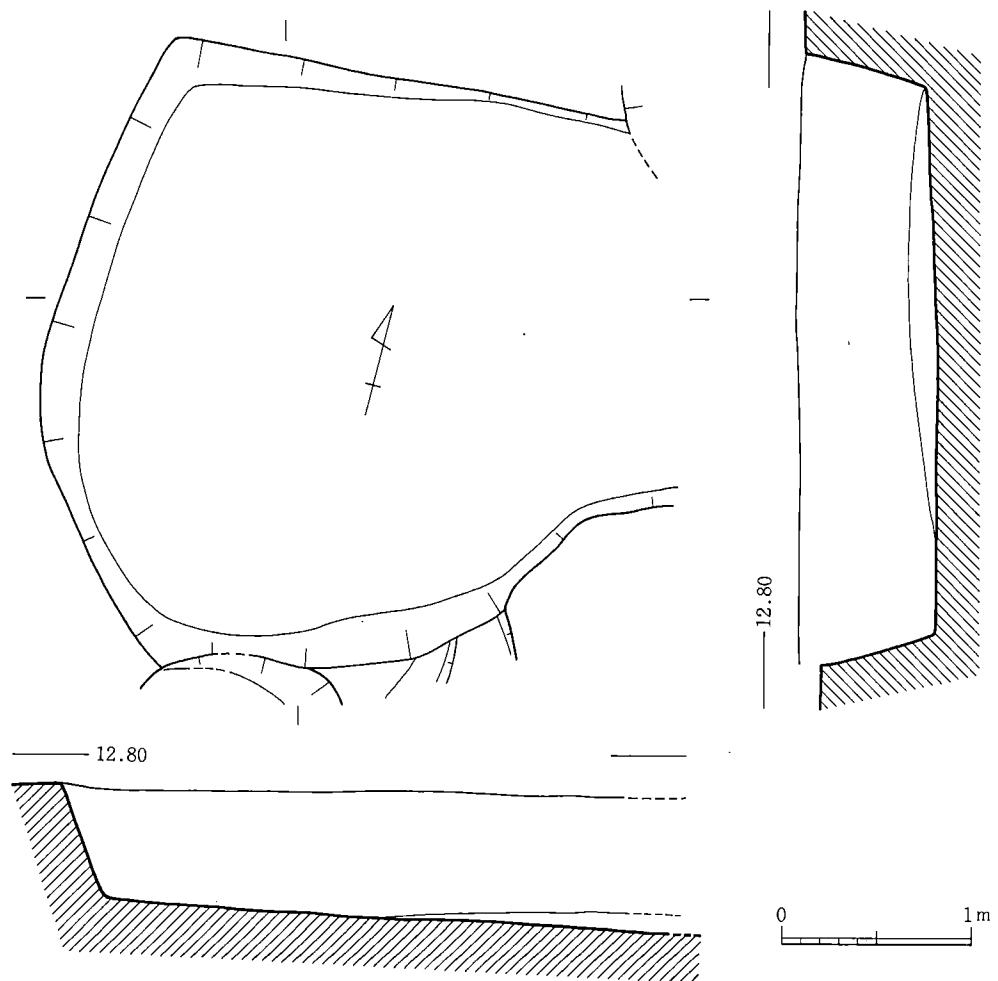
23区に位置する不整形の土壙。東側を攪乱され規模は不明であるが、土壙底で285cmを測り、深さは56~67cmを測る。底面は平坦であるが東にかけてやや傾斜する。土器は覆土内に散在して出土している。

### 出土土器（第50図・図版29）

1~4は如意形口縁を有す甕。1・2は口唇部にキザミが施される。2はキザミのある凸帯が貼付され、口縁端部のつくりも他とは異なる。3はほぼ完形品。横に屈曲した口縁と張り出したやや上げ底の底部をもつ。土径17.1cm、器高16.8cm、底径7.2cm。5・6は三角状の貼付口

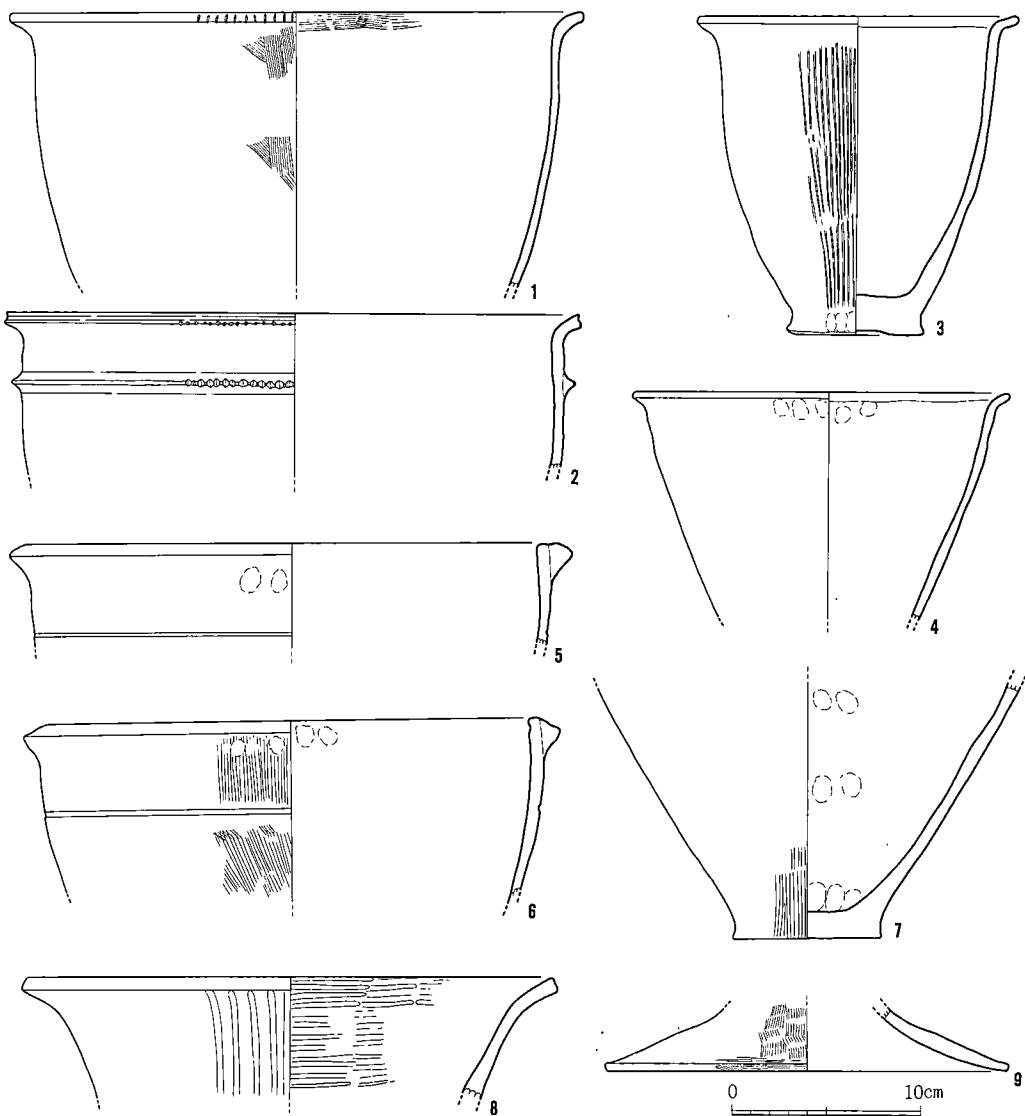


第48図 16号土壙出土土器実測図(1/4)



第49図 19号土壙実測図(1/40)

縁をもち、沈線が施されるもの。7の甕の底部は平底で、下端部がやや横に張り出す形態を呈す。8は壺口縁で、内面ヘラ磨き、外面は暗文状のヘラ磨きが施されている。



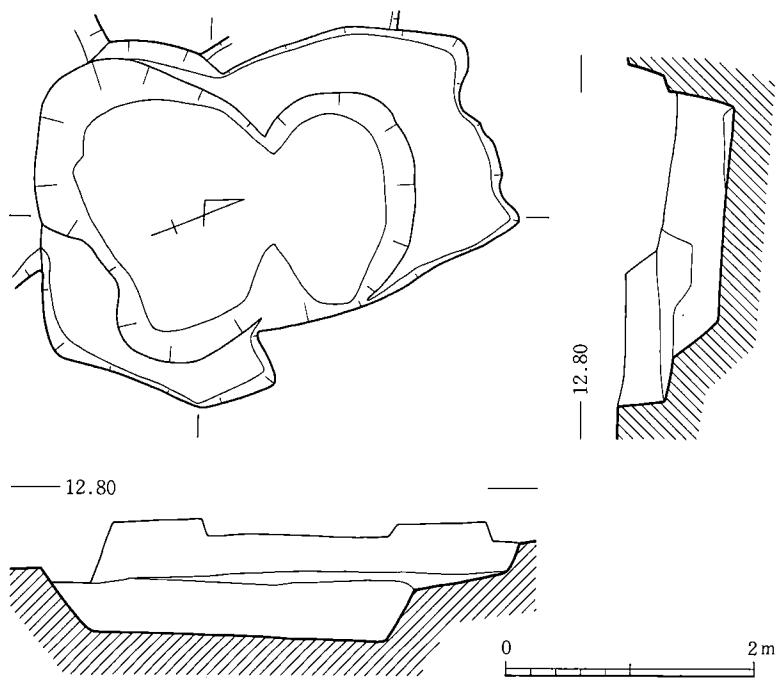
第50図 19号土壙出土土器実測図 (1/4)

## 21号土壙（第51図）

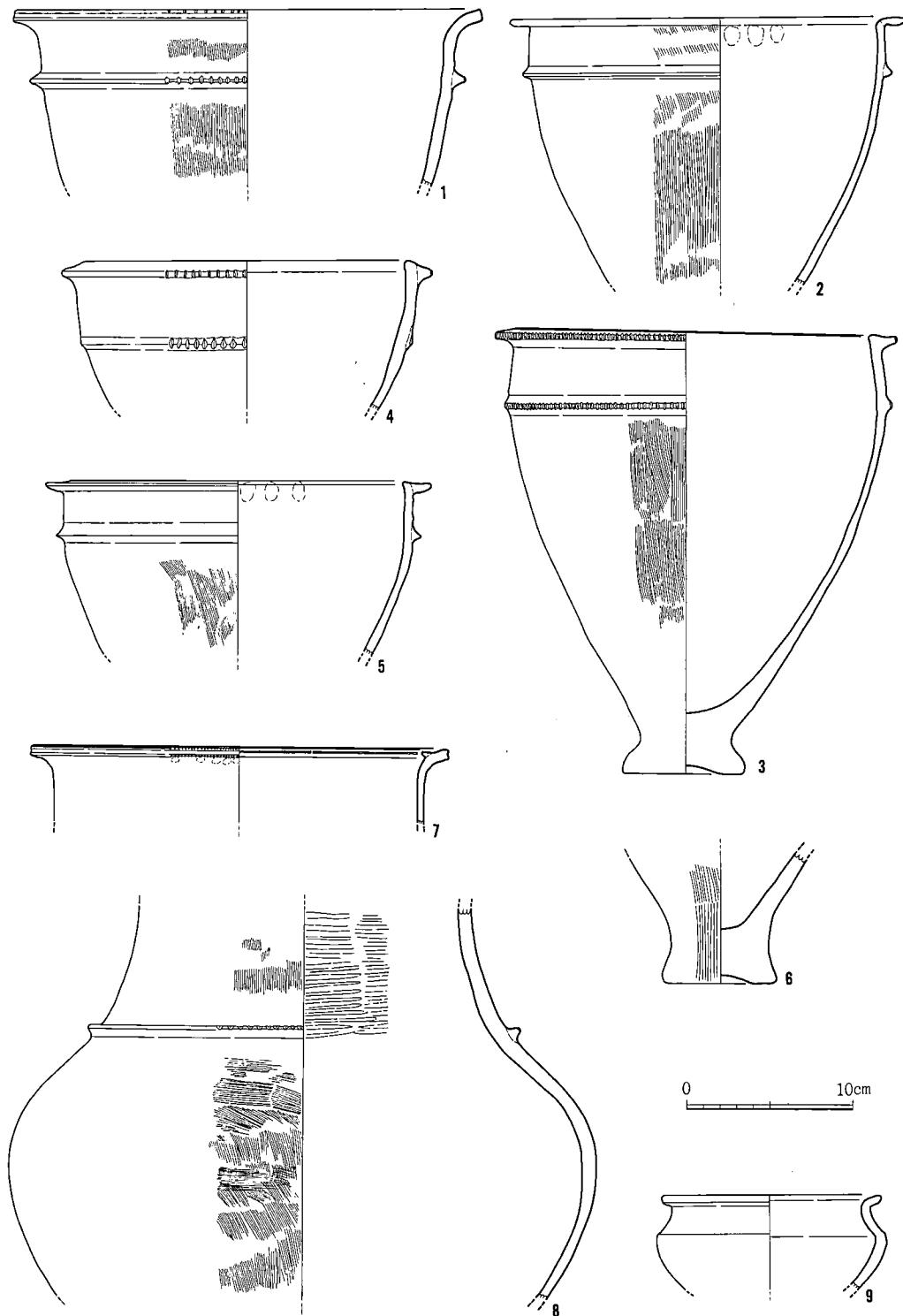
29区に位置する不整形の土壙。南北はそれぞれ一段のテラスをなし、間には不整形の掘り込みがある。土壙底までの深さは89cm前後を測り、そこは平坦である。土器はこの一段落ちた部分から散在的に出土した。石製紡錘車出土。

## 出土土器（第52・53図・図版29）

1・10は如意形口縁を有す甕。1は口縁端部がシャープに仕上げられ、小さなキザミが施されている。一条貼付の凸帯にもキザミはみられる。2は逆L字形に屈曲する口縁をもつが、大きくは如意形の部類に含まれるものであろう。3～5は三角状の貼付口縁、所謂亀ノ甲タイプの口縁をもつもの。いずれも横方向への発達が認められ、逆L字口縁への発展の過渡的形態を呈するものであろうか。3・4の口縁端部、凸帯にはキザミが施され、5にはそれは認められない。3の底部は横に張り出し、上げ底を呈す。6も同じく上げ底の底部であるが、横への張り出しあは小さい。7は大形甕の口縁部片。外反した口縁部の上面に三角状の粘土を貼付し、突出部を造り出す。口縁の上下端に小さなキザミが施され、突出部にもそれは認められる。胴部は直立し、内外面はヘラ状工具でナデられている。口径55cmを測る。8は肩部にキザミのある凸帯が施される甕。頸部はやや内傾して立上がり、胴部はやや張る。内面上部ヘラミガキ、外面



第51図 21号土壙実測図(1/60)



第52図 21号土壤出土土器実測図①(1/4)

ハケ後ナデ仕上げ。9は浅鉢状の器形で、肩部から内湾して立上がる形態を呈す。古い要素を残すものであるいは混込かもしれぬ。11は如意形口縁をもつ鉢。

#### 22号土壙（付図1）

22区に位置する深さ60cm前後、底径173～186cmを測る円形の土壙。

#### 出土土器（第55図・図版29）

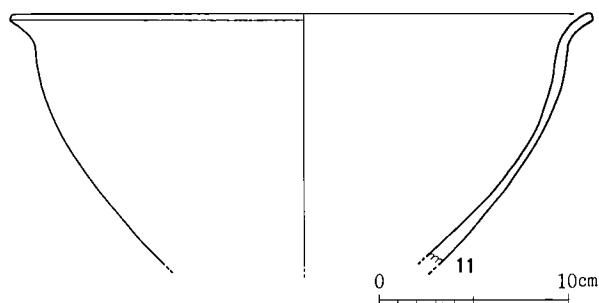
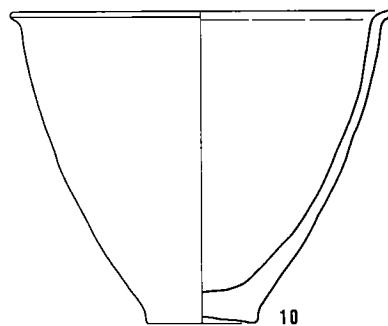
肩部に二条の沈線をもつ壺。頸部は内傾して立上がり、口縁は強く屈曲する。胴部は張るがやや長めで、直線的に底部に経る。底部は厚みのある平底で、内面は平坦である。内面ヘラナデ、外面ハケ目後ヘラナデ仕上げ。口径21.4cm、器高31.8cm、底径9.2cmを測る。

#### 24号土壙（第56図）

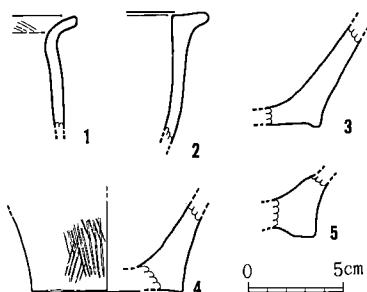
23・24区に位置する方形プランと考えられる土壙。204cm×208cmを上端で測り、深さは49cmを測り。土壙底は不整状の隅丸方形を呈し、190cm×201cmを測る。底面は平坦である。土壙に附隨するテラス、ピットはすべて後世のものである。土器は覆土中に散在して出土する。

#### 出土土器（第54図）

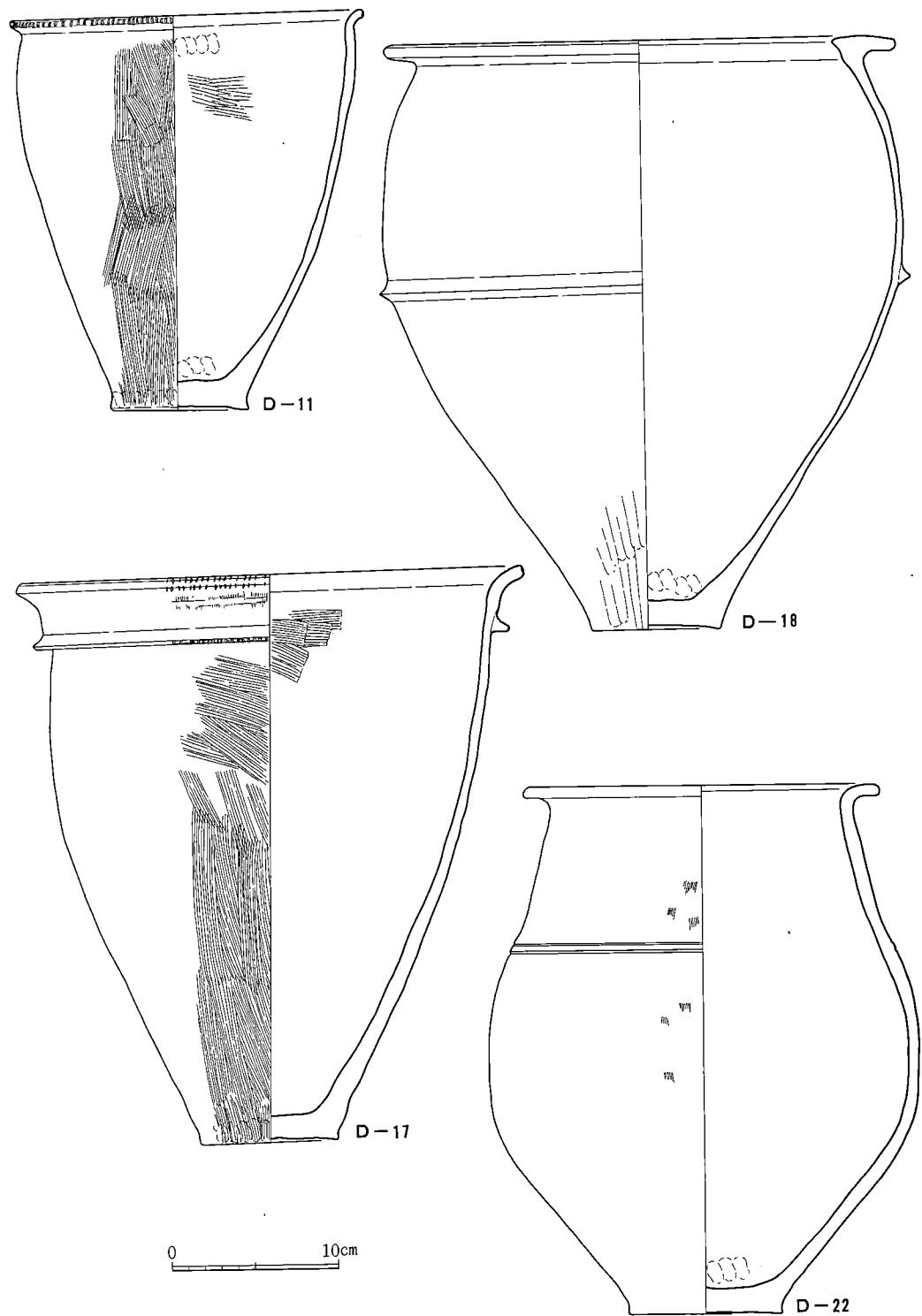
1は如意形口縁の甕。2は亀ノ甲タイプの甕がやや横に発達した形状を呈する。3～5は甕の底部片。5のみが上げ底で、他は平底。



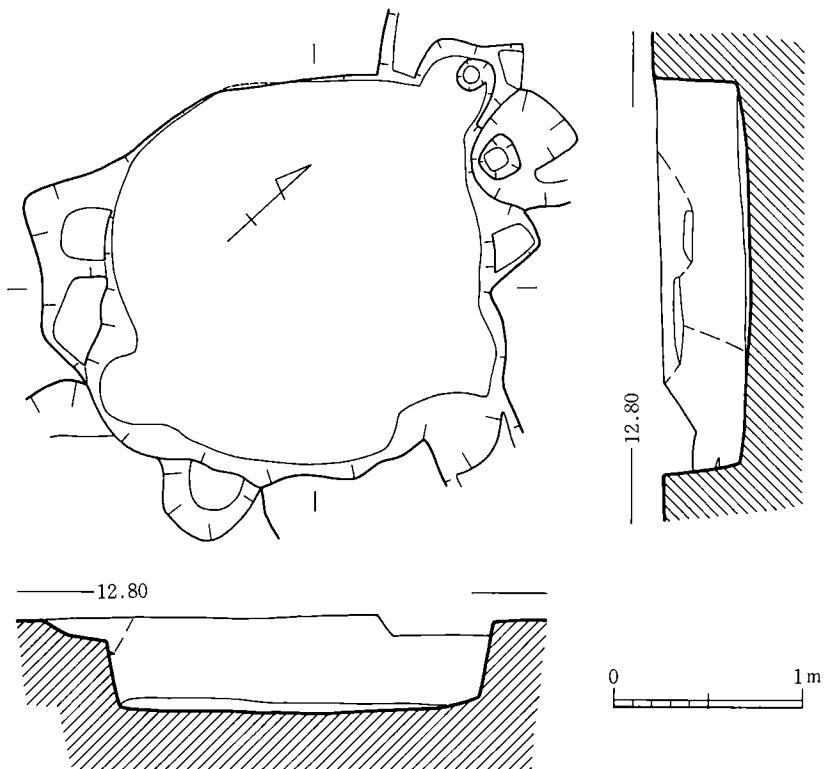
第53図 21号土壙出土土器実測図②(1/4)



第54図 24号土壙出土土器実測図(1/4)



第55図 11・17・18・22号土壤出土土器実測図 (1/4)



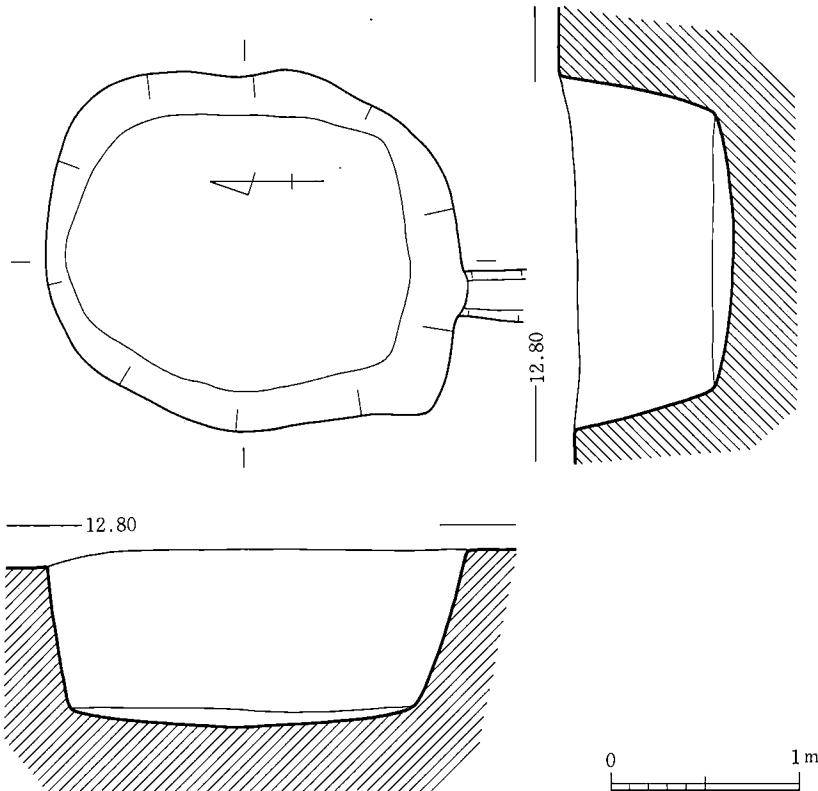
第56図 24号土壙実測図(1/40)

### 25号土壙（第57図）

19区に位置する隅丸方形の土壙。221cm×187cmを測り、深さは93cm。底面は181cm×144cmを測り、ほぼ平坦である。貯蔵穴のような性格をもつ遺構であろうか。土器は覆土中に散在して出土した。

### 出土土器（第58図）

1は如意形口縁の甕で、沈線が施される。2～6は亀ノ甲タイプ口縁の甕。貼付の仕方は様々で、5はやや横への発達をみせ始めている。口縁下には凸帶が貼付される例が多い。口径は19.4～26.8cmの範囲。7～10は甕の底部片。横への張り出しありは9に強く認められ、他は比較的直線的である。7に強い上げ底が認められる。底径7.2～8.6cm（9）である。11は小壺片。外面はヘラ状工具によるナデが認められる。



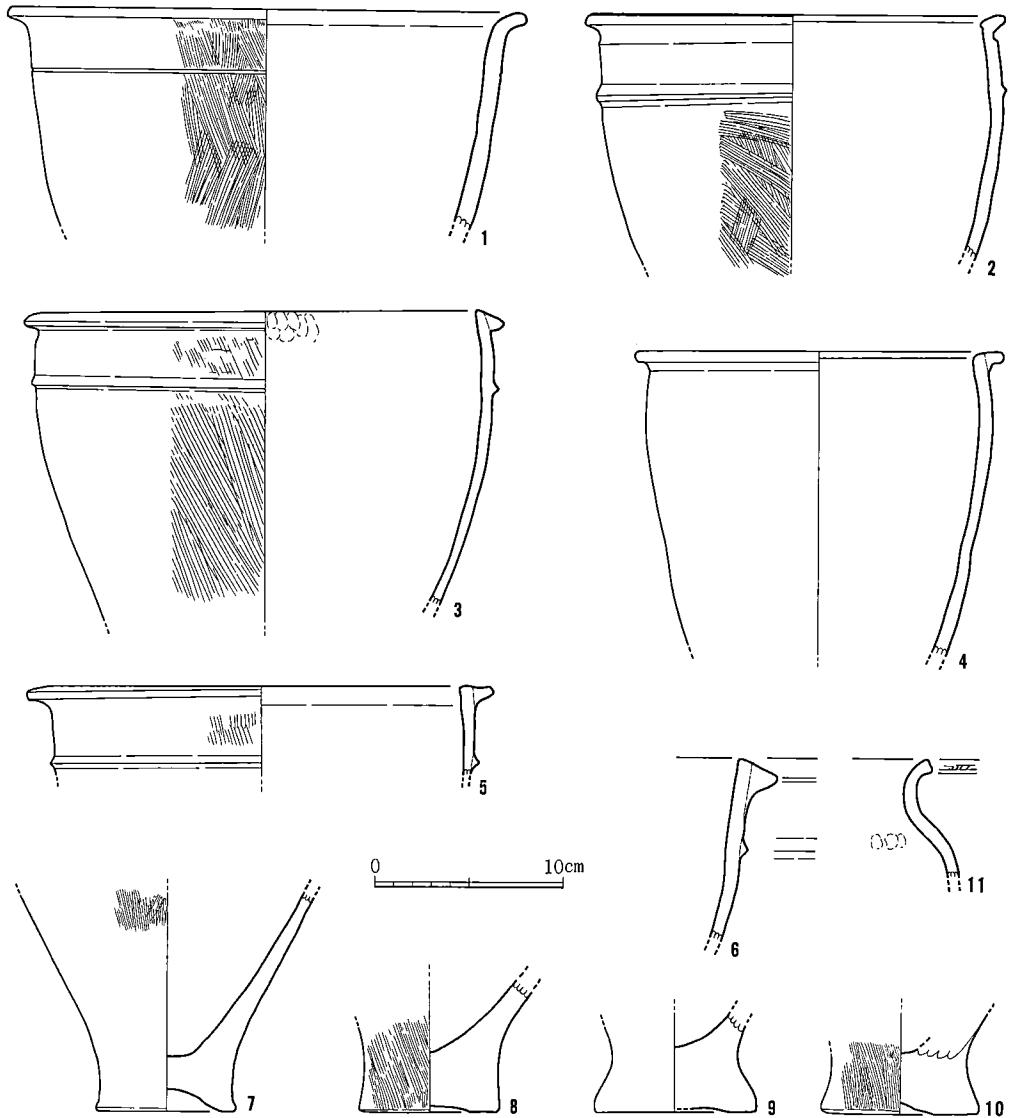
第57図 25号土壌実測図(1/40)

#### 26号土壌（第59図）

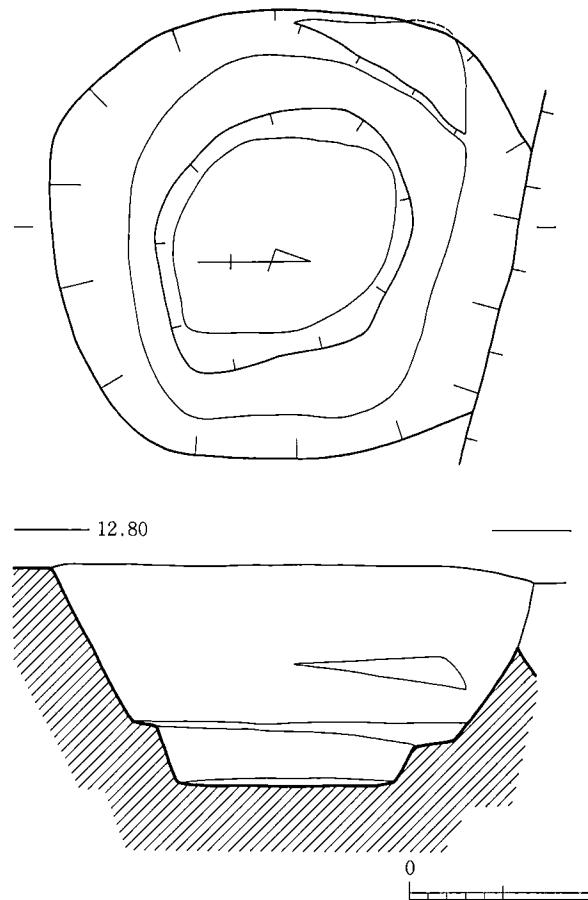
25区に位置する橢円形の土壌。北側をM3に切られている。東西径235cmを測り、土壌底までの深さは116cmを測る。二段掘りの形態を呈し、他には一段のテラスを有す。二段目の掘り込みは径136～159cmを測り、一段目から深さ約29cm程掘り込まれている。性格は判然としないが、湧水は認められ井戸の可能性もある。凝灰岩製の石庖丁が出土した。

#### 出土土器（第60図）

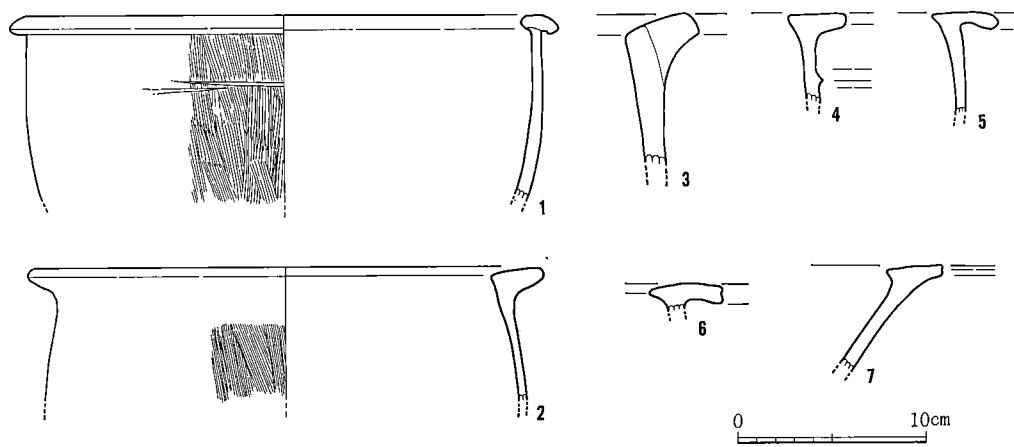
1～6は甕の口縁部片で、相互にかなりの時期差が存在する。1は胴部の上に粘土をのせて口縁部を形成するもの。2・3は内傾した口縁をもち、長さはまだ短い。3は亀ノ甲タイプの接合をみせるやや大形のもの。4は水平で、整った形の逆L字形口縁。5は内側に発達し、口縁端部がやや下がる形態を呈し、4以下では最も新しい時期の所産である。6は丹塗り精製甕の口縁部で、内側へ大きく発達している。7は壺の口縁部で、内側に発達した鋤形口縁をもつ。



第58図 25号土壤出土土器実測図(1/4)



第59図 26号土壤実測図(1/40)

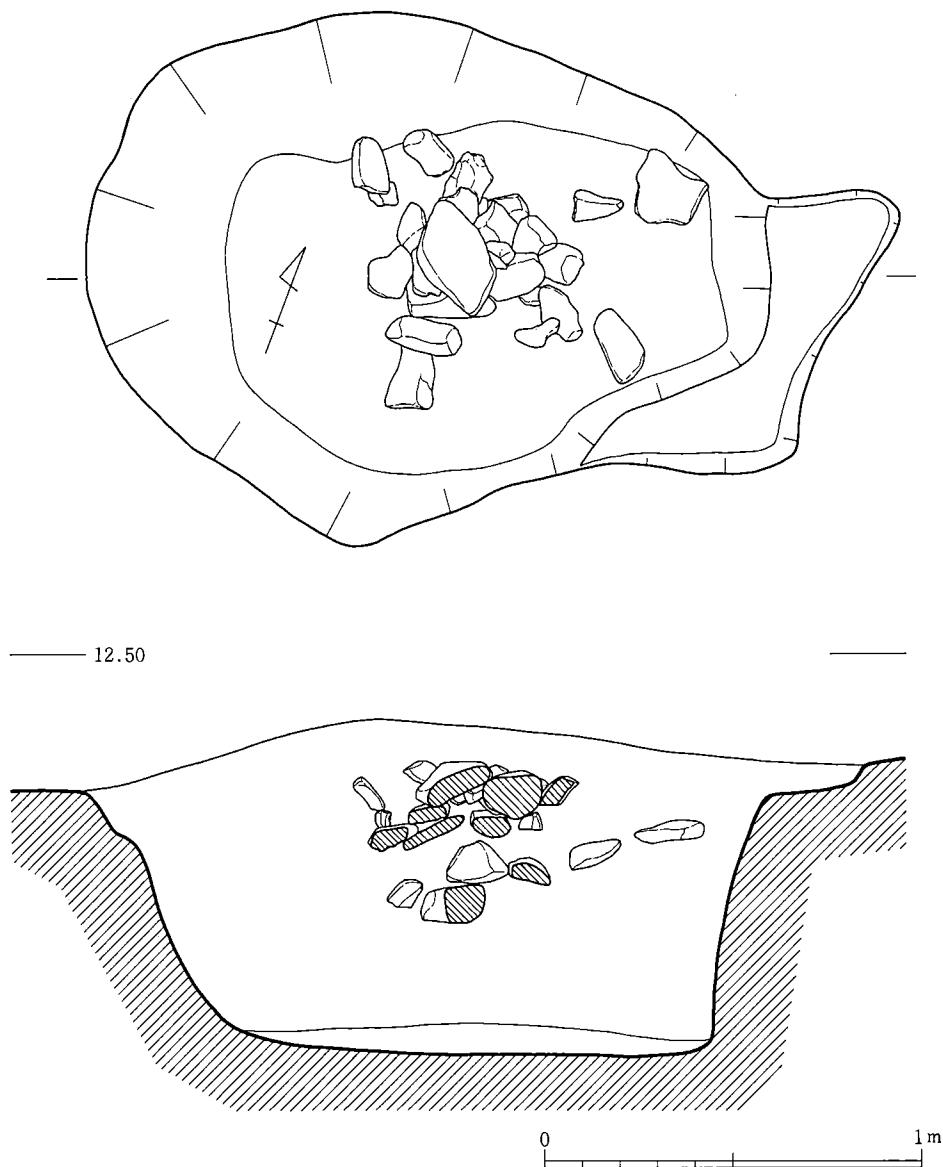


第60図 26号土壤出土土器実測図(1/4)

### (3) その他の遺構

#### 10号土壙（第61図）

16区に位置する不整形の土壙。206cm×138cmを測り、一段のテラスを有す。土壙内の中央には花崗岩碑石の集石が認められる。集石は土壙中位から上位のレベルにかけて認められ、土壙底付近には存在しない。土壙底は139cm×85cmを測る不整長方形を呈し、深さは88cm前後を測る。



第61図 10号土壙実測図(1/20)

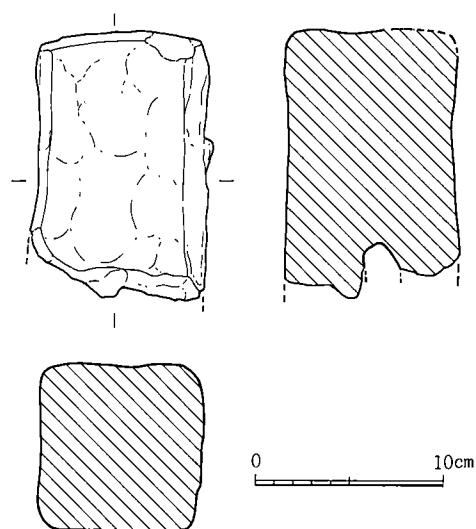
出土遺物は、須恵器片、弥生土器底部、弥生時代の所産と考えられる支脚が出土しており、遺構の上限を古墳時代後期に求めうる。性格不明の遺構である。

#### 出土遺物（第62図）

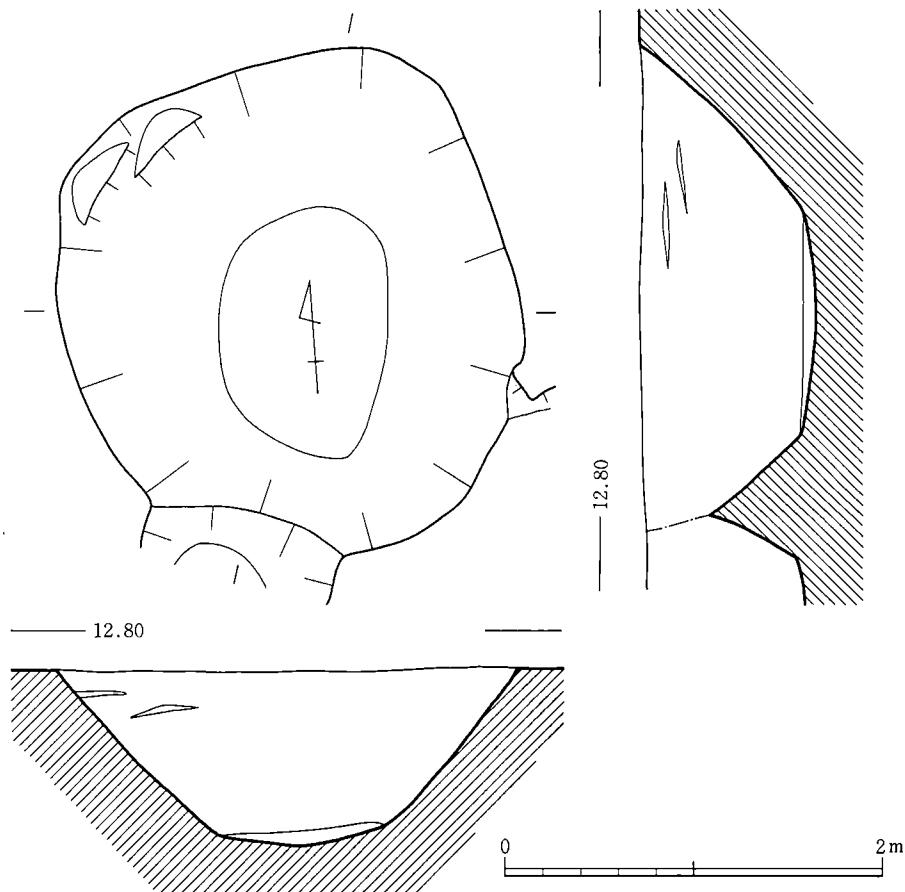
土製の支脚 1 点を図示する。一辺 4.4cm 前後の四角柱状をなし、下部は欠けている。上面には横長の凹部がある。胎土は砂粒を含み、外面は加熱のため剝落している。

#### 20号土壙（第63図）

24区に位置する橢円形の土壙。径は 238～270cm を測る。土壙底は径 89～132cm を測り、深さは



第62図 10号土壙出土遺物実測図 (1/2)



第63図 20号土壙実測図 (1/40)

最深部で91cmを測る。当土壙の性格は不明であるが、簡略な縦井戸の可能性もある。湧水は現在では土壙中位のレベルまで達している。弥生時代の紡錘車が出土。

#### 出土土器（第64図）

1は須恵器壺蓋で、宝珠つまみがつき天井部はやや丸みをもつ。外面一部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ、内面は不定方向のナデがみられる。2は皿で復元口径14.7cmを測る。

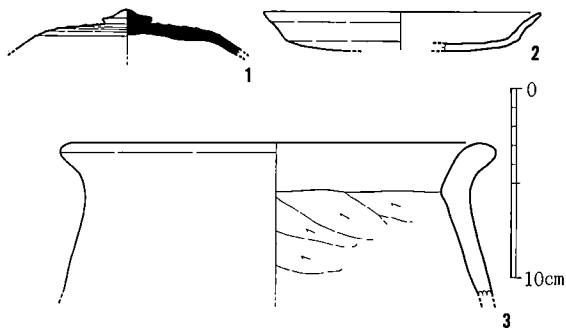
内外とも回転ヨコナデ。3は器壁の厚い甕で、内面に左上がりのヘラケズリが認められる。

#### 23号土壙（第65図）

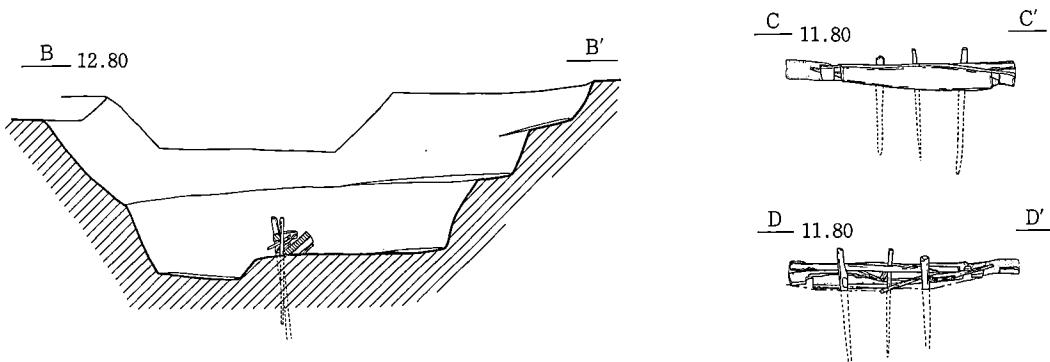
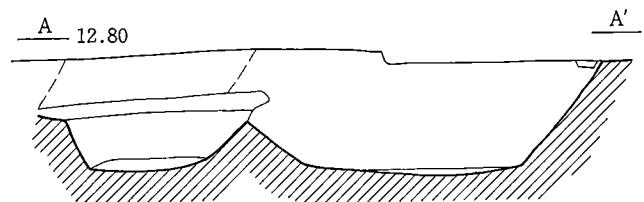
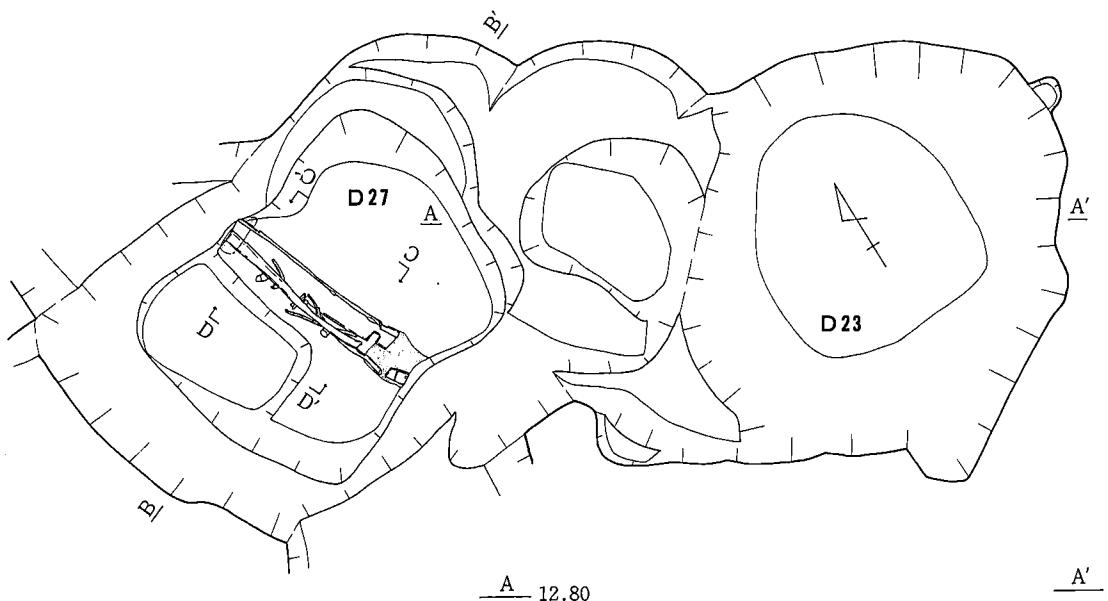
27号土壙の東側に位置する不整円形の土壙。27号土壙との先後は不明。当土壙も2基の土壙が切り合っていると考えられるが、遺構確認ではそれは認められなかった。東西にそれぞれ橢円形の土壙底を有す。

#### 27号土壙（第65図・図版5）

18区に位置する、井戸と考えられる土壙。北側を攪乱に、南側をM4に切られている。東側はD23と切り合うが、先後関係は確認できなかった。従って、その規模は不明であるが、土壙の残存から判断するならば、長方形プランの遺構であった可能性もある。土壙底は隅丸長方形に掘り下げられ、そこからさらに一段深く長方形に掘り下げられた部分が存在する。土壙底は226cm×182cmを測り、深さは130cm前後を測る。土壙底中央には、南北方向に長さ80～103cmの杭が3本打ち込まれ、その東側には長さ156cm、幅14～21cm、厚さ4～6cmの板材がやや倒れた状態で検出される。杭と板材の間には、枝材や角材が数本認められ、両者がよりかみ合うように配慮されていると考えられる。板材の東側には杭は存在しないが、その代わりに黒褐色土や砂質土を土壙底東側に充填することによって板材の安定を計っている。この板材を直立して復元するならば、水を汲む人は図の点線のレベルまで降りてきてそれを行ったと考えられる。湧水は土壙底のほぼ全面に認められるが、長方形の一段深い部分では特に顕著である。前後するが、板材は土壙底を横に仕切るには短く、不足する部分には粘土を充填して仕切りを行っている。板材は井字形に組み合わせる井戸枠の一枚をそのまま使用しており、両端には組み合わせ用のコ字形の切り込みが認められる。土壙の東側には三日月形のテラスが2段あり、階段状をなしている。おそらく昇降用と考えられ、断面図もそれを意識して作図している。以上のことから、この遺構は地面を筒状に掘り抜く「縦井戸」ではなく、いわゆる「横井戸」の部類に含まれる性格のものであろう。現在の湧水レベルは当土壙の中位以上にあり、杭や板材で区画さ



第64図 20号土壙出土土器実測図(1/4)



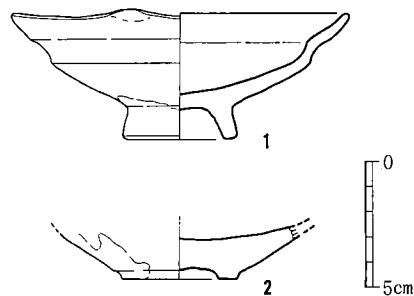
第65図 23・27号土壤実測図 (1/60)

れた東半部の土台は完全に水没し、古代と現代ではそのレベルにかなりの差があったことを推定させる。

#### 出土遺物（第66図・図版85）

出土遺物は弥生土器から近世に至るまでの様々なものを含んでいるので、ここでは下限を示す陶器2点を図示している。1は唐津もしくは上野・高取の皿。復元口径13.6cmを測り、口縁の一部を内側にひずませている。体部は中位やや上がり内湾し、高台はやや高い。技法はロクロ成形、後に施釉のため定がでないがロクロケズリを体部に施し、高台周辺はロクロナデ。胎土は赤褐色。釉は白色で部分的に気泡が生じている。

焼成は不良で、施釉は高台ぎわまで行われる。16世紀末から17世紀初頭の所産。2は唐津の皿。体部下半のみの破片で、体部は広がり高台は低い。ロクロ成形後ケズリ、後ロクロナデを施しているが、高台内はケズリのままである。施釉は高台ぎわにまでおよぶが、体部は部分的にかかってないところがある。釉は青みがかった灰色で、胎土は薄明るいアズキ色。見込に現状で2ヶ所、砂目の痕が残っている。高台畳付にも目砂が付着している。1600年～1630年代の所産である。



第66図 27号土壙出土遺物実測図(1/3)

#### (4) 溝

溝は24条を数える。時代は中世から現代にわたり、ここではその主な例のみ説明を記す。

##### 1号溝（付図1）

VI区西の東側を南北に走る溝。溝中には現在の道路にそって木杭が打たれているが、これはおそらく西岸の護岸のためのものと考えられる。出土遺物は中世の土師質、瓦質土器、江戸時代～現代の陶磁器類を多量に含む。

##### 2・3・4号溝（付図1）

調査区東側をコ字形に走る溝で、おそらく中世に機能していた一連の溝と考えられる。2号溝の北側は搅乱により定かでなく、4号溝は近・現代に再び溝として掘り直されており、その終点は明らかでない。2号溝は南北に現存で約23mの長さを測り、幅は1～1.5m、深さは45～60cmで南ほど深くなっている。3号溝は東西に約20mの長さで、幅は1.5～20m弱、深さは80cm前後を測り、中央が最深部となる。4号溝は3号溝とのコーナーから北へ約13mの部分までが一連の溝と考えられるが定かでない。遺物出土状況は2号溝に特に集中し、3号溝から綠釉陶器と胎土目が4ヶ所の16世紀末から1610年代にかけての唐津の皿が出土。（図版63）

### 7・8号溝（付図1）

調査区南西を十字状に走る溝。7号は東西に28mの長さを測り、出土遺物は無い。8号は南北に約24mの長さで、南は調査区外に伸びている。中世から現代までの遺物を出土する。

### 11号溝（付図1）

調査区の西端を南北に走る溝で、北端は13号溝に合流する。長さは約26mを測り、弥生時代から現在までの遺物を含む。特に江戸時代から明治・大正と考えられる陶磁器類が多量に含まれている。

### 9・10・18号溝（付図1）

調査区西侧をL字状に走る溝で、江戸時代に機能していた一連の溝と考えられる。9号溝は東西に長さ約15mを測り、幅は0.8~1.5m、深さは50~90cm弱を測り東側と中央部が深く、溝中にはいくつかの段差がある。10号溝は南北に約10m、幅は0.8m前後で深さは30~70cmを測り、北側が浅くなる。18号溝は東西に現存で約10mを測り、西端は11号溝に切られ定かでない。幅80cm前後、深さは40cm前後を測り西側ほど深くなる。遺物は9号溝東半に集中して、18号溝に散在して出土している。9号溝出土遺物は溝底面付近出土のものが多い。

### 13号溝（付図1）

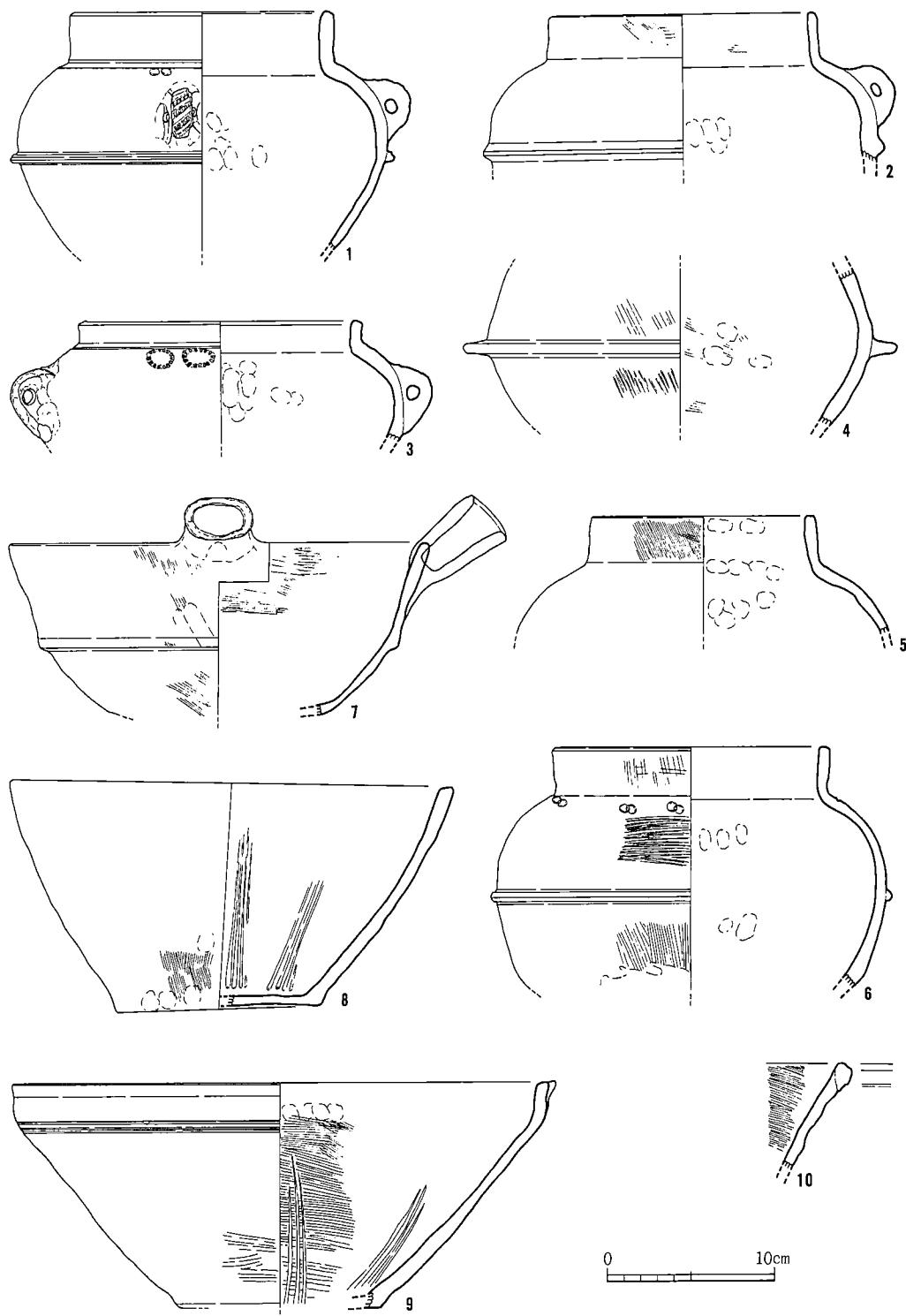
調査区北西を北東から南西に現存で約30m走る溝で、両端は調査区外に伸びている。幅は場所によって変化するが、基本は1.8m前後を測る。深さは北東側が約90cm前後と深いが、標高からいうと溝中央部付近が最も低い。遺物は溝全面から陶磁器類が出土している。

### 2号溝出土遺物（第67図・図版62）

中世の土器が出土している。10のみ土師質の土器で、他は主に暗青灰色を呈する瓦質の土器である。1~6は湯釜でいずれも復元実測。いずれも直立した口縁をもち、肩部上位にはスタンプによる装飾が施される例が多い。最終調整はナデ・ヨコナデであるが、外面に刷毛目を残すものもある。7は把手付きの鍋（鉢？）で、外面には二次焼成の痕が著しい。8・9はすり鉢。いずれも内面に刷毛目の痕を残す。

### 9号溝出土陶磁器（第68・69図・図版64~71・88~96・表2）

陶器19点、磁器13点を図示している。遺物の年代は上限を1610~1630年代の陶器（26・27）2点に求められ、下限は19世紀初頭～中葉の磁器（13）が示している。しかし、総体は17世紀後半から18世紀中葉にかけてのものが占め、遺物の群としての年代はここに求めることができよう。磁器は輸入中国青磁を除いて、肥前・肥前系で占められる。碗には、高台内に「大明年製」の銘をもつものが多い。色絵は1点（5）存在する。皿は見込みを蛇ノ目釉剥ぎにしたものが多く、図示以外のもの（図版）にも認められる。蓋には「廣東碗」の蓋があるが、碗には「廣東」は無い。陶器は19点中17点が唐津・唐津系で占められる。碗・皿・瓶ともに刷毛目のもの



第67図 2号溝出土遺物実測図(1/4)

が多く存在する。碗は唐津内野山窯の掛け分けを行う碗があり、これらはどの溝にも普遍的にみつけることができる。皿では見込を蛇ノ目釉剥ぎにして重ね焼きを行うものが多く、古手の皿では見込に目砂を置いたものがある。大皿では、砂胎土目のものが18世紀の中葉まで認められる。擂鉢は、内外に鉄泥を施すのみで無釉のものがほとんどである。唐津・唐津系以外の陶器には、色調が淡黄褐色の京焼風陶器の一群があり、胎土は他のものと大きく異なっている。また、図示したもの以外（図版88～96）でも、肥前・肥前糸磁器と唐津・唐津系陶器がそのほとんどを占め、文様その他の特徴は図示したものとほぼ同様である。図示したものの詳細は表2を参照されたい。

#### 13号溝出土陶磁器（第70・71図・図版71～77・96～99・表3）

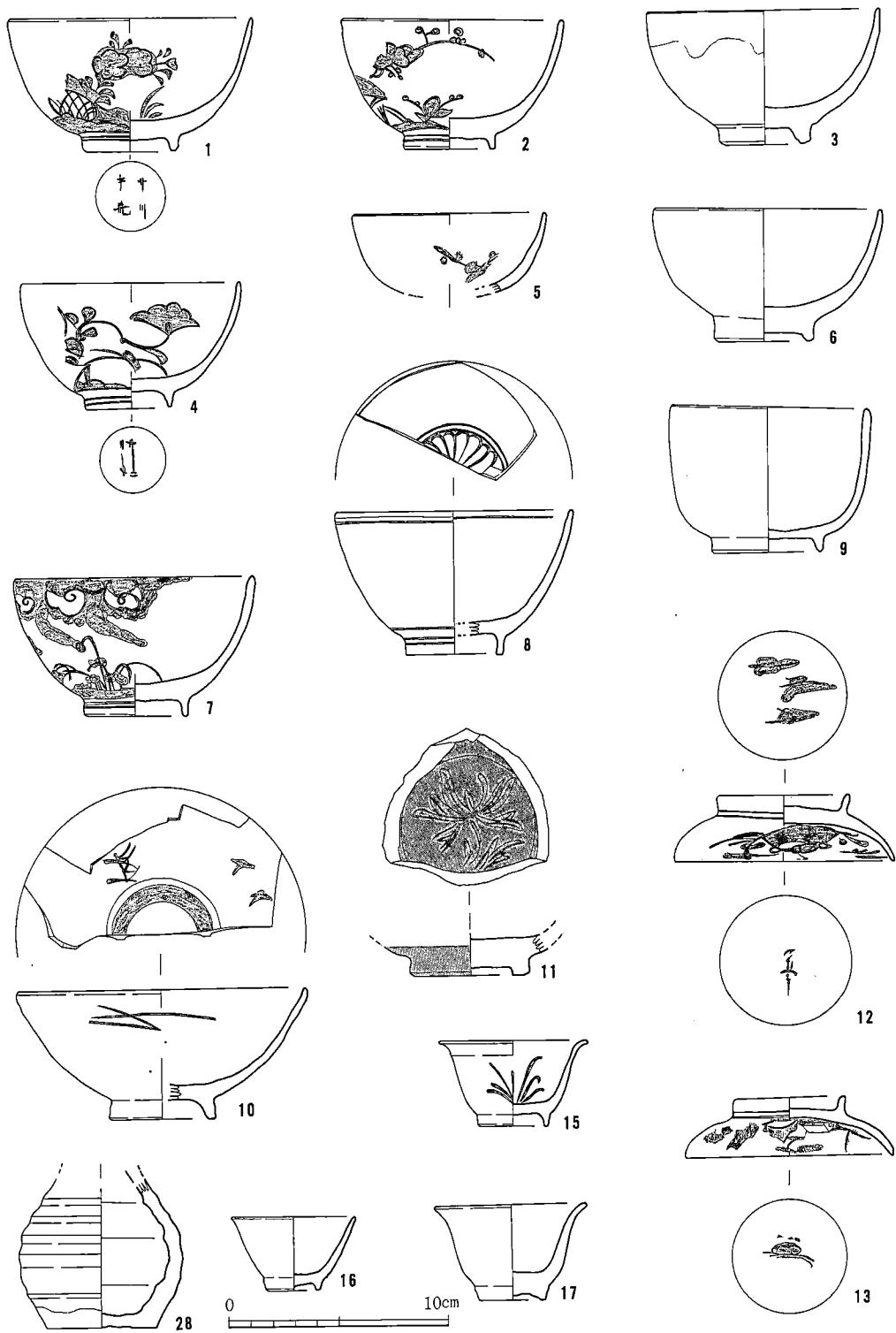
磁器18点・陶器8点を図示。図示以外のもの（図版96～99）でも磁器の占める割合が多い。磁器では18点中17点（1点は中国産）が肥前・肥前系のもの。碗は通常のもの以外に「広東碗」、「筒形碗」が見受けられ、前者にはセットと考えられる蓋もある。文様は、芙蓉手、網目、蔬菜、山水、菊花と多様である。また、見込にコンニャク版による五弁花文をもつものもあり、それは皿にも多く認められる。皿では、見込に蛇ノ目釉剥ぎが施されたものや、高台内蛇ノ目釉剥ぎや蛇ノ目凹形高台のものがある。陶器は、碗に京焼風陶器が認められ、擂鉢は内外とも鉄泥を施したもののがすべてである。図示以外のものでは広東碗とその蓋の破片が多く、陶器では唐津・唐津系の陶器が大半を占めている。以上の大半は18世紀後半から19世紀前半の所産と考えられる。

#### 18号溝出土陶磁器（第72図・図版75・78・79・表4）

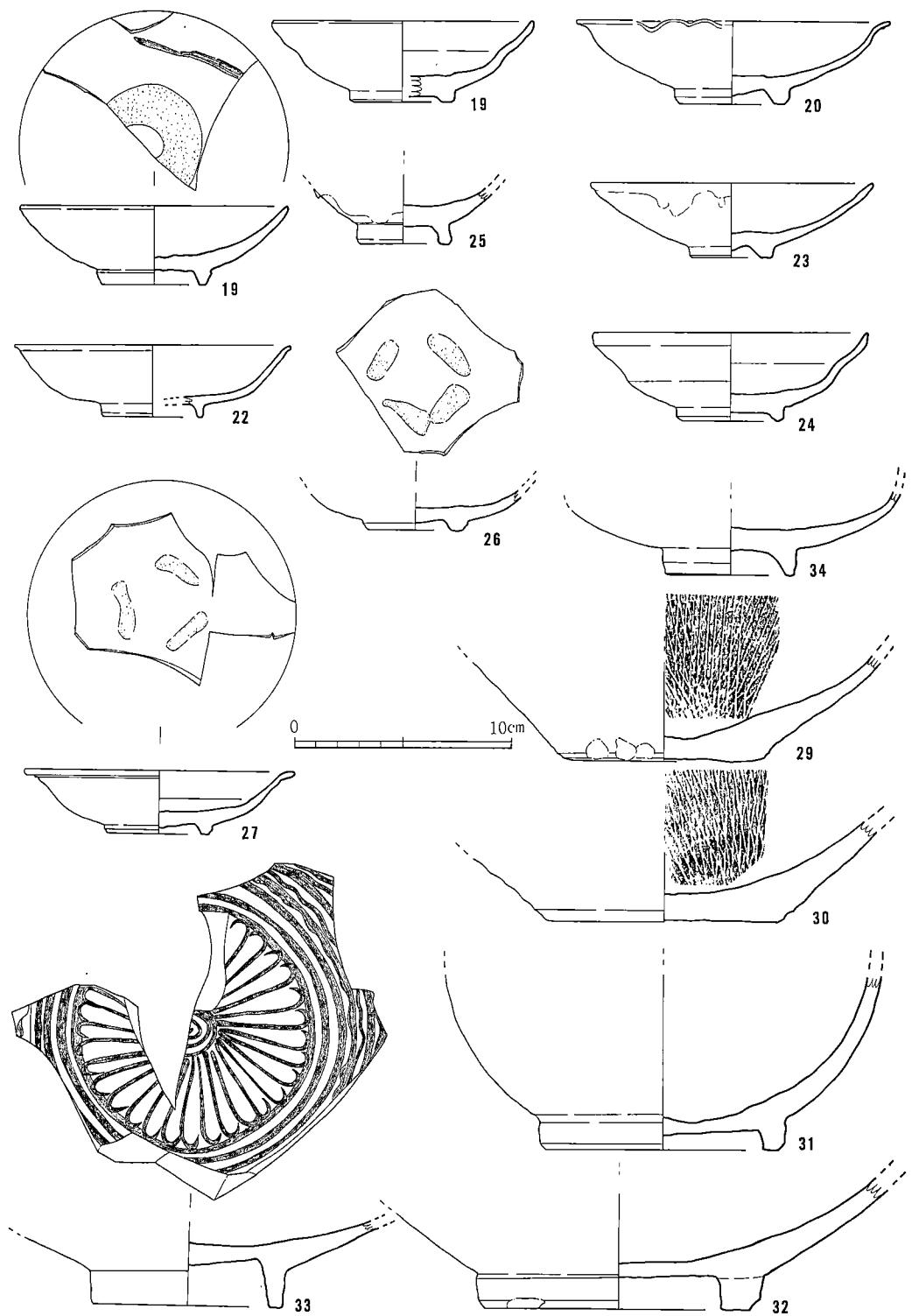
磁器6点、陶器4点を図示。年代は17世紀後半から幕末まで多岐にわたる。磁器はすべて肥前・肥前系で占められる。碗には蝶文やつる草文が施され、見込に渦福の銘をもつものもある。皿は見込を蛇ノ目釉剥ぎにし、重ね焼きを行っている。陶器では4点中2点が唐津系であり、瓶には刷毛目が施されている。また、8は灰色釉の上に呉須で絵付をする染付陶器である。

なお、ここで系統を示す用語に触れておく。磁器は肥前、肥前系の二種に大別される。肥前とは佐賀・長崎県に分布する磁器窯産のものを示し、18世紀前半以前のものはほとんどがこれに含まれる。対して、18世紀後半以降になると前述の地域のみならず全国的な規模で磁器窯が開かれ、同時に肥前の磁器の技術も波及する。肥前系とはそれらの諸窯で焼かれた磁器を示す総称であるが、現時点では特徴的なものを除いては地域、窯の同定は困難であるという。

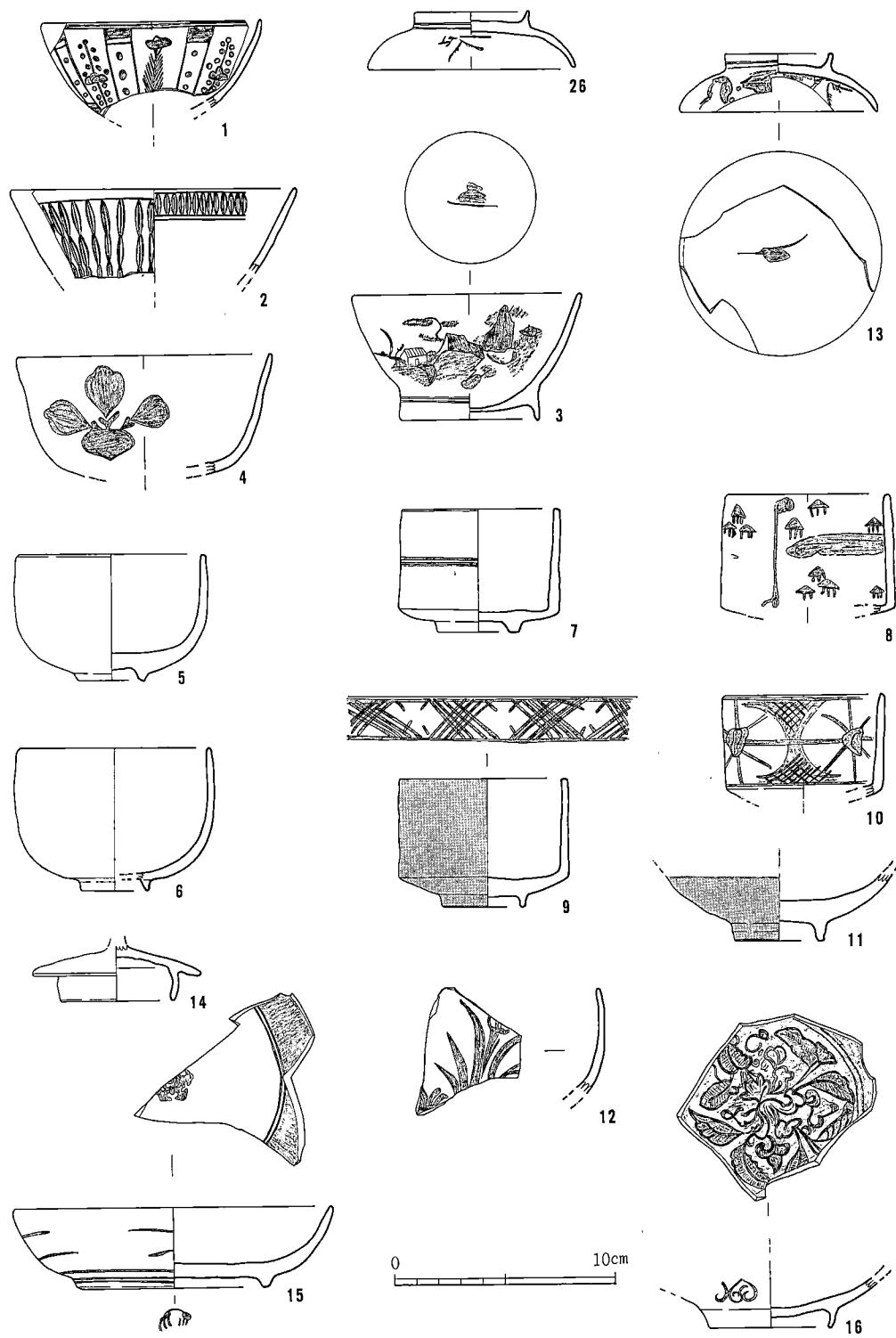
陶器では、唐津の諸窯が17世紀後半以降京焼等の影響を受け、唐津の技術の中にそれらが溶け込んで多様なものを生み出すようになる。唐津系とは、そのようなものを示すのであるが、大きくは肥前の陶器の総称であり、唐津と区分しているものもこの中に含んでもさしつかえはないと考えられている。また、京焼風陶器と呼ばれる一群が存在する。これは京焼を模倣した陶器のことを示すのであるが、広くは京焼も含まれる。肥前地方では17世紀後半から18世紀前



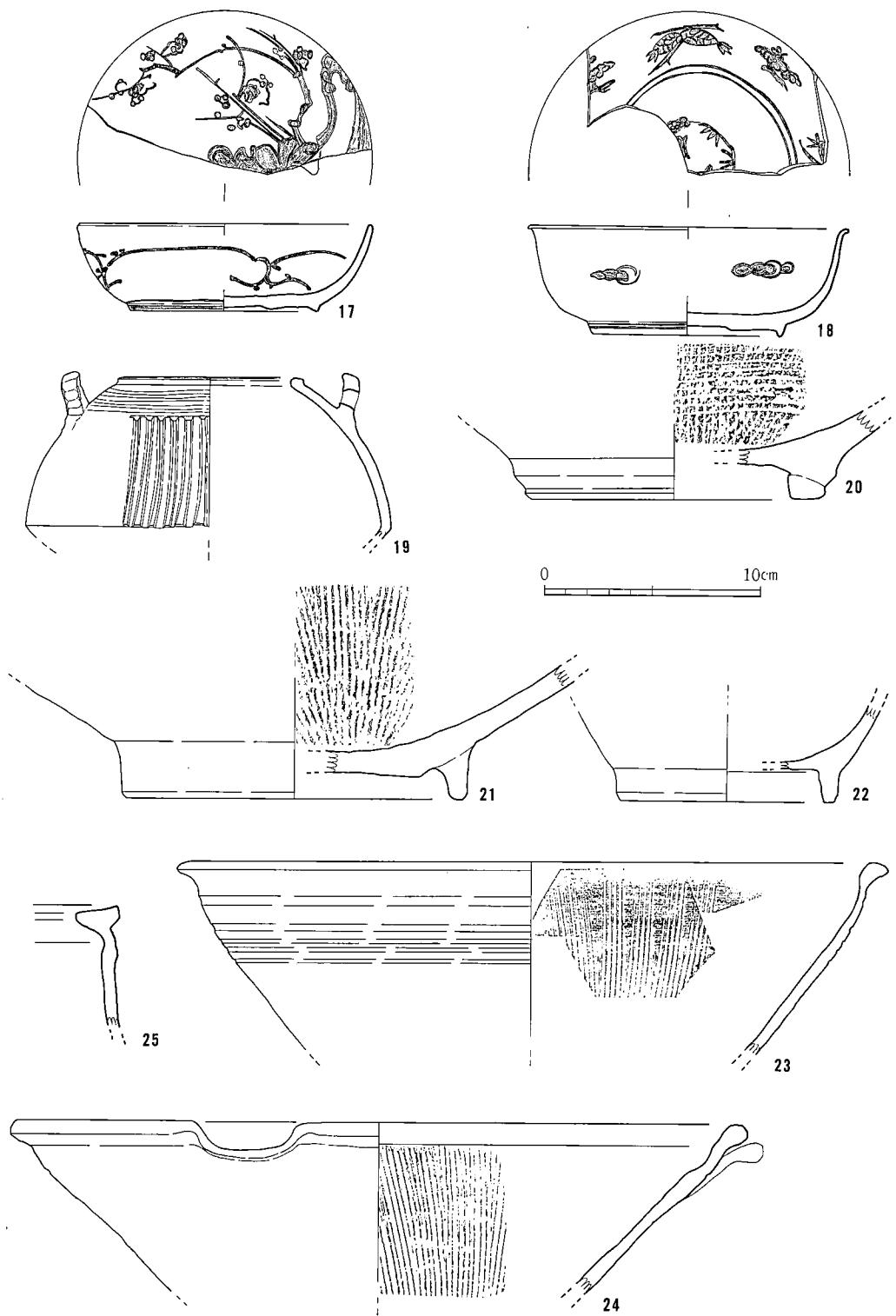
第68図 9号溝出土陶磁器実測図① (1/3)



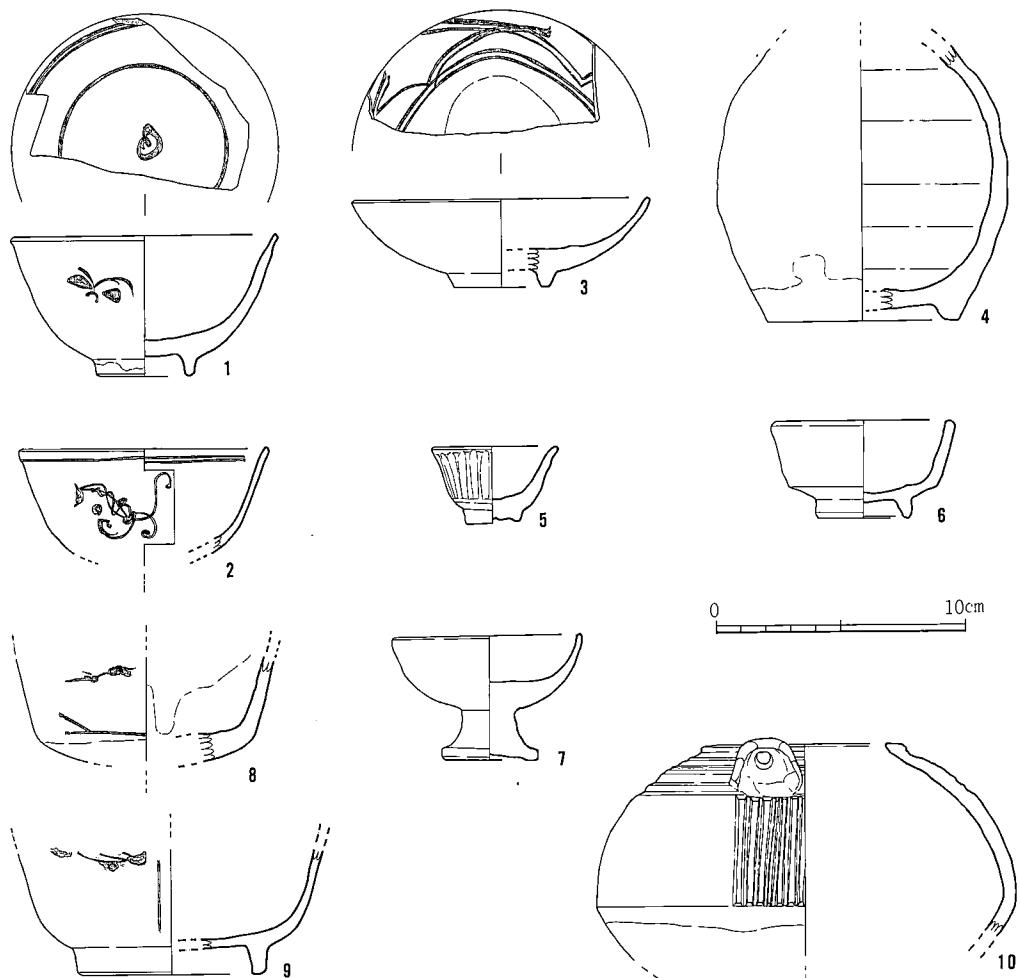
第69図 9号溝出土陶磁器実測図② (1/3)



第70図 13号溝出土陶磁器実測図① (1/3)



第71図 13号溝出土陶磁器実測図② (1/3)



第72図 18号溝出土陶磁器実測図 (1/3)

半にかけてこれらが唐津系の窯で焼かれていた可能性が強く、伊万里市大川内山では窯からの出土をみている。

表2 VI区西9号溝出土陶磁器一覧

( ) は復元値

插図内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉调・その他	文 樣	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
1	染付磁器	碗	11.0	6.0	4.0	灰白色	吳須は淡青色	草花文 高台 内に「大明年 製」銘	肥前	18世紀前半
2	染付磁器	碗	(9.9)	5.9	4.0	灰白色	吳須は淡青色	梅樹文 高台 内に「大明年 製」銘	肥前	18世紀前半

( ) は復元値

掲図内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 様	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
3	陶器	碗	10.6	6.0	4.2	淡茶灰色で 灰色強い	掛け分け、内面透明、外面綠 色を掛け、さらに濃い綠色 を上半のみ重ねる高台、体 部下半は施釉されず		唐津 内野山窯	18世紀前半
4	染付磁器	碗	(10.0)	5.7	3.9	灰白色	吳須は暗綠青 色	草木文 内に「大明年 製」銘	肥前	18世紀前半
5	色絵磁器	碗	( 8.8)			灰白色	花は赤色、枝 は黒色、枝周 囲は空色を重 ねる。	草花文	肥前	17世紀末～ 18世紀中葉
6	陶器	碗	(10.4)	6.0	4.5	淡茶灰色で 灰色強い	掛け分け、内面透明、外面 綠色を掛け、その上半の み他の釉(色別不明)を重 ねる高台周辺施釉されず		唐津 内野山窯	17世紀末～ 18世紀中葉
7	染付磁器	碗	(10.7)	6.6	(4.2)	灰白色	吳須は淡青色	雲?に草花文、高 台内に「大明年製 銘」の痕跡あり	肥前	18世紀前半
8	染付磁器	碗	(10.8)	6.5	(4.4)	灰白色	吳須は淡青色	見込に菊花文	肥前	18世紀前半
9	陶器	碗	8.8	6.6	4.3	淡茶褐色	透明	内外とも横方 向の白泥の刷 毛目	唐津系	17世紀後半 ～18世紀初頭
10	色絵陶器	碗	(13.2)	6.0	4.8	淡茶灰色	透明、見込は 蛇ノ目剥き後 空色を同じよ うに施す	内面松葉文に 鳥外面線文?	京焼風陶 器	17世紀後半～ 18世紀前半
11	青磁	碗			5.5	暗灰白色	淡青綠色	草花文 外面鷺蓮弁文	中国	
12	染付磁器	蓋 (広東)	(10.0)	3.0	5.8	灰白色	吳須は淡青色	見込に銘? 外面・高台内 山水文?	肥前系	19世紀初頭 ～中葉
13	染付磁器	蓋 (広東)	9.4	2.7	4.9	灰白色	吳須は淡青 色	山水文	肥前	18世紀末～ 19世紀前半
15	染付磁器	小壺	( 6.8)	3.9	3.2	灰白色	吳須は淡青綠 色	草文	肥前	17世紀後半
16	白磁	小壺	5.6	3.4	2.5	灰白色			肥前	17世紀後半
17	白磁	小壺	6.8	4.4	3.0	灰白色			肥前	17世紀後半
18	染付磁器	皿	12.2	3.6	4.0	灰白色	吳須は淡綠色、 見込は蛇ノ目剥 き、高台周辺 は無釉	線文	肥前	17世紀末～ 18世紀中葉
19	陶器	皿	(12.0)	3.7	4.2	淡灰褐色で 灰色強い	透明、内面に青 綠釉を点滴、 見込は蛇ノ目剥 き、高台内無釉		唐津 内野山窯	17世紀末～ 18世紀中葉
20	陶器	皿	14.3	3.9	4.8	淡灰褐色で 灰色強い	鉛釉、見込は 蛇ノ目剥き、 外面体部下半 以下無釉	波状口縁	唐津 内野山窯	17世紀末～ 18世紀中葉
22	陶器	皿	(12.6)	3.3	(4.6)	淡青灰色	綠釉の刷毛目 見込は蛇ノ目 剥き、のち 梅花文を描く	梅花文	唐津系も しくは福 岡系諸窯	18世紀前半

( ) は復元値

捕団内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 標	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
23	陶器	皿	(13.0)	3.4	3.8	暗灰褐色で 灰色強い	緑色、見込は蛇 ノ目釉剥ぎ、体 部下半以下無釉		唐津 内野山窯	17世紀末～ 18世紀中葉
24	陶器	皿	(12.6)	4.0	4.9	淡灰茶色で 灰色強い	透明、見込は蛇ノ目 釉剥ぎ、高台周辺無 釉内面に綠釉を点滴		唐津 内野山窯	17世紀末～ 18世紀中葉
25	陶器	碗			4.3	灰褐色	黒色(鉄釉)外 面体部下半以下 無釉		肥前	17世紀中葉 ～後半
26	陶器	溝縁 皿			4.4	淡青灰色	透明、見込に4ヶ 所の砂目の痕、高 台周辺一部無釉		唐津、内 野山窯？	1610～1630 年代
27	陶器	溝縁 皿			4.4	淡青灰色	透明、高台周辺と外 面体部の一部無釉、 見込に3ヶ所の砂目 の痕		唐津	1610～1630 年代
28	陶器	瓶			5.0	暗灰褐色	鉄釉、刷毛目、 底部周辺と内 面無釉		唐津系	16世紀末～ 17世紀前半
29	陶器	擂鉢			9.2	暗茶褐色	鉄泥、底面に 糸切り痕		唐津系	17世紀後半 ～18世紀前半
30	陶器	擂鉢			10.6	暗茶褐色	鉄泥、底部周 辺は素地、底 面に糸切り痕		唐津系	17世紀後半 ～18世紀前半
31	陶器	瓶？			(10.6)	アズキ色	外面鐵泥、胴中位に 白化粧土による横線、 その上に鉄釉もしく は透明釉を重ねる		唐津系	17世紀後半
32	陶器	大皿			12.0	茶褐色	鉄泥、刷毛目、見込 に径12cm前後で砂胎 土目が残る。高台疊 付は無釉		唐津系	17世紀末～ 18世紀中葉
33	陶器	皿			8.6	茶褐色	内面白化粧土の刷毛 目、のち鉄絵の菊花 文と同心円文、外面 は刷毛による鉄泥	菊花文	唐津	17世紀中葉 ～後半
34	陶器	皿			5.7	淡灰褐色で 灰色強い	透明、見込は蛇ノ目 釉剥ぎ、のち鉄泥を 同様に塗る。高台疊 付に砂目積みの痕		京焼風 陶器	17世紀後半

表3 VI区西13号溝出土陶磁器一覧

( ) は復元値

捕団内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 標	系 統	時 時
			口径	器高	底径					
1	染付磁器	小形 碗	(10.0)			灰白色	吳須は淡青色	芙蓉手 (草花文)	肥前	18世紀末～ 19世紀前半
2	染付磁器	碗 (広東)	(13.0)			灰白色	吳須は淡青色	網目文？	肥前	18世紀末～ 19世紀前半
3	染付磁器	碗 (広東)	10.3	5.6	6.3	灰白色	吳須は淡青色	見込は岩に波 外面山水文	肥前	18世紀末～ 19世紀初頭
4	染付磁器	碗	(11.6)			灰白色	吳須は青色	蔬菜文 (かぶ?)	肥前系	19世紀前半 ～幕末

( ) は復元値

捕団内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 標	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
5	白磁	小丸 碗	(8.2)	5.6	3.0	白灰色	口縁周辺がや や薄く緑色を 呈す		肥前系	18世紀末～ 19世紀前半
6	陶器	碗	(8.4)	6.4	(3.6)	淡灰褐色で 灰色強い	透明、高台周 辺無釉		京焼風 陶器	18世紀末～ 19世紀前半
7	磁器	筒形 碗	7.1	5.5	3.7	灰白色	口縁は鉄釉による 口銘、胴中位に同 じく、横線、高台 疊付やや広い、火	口銘、横線	肥前	18世紀末～ 19世紀初頭
8	染付磁器	筒形 碗	(7.4)			灰白色	吳須は淡青緑 色	雪持筆	肥前系	18世紀末～ 19世紀初頭
9	青磁染付	筒形 碗	7.6	5.8	3.8	灰白色	外面緑色と内 面青灰色の掛 け分け、吳須 は淡青緑色	内面上位に斜 格子文、見込 にコンニヤク 版の五弁花文	肥前系	1760～1780 年代
10	染付磁器	筒形 碗	7.2			灰白色	吳須は薄い淡 青色	菊花散らし	肥前系	18世紀末～ 19世紀初頭
11	青磁染付	皿?			4.1	灰色	外面青緑色、内 面透明の掛け分け 見込は蛇ノ目袖剥ぎ 吳須は淡青緑色	見込にコンニ ヤク版の五弁 花文	肥前	1760～1780 年代
12	染付磁器	碗				灰白色	吳須は淡青色	草花文	肥前系	18世紀末～ 19世紀前半
13	染付磁器	蓋(廣東)	(9.1)	2.6	5.2	灰白色	吳須は淡青色	見込は岩に波 外面山水文	肥前	18世紀末～ 19世紀初頭
14	半磁器	蓋(土 瓶類)	5.0			外面透明 内面素地	外面透明 内面素地		肥前系	18世紀末～ 幕末
15	染付磁器	皿	(14.4)	(3.6)	(8.4)	淡青灰白 色	吳須は淡青色	外面唐草文、見込 にコンニヤク版の 五弁花文、高台内 に滴溜?の銘	肥前	18世紀前半 ～1780年代
16	染付磁器	皿			5.5	灰白色で 白色強い	吳須は淡青色	蓮子形文	中国、景 徳鎮窯?	16世紀代
17	染付磁器	皿	(13.4)	4.0	(8.7)	灰白色	吳須は淡青色 高台内蛇ノ目 袖剥ぎ、蛇ノ 目凹形高台	見込は梅花文 外面唐草文	肥前系	18世紀後半 以降
18	染付磁器	皿	(14.9)	4.9	(8.7)	灰白色	吳須は青色 高台内蛇ノ目 袖剥ぎ、蛇ノ 目凹形高台	見込は松竹梅 周囲は松・梅	肥前	18世紀～ 1780年代
19	陶器	土瓶	(8.6)			淡茶褐色	鉄釉、内面の 一部及び口縁 端部は無釉		関西系(九 州産の 可能性)	18世紀後半 ～幕末
20	陶器	擂鉢			(13.8)	茶褐色	鉄泥、高台疊 付無釉		唐津系の 可能性	18世紀後半 ～幕末
21	陶器	擂鉢			(15.9)	淡茶褐色	鉄泥		唐津系の 可能性	18世紀後半 ～19世紀前半
22	陶器	瓶			(10.2)	赤褐色	自化粧、のち 透明釉	内面は素地	唐津系	18世紀～ 19世紀

( ) は復元値

插図内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 標	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
23	陶器	擂鉢	(32.8)			晴青灰色	鉄泥		唐津系もしくは福岡系諸窯	18世紀～19世紀前半
24	陶器	擂鉢 (片口 形)	(34～ 34.7)			淡灰褐色	鉄泥		唐津系もしくは福岡系諸窯	18世紀～19世紀前半
25	陶器	大鉢もしくは 大甕				赤褐色	白化粧土の刷毛目、のち鉄釉を部分的に重ねる		唐津系	17世紀～18世紀
26	染付磁器	蓋(広 東)	(9.4)	2.6	(5.2)	灰白色	吳須は淡青色	山水文、見込 は岩に波	肥前	18世紀末～ 19世紀初頭

表4 VI区西18号溝出土陶磁器一覧

( ) は復元値

插図内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 標	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
1	染付磁器	碗	(10.0)	5.6	4.1	灰白色	吳須は淡青色	蝶文?、見込 は渦巻?	肥前系	19世紀～幕末
2	染付磁器	碗	(9.9)			灰白色	吳須は淡青色	つる草文	肥前系	19世紀初頭～幕末
3	染付磁器	皿	(12.0)	2.9	(3.8)	灰白色	吳須は淡青色 見込は蛇ノ目 釉剝ぎ	?	肥前	18世紀前半～ 1780年代
4	陶器	瓶			(7.7)	淡茶褐色	外面淡青緑色の上に 白化粧土の刷毛目を 重ねる、底部周辺及 び内面は素地		唐津	17世紀後半～ 18世紀
5	白磁	小壺	(5.0)	3.1	2.1	灰白色			肥前	1640～1650 年代
6	陶器	小壺	(7.1)	3.9	(3.6)	暗灰色	暗茶色、外面 と内面口縁 周辺のみ施釉		唐津系もしくは福 岡系諸窯	18世紀代～ 幕末
7	染付磁器	仏飯 器	(7.4)	4.9	3.7	灰白色	吳須は淡青色	?	肥前	18世紀
8	染付陶器	?				晴灰色	灰色を外面中位ま で施釉、内面にも やや垂れる、吳須 は淡青緑色			
9	染付磁器	鉢			(7.6)	灰白色	吳須は淡青色	見込は山水文? 、外面草木文?	肥前系	19世紀初頭～ 幕末
10	陶器	土瓶	(8.2)			茶褐色	鉄釉		関西系(九州産の 可能性)	18世紀末～ 幕末

## (5) 石器・土製品（第73～77図・図版53～55）

住居跡・土壤・溝・ピット出土の石器・土製品を掲載している。調査区全域が近世から現代の搅乱をうけているため、遺物が遺構の時期を示すものでない例も多い。遺物の出土遺構番号は第73図～第77図の遺物番号の右の（ ）内に示している。また、その位置は第3図、及び付図1にて探されたい。以下、VI区東、VII区も同じである。

### 磨製石斧（1～5）

磨製石斧は大型蛤刃石斧3点、抉入石斧2点、が出土している。完形品ではなく、全て破損している。

### 抉入石斧（1・2）

1は現存長9.7cm、幅3.3cm、厚さ3.4cmを測る。研磨は長軸方向に行なわれた後に、斜方向に施し、抉り部では横方向に施している。抉りの上端には長さ1.4cm、幅1.5mmの溝が入る。刃部は欠損後に再研磨されているが研ぎだしは行っていない。2は刃部の一部を失っている。現存長12.6cm、幅3.2cm、厚さ4.0cmの断面かまぼこ状を呈す。刃部は節理に直行してつけられている。

### 大型蛤刃石斧（3～5）

すべて今山産出玄武岩製である。3は現存長13.4cm、幅9.0cm、厚さ4.7cmを測る、全面研磨されているが、敲打痕を一部残す。4は頂部で、幅6.3cm、厚さ4.1cm、を測る。頂部は研磨により丸く仕上げている。5は刃部破片である。

### 石庖丁（6～12）

VII区西出土石包丁は7点あるが、破片資料が多い。刃部の明らかなものは全て両刃である。石材については12・11が立岩産石包丁、他は粘板岩質を使用している。6は背部欠損後再研磨を施し、新たに穿孔して使用している。7は丁寧な研磨を施こし、刃部の厚さはそれほど幅広くない。8～11は直線的な背部を持つ。8は薄手で、厚さ5mmを測る。9は表面（図示した面）から大きく刃部を研ぎだし、裏面とも小さく傾斜する面をもつ。11も同様に片刃に近い両刃を呈し、全体に入念な研磨が施される。

### 石鎌（13）

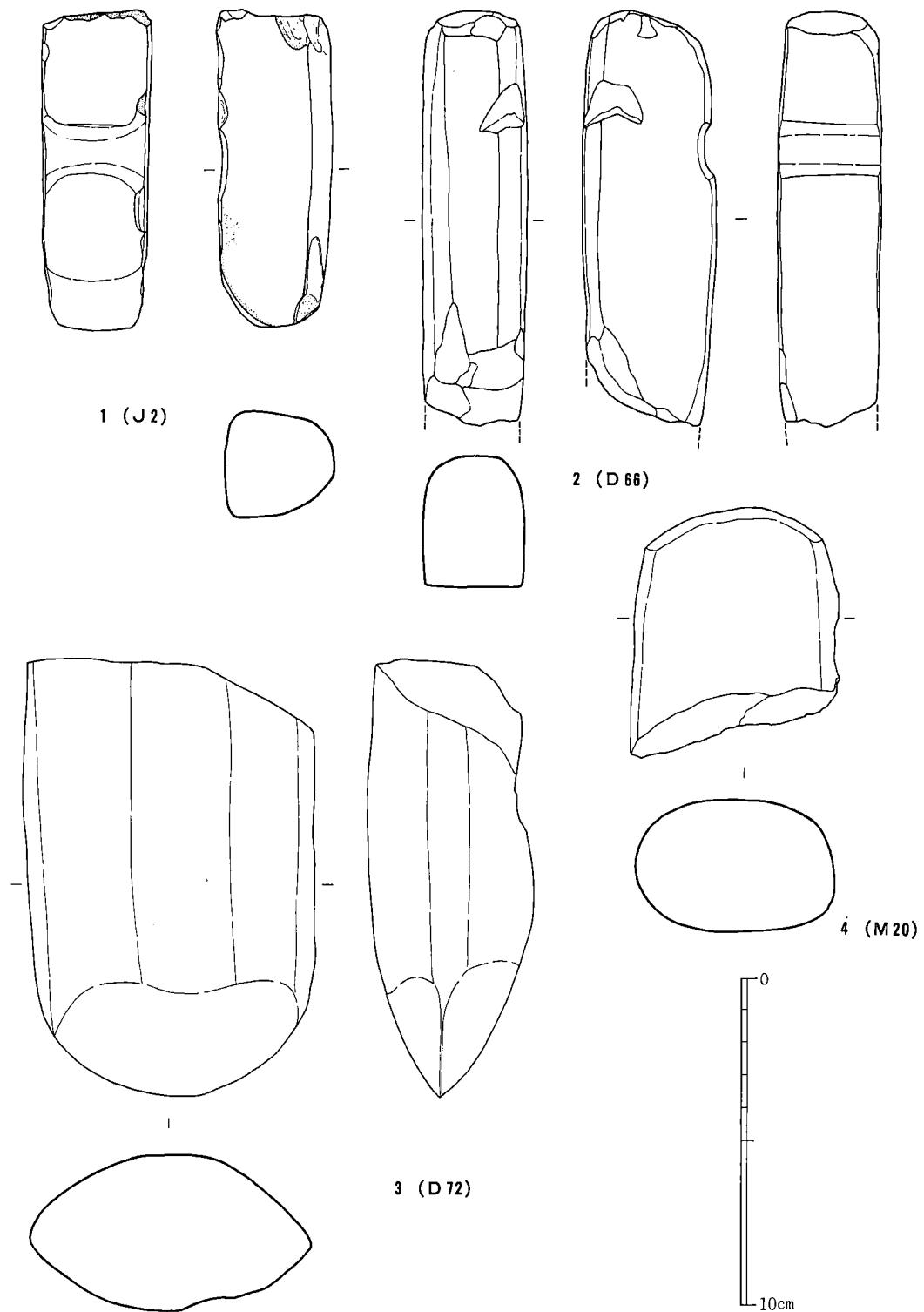
破片のため形状は不明。背部は若干外彎し、内彎する両刃の刃部をもつ。全体は入念に研磨される。

### 磨製石剣（14）

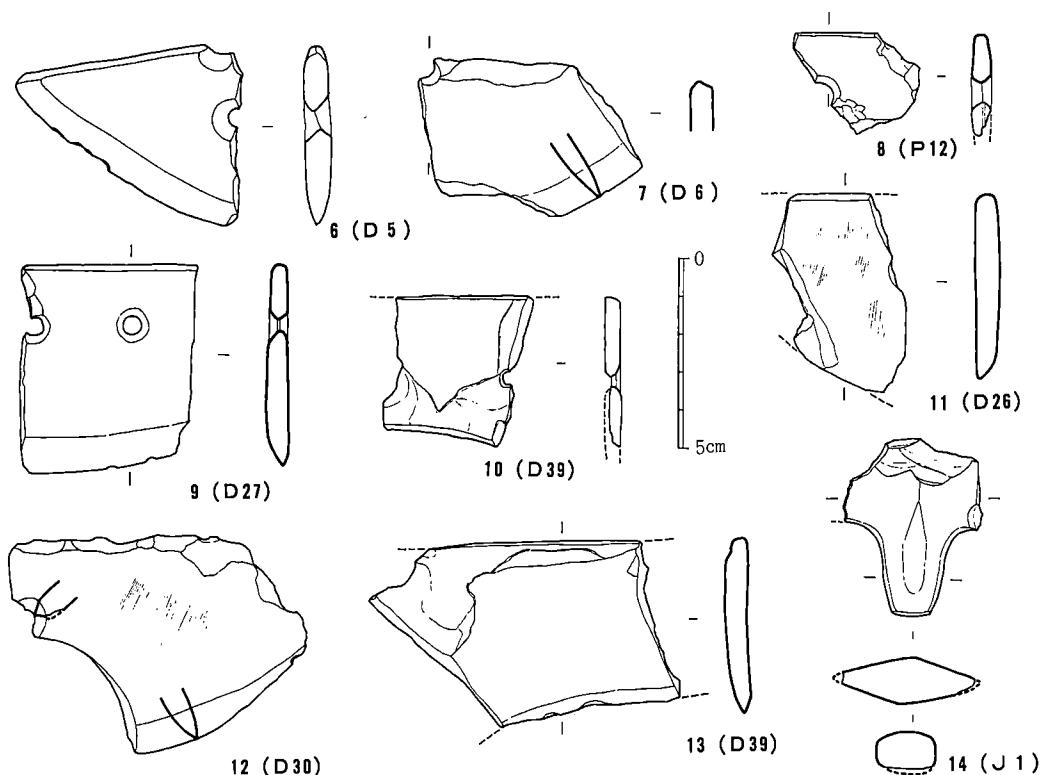
粘板岩製の基部破片である。現存長4.7cm、現存刃部幅3.6cm、厚さ1.3cm、基部長2.3cm、を測る。

### 不定形刃器類（15・19～22）

15は大形の部厚い剝片を利用し、直線的な刃部を両面加工によってつくりだしている。19は



第73図 VI区西出土石斧実測図 (1/2)



第74図 VI区西出土石庖丁・石鎌・石剣実測図(1/2)

横長剝片を使用し、外彎する刃部をつくりだしている。20は横長剝片を利用し、直線的な刃部を2側縁に持つ。21・22は不定形な剝片を使用し、側縁に調整加工を施し刃部としている。

#### 石錐 (16~18)

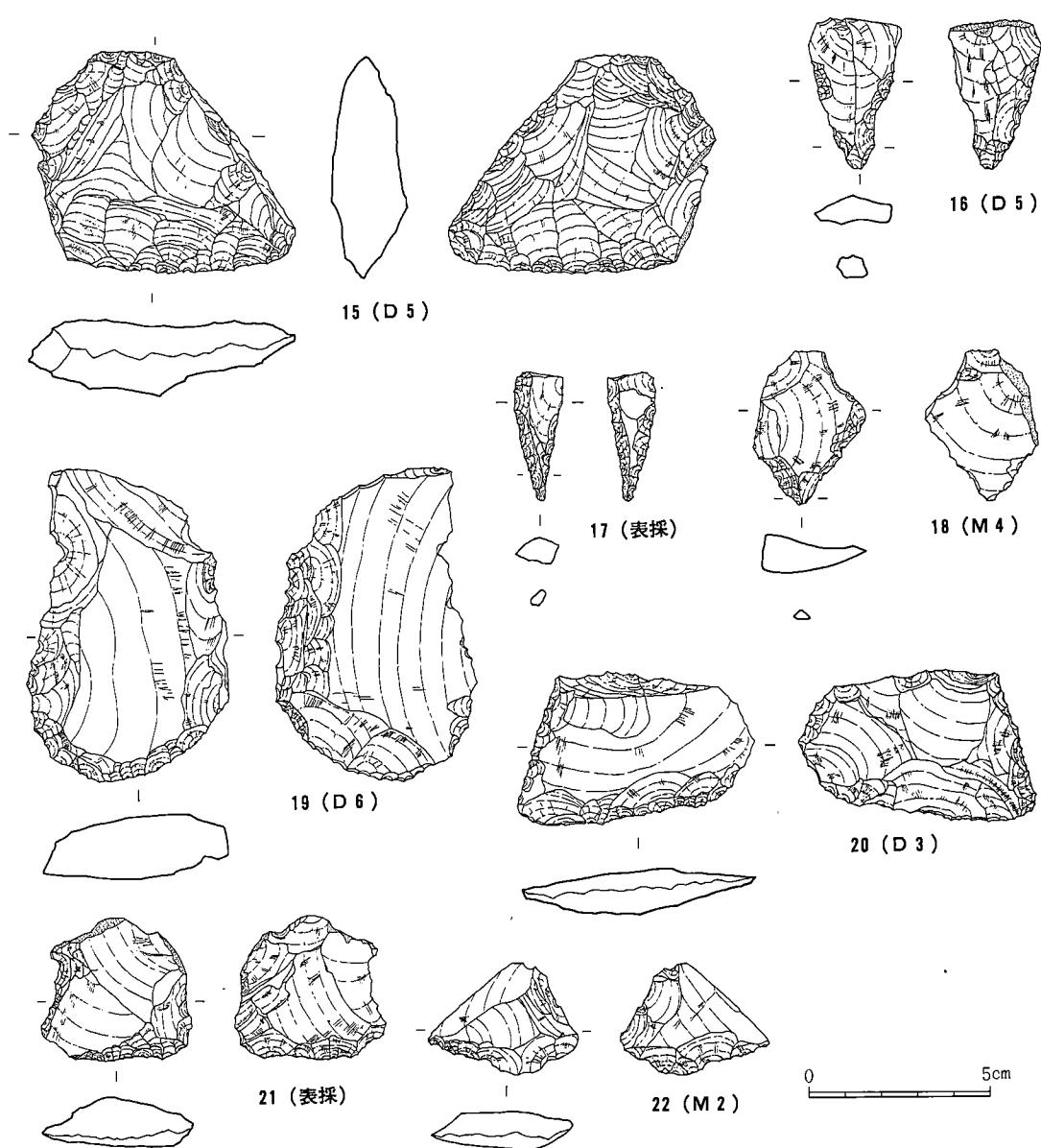
16・18は縦長剝片を利用し、17は横長剝片を利用している。共に上端に自然面を残す。錐部は両面からの調整加工により仕上げられて、多角形を呈するもの16・17を片側からだけ調整加工を施し、断面三角形を呈すものがある。3点ともにサヌカイト製である。

#### 砥石 (23~29)

5点出土している。石材は粘板岩23・27、砂岩26、花崗岩24・25がある。23は二面使用し、うら一面には交錯する2条の溝状の磨痕がある。24は大半が欠損しているが、三面使用しているそれぞれ溝状磨痕を持つ。25は一面使用し、中央にはV字状の溝状磨痕を持つ。26は四面とも砥石面がつくられている。平面形は長方形をなし、両端を欠損する。砥石面は四面とも中央が凹む。27は表裏の二面使用している。両面とも数条の溝状磨痕をもつ。

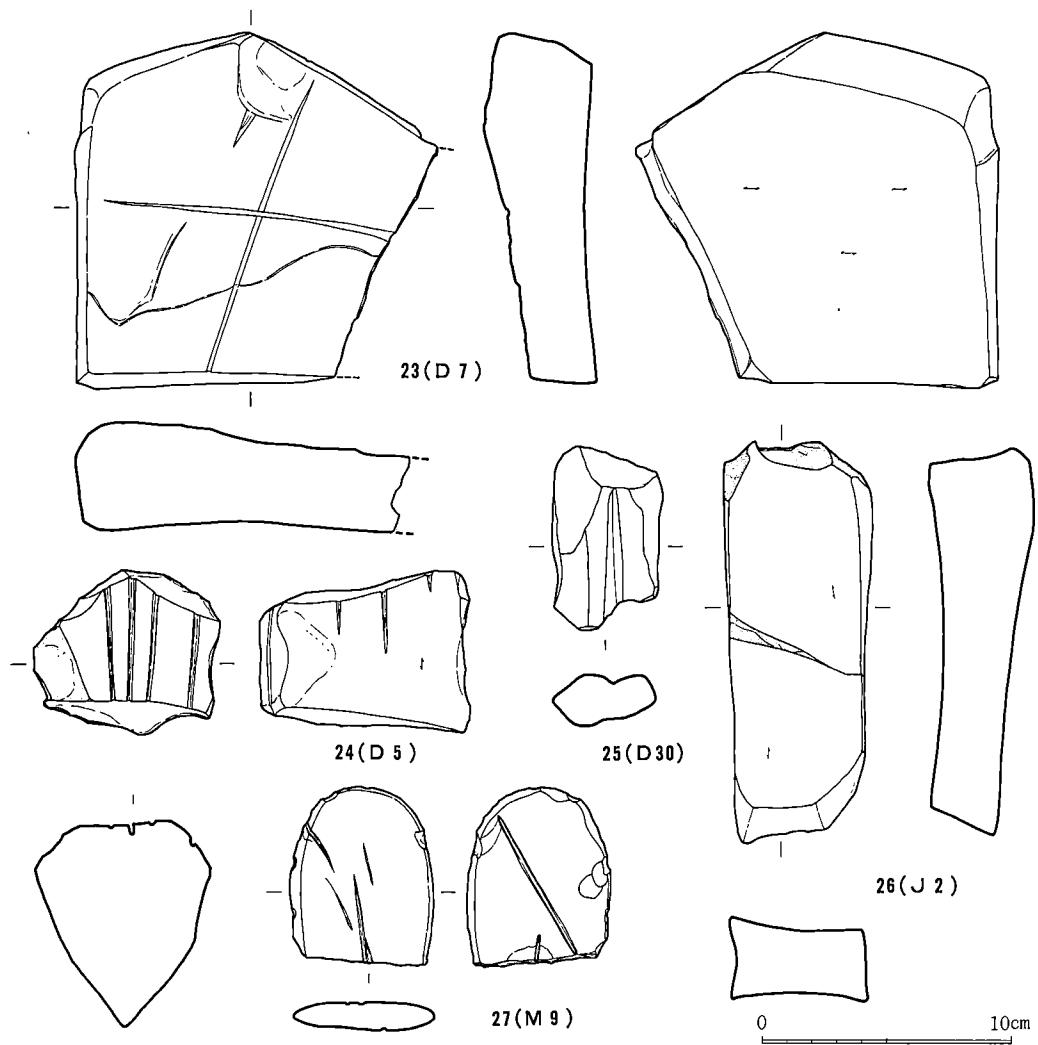
#### 紡錘車 (28~31・33)

28~31は土製で、31は滑石製である。28は黄褐色を呈し、胎土は細砂粒を含む。表面は褐色



第75図 VI区西出土スクレイパー・錐実測図 (1/2)

の化粧土の付着が一部残存する。焼成は良好。29は黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を含み精良である。焼成は良好。30は黒褐色を呈し、胎土には1~3mm程度の砂粒を混入し精良である。焼成は良好。31は1/2弱を欠損する。色調は黄褐色を呈し、褐色の化粧土が一部残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を含み精良である。焼成は良好。33は表裏、周縁とも丁寧な研磨がされてい



第76図 VI区西出土砥石実測図(1/3)

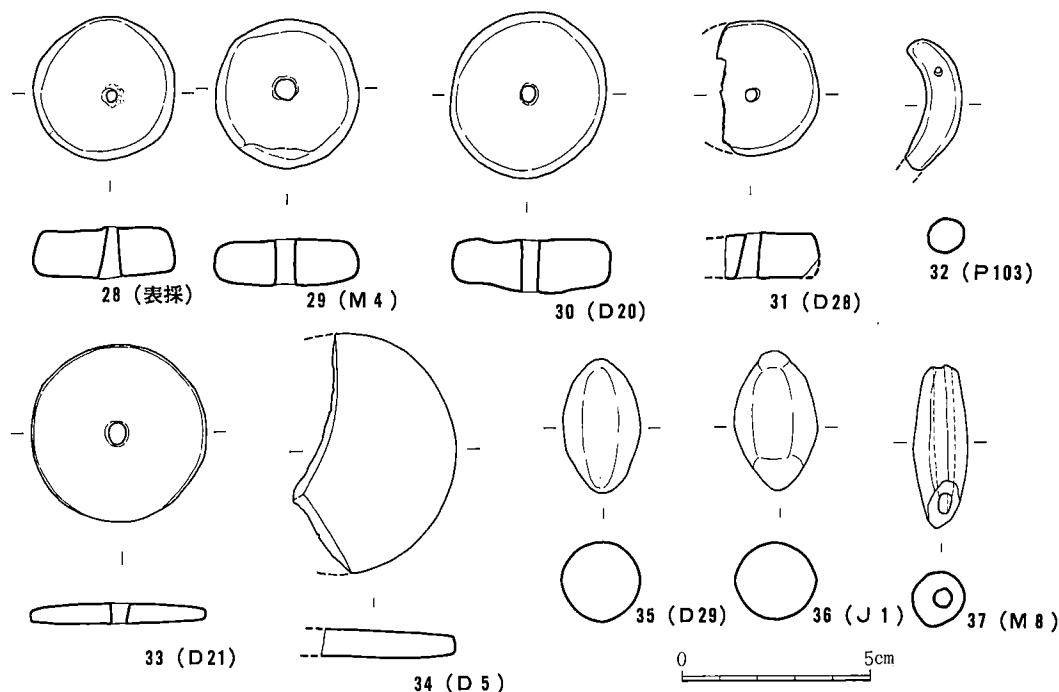
る。研磨は一定方向に行われた後、周辺を研磨し、レンズ状に仕上げ、周縁の研磨を行なっている。幅4.7cm、厚さ5mm、重さ21.6gを測る。

#### 石製円盤 (34)

1/2を欠損するが、表裏、周縁とも入念な研磨が施されている。石材は凝灰岩質。

#### 土製投弾 (35・36)

2点とも黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を含み精良である。手づくねで紡錘形に成形・調整している。焼成も良好ある。



第77図 VI区西出土石製品・土製品実測図(1/2)

### 土錘 (37)

管状土錘で端部を欠く、現存長4.3cm。

### 土製勾玉 (32)

下端をわずかに欠く、手づくねで成形・調整されている。色調は橙褐色を呈し、焼成も良好である。

表5 VI区西出土石器・土製品重量石材一覧 ( )は現存値

出土遺構	器種	重量(g)	石 材	出土遺構	器種	重量(g)	石 材
J 2	石斧	210		D30	石庖丁	(31.2)	
D 6	〃	34	玄武岩	D39	〃	(10.8)	粘板岩
D66	〃	320	頁岩	P12	〃	( 5.2)	〃
D72	〃	945	玄武岩	D39	石鎌	(37.6)	粘板岩
M20	〃	327	〃	D28	石劍	(18)	
D 5	石庖丁	(24)	粘板岩	D 3	刀器	33.4	サヌカイト
D 6	〃	19.5	〃	D 6	〃	88	〃
D26	〃	(15.1)		J 5	石錐	100	〃
D27	〃	(23.3)	粘板岩	D 2	砥石	447	

出土遺構	器種	重量(g)	石材	出土遺構	器種	重量(g)	石材
D 5	砥石	465	砂岩?	D28	紡錘車	(14.9)	土製
D 7	〃	1330		M 4	〃	18.8	〃
D30	〃	78.9	砂岩	表採	〃	21.5	〃
M 9	〃	90.9	粘板岩	D16	投弾	12.8	〃
D20	紡錘車	30.7	土製	P 103	土製勾玉	3.5	〃

表6 VI区西出土石器・土製品器種別数量一覧

出土遺構	器種 蛤刃 石斧	石庖丁			石 石 石鍛 磨 打	搔 石 器 錐	磨 敲 砥 凹	紡 錘 車	投 弾 子	そ の 他	旧石器				
		方柱	扁平	扁平							磨 劍	打 製	石 石 石 石		
		玄武岩	その他	状石斧	刃石斧	磨製石斧	その他	劍	製	錐	錐	錐	錐	台形 ナイフ	
J-2			1										1		
D-3										1					
D-5						1		1		1			1		
D-6	1					1			1						
D-7											1			1	
D-20													1		
D-21													1		
D-26					1										
D-27						1									
D-28							1						1		
D-29													1		
D-30						1					1				
D-39							1	1							
D-66			1												
D-72	1														
D-114													1		
M-2										1					
M-4										1			1		
M-8													1		
M-9											1				
M-20	1														
M-23													1		
P-12						1									
P-103													1		
表採									1	1			1		
計	3	2			2	5	1	2		6	2		5	4	1 2

## IV. 大板井遺跡VI区東の調査

### 1. 調査の概要

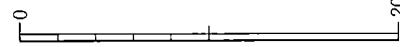
VI区中央の道路より東をVI区東とする。調査面積は約2,700m<sup>2</sup>で、検出された遺構は、弥生時代前期後半から中期前半にかけての土壙29基、中世から近世にかけての土壙10基（うち井戸は8基）、江戸時代から現代までの溝20条が主なものである。特徴としては、VI区西やVII区では確認されなかった弥生時代前期後半～中期初頭の土壙が数多く存在することであり、このうちのいくつかは貯蔵穴とも考えられる。平面、中期の土壙はVI区西、VII区に較べて少なく、時代が下るにつれて生活域が東から西へ移動したことも推定できる。また、地形は10号溝のやや北側で一段の段差が生じており、それ以北はやや標高が低くなっている。それに関連するのかは定かでないが、前記の土壙群は南側の高地部に数多く掘られている。北側の低地部では7基の井戸が築かれており、現在でも湧水は活発でかつ標高に較べると水位は高い。以下、時期の限定できる遺構のみ説明を記す。各遺構の位置は第78図を参照のこと。

#### ※ 遺構番号の変更について

変更した番号は下記のとおり。旧→新

D27→D 1	D39→D 2	D46→D 3	D47→D 4	D73→D 5	D78→D 6
D86→D 7	D87→D 8	D110→D 9	D127→D10	D136→D11	D137→D12
D141→D13	D142→D14	D143→D15	D145→D16	D147→D17	D152→D18
D154→D19	D162→D20	D168→D21	D186→D22	D193→D23	D28→D24
D218→D25	D88→D26	D226→D27	D29→D28	D138→D29	D 2 →D 30
D126→D31	D158→D32	D165→D33	D181→D34	D199→D35	D38→D36
D175→D37	D 4 →D46	D 6 →D47	D10→D40	D15→D41	D21→D42
D26→D43	D33→D44	D44→D45	D241→D39	D39→D47	

31	36	41	46	51	56	61
32	37	42	47	52	57	62
33	38	43	48	53	58	63
34	39	44	49	54	59	64
35	40	45	50	55	60	65

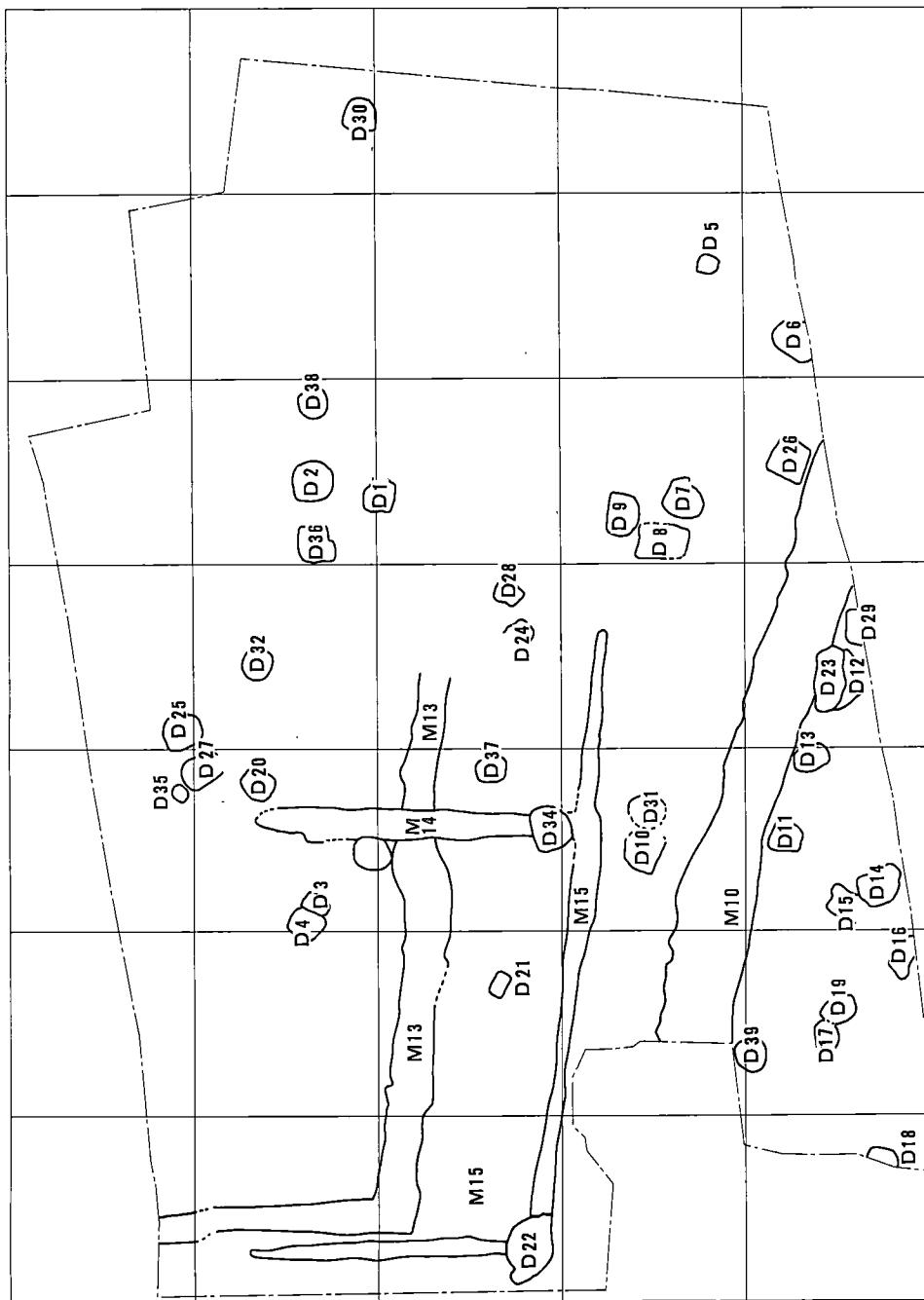


X = 43.950



Y = -40.450

第78図 大板井遺跡VI区東遺構配置区割図 (1/400)



## 2. 遺構と遺物

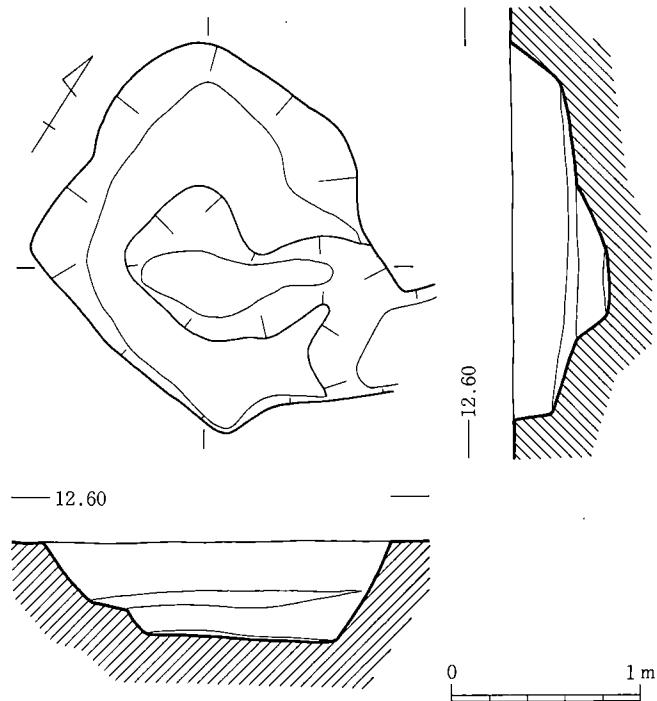
### (1) 弥生時代の土壙

#### 1号土壙 (第79図)

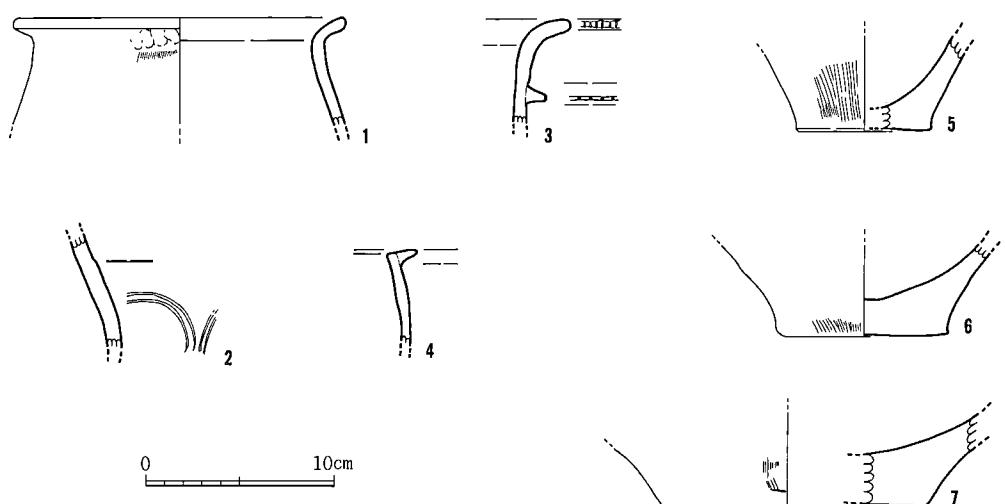
53区に位置する不整形の土壙。方形プランの遺構と思われるが溝状遺構に切られている。底面は不整形を呈し、そこからさらに一段の掘り込みがある。土器は散在して出土する。

#### 出土土器 (第80図)

1・2は壺で、1は内傾して立上がる頸部をもち口縁はゆるやかに外反する。外面は縦ハケ後ヘラミガキ。2は肩部で二重の弧文がへラ状工具により描かれる。外面ヘラミガキ。3～7は甕。3は如意形口縁を有し、



第79図 1号土壙実測図 (1/40)



第80図 1号土壙出土土器実測図 (1/4)

そこと凸帯にはキザミが施される。4は細長い亀ノ甲タイプの口縁を有し、やや内傾している。底部はいずれも平底である。

### 2号土壙（第81図）

52区に位置する橢円形の土壙。底面で径89～95cmを測り、深さは28cm。壁は開き気味に立ち上がる。土器は散在して出土している。石錐が出土。

### 出土土器（第82図）

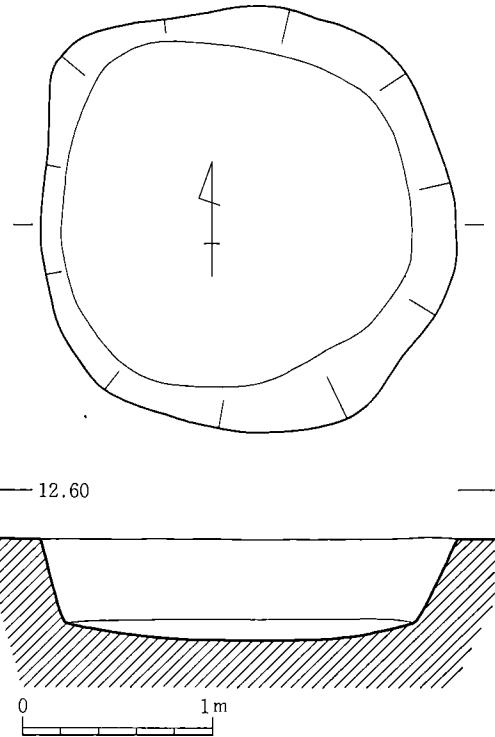
1～8は甕の部分片でいずれも小片。1～4は如意形の口縁を有し、いずれ屈曲度が異なっている。1は沈線、3・4は凸帯が施される。キザミは3のみに認められ、内面ナデ外面ハケメはほぼ共通。5は亀ノ甲タイプの口縁を有し、その断面は台形状を呈す。口縁と凸帯にはキザミあり。6～8はいずれもほぼ平底の底部。8のみがやや上部にかけて丸みをもつ。9は亀ノ甲タイプの貼付口縁をもつ鉢。凹凸のあるわずかに丸みをもつ胴部と厚い底部を有す。外面ハケメ、内面ヘラミガキ。口径34.4cm、器高18.1cm、底径9.9cmを測る。

### 3号土壙（第83図）

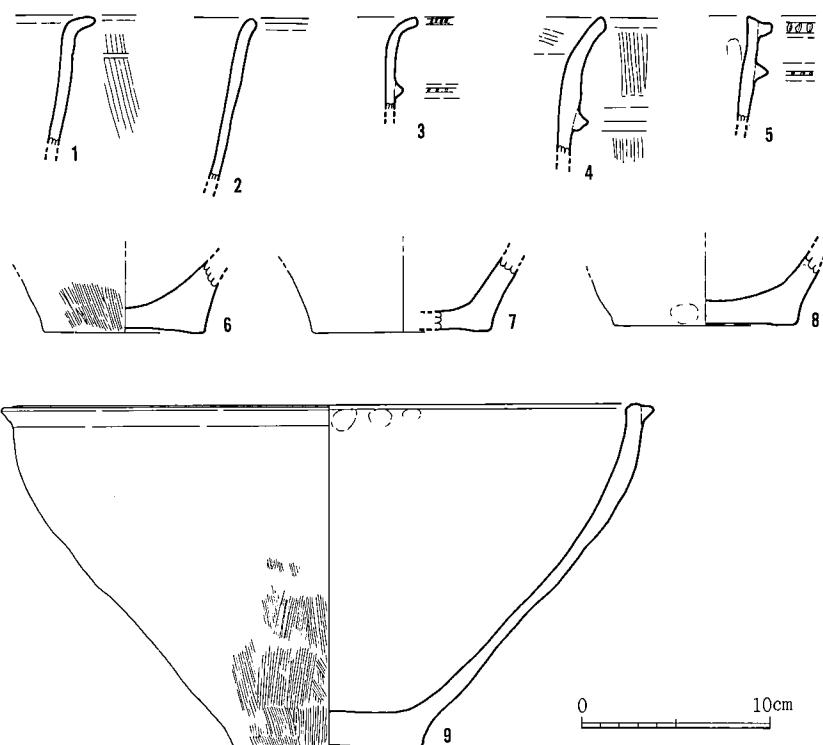
42区に位置する長方形の土壙でD4を切る。底面で138cm×85cmを測る。底面は平坦ではなく、中央に掘り込まれたピットに向かって傾斜する。土壙内から土器が散在して出土している。

### 出土土器（第84・85図・図版30）

1～11・17は甕。1～3は亀ノ甲タイプの貼付口縁がやや横に発達したもの。3は端部がすぼまり、まだ前代の形態を残しているものといえる。2では胴部がやや張る傾向をみせる。4～6は逆L字形の口縁をもつもので、1～3より形態的には新しい一群である。口縁の長さはまだやや短く、内傾気味である。4のみに凸帯が施される。7～11は底部で、7～10は底壁が厚く（背が高く）小ぶりの底部で外底面は上げ底となっている。底径は6.2～7.1cmを測り、底壁は厚さ1.3cm(10)～3.3cm(9)を測る。12・13は壺の口縁部片。12は内湾しながら立ち上がる頸部を有し、口縁はそのまま外反する。内面ヘラミガキとナデ、外面ハケメ後ヘラ状工具による

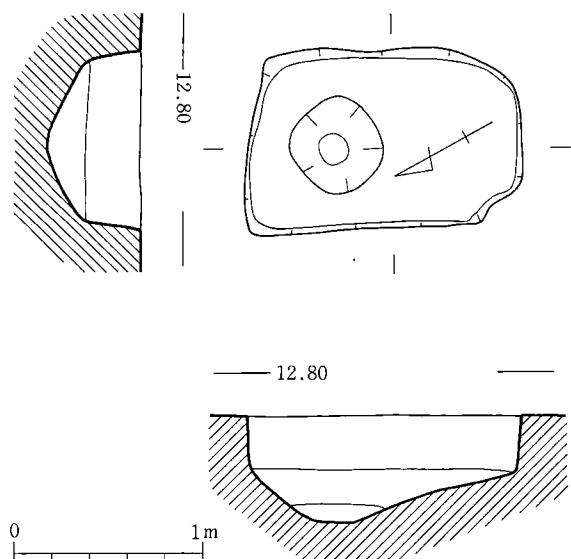


第81図 2号土壙実測図(1/40)

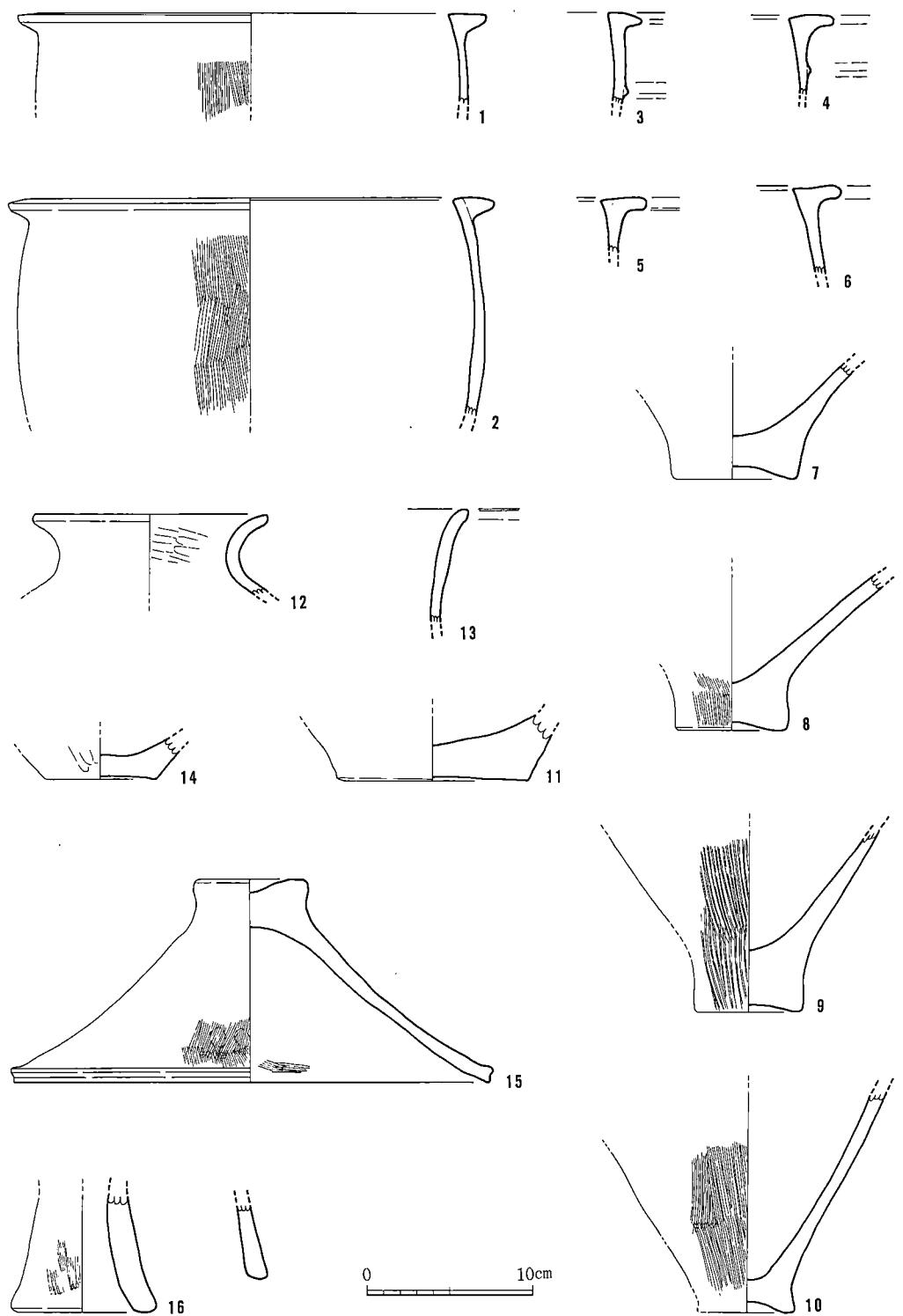


第82図 2号土壙出土土器実測図(1/4)

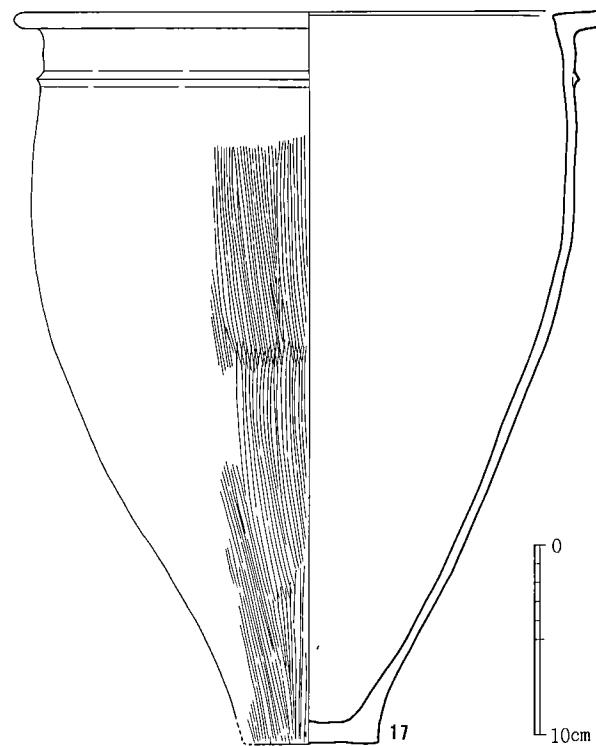
ナデが施されている。13は直線的に立上がる口縁と考えられ、外面へラ状工具によるナデが施されている。14は壺の底部片。15の蓋は外天井部が上げ底を呈し、口径28.5cmを測る。16は器壁が厚い器台。17の甕は内傾気味の逆L字形口縁を有し、凸帯が貼付される。胴部は中央部でやや張り、底部へはややすぼまり気味の形態を呈す。底部は平底で、やや小さい。口径31.4cm、器高38.7cm、底径7.1cmを測る。



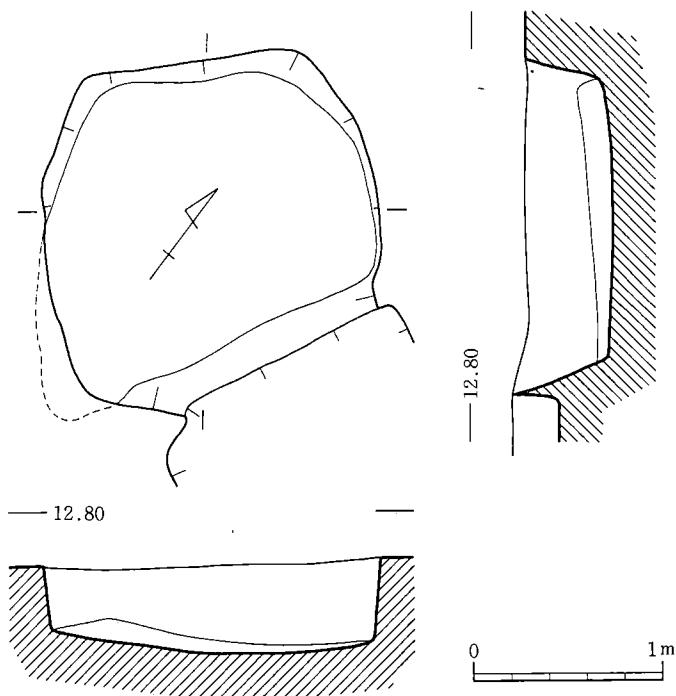
第83図 3号土壙実測図(1/40)



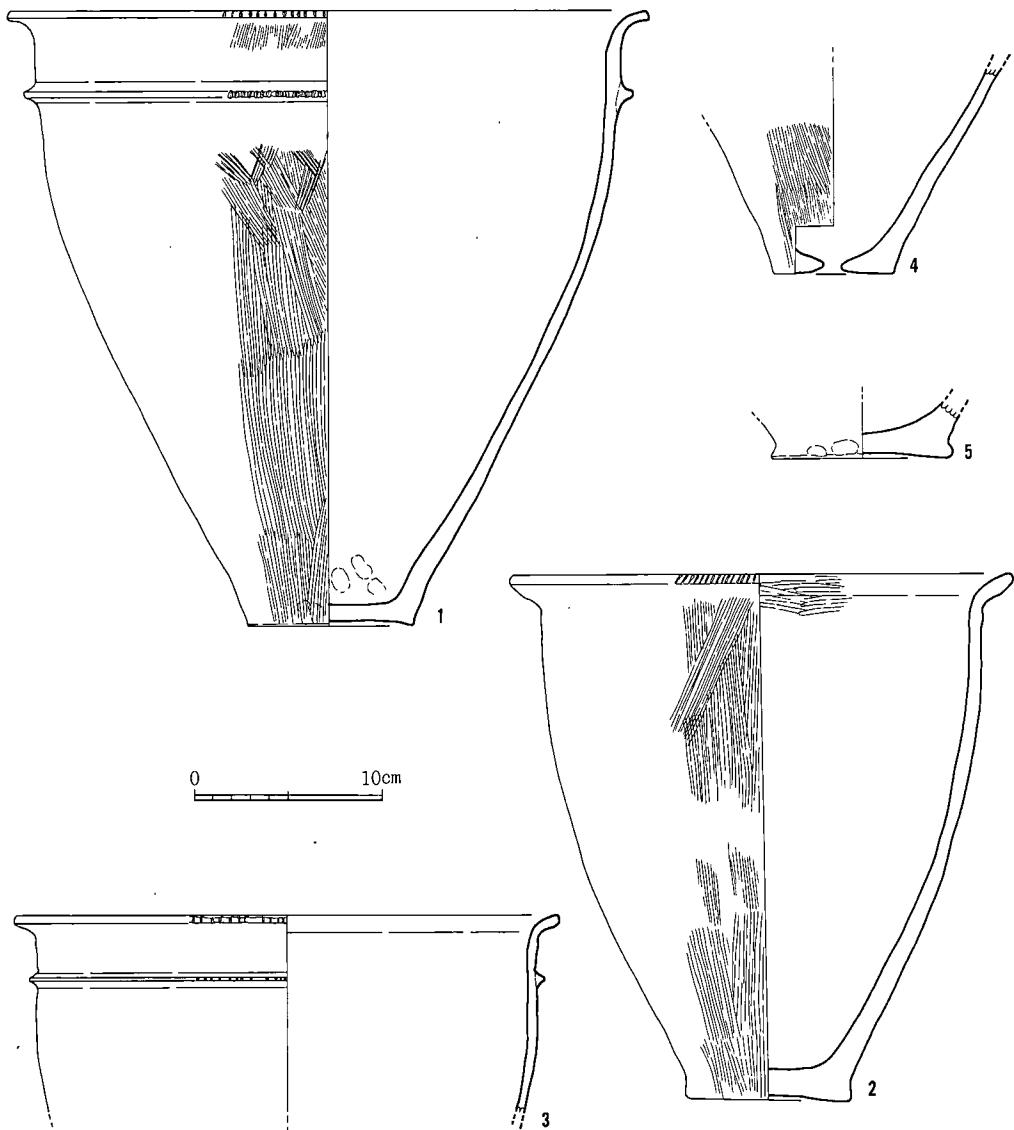
第84図 3号土壤出土土器実測図①(1/4)



第85図 3号土壤出土土器実測図②(1/4)



第86図 4号土壤実測図(1/40)



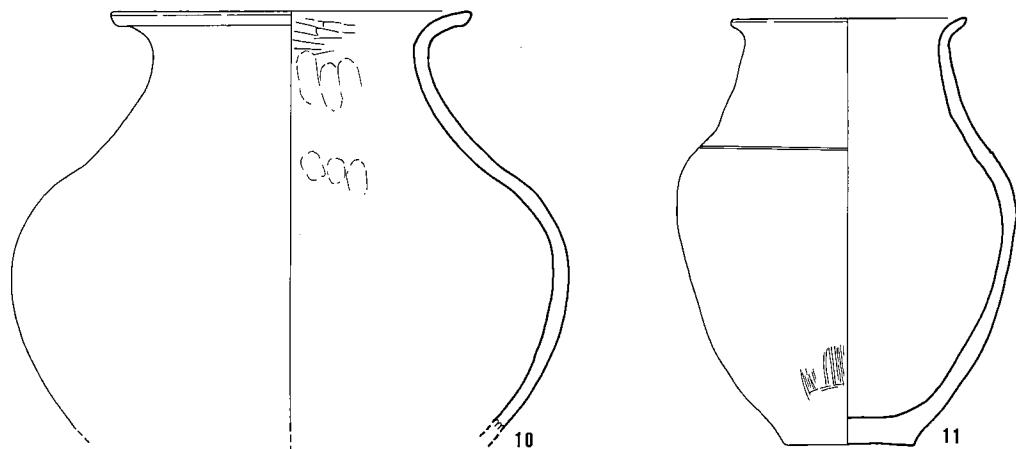
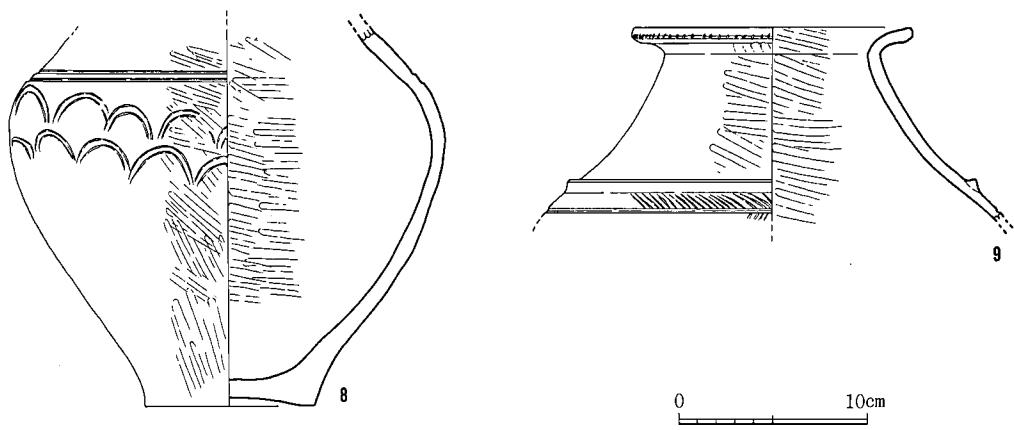
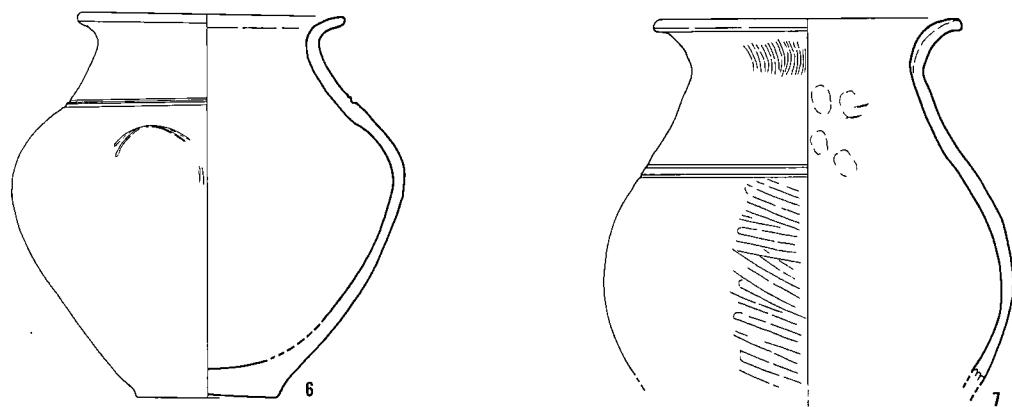
第87図 4号土壤出土土器実測図①(1/4)

#### 4号土壤 (第86図)

42区に位置する不整方形の土壤でD 3に切られている。底面は195cm×170cmを測る不整形で、平坦ではなく、南壁はややオーバーハングする。土器は散在して出土する。石器出土。

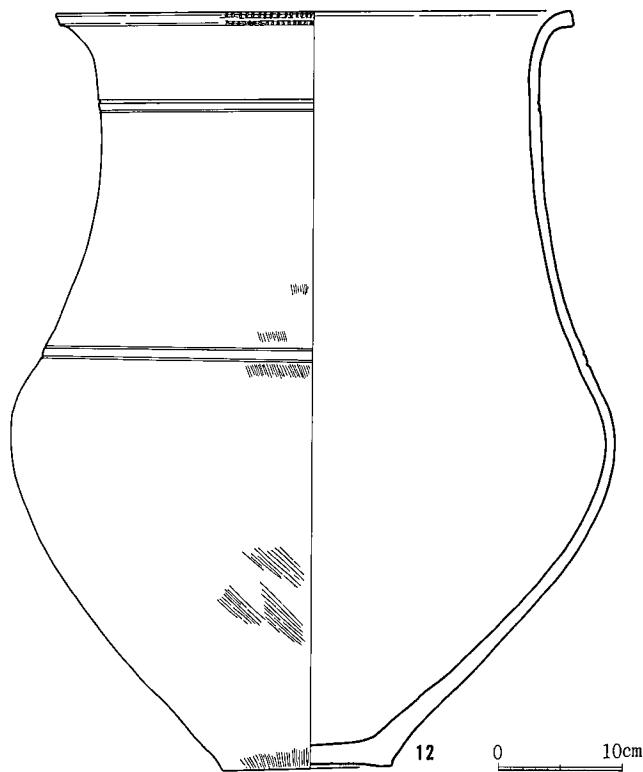
#### 出土土器 (第87~89図・図版30・31)

1~5は甕で、1~3は如意形の口縁を有し、口縁端部や凸帯にはキザミが施されている。口縁はゆるやかに外反し、胴部はほんのわずかに張り底部へ経る。底部はほぼ平底で、底壁は



第88図 4号土壙出土土器実測図②(1/4)

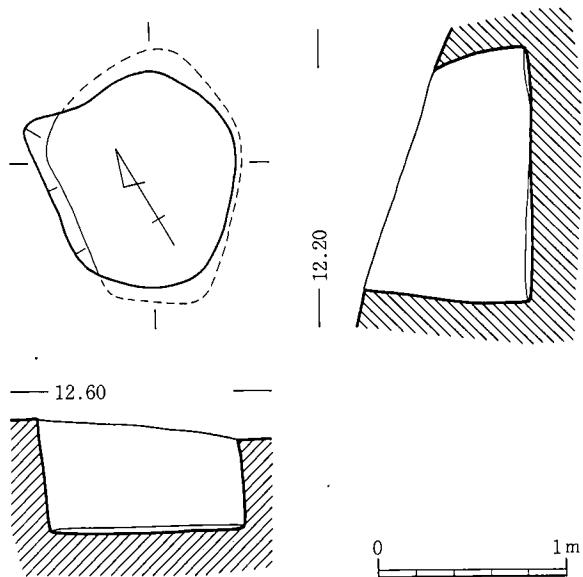
薄い。内面ナデ、外面ハケメは共通。法量は 1 が口径28.7cm、器高32.2cm、底径8.8cm、2 が同じく26.5cm・27.9cm・8.7cmを測る。4 はコシキ転用のもので、平底に穿孔が施されている。5 は横に張り出す形態を呈し、指頭による整形痕が残る。6～12は壺で、いずれも内傾して立ち上がる頸部をもつ。口縁はゆるやかに外反し、9 がやや強く屈曲し外面に稜を残す。口縁端部には 9・12 にキザミが施され、12 では上下端にそれが認められる。頸部から肩部にかけては、6～9・11・12 に 1 条ないし 2 条の沈線が施され、9 では凸帯も貼付されている。胴部は極端に張る傾向はみせず、丸みを帯びた形態で、6・8・9 にヘラ描きの二重弧文や斜行文が認められる。底部は 8 にやや上げ底が認められる以外は平底で、円盤状に底部が立ち上がる形態はない。調整は外面ヘラミガキが基調であるが、12 のように縦ハケの後ミガキ風に外面をナデでハケメを消したものもある。この場合、器面はミガキ程光沢をもたず、ナデよりはなめらかになっている。内面はナデ、ヘラミガキの二者に分かれ、8 では内面の底部付近までミガキが施される。法量（口径・器高・底径）は、6（14.3・20.2・7.5）、11（12.5・22.5・6.8）、12（41.6・60.5・13.6）を測る。



第89図 4号土壙出土土器実測図③(1/6)

### 5号土壙（第90図）

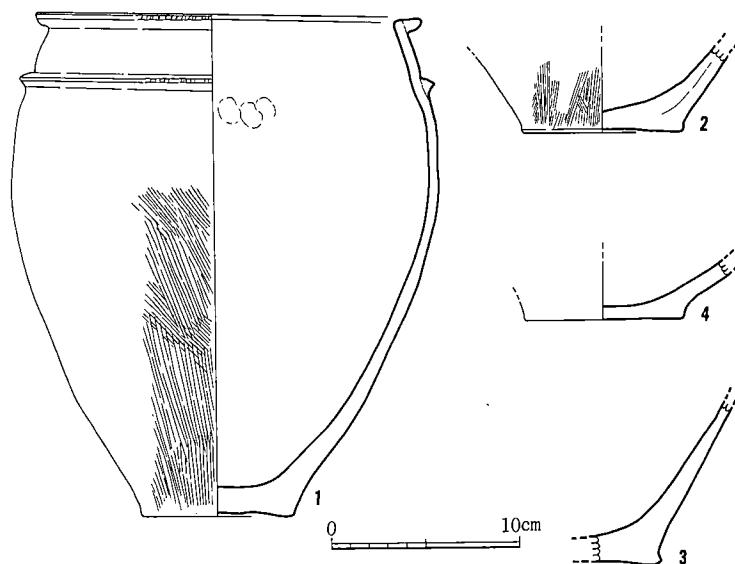
59区に位置する不整形の土壙。底面で134cm×103cmを測り、深さは58cmで橢円形を呈す。南北壁はオーバーハンプの形状を呈し、東壁もわずかにそれを呈す。西壁もその上端の形態が乱されることから、一部崩壊したことなどが考えられ、元来袋状の断面を呈していた可能性はある。土壙内には土器が散在し、まとまりは見られない。



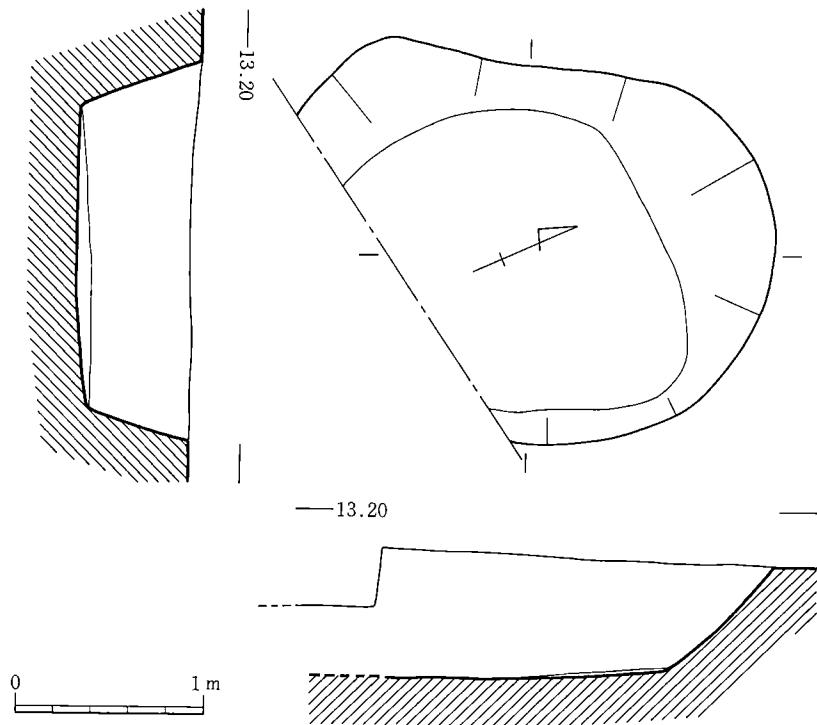
第90図 5号土壙実測図 (1/40)

### 出土土器(第91図・図版31)

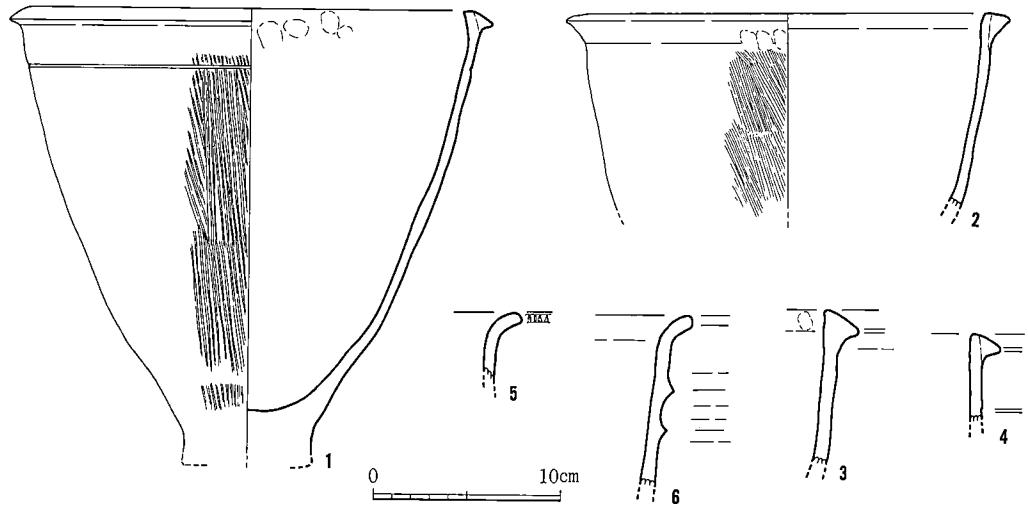
1は亀ノ甲タイプの内傾する口縁を有す甕で、口縁はやや横に長く、凸帯とともにキザミが施されている。胴部は張り、底部は平底でやや大きい。内面ナデ、外面ハケメで、口径20.2cm、器高26.6cm、底径8.0cmを測る。2・3は甕の底部で、3は横に張り出す形態を呈す。4は壺の底部。



第91図 5号土壙出土土器実測図 (1/4)



第92図 6号土壤実測図(1/40)



第93図 6号土壤出土土器実測図(1/4)

### 6号土壙（第92図）

60区に位置する橢円形と思われる土壙で、一部は調査区外にある。底面で158cmを測り、深さは68cm。壁はいずれも斜めに立ち上がり、直立しない。土壙内には土器が散在して認められる。玄武岩製の大型蛤刃石斧が出土。

### 出土土器（第93図）

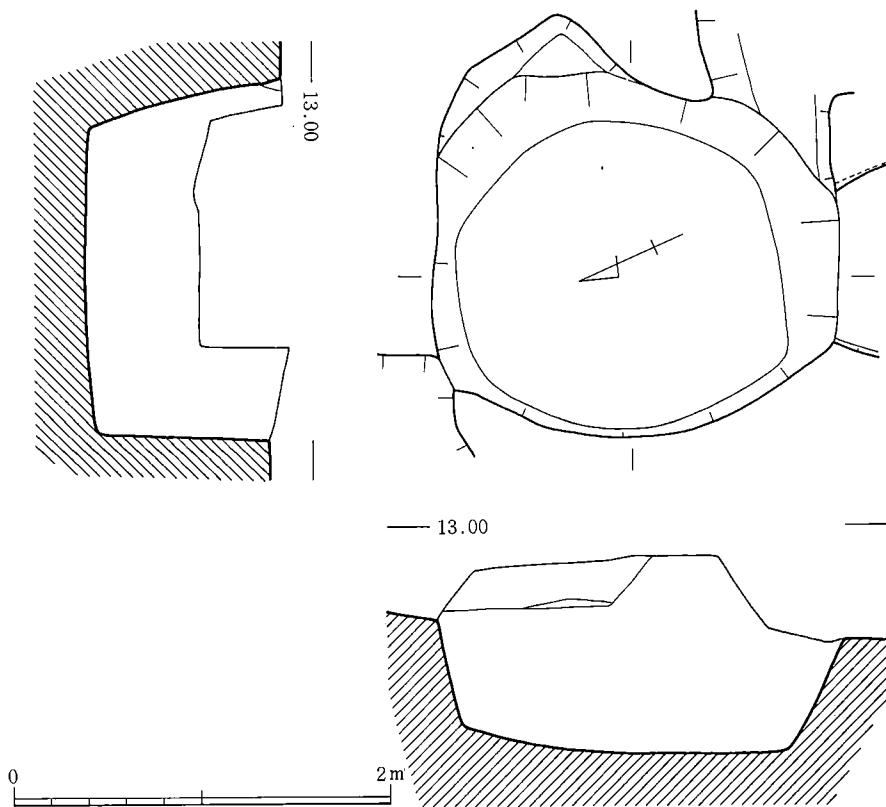
1～4は亀ノ甲タイプの口縁をもつ甕で、口縁は三角状を呈す。1・4には沈線が施され、胴部は1・2では底部にかけてすぼまる形態を呈す。底部は1では、背が高く底壁が厚いタイプのもの。5・6は如意形口縁の甕で、口縁はゆるやかに外反する。5ではキザミ、6は2条の凸帯が施されている。

### 7号土壙（第94図）

54区に位置する不整形の土壙で、一部を溝に切られている。底面は径159～171cmを測る橢円形で北側がやや高い。壁は斜めに立ち上がり、土壙内には土器が散在している。

### 出土土器（第95図）

1・2は甕の口縁部片。1は口縁端部・凸帯にキザミを有す如意形口縁の甕。凸帯下の外面

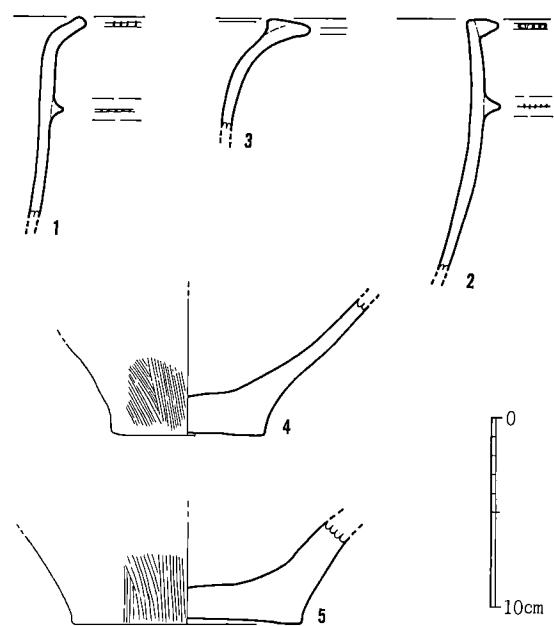


第94図 7号土壙実測図(1/40)

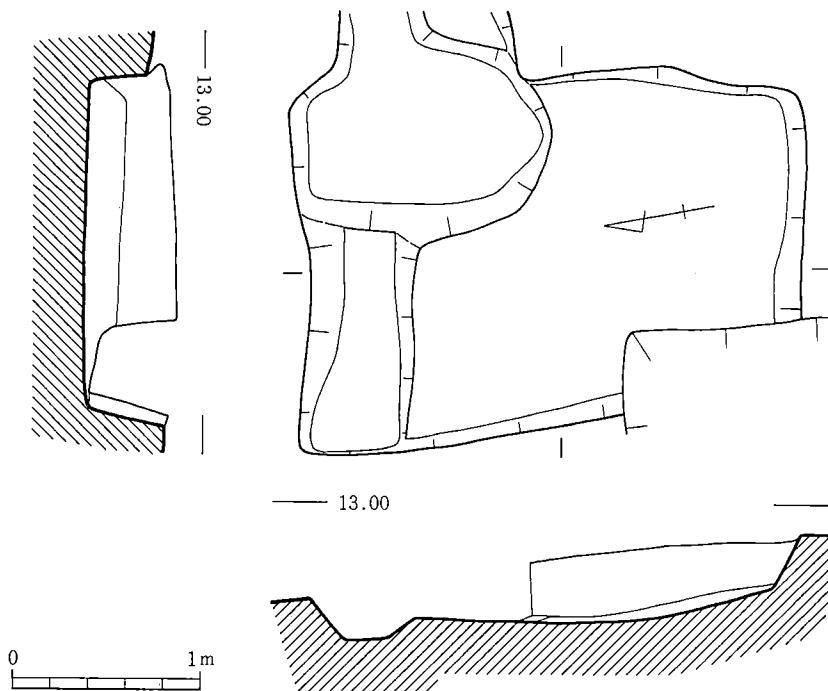
のみハケメ残存。2も同様に両者にキザミを有す、亀ノ甲タイプの口縁をもつ甕。外面に縦ハケ。3は壺の口縁部片。口縁内面に三角状の粘土帯を重ね、鋤先状口縁を形成している。内外ともにナデ・ヨコナデ。4・5は甕の底部と考えられる。土器相互にやや時期差が認められる。

#### 8号土壙（第96図）

54区に位置する長方形プランの土壙で、一部を溝に切られている。北壁が溝に切られるため、南北の規模は不明であるが、東西は175cmを測っている。伴出遺物が皆無のため、その時期は定かでないが、周辺にはD26のように方形プランの弥生時代土壙もあり、その所産とも考えられる。



第95図 7号土壙出土土器実測図 (1/4)



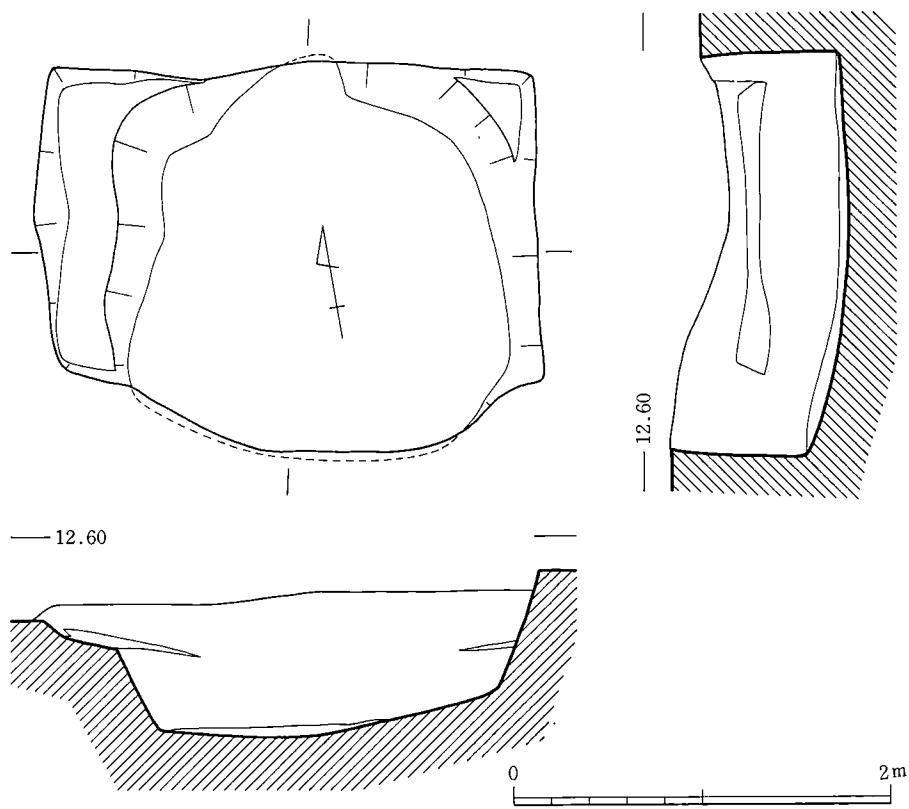
第96図 8号土壙実測図 (1/40)

### 9号土壙（第97図）

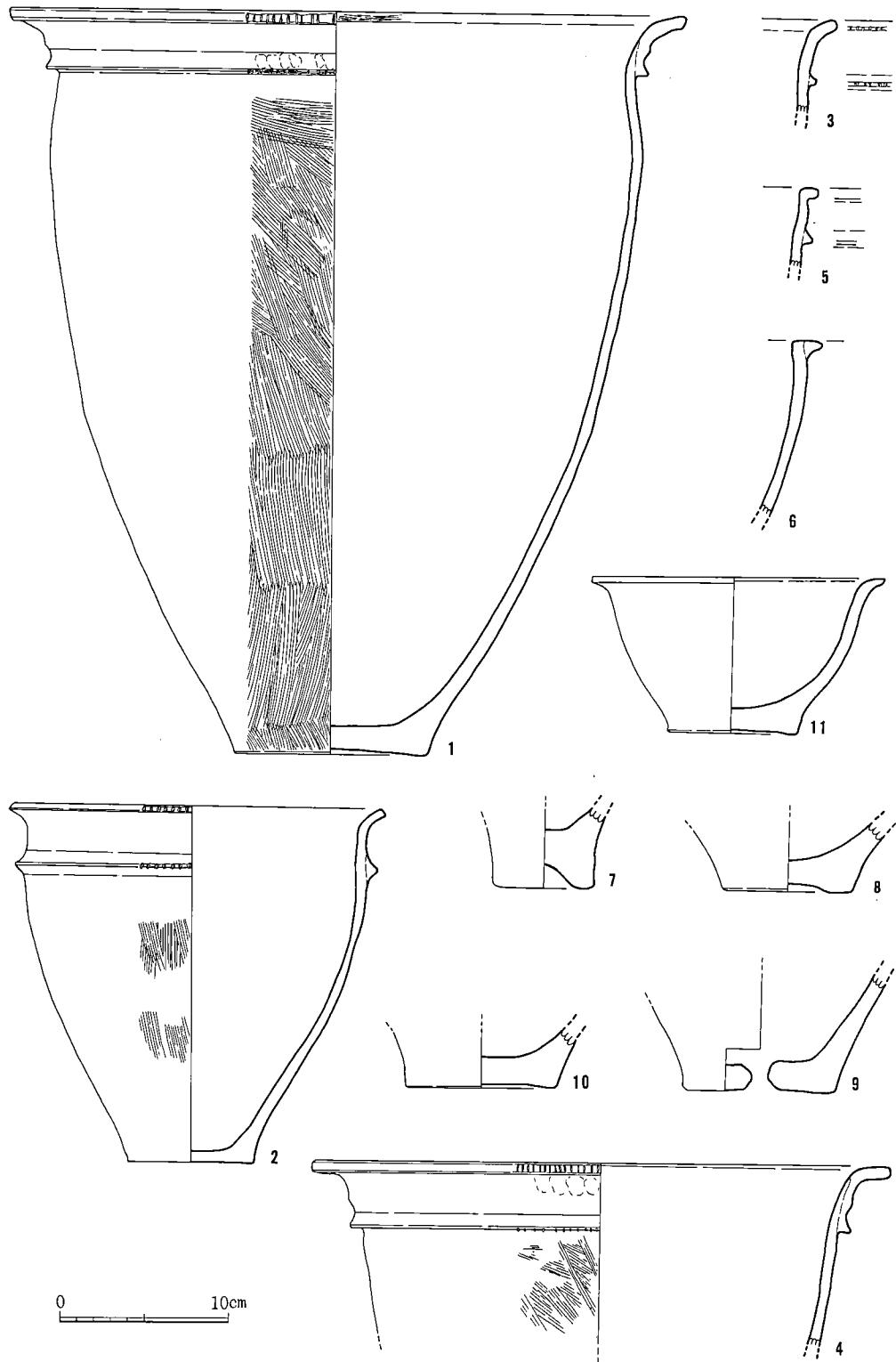
54区に位置する不整方形の土壙。東西に2段のテラスをもち、不整形の底面は214cm×203cmを測る。南壁と、北壁の一部はややオーバーハングするが、東西壁は斜めに立ち上がる。土壙内に土器が散在する。

### 出土土器（第98図・図版31）

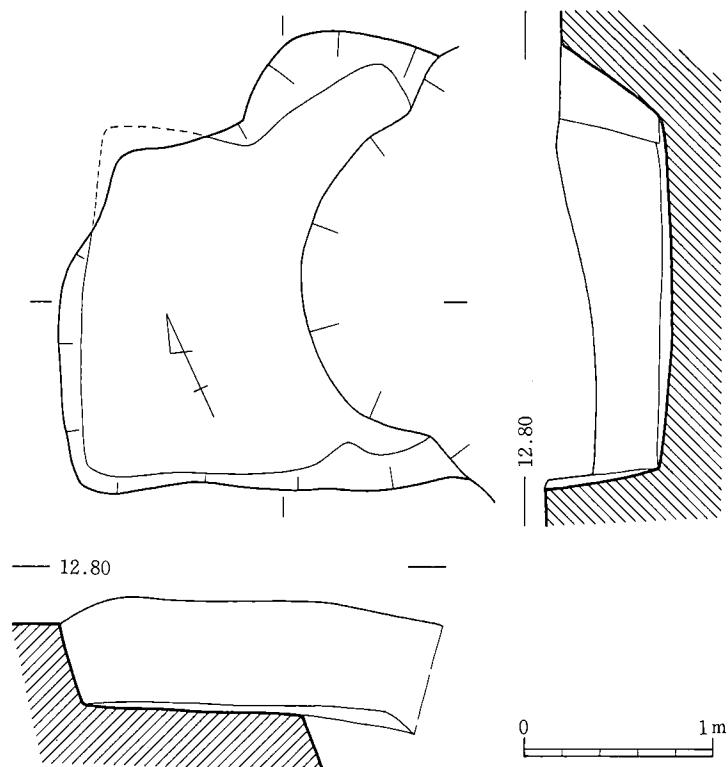
1～4は如意形口縁を有す甕。1は口径40cm、器高44.2cm、底径11.3cmを測るが完形品ではない。口縁はゆるく外反し、やや下向きに凸帯が貼付されている。両者の端部にはキザミ。胴部は上半でわずかに張る形状をみせ、底部はわずかに上げ底を呈す。2も同様にキザミを有す、復元口径21.2cm、器高21.2cm、底径7.4cmを測る甕。4の口縁部は強く屈曲し外反する。胴部は直線的な形態を呈している。5・6は亀ノ甲タイプの口縁を有す。7～10は甕の底部片。7・8に上げ底が伺え、他は平底を呈す。11は如意形口縁を有す鉢。



第97図 9号土壙実測図(1/40)



第98図 9号土壙出土土器実測図 (1/4)



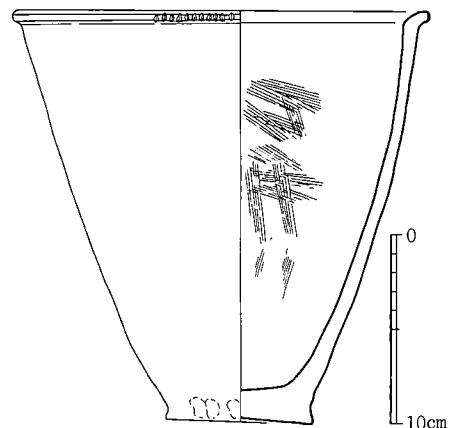
第99図 10号土壙実測図(1/40)

#### 10号土壙（第99図）

44区に位置する不整形の土壙で、東側を土壙に切られ全容は不明。北壁の一部がややオーバーハングする形状を呈す。土壙内から土器が散在して出土している。

#### 出土土器（第100図・図版32）

口縁は短く、端部にキザミを有し、如意形を呈する。胴部は直線的で、底部は指頭による整形痕が残り、その為横に張り出す形状をとる。口縁周辺を除き、内外ともナデ仕上げであるが外面は明瞭ではない。口径22.1cm、器高21.7cm、底径7.8cmを測る。



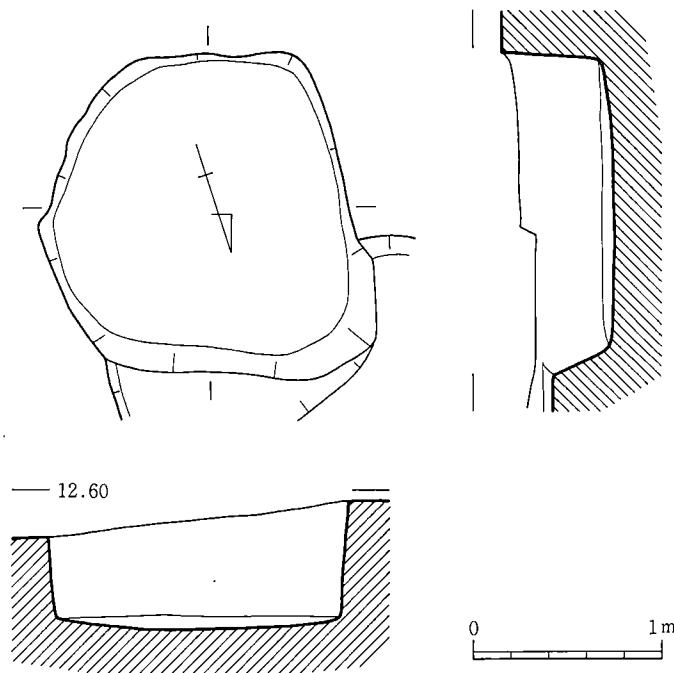
第100図 10号土壙出土土器実測図(1/4)

### 11号土壙（第101図）

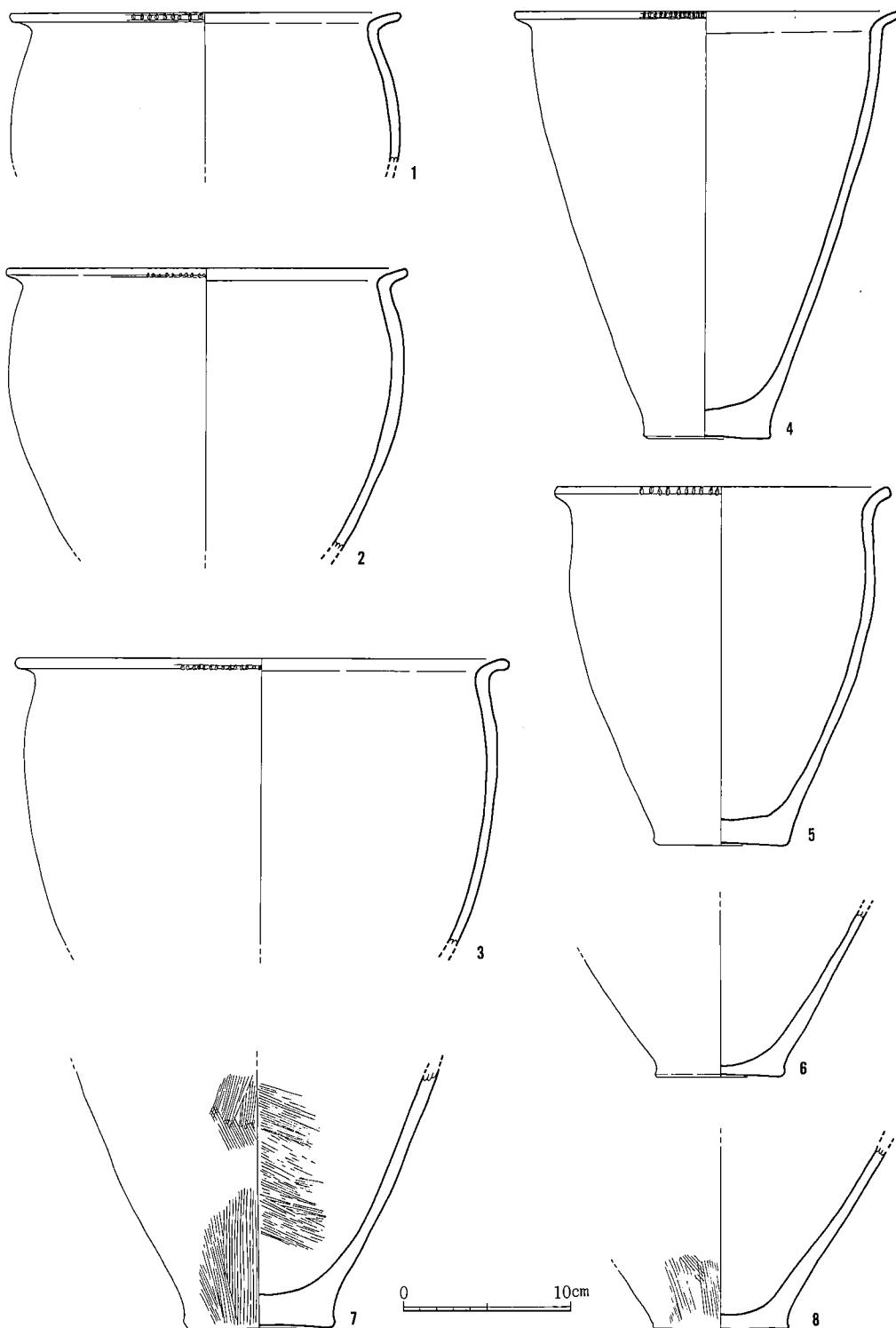
45区に位置する楕円形の土壙で、一部を溝に切られている。径150～166cmを測り、深さは50cm前後を測る。土器は散在して出土する。玄武岩製の蛤刃石斧が出土。

### 出土土器（第102～105図・図版32・33）

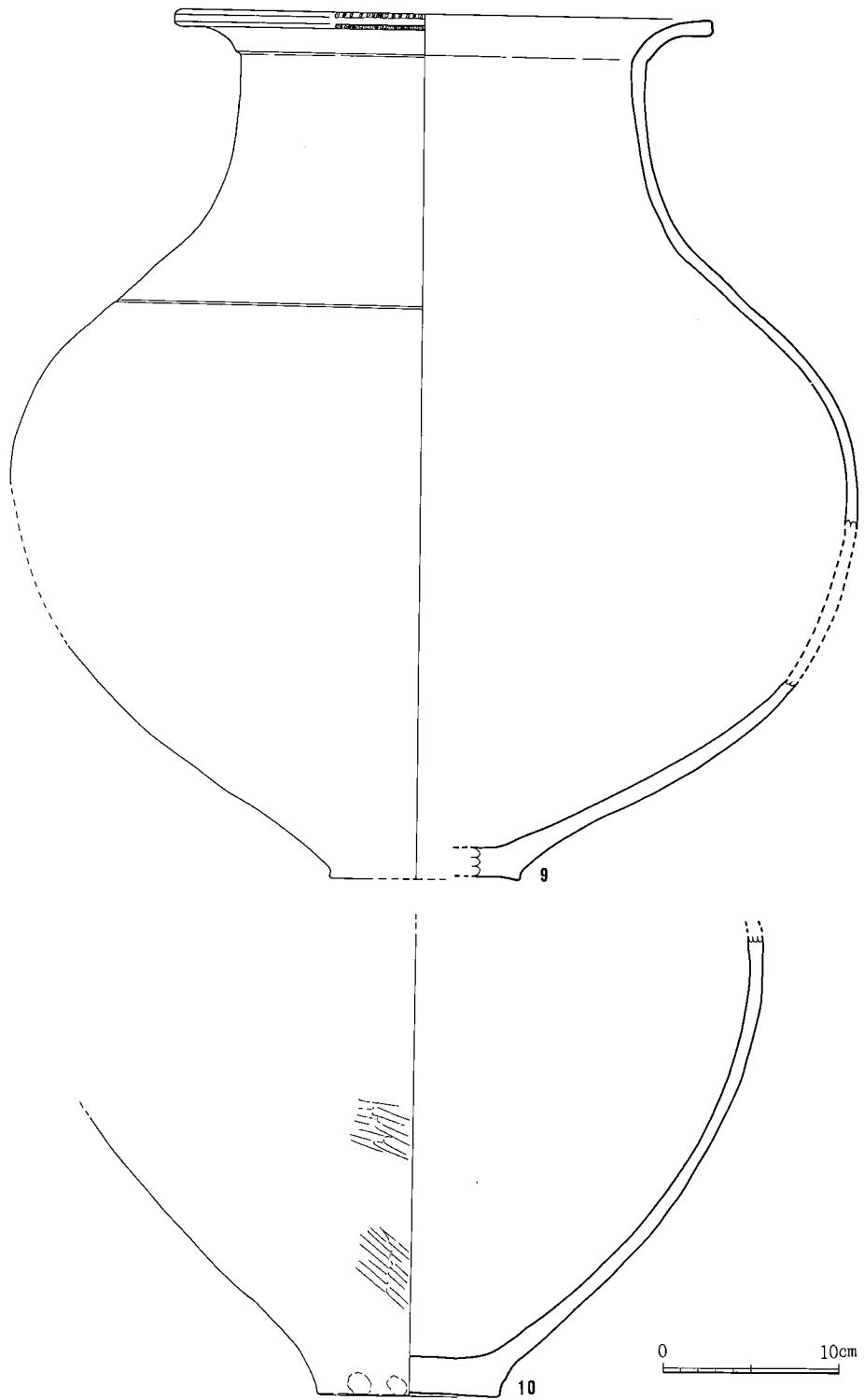
1～8・22・23は甕とその部分片。口縁部はすべて如意形を呈し、キザミが施されている。如意形の屈曲度は個体により異なるが、口縁の長さはいずれもやや長い。胴部は1～3・5がやや張り、4は直線的な形状を呈す。底部はすべて平底である。調整は7・8を除き、内外ともナデ仕上げのものが多くやや特異。9～21・24～26は壺とその部分片。口縁部が外反し、頸部が内傾して立上がるものが主体を占める。9・11の肩部には沈線が施され、12の肩部には接合の痕と考えられる段が認められる。胴部はいずれもやや張る形状を呈し、底部は小ぶりである。9の口縁端部にはキザミが施され、また12・13の口縁はやや肥厚し頸部との境には段が認められる。いずれも完形品ではなく、反転復元実測を行っている。27は蓋、28は蓋の取っ手とも考えられるが定かではない。内外にヘラミガキが施されている。



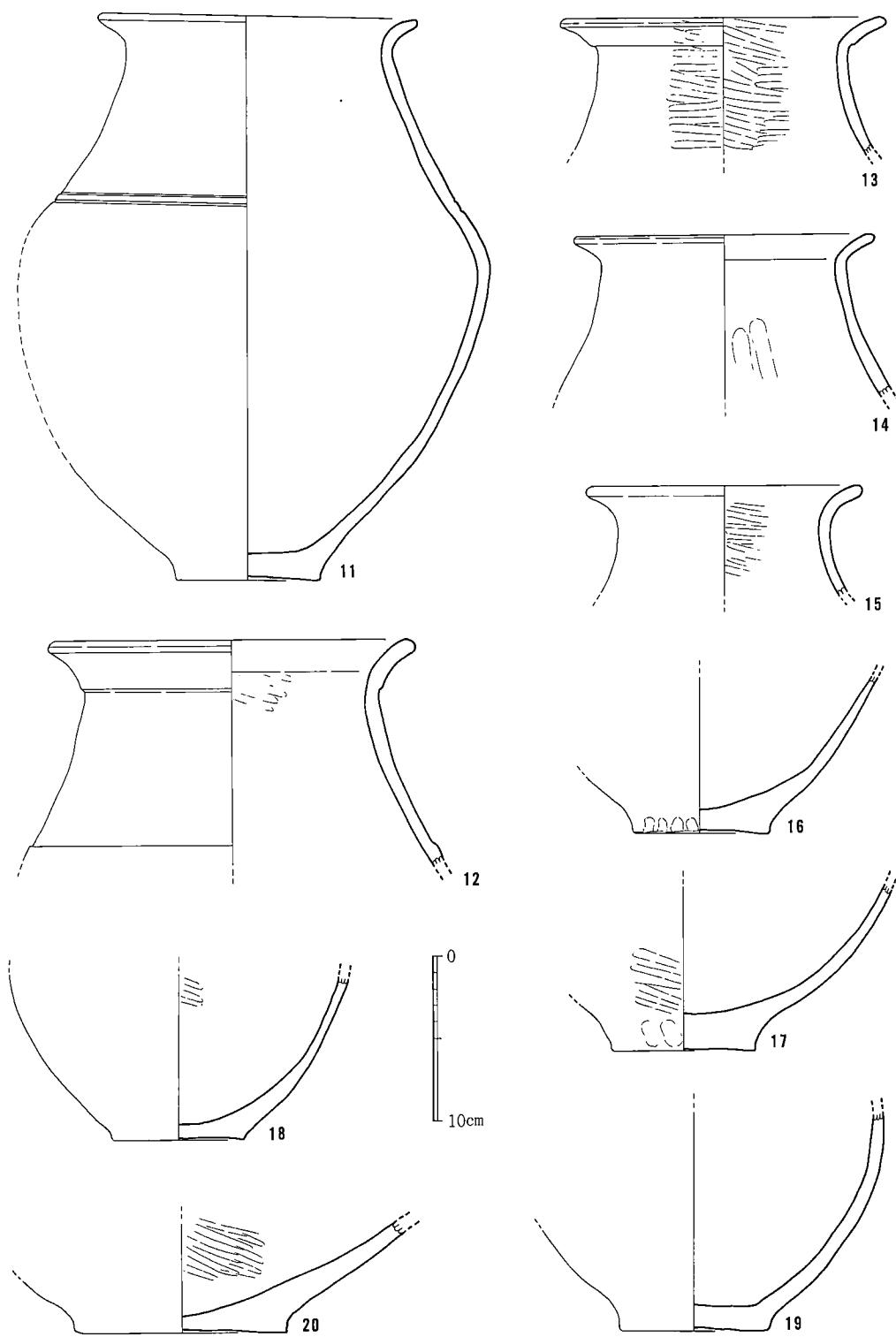
第101図 11号土壙実測図(1/40)



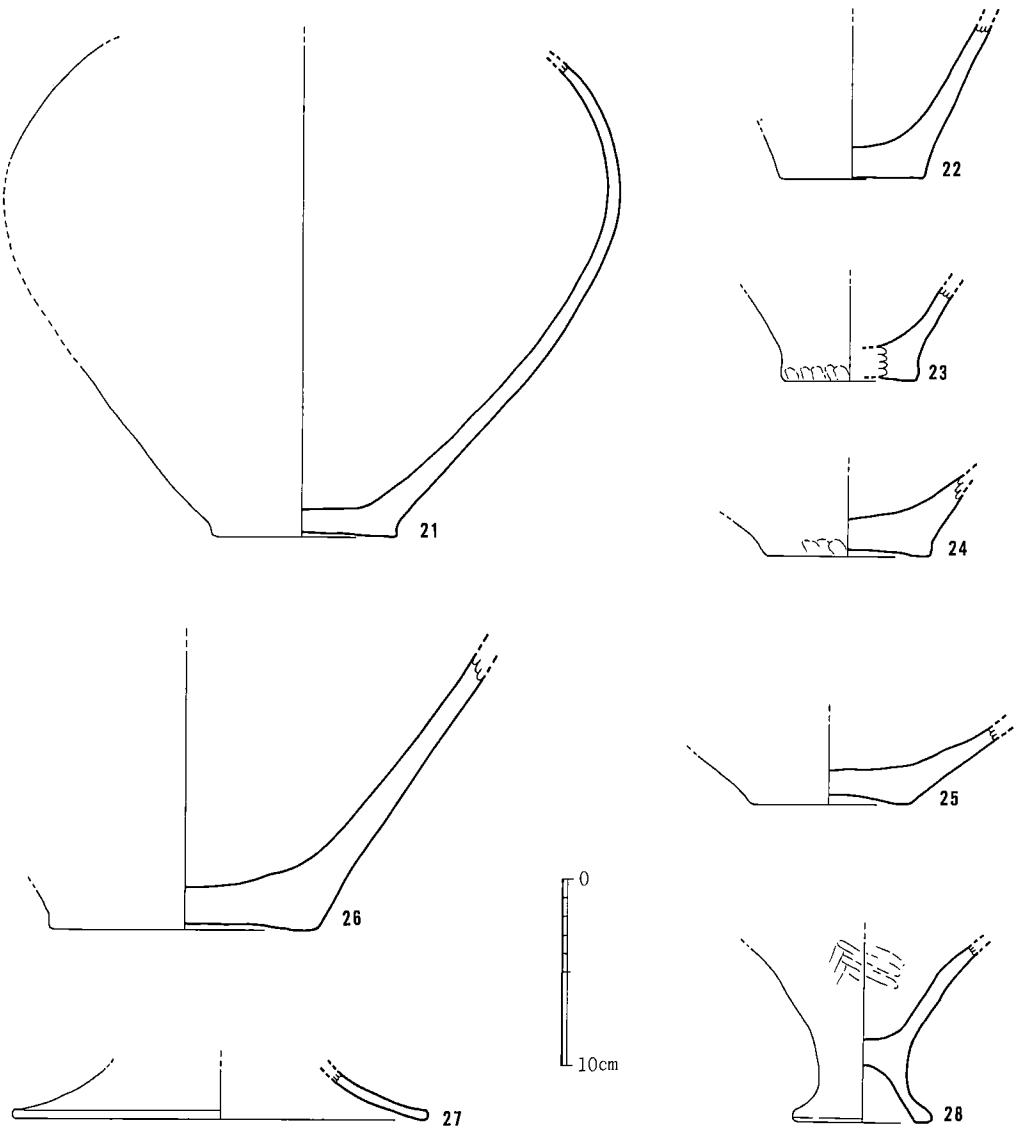
第102図 11号土壤出土土器実測図① (1/4)



第103図 11号土壙出土土器実測図② (1/4)



第104図 11号土壤出土土器実測図③ (1/4)



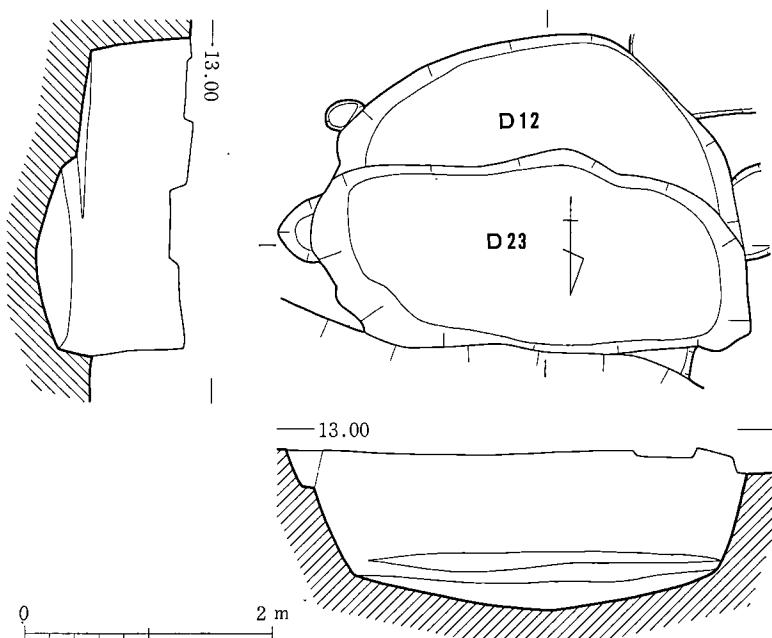
第105図 11号土壙出土土器実測図④ (1/4)

### 12号土壙 (第106図)

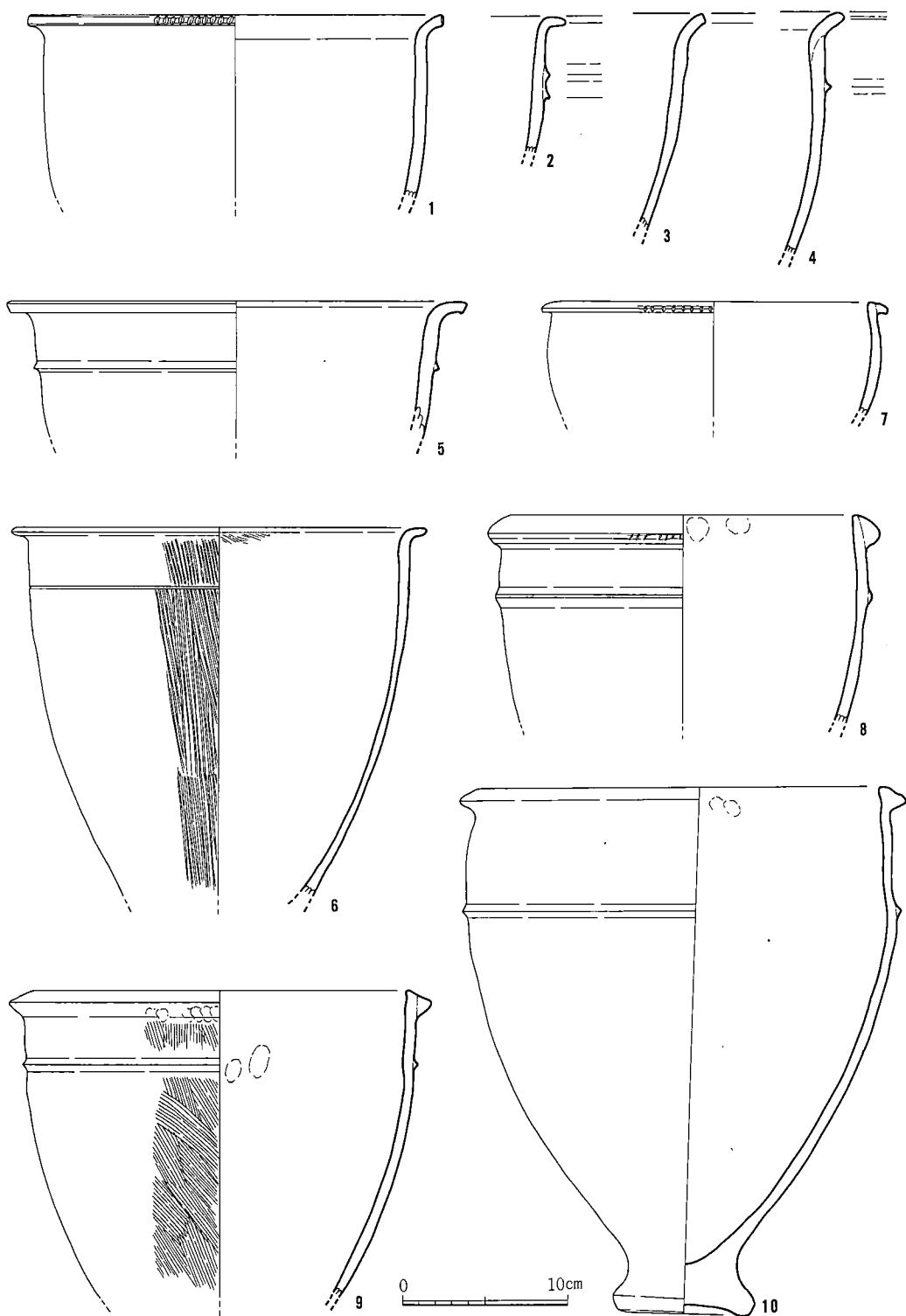
50区に位置する楕円形と考えられる土壙で、D23と切り合っているが先後関係は不明。現状で底面は径280cm以上を測り、深さは90cm前後。底面は北へやや傾斜する。土器は散在して出土している。石器・土製品が出土。

### 出土土器 (第107・108図・図版33)

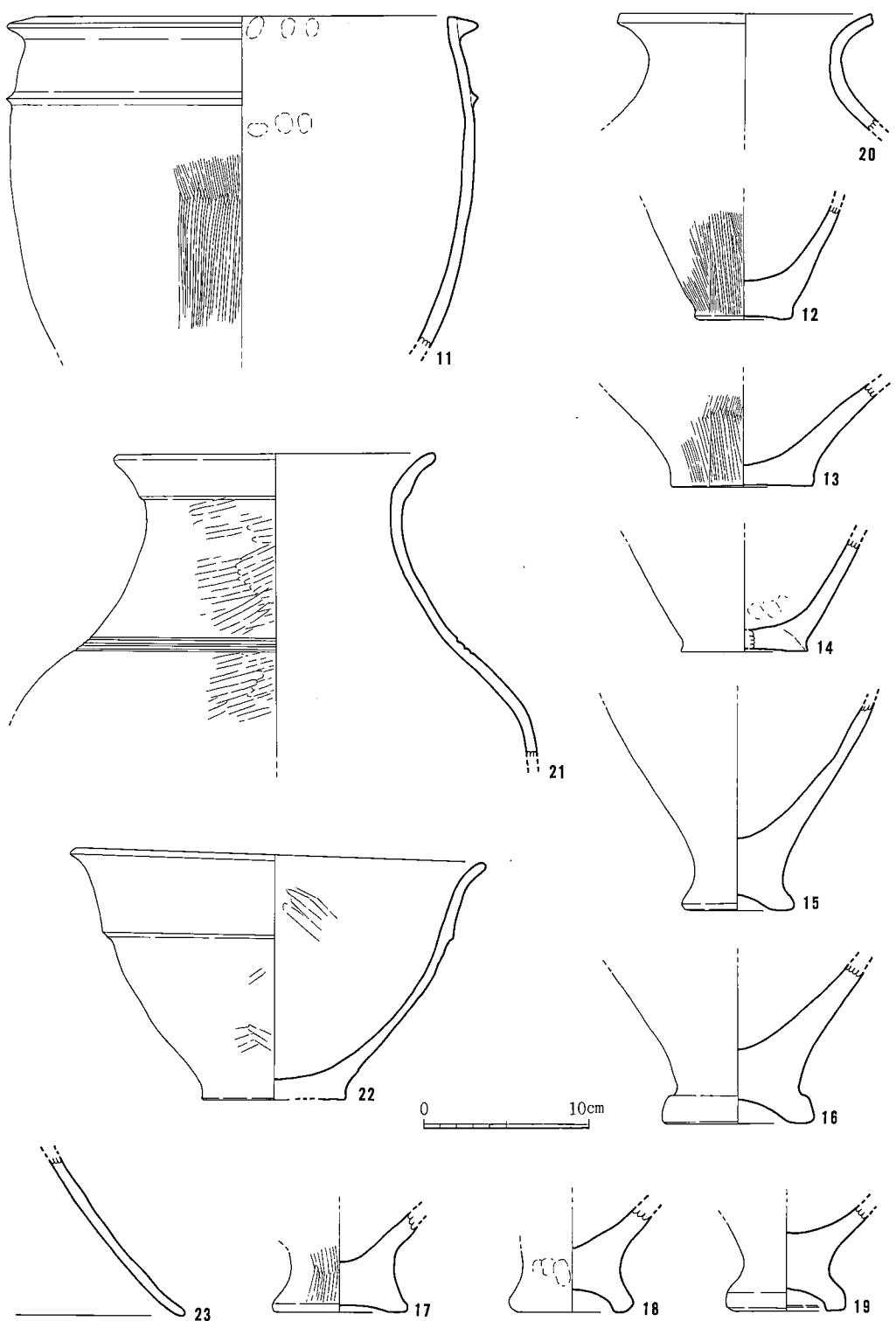
1～19は甕とその部分片。1～6は如意形口縁を有すもの。1は口縁端部にキザミ、2は口縁下に二条凸帯、4・5は一条凸帯、6には沈線が施されており多様である。胴部は直線的に底部へとすぼまる形態を呈し、内面ナデ、外面ハケメのものが主体である。7～11は亀ノ甲タイプの口縁を有す。いずれも三角状の粘土帯が貼付されており、やや形態が異なる7のみキザミが施されている。7を除き、口縁下には凸帯が貼付される。胴部は10・11がやや張る形状を呈し、10の底部は横に張り出した上げ底を呈している。内面はすべてナデ仕上げ。外面はナデ、ハケメの両者が認められる。12～19は甕の底部片。12～14が平底を呈し、14はやや横に張り出す傾向をもつ。15～19は横に張り出した上げ底のものであるが、いずれも背は低い。底壁の厚さは2.5～3.4cmを測る。20・21は壺の上半部片。外反する口縁と内傾して立ち上がる頸部を有す。21の口縁部は肥厚し、頸部との境には段をなしている。また肩部には3条の沈線が施されている。外面はヘラミガキ。22はわずかに外反する如意形口縁を有す鉢。胴上位には突出部が認められるが、貼付凸帯ではなく接合の痕である。内外面ともヘラミガキ。23は蓋であろう。



第106図 12・23号土壙実測図 (1/60)



第107図 12号土壤出土土器実測図① (1/4)



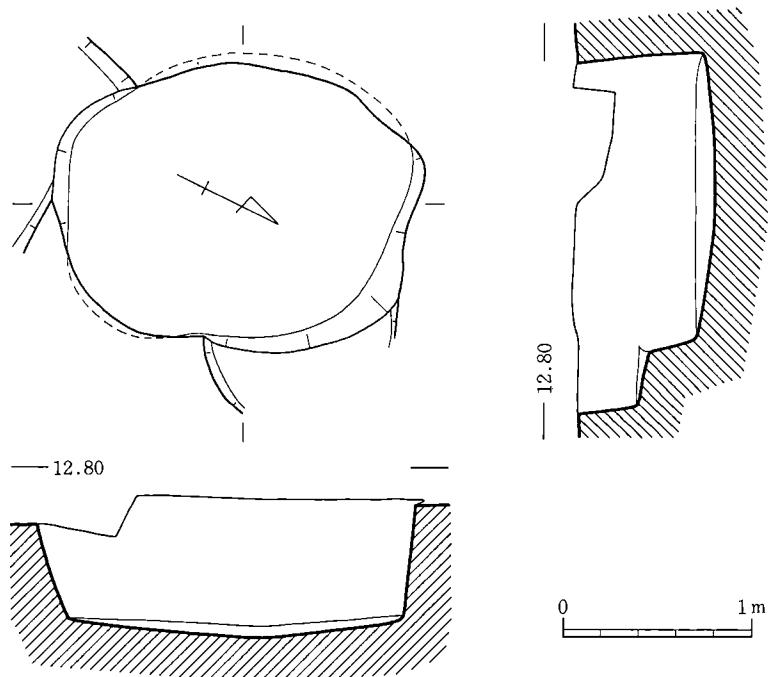
第108図 12号土壤出土土器実測図② (1/4)

### 13号土壙（第109図）

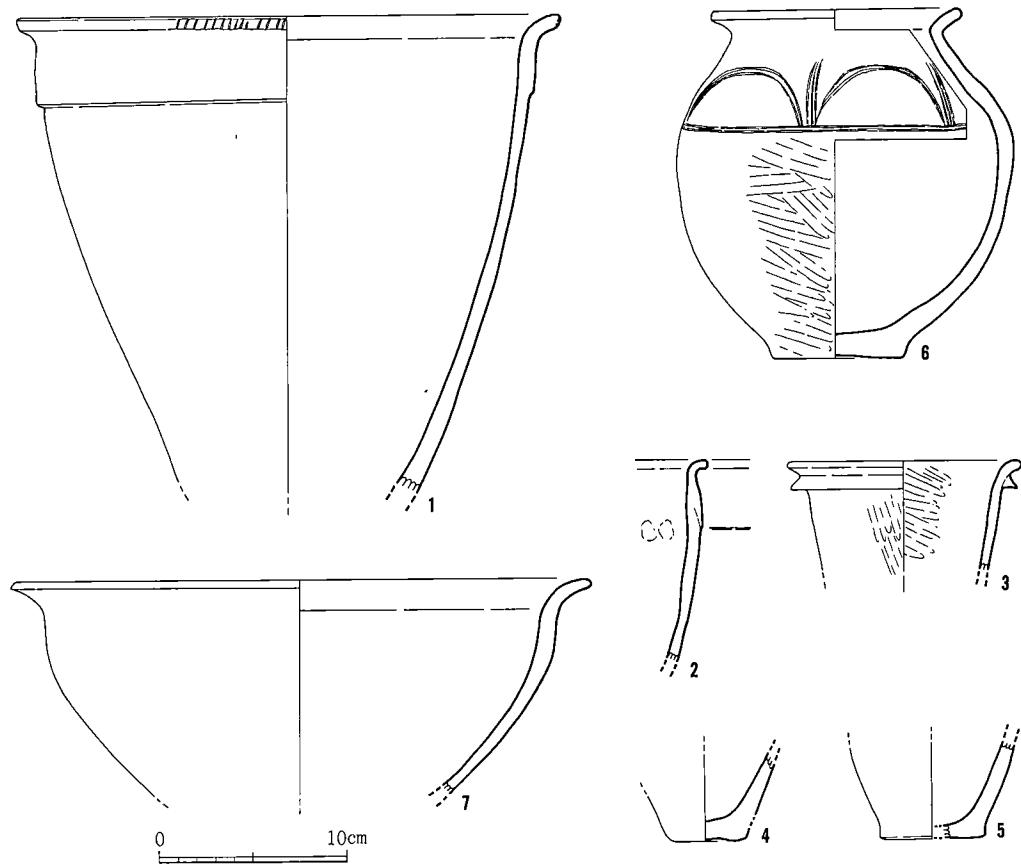
45区に位置する不整長方形の土壙で、南側を土壙に切られている。底面は176cm×150cmを測り、深さは71cmで梢円形を呈す。壁の一部がオーバーハングする形状を呈す。土壙内に散在して土器が出土する。石鎌出土。

### 出土土器（第110図・図版33）

1～5は甕の部分片。口縁はすべて如意形を呈し、1の端部にはキザミが施される。1・2の口縁下には接合の痕の段が認められ、3には特異な形の凸帯が貼付されている。胴部はいずれも張らず直線的である。1・2は内外ともナデ仕上げ、3は内外ともヘラミガキの特異なもの。6はく字状に外反する口縁と球形の胴部を有す壺。胴上半にヘラ描きの重弧文と2条の平行沈線を有す。重弧文の間には3条の立ち上がる沈線も認められる。7はゆるやかに外反する如意形口縁を有す鉢。外面はヘラミガキの可能性もあるが明瞭ではない。



第109図 13号土壙実測図(1/40)



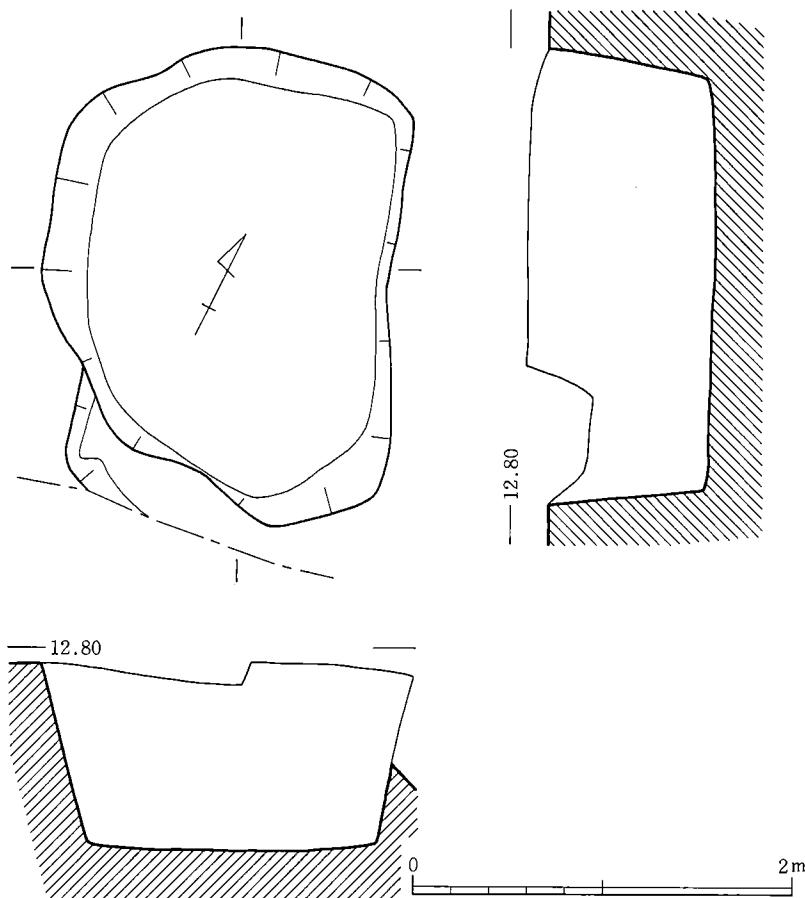
第110図 13号土壙出土土器実測図 (1/4)

#### 14号土壙 (第111図)

45区に位置する不整形の土壙でD15を切る。底面で216cm×153cmを測り、深さは100cm。壁は斜めに立ち上がる。土壙内に散在して土器が出土している。

#### 出土土器 (第112図)

1～4は甕の部分片。1はキザミが施された、内外ともナデ仕上げの甕。2は横に張り出す、上げ底の底部。3・4もわずかに上げ底を呈し、3では指頭による整形によりやや横に張り出す形状を呈す。5・6は壺の口縁部片。5はゆるやかに外反する口縁部と外傾して立ち上がる頸部をもつ。内外とも横方向のヘラミガキ。6の頸部は内傾し、3条の平行沈線と縦にも数条の沈線が描かれる。外面はヘラミガキ。7～11は鉢とその部分片。7は如意形口縁とく字状に突出する胴上半を有す。外面は剥落のため調整不明。復元口径22.6cm、器高17.8cm、底径7.5cmを測る。8は壺の胴下半部の可能性もあるが、やや横に張り出す底部をもつ。球形の胴部は外面ヘラミガキ。底部側面は強いヨコナデにより仕上げられている。9も8と同様の底部を有し、



第111図 14号土壙実測図(1/40)

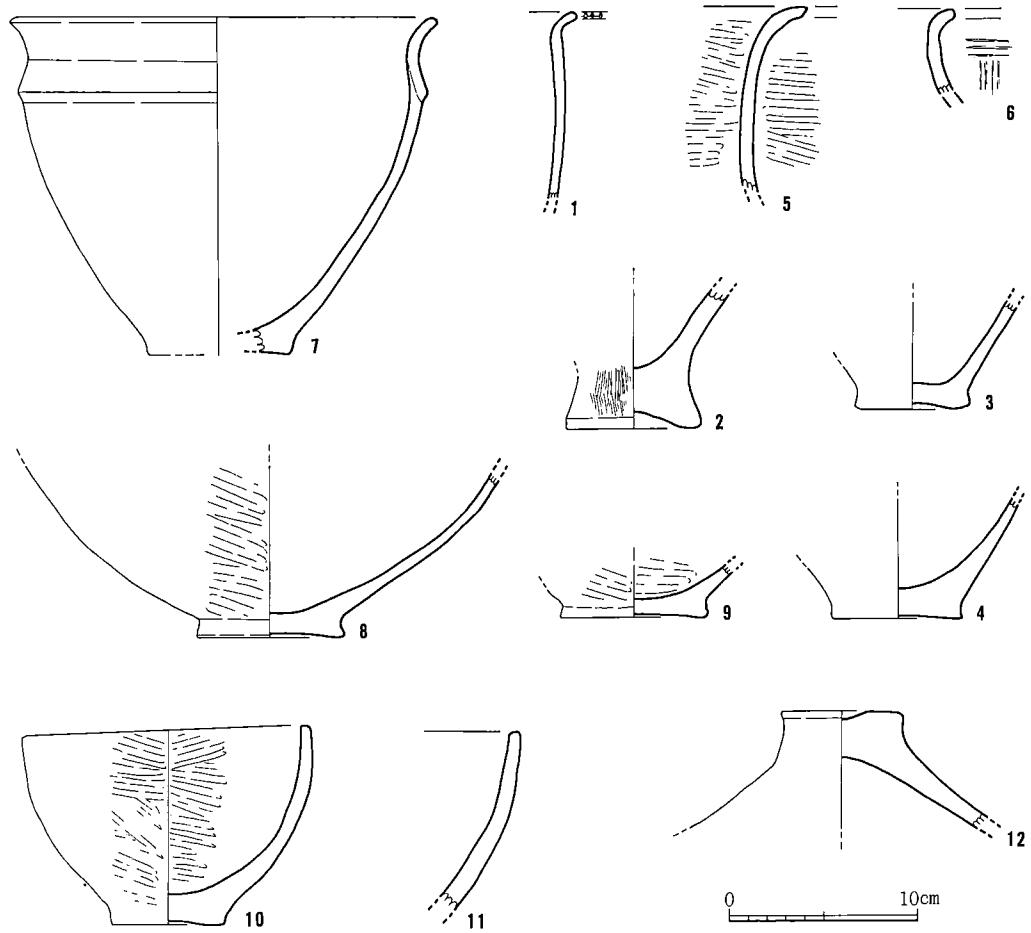
内外ともヘラミガキ。10は口径14.0cmを測る、やや小さい鉢。内外ともヘラミガキ。11も調整は同様。12は内外ナデ仕上げの蓋。天井部は上げ底状を呈す。

#### 15号土壙 (第113図)

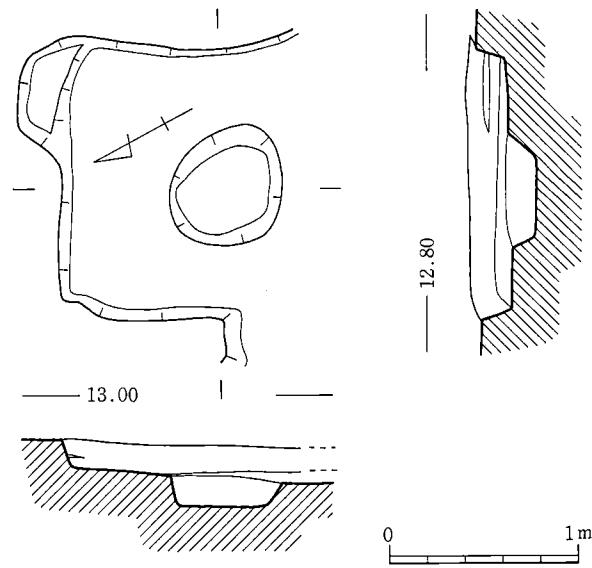
45区に位置する土壙でD14に切られ、一部は削平されて全容は不明である。土壙底には径64cmを測る浅い小土壙が掘り込まれている。土器は散在して出土。

#### 出土土器 (第114図)

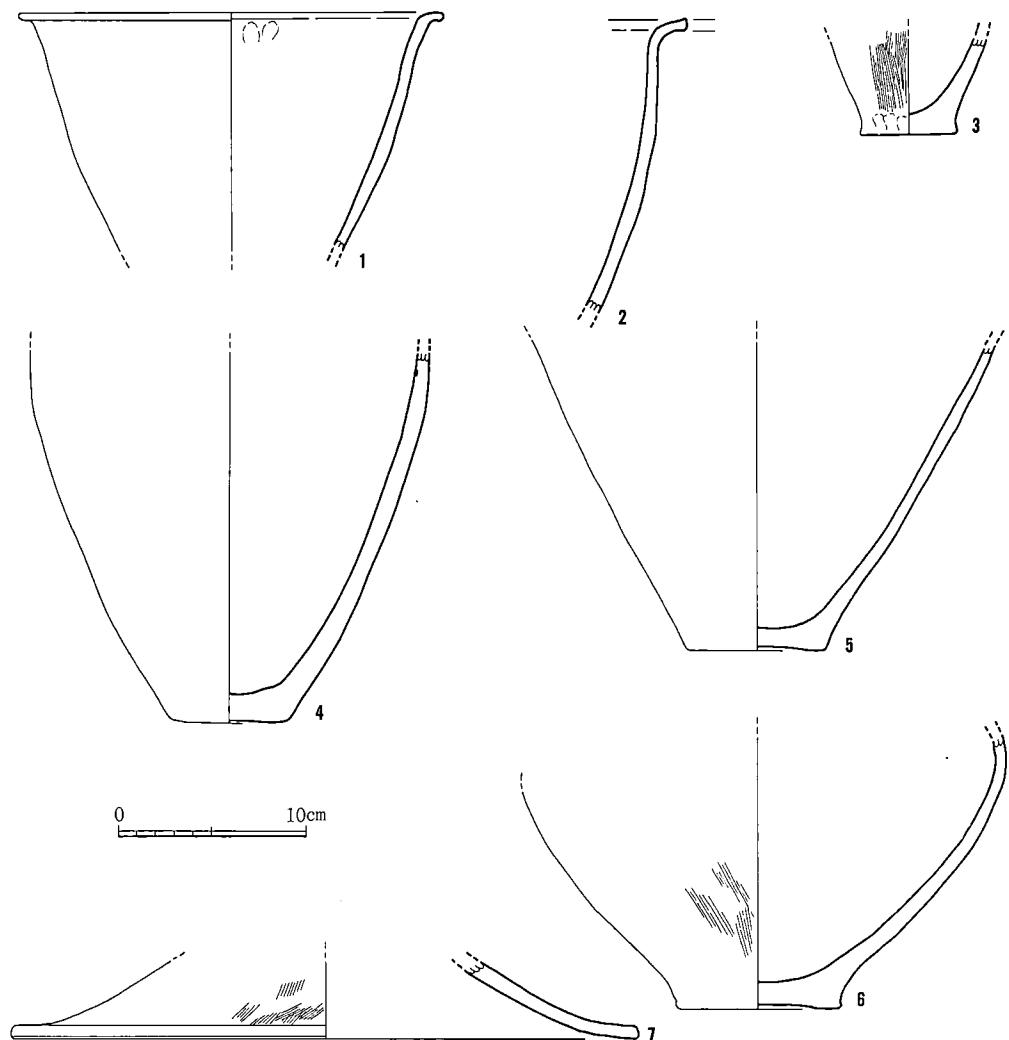
1～5は甕の部分片。1・2は如意形口縁をもつ。1は直線状の胴部もち、縦ハケメがわずかに残存している。3はやや横に張り出す形状を呈す底部で、指頭による整形痕を残す。4はやや角がとれた形態の底部で、胴部はわずかにふくらみをもつ。6は壺の下半部と考えられるが、わずかにハケメが残存している。底部付近には指頭による整形痕(調整痕?)。7は蓋の部分片で外面はハケメ仕上げ。



第112図 14号土壤出土土器実測図(1/4)



第113図 15号 土 壤 実 測 図(1/40)



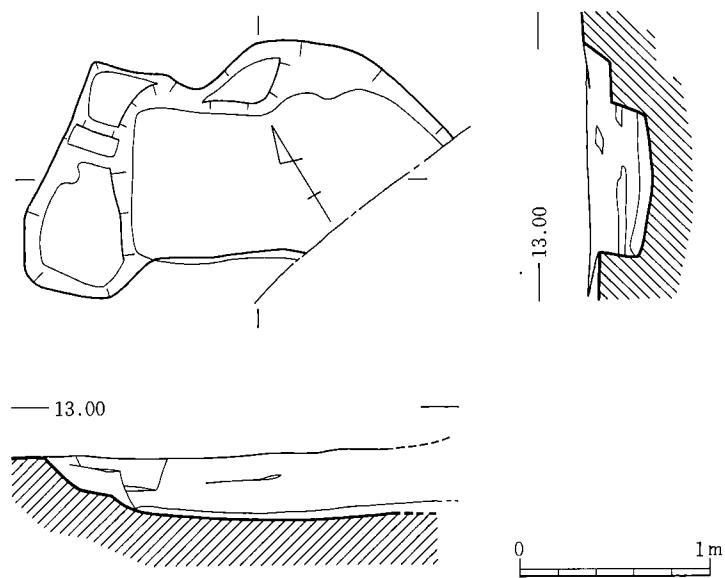
第114図 15号土壙出土土器実測図 (1/4)

#### 16号土壙 (第115図)

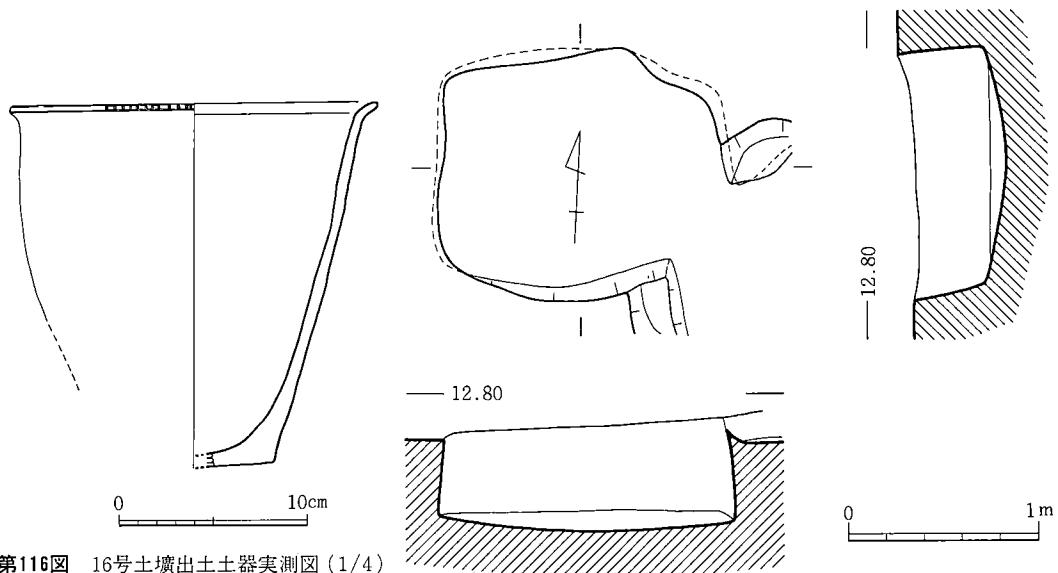
40区に位置する不整形の土壙で、一部は調査区外にある。4段の小テラスと不整形の底面を有す。土器は散在して出土。

#### 出土土器 (第116図・図版34)

口縁はゆるやかに外反する如意形口縁で、端部にはキザミが施される。胴部は直線的で、底部は平底である。内面はナデ、外面は剝落のため不明瞭であるがナデの痕跡が認められる。外面は二次焼成をうけている。完形ではないが復元で口径19.5cm、器高19.2cmを測る。



第115図 16号土壤実測図(1/40)



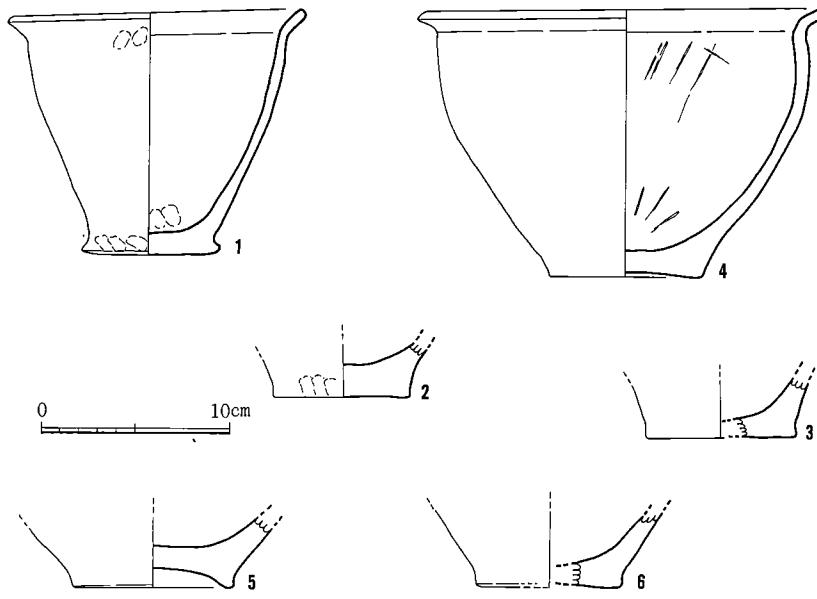
第116図 16号土壤出土土器実測図(1/4)

第117図 17号土壤実測図(1/40)

### 17号土壤 (第117図)

40区に位置する不整長方形

の土壤で、D19を切るが同時に掘り下げたため壁の一部を失なっている。底面は $157\text{cm} \times 125\text{cm}$ を測り、深さは54cmで上面プランと似た形状を呈す。東、北、西壁はオーバーハングし、元来



第118図 17号土壙出土土器実測図 (1/4)

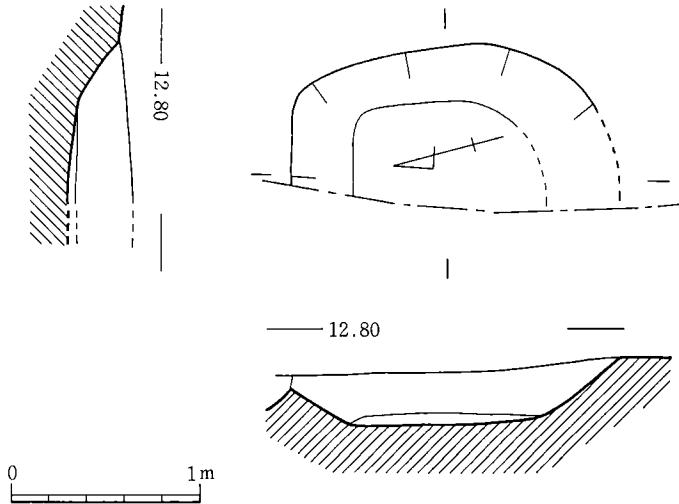
袋状豎穴であった可能性もある。土壙内に散在して土器が出土。

#### 出土土器 (第118図・図版34)

1は如意形口縁を有する背の低い甕。胴部はわずかに張り、底部は指頭による整形・調整が顯著で横に張り出す形状を呈す。内面は不定方向のナデ、外面は縦方向のナデにより仕上げられる。口径15.2cm、器高12.7cm、底径7.3cmを測る完形品。2・3は甕の底部と考えられる。2の外面はナデ仕上げ。

3は調整不明。4はやや強く屈曲する如意形口縁を有す鉢。内外とも板状工具によるナデの痕が認められる。口径20.8cm、器高14.0cm、口径8.0cmを測る完形品。

5・6は甕の底部?。5は高台状の底面をもち、外面はヘラミガキが施される。



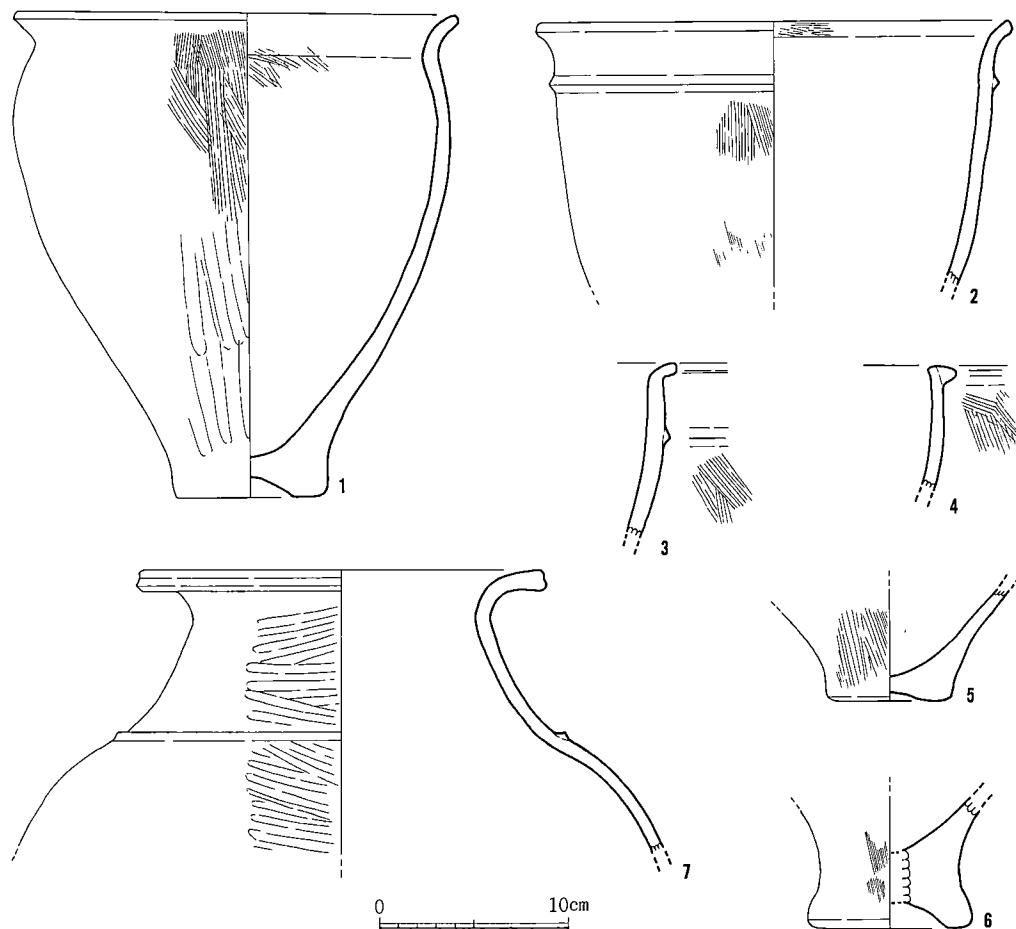
第119図 18号土壙実測図 (1/40)

### 18号土壌（第119図）

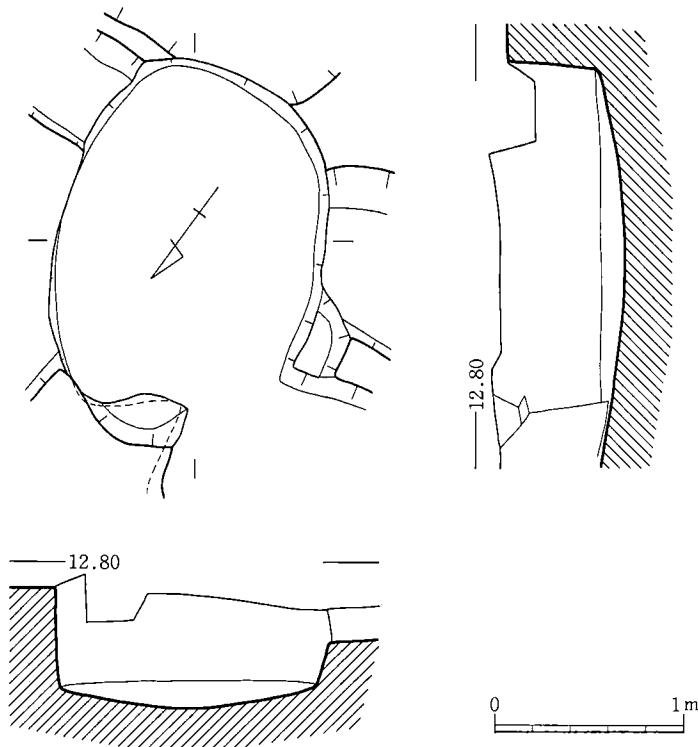
35区に位置する土壌で、一部は調査区外にある。底面で103cmを測り、深さ29cm。土器は散在して出土する。

### 出土土器（第120図）・図版34

1～6は壺とその部分片。1はゆるやかに外反する如意形口縁を有し、胴上半は張る。底部は上げ底を呈すが、横方向への張り出しあはみられない。胴上半はハケメ、下半部はヘラミガキの痕を明瞭に残し特異。口径23.0cm、器高25.5cm、底径7.8cmを測る。2も如意形口縁をもつが、口縁下には凸帯が貼付されている。3も同様。4は亀ノ甲タイプの口縁を有す。5は1と同じような形状を呈すが、1ほど上げ底は顕著ではない。6は横方向に張り出す形状を呈す上げ底の底部。7は外反して屈曲する口縁をもつ壺。口縁端部には凹部が認められる。頸部は内傾して立ち上がり、肩部には凸帯が貼付され、そこを境に胴部が張り始める。口縁と凸帯周辺はヨコナデ、外面は横方向のヘラミガキが施される。



第120図 18号土壌出土土器実測図 (1/4)



第121図 19号土壙実測図(1/40)

### 19号土壙（第121図）

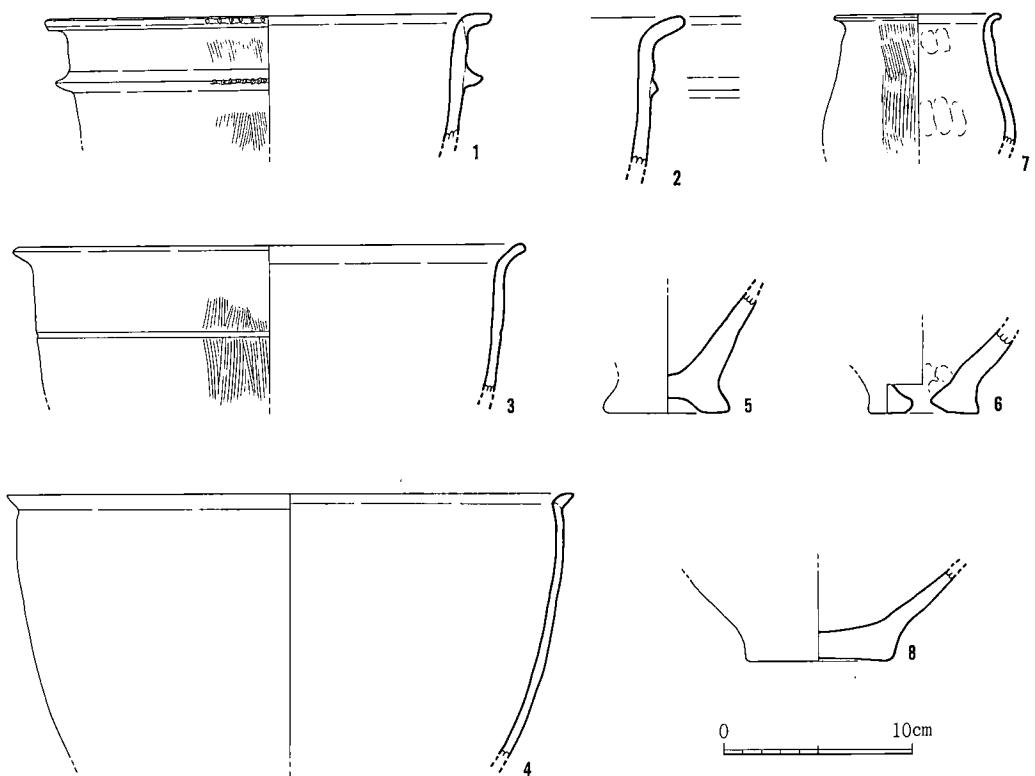
40区に位置する楕円形の土壙で、D17に切られている。底面は径136～180cmを測り、深さは69cmで楕円形を呈す。壁は直に立ち上がる。土器は散在して出土。

### 出土土器（第122図）

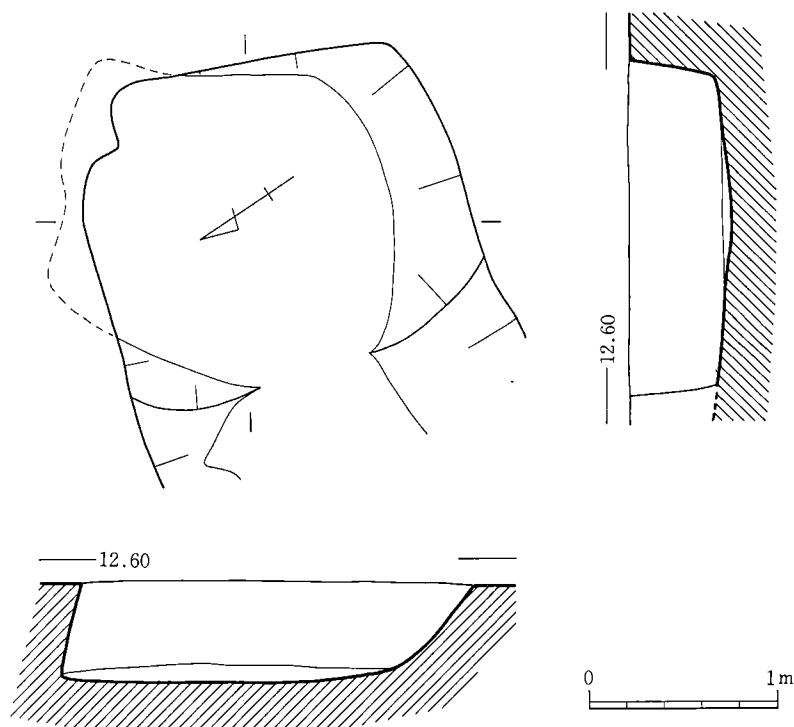
1～6は甕の部分片。1～4は如意形口縁を有す。1・2は口縁下に凸帯が貼付され、1にはキザミが施される。2は沈線が施されるもの。4はやや特異な形の口縁を有す。5は横方向に張り出した上げ底の底部。6は平底の甕をコシキに転用したもの。穿孔は焼成後。7はわずかに外反する短い口縁部を有す甕。胴部はやや張る程度で、頸部との境は明瞭ではない。8も甕の底部であろう。

### 20号土壙（第123図）

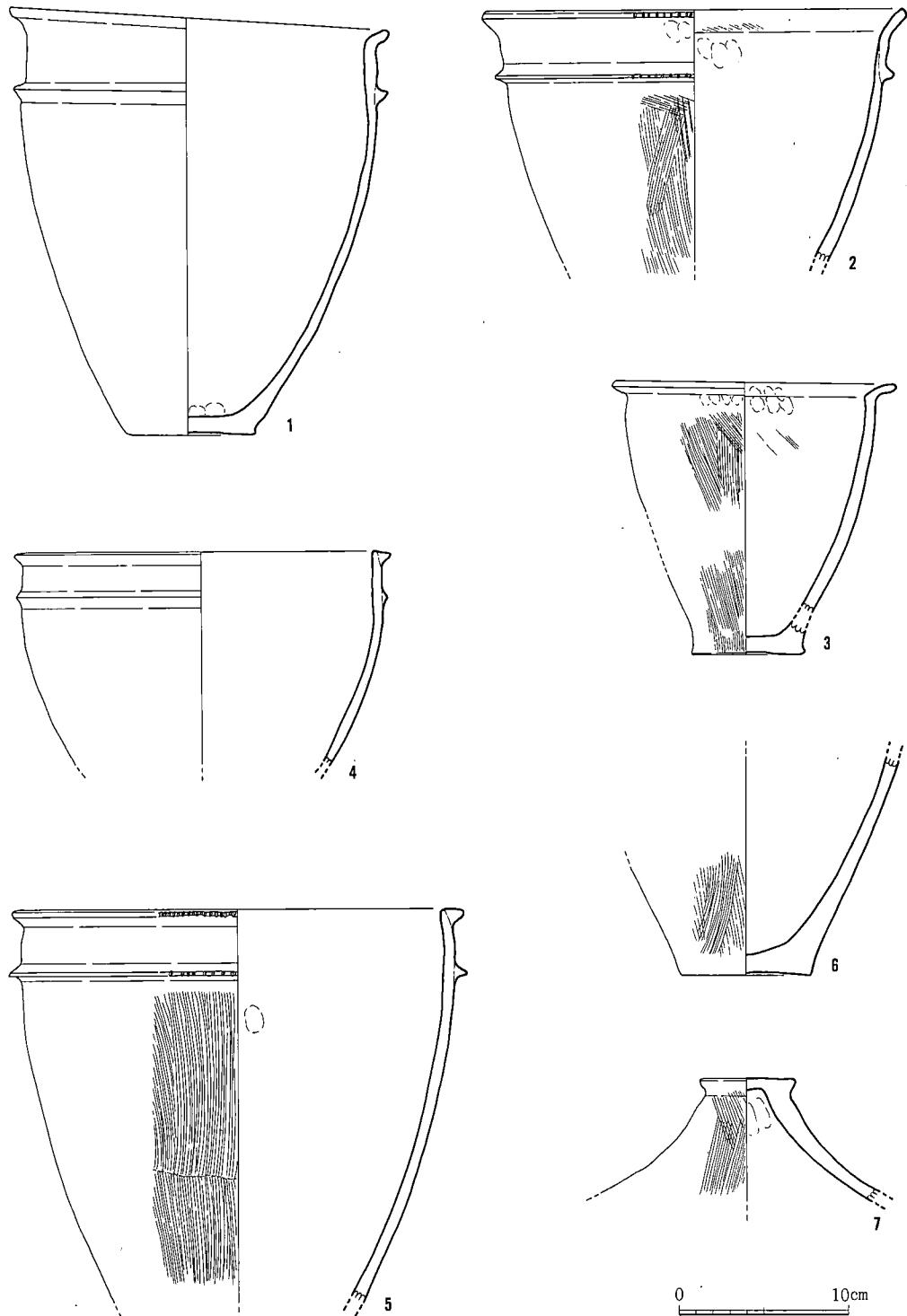
42区に位置する方形と考えられる土壙で、一部を土壙に切られている。床面は191cm×167cmを測り、上面プランとは軸をやや異にする。東壁はオーバーハングし、土壙内には土器が散在



第122図 19号土壤出土土器実測図 (1/4)



第123図 20号 土壌実測図 (1/40)



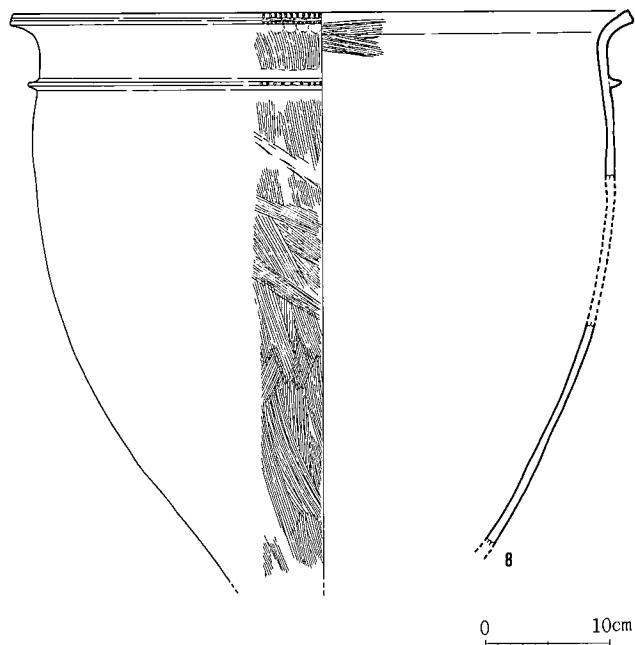
第124図 20号土壤出土土器実測図① (1/4)

している。紡錘車出土。

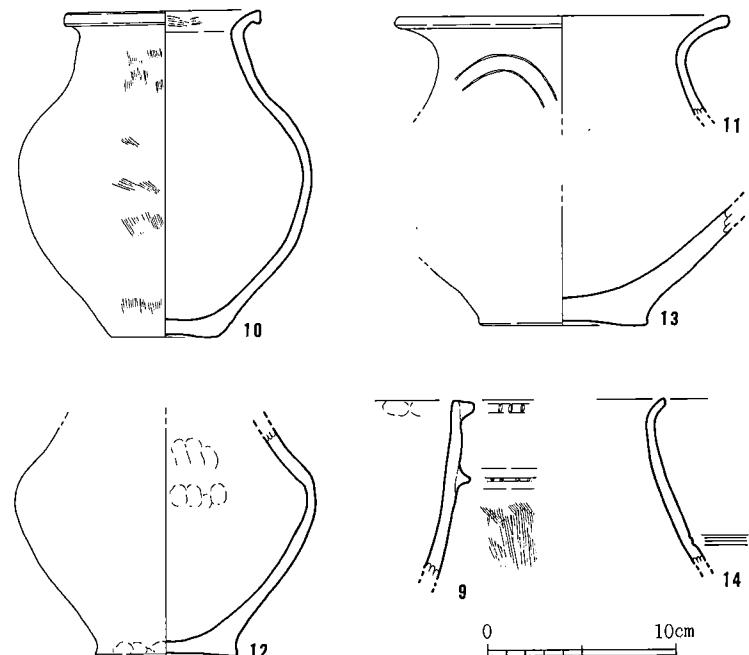
出土土器 (第124~126図)  
図版35)

1~3・8は如意形口縁をもつ壺。口縁は2のみがゆるやかに外反する。2・8は口縁端部にキザミが施されるが、その形状は異なっている。3を除き、口縁下には凸帯が貼付され、同じく2・8にはキザミが施されている。胴部は8がわずかに張り、他は直線的。調整は外面ハケメ、内面ナデが主流であるが、1は外面をハケメの後ナデていると考えられる。8は

現存高46cmを測る中型品。4・5・9は亀ノ甲タイプの口縁を有す壺。両者とも口縁下凸帯をもつが、5・9にはキザミが施されている。4は外面ナデ仕上げ。6は壺の底部片で平底を呈す。10~14は壺とその部分片。10はく字状に外反する口縁を有し、端部は三角状に肥厚する特徴をもつ。頸部は内傾して立上がり、肩部



第125図 20号土壤出土土器実測図② (1/6)



第126図 20号土壤出土土器実測図③ (1/4)

との境は明瞭ではない。外面縦ハケの後、ヘラミガキを施すが部分的にハケメが残る。口縁内面はヨコハケ後、ヨコナデ。11はゆるやかに外反する口縁を有し、頸部にヘラ描きの重弧文をもつ。外面ヘラミガキ。器高12.2cm。12は張った胴部をもち、底部は横に張り出し、指頭痕を残す。外面ヘラミガキであるが、指頭による成形痕を全面に残す。14は混り込みとも考えられる。ゆるやかに外反する短い口縁をもち、内外とも丁寧なヘラミガキが施されている。

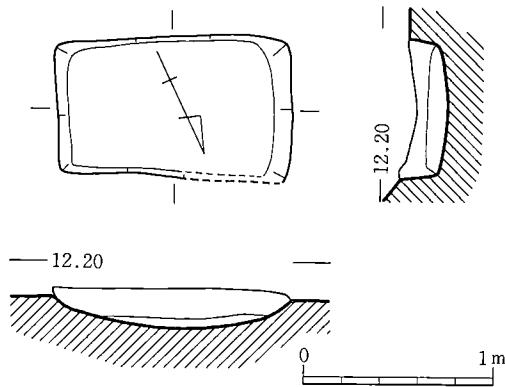
### 21号土壙（第127図）

38区に位置する長方形の土壙で、一部を削平される。底面は108cm×66cmを測り、中央のレベルがやや低い。土壙内に散在して土器が認められる。

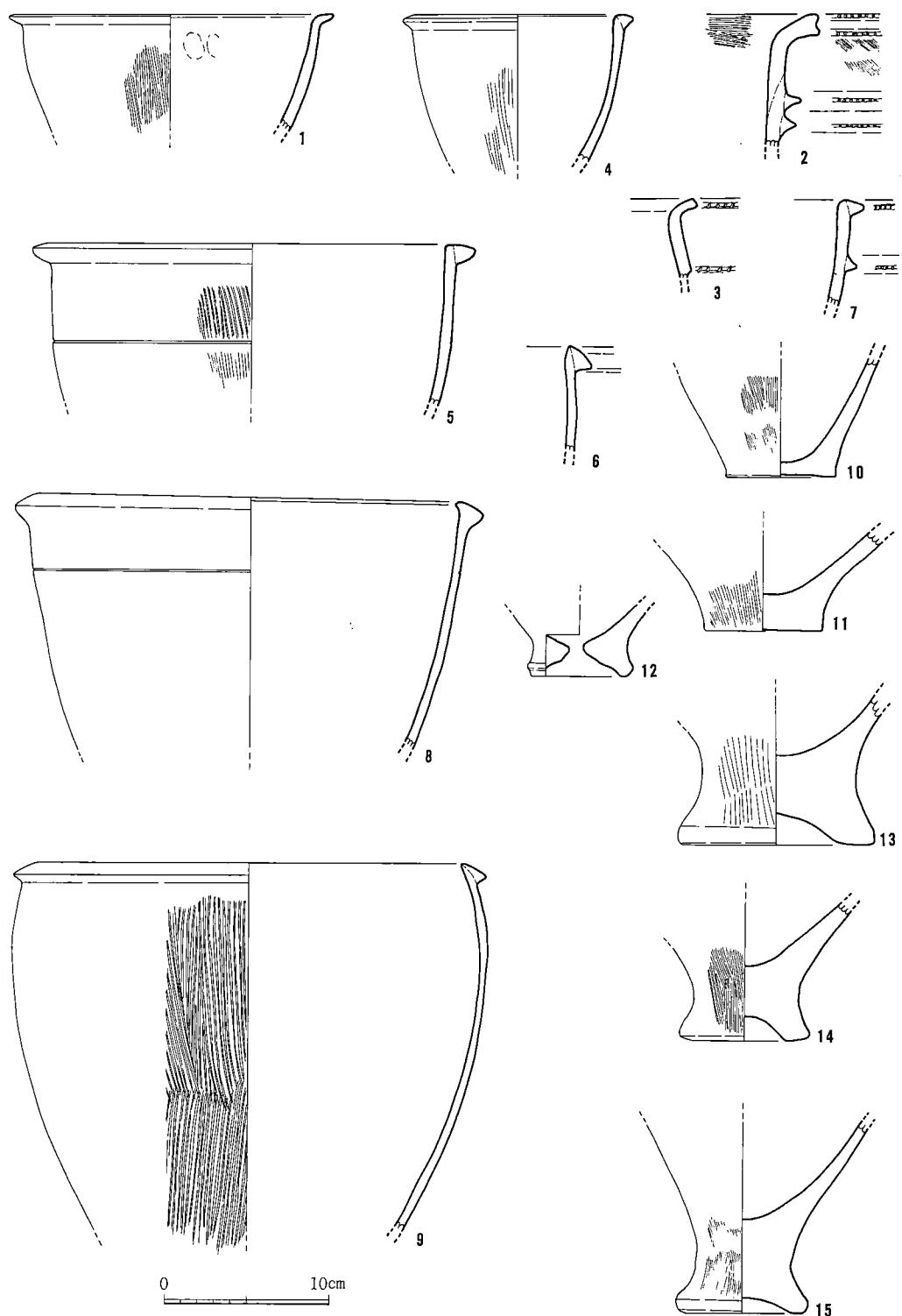
### 出土土器（第128・129図・図版35）

1～16・18～20は甕とその部分片。1～3は如意形口縁を有す甕（1は鉢か？）。2は口縁端部と凸帯に細かいキザミが施される。凸帯は2条貼付。4～9は亀ノ甲タイプの口縁を有すもので、口縁の形態は三角状、放物線状等様々である。5

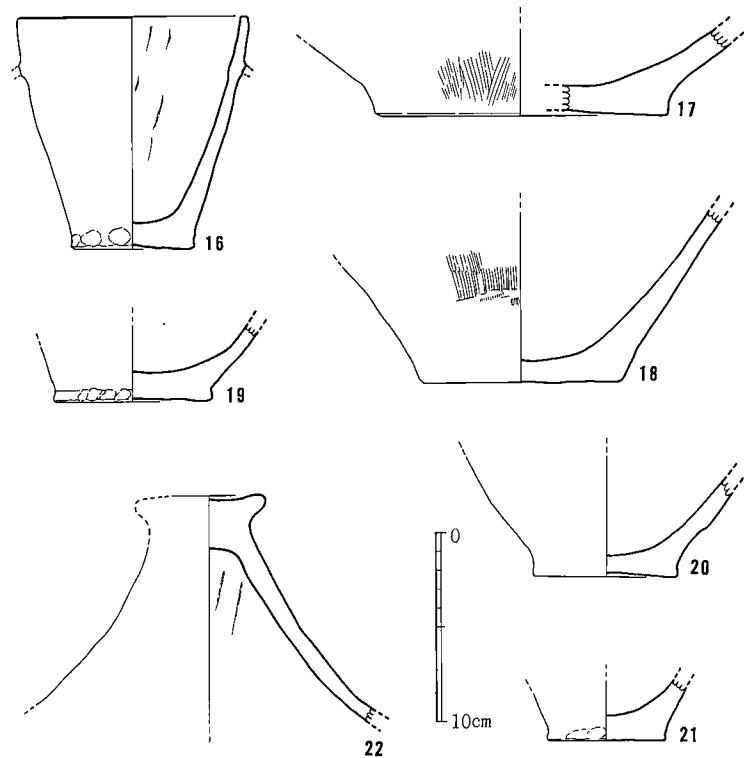
- 8にはヘラ描きの沈線、7にはキザミを施した口縁・凸帯が貼付されている。胴部は9のみが張り、他は比較的直線的。外面は判別できるものではハケメのみ。以下は底部片。10・11は平底を呈すが、11は甕以外の器種の可能性もある。12～15は横に張り出す形状の上げ底。12を除き、底部は厚く、特に15では4.5cmを測る。12はコシキに転用のもの。18～21も平底であるが、19・21は指頭によるナデツケ？により、横方向にやや張り出す形状を呈す。外面はともに丁寧なナデで上記の一群とは様相を異にする。20もやや横に張り出す形状をとるが、これはヨコナデによるもの。外面ヘラミガキ。17は壺の底部と考えられるが、外面には荒いハケメが残存している。16は直立した口縁を有する甕で、胴上位には把手が貼付されている。把手は残存しない。胴部は直線的で、底部は19・21と同様、指頭によるナデツケでやや横に張り出す形状を呈す。外面は縦方向のナデ、内面はハケメの木口かと思われる工具痕を残し、ナデられている。口経12.2cm、器高7.2cmを測る半完形品で、胎土は長石・石英・金雲母を多量に含み、色は淡茶褐色を呈し他の弥生土器と異なっている。以上、19・21・16は朝鮮系無文土器の系統とも考えられる。



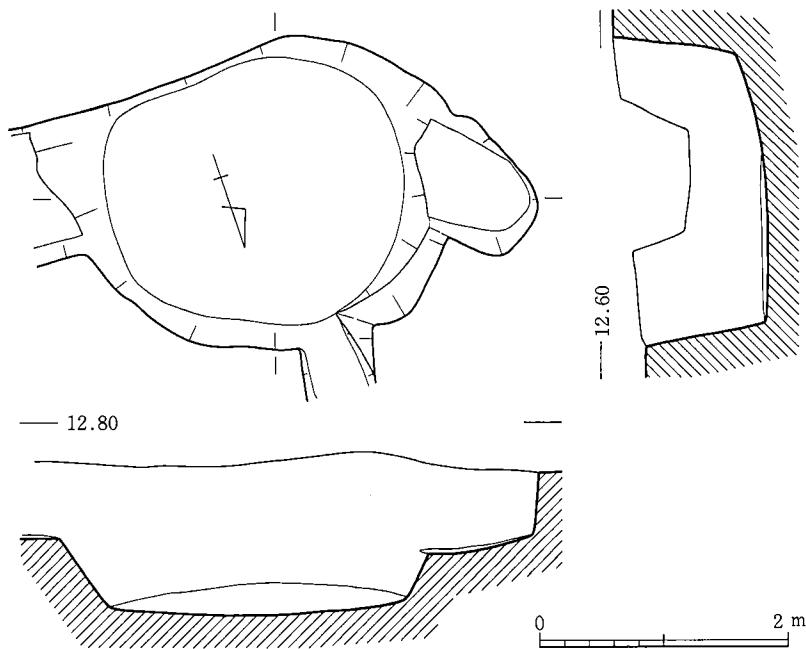
第127図 21号土壙実測図 (1/40)



第128図 21号土壙出土土器実測図①(1/4)



第129図 21号土壤出土土器実測図②(1/4)



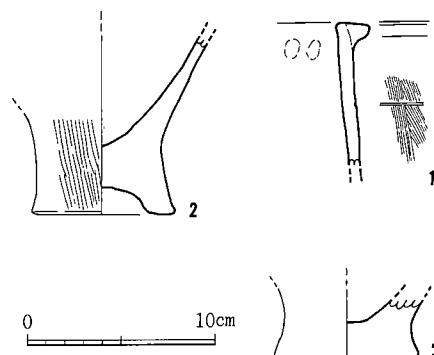
第130図 22号土壤実測図(1/60)

### 22号土壙（第130図）

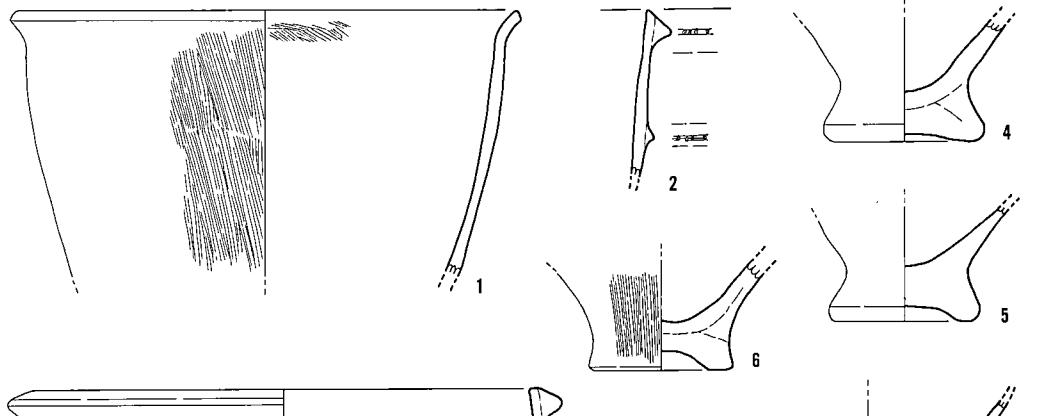
33区に位置する楕円形の土壙で、溝に一部を切られている。底面は径216～240cmを測る楕円形で、深さは129cmを測る。土壙内に散在して土器が出土する。底面は現在では活発な湧水が認められるが、弥生時代の井戸かどうかは定かではない。

### 出土土器（第131図）

すべて甕の部分片。1は亀ノ甲タイプの口縁を有し、口縁下には沈線が施される。2は上げ底の底部で、やや外に張る形態を呈す。3は平底であるが、底面はややレンズ状を呈す。外面縦ハケ後ナデ消し。



第131図 22号土壙出土土器実測図 (1/4)



第132図 23号土壙出土土器実測図 (1/4)

### 23号土壙（第106図）

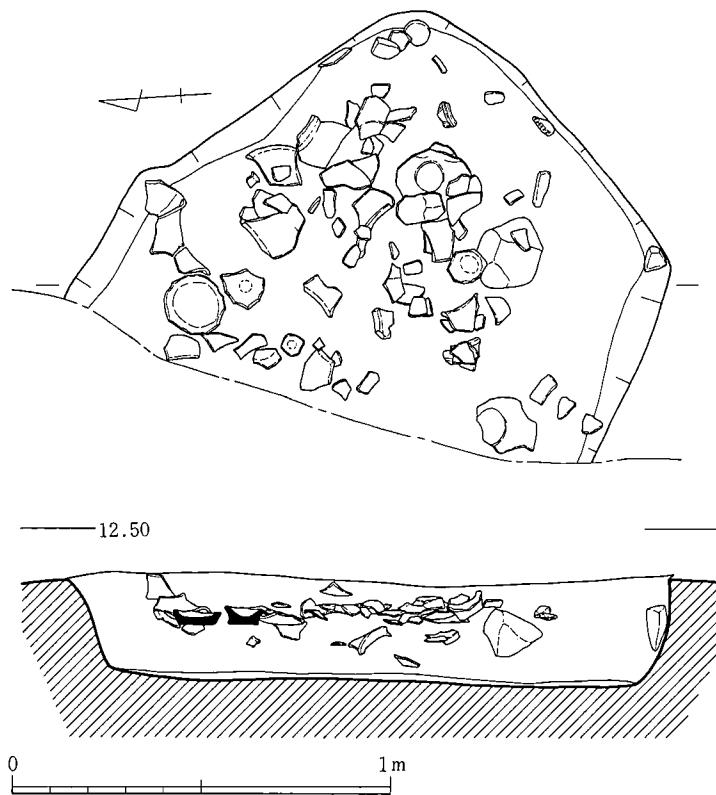
50区に位置する長楕円形の土壙で、D12と切り合うが先後は不明。底面で302cm×145cmを測り、深さは120cm。底面は中央に向かってくぼみ平坦ではない。北側を大溝に切られている。土器は散在して出土する。

### 出土土器（第132図）

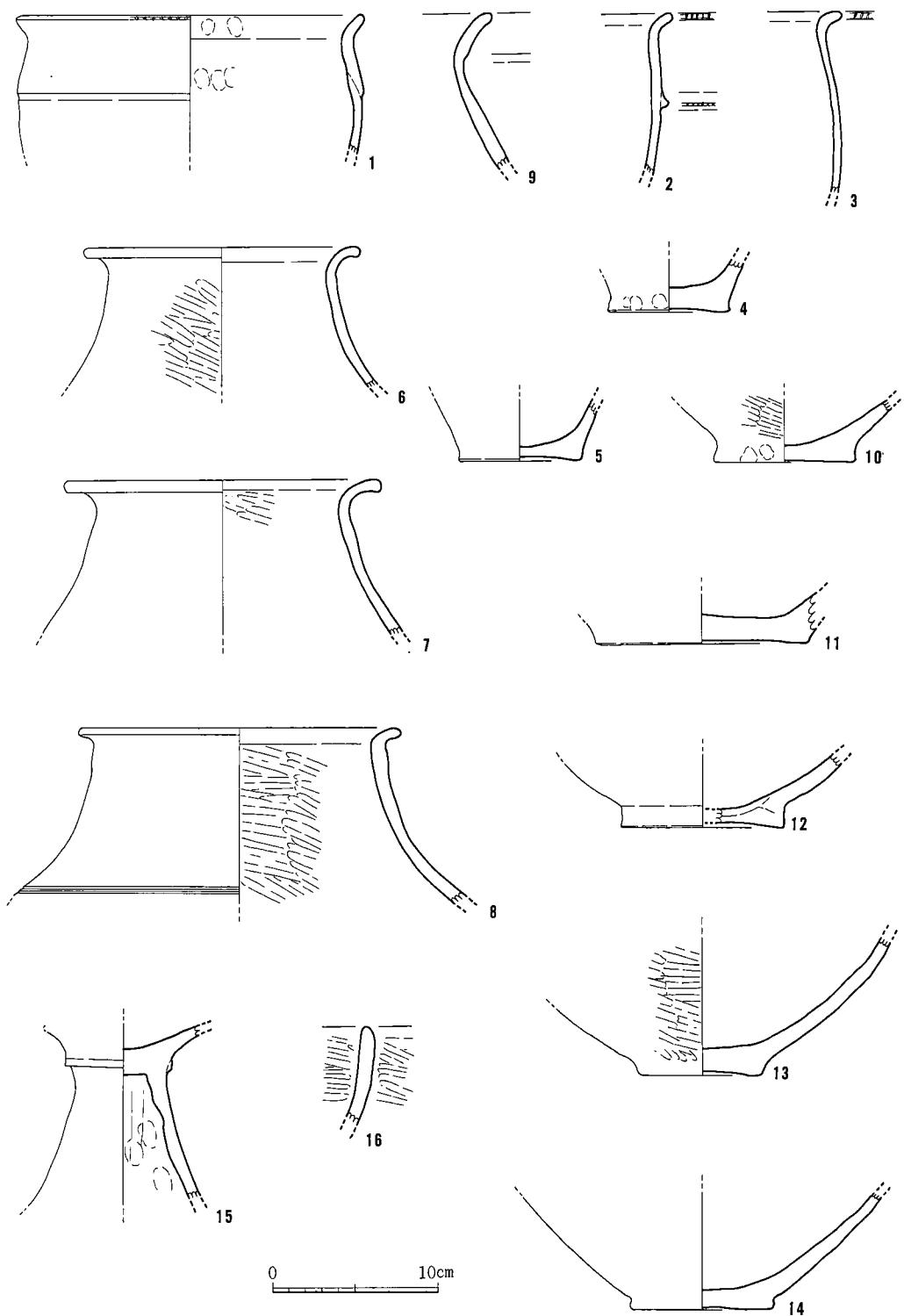
すべて甕の部分片。1は如意形口縁を有し、胴部は直線的。2・3は亀ノ甲タイプの口縁を有し、口縁下に凸帯が貼付される。2にはキザミ有り。4～6は上げ底の底部で、6を除き横に張り出す形態をとる。6は底壁がやや薄い。7も4～6と同様の形態をとるが、外底面は上げ底ではない。8は平底で、外面は丁寧にナデられている。

### 24号土壙（第133図・図版9）

48区に位置する長方形と考えられる土壙で、攪乱により一部を切られる。短軸の底面で129cmを測り、深さは25cm前後。土壙中位のレベルで土器のまとまった分布がみられ、上位、下位でもわずかに認められる。土器廃棄の主体は土壙中位のレベルまで埋まった状態で行われたので



第133図 24号土壙実測図(1/20)

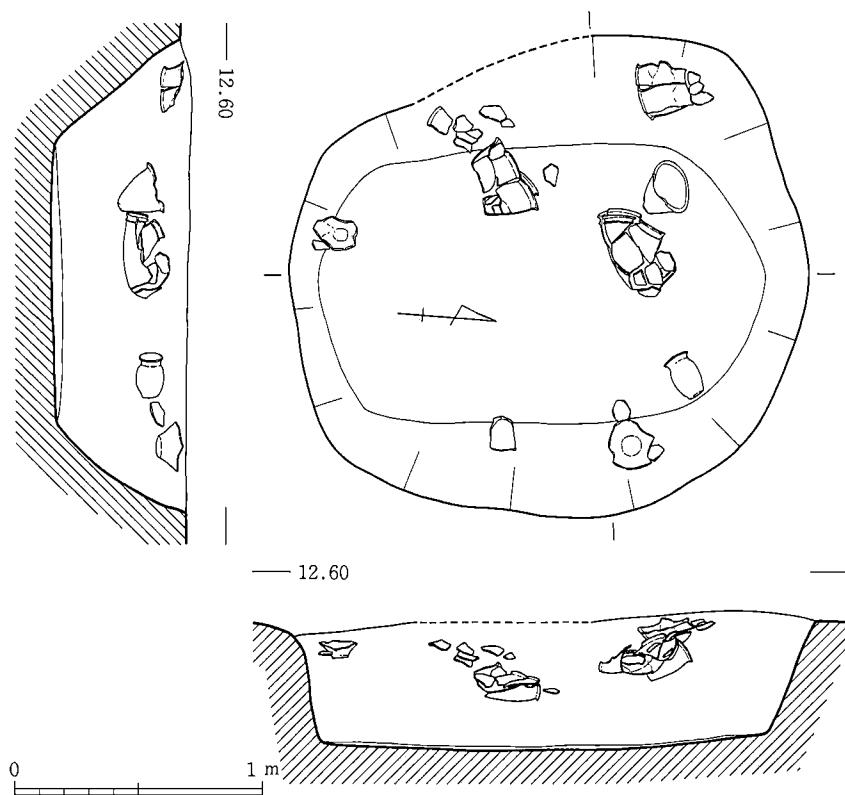


第134図 24号土壤出土土器実測図 (1/4)

あろう。

#### 出土土器（第134図）

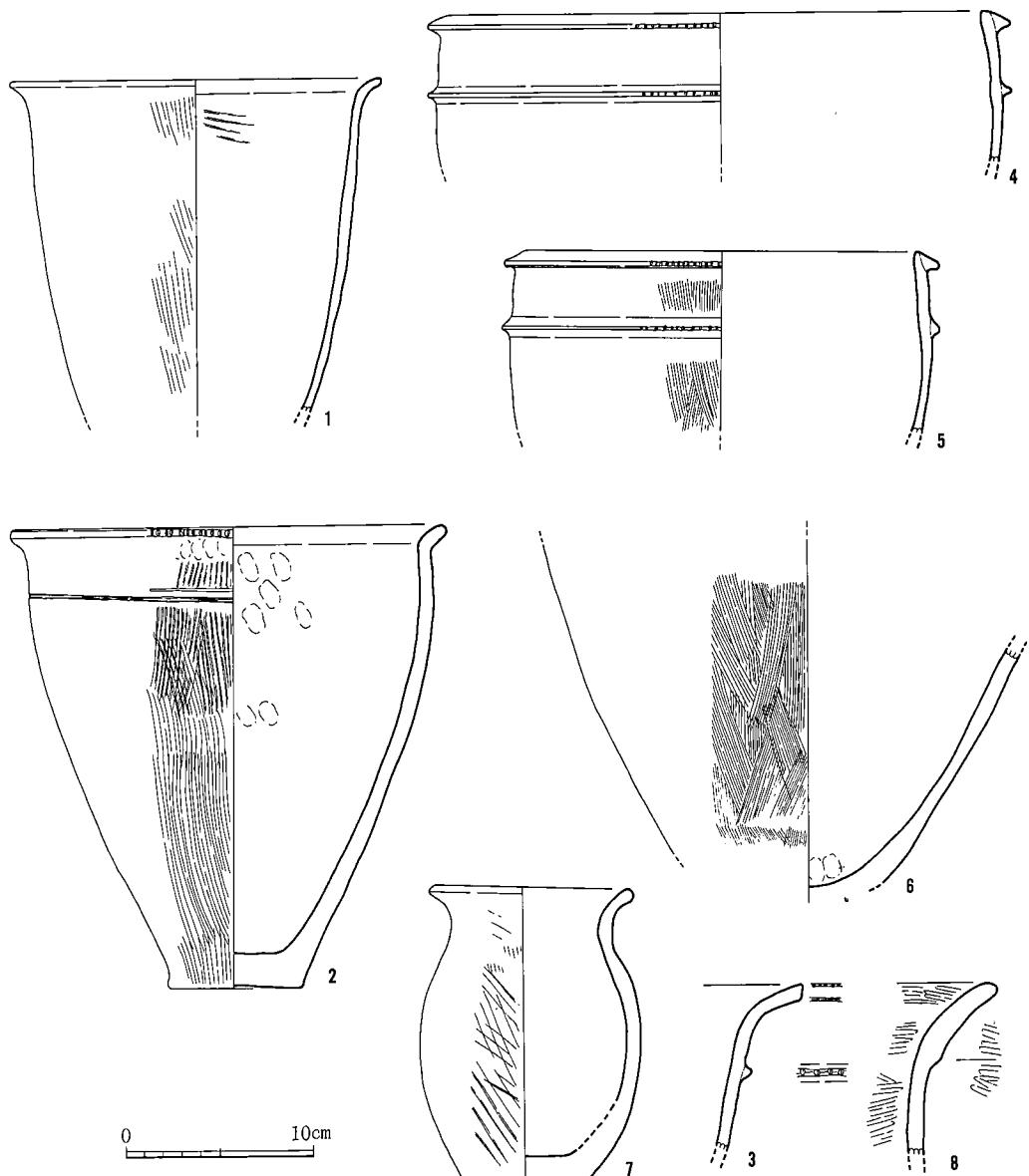
1～5は甕の部分片。1～3は如意形の口縁を有し、2のみに凸帯が貼付される。いずれも口縁端部にはキザミが施される。1は粘土接合部に段を残し、凸帯状をなす。胴部はいずれもわずかに張る程度で、内外ともナデ仕上げは共通。4は端部が指頭整形により横へ張り出す形態の底部で、朝鮮系無文土器のそれとも考えられる。胎土は他の弥生土器と極端に異なる。ともに平底で、内外ともナデ仕上げ。6～14は壺の部分片。6～9は内傾して立上がる頸部を有し、口縁は外反して屈曲する。6・9は口縁部下端に段を有し、9ではそれが顕著である。8は短かめの口縁部を有し、頸部下端に2条の沈線が施されている。調整は、外面が口縁周辺を除いてヘラミガキ、内面がナデもしくはヘラミガキである。口径16.8～19.6cmを測る。10～14は底部と考えられる。11を除き、いずれも下端が立ち上がる傾向をみせ、10・14では横に張り出している。外底面はやや上げ底状を呈す。外面ヘラミガキ、内面ナデは共通。15は高壺の脚周辺で、壺部との接合部には凸帯が貼付されている。脚は裾広がりの形態を呈し、内面はしづり痕を残しナデ仕上げ。外面は不明。16は内外をヘラミガキされた碗の破片であろうか。



第135図 25号土壙実測図(1/30)

25号土壙（第135図・図版9）

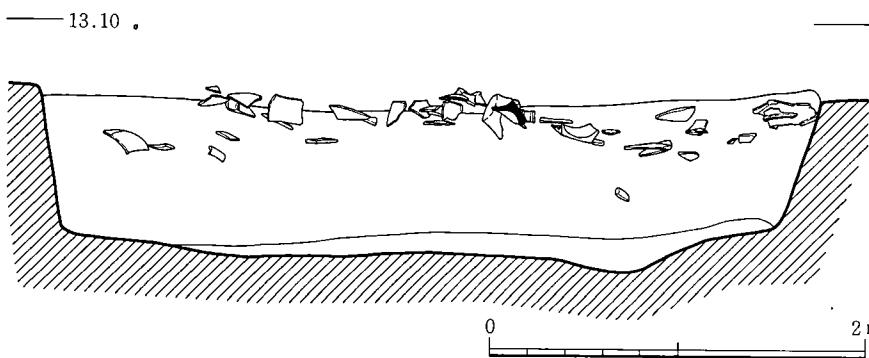
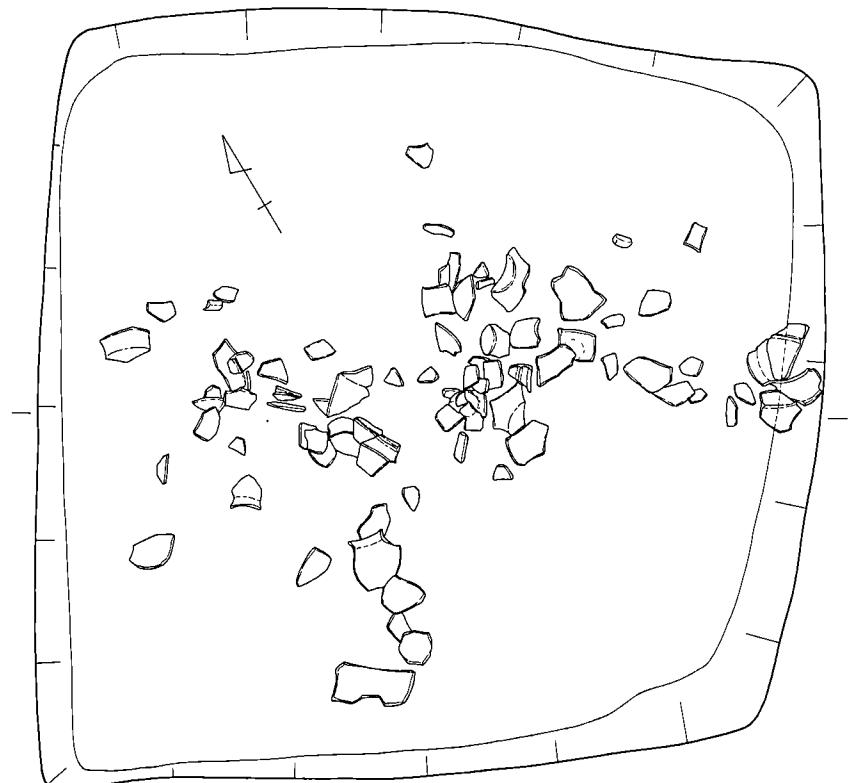
46区に位置する長楕円形の土壙。底面は178cm×111cmを測り、深さは51cmで平坦である。土壙底より浮いた状態で土器が認められることから、土器の廃棄は土壙中位まで埋まつた後に行われている。土器は散在し、まとまりは認められないが、各々の接合は比較的良好である。



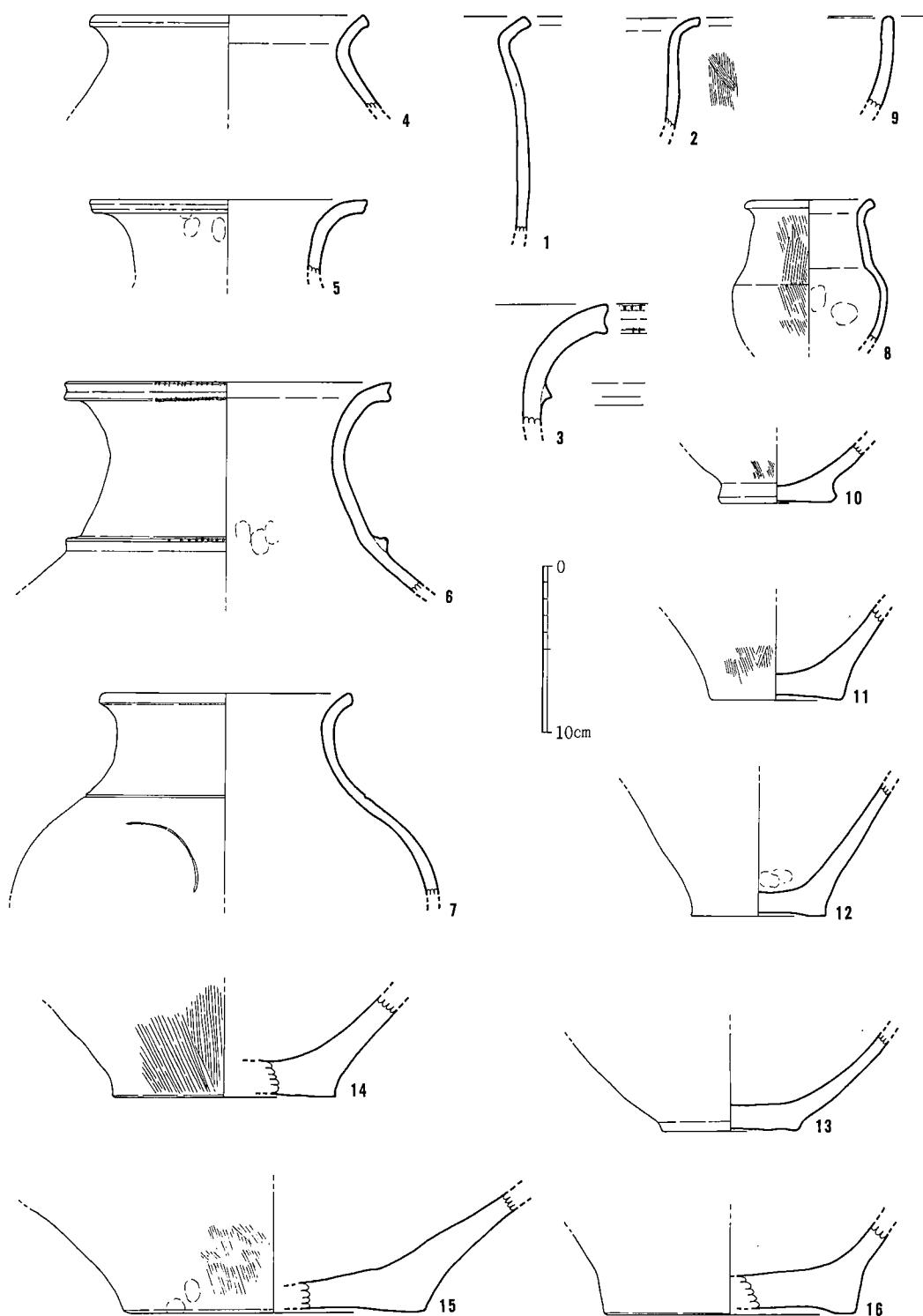
第136図 25号土壙出土土器実測図 (1/4)

出土土器（第136図・図版35）

1～6は甕とその部分片。1～3は如意形口縁を有す。1は円筒状の胴部をもつが、反転実測のため口径がやや増す可能性有。2はほぼ完形で、口縁端部にキザミ、口縁下には沈線が施されている。沈線は起点、終点が上下にずれている。3はやや大型の鉢の可能性もあるが、口縁端部・凸帯にキザミあり。外面はナデ仕上げ。4・5は亀ノ甲タイプの口縁をもち、口縁端



第137図 26号土壤実測図(1/20)



第138図 26号土壙出土土器実測図 (1/4)

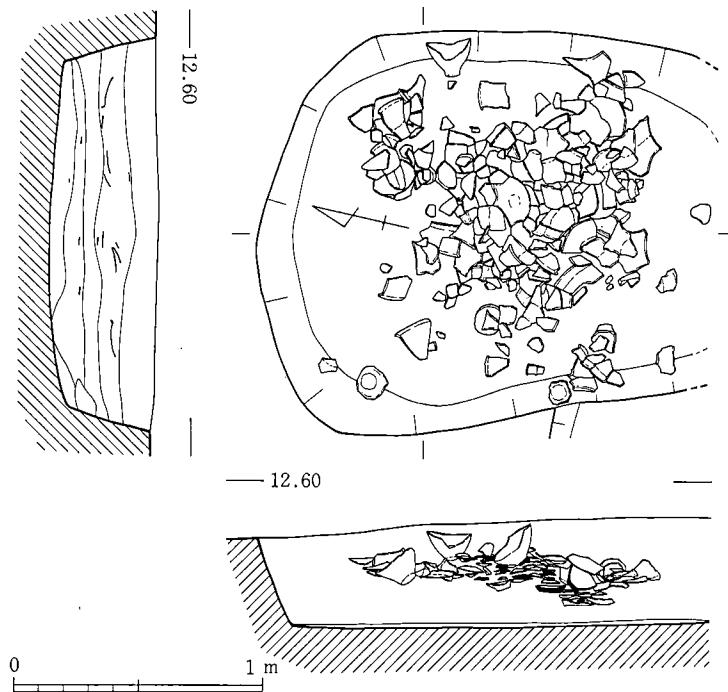
部・凸帯にキザミ有。外面はハケメ。7は長胴の壺。ゆるやかに外反する口縁を有し、器壁は厚い。外面はハケメの後、口縁下よりヘラミガキ。8はやや大型の壺の口縁で、肥厚する形状を呈す。内外とも横方向のヘラミガキ。

#### 26号土壙 (第137図)

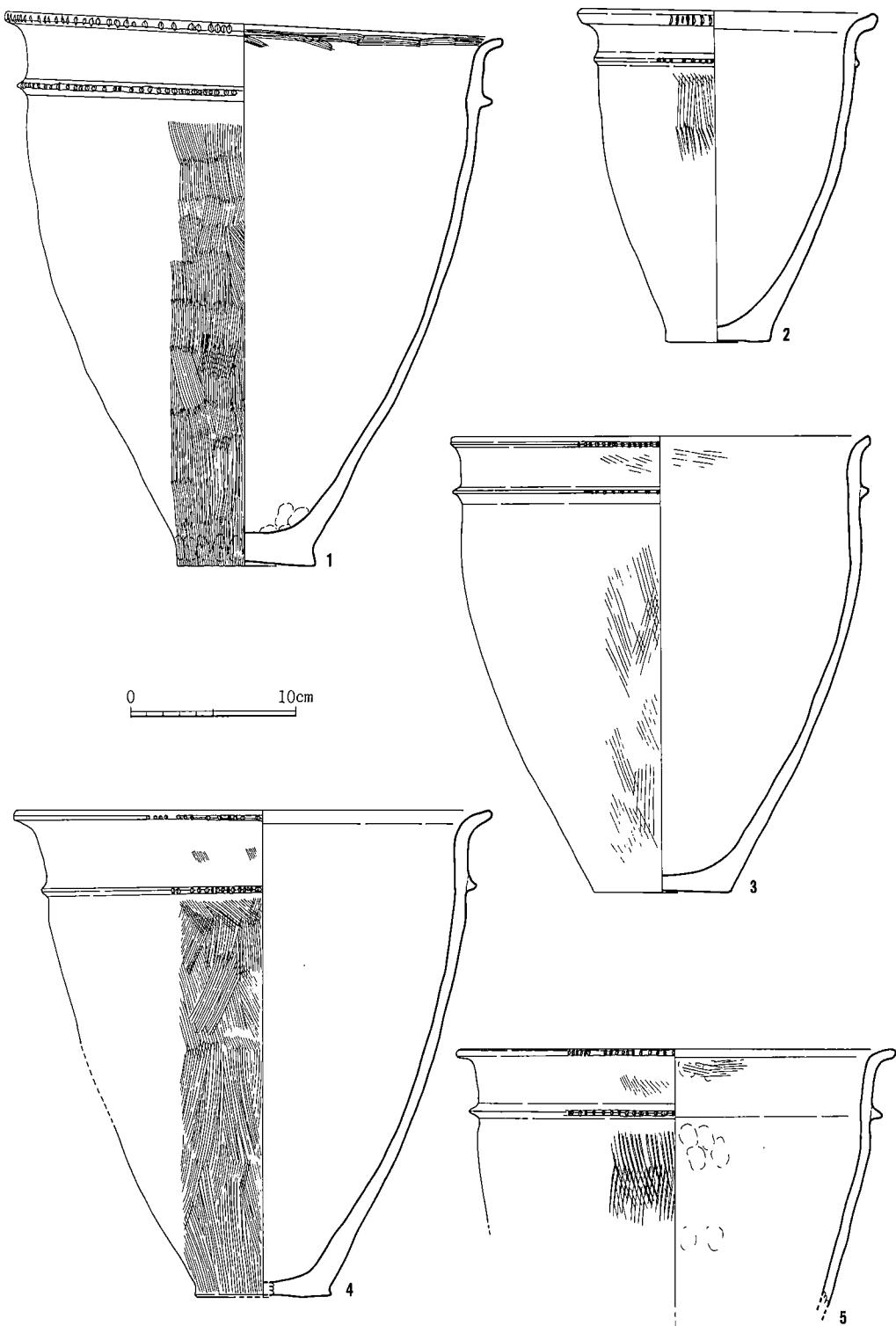
55区に位置する方形の土壙。底面は186cm×188cmを測り、深さは37cmでやや起伏に富む形状を呈す。土壙上位のレベルに土器のまとまりが認められ、土器廃棄の主体はこのレベルまで土壙が埋没した時点に求められる。比較的大きな破片が多く認められる。

#### 出土土器 (第138図)

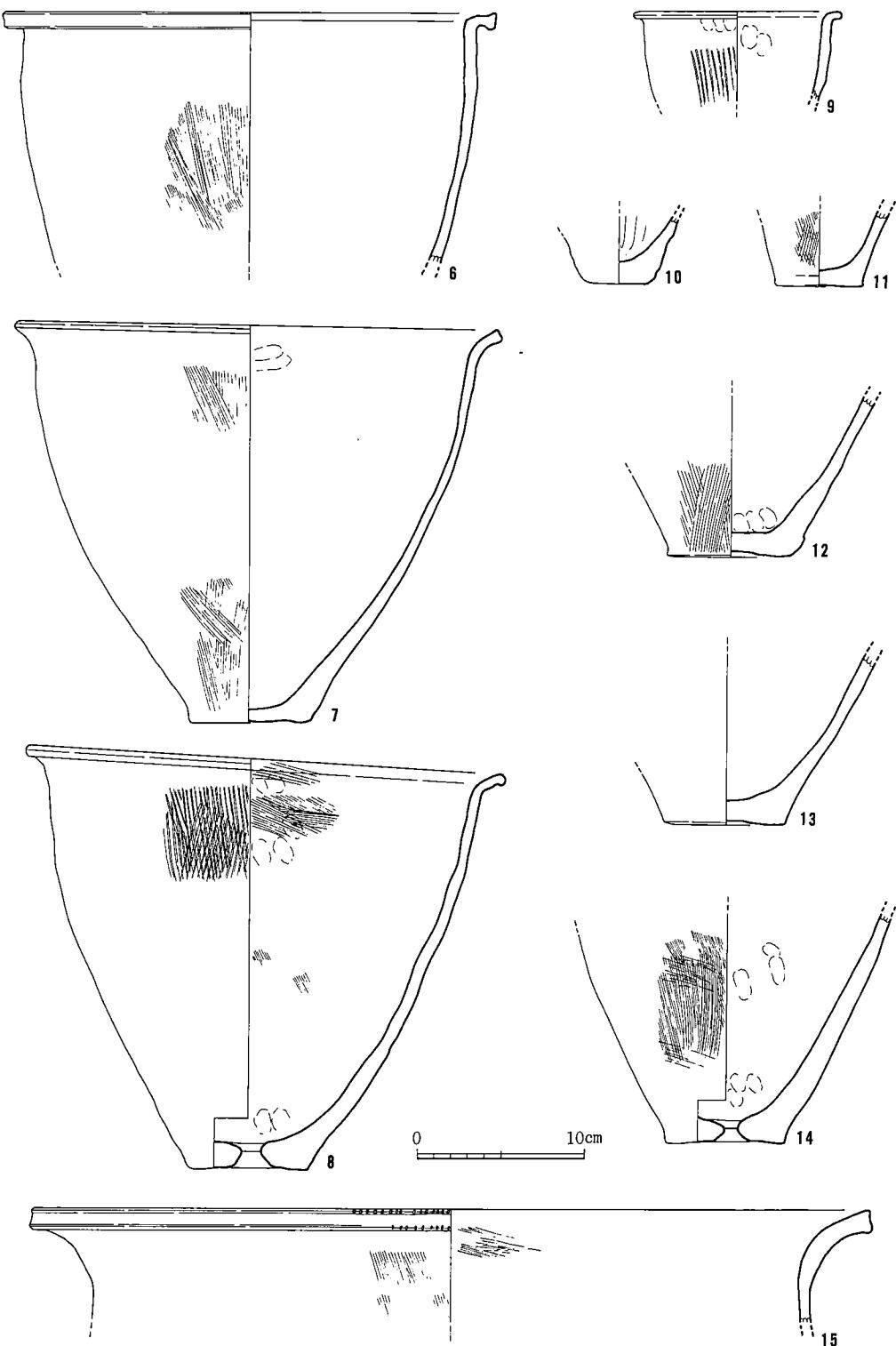
1～3は如意形口縁を有す甕で、3のみ端部にキザミが施される。4～8は壺。5は外傾して立上がる頸部を有し、6の頸部上半にも同様の形状が認められる。他は頸部が内傾して立上がり、口縁部のみ外反する。6の口縁端部・凸帯にはキザミが施される。7の肩部には沈線、胴上半にはヘラ描きの円弧文が施される。調整は8を除き、内外ともナデ仕上げ。6にはわずかにハケメが残存している。10～16は底部片。10・13・15は壺、11・12・14～16は甕と考えられ、10はやや異なる形態を呈している。10・13は内外ともナデ仕上げ。



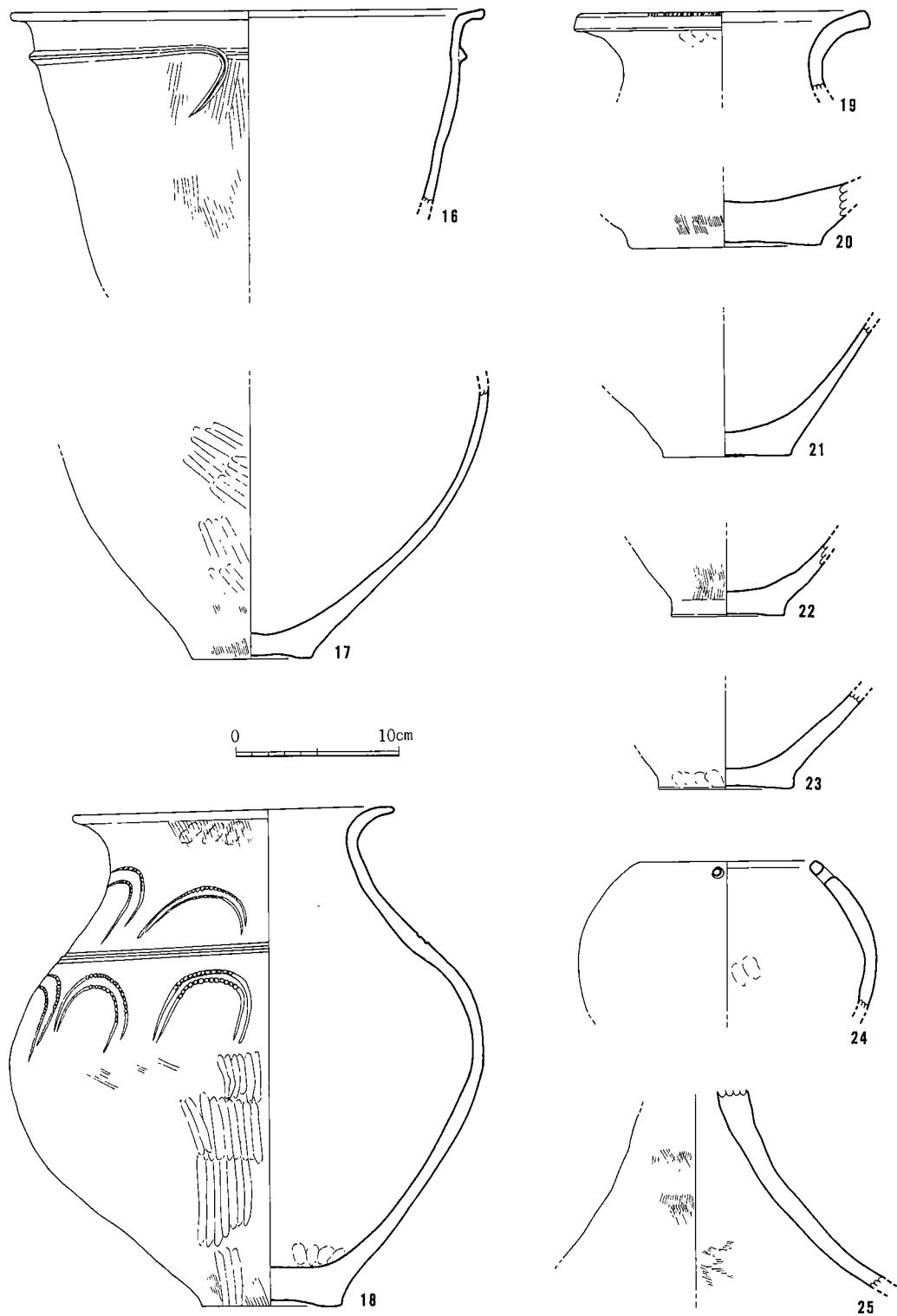
第139図 27号土壙実測図(1/30)



第140図 27号土壤出土土器実測図① (1/4)



第141図 27号土壤出土土器実測図② (1/4)



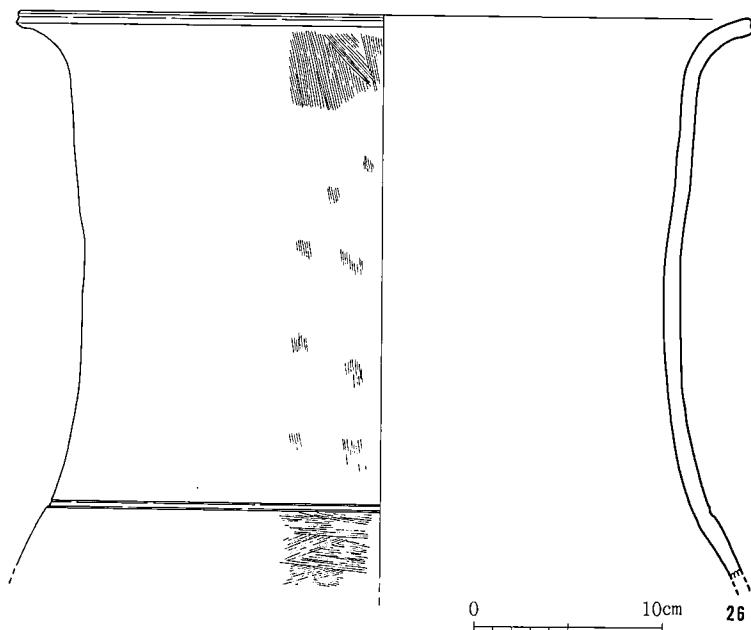
第142図 27号土壤出土土器実測図③ (1/4)

## 27号土壙（第139図・図版9）

42区に位置する隅丸長方形と思われる土壙。現状の底面で138cmを測り、一部は削平されている。土器は土壙中位から上位にかけてまとまりが認められ、土層図によるなら上から2層目の段階に土器廃棄の主体は求められる。比較的大形の破片が多く、接合状況も良好である。

## 出土土器（第140～143図・図版35～37）

1～14・16は甕とその部分片。1～9は如意形口縁を有す甕。1～5はいずれも、口縁端部と凸帯にキザミが施される。1は口縁内面にハケメの痕を残す。口縁はゆるやかに外反し、口径29.5cm、器高33.4cmを測る。2は口縁内面に凹部を残す。口径17.9cm、器高19.6cm。3は口径25.3cm、器高27.3cmを測り、外面はハケメの後、軽くナデ。4はやや直線的な胴部をもつ。口径28.3cm、器高29.4cm。以上、3を除きほぼ完形品に近い。6は強く屈曲し、端部が肥厚する特徴的な口縁をもつ。7・8は口径が大きい例で、鉢に近い。8はコシキとして使用される。9は小型甕の例。口径は12.4cm。10～14は底部で、すべて、ほぼ平底。10は器面剝離のため、不整形を呈す。14はコシキとして使用。16は凸帯をもつ甕であるが、凸帯の終点が胴部に左下がりに貼付され特異。以上、甕には亀ノ甲タイプの口縁や、上げ底で横に張り出す形態を有する底部は含まれていない。15・17～24・26は壺とその部分片。15は復元口径49.6cmを測るやや大型の口縁部。口縁端部にはキザミが施され、外面はハケメの後ナデ消し。18は外反する口縁を有し、肩部には2条の沈線が施される。沈線の上下には、貝殻文の重弧文が施されている。調整は内面ナデ、外面ハケメの後縦方向のヘラミガキでハケメが一部残存。口径19.1cm、器高



第143図 27号土壙出土土器実測図④(1/4)

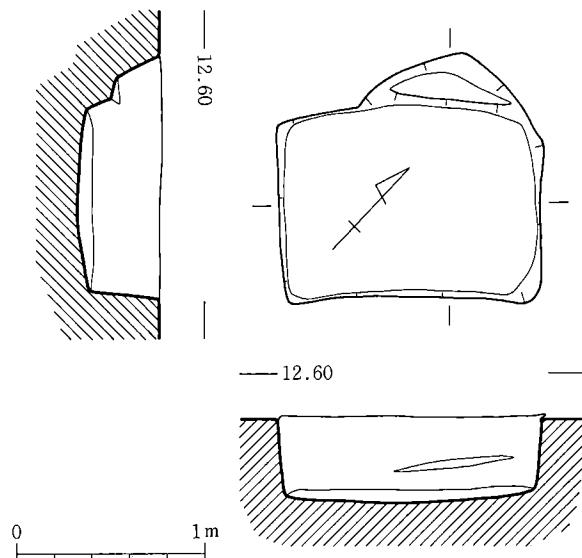
30.5cmを測る。19はやや肥厚する口縁部を有し、口縁上端のみキザミ有。26は復元口径38.4cmを測る大型品で、直立した頸部を有す。肩部には沈線が施され、外面はハケメ後ミガキ風のナデ。20～23は底部片。24は無頸壺で、胴部上端に2ヶ所の穿孔あり。内面ナデ、外面ヘラミガキ。復元口径10.8cm。25は高壺の脚部で、外面ハケメの後ナデ消し。

#### 28号土壙（第144図）

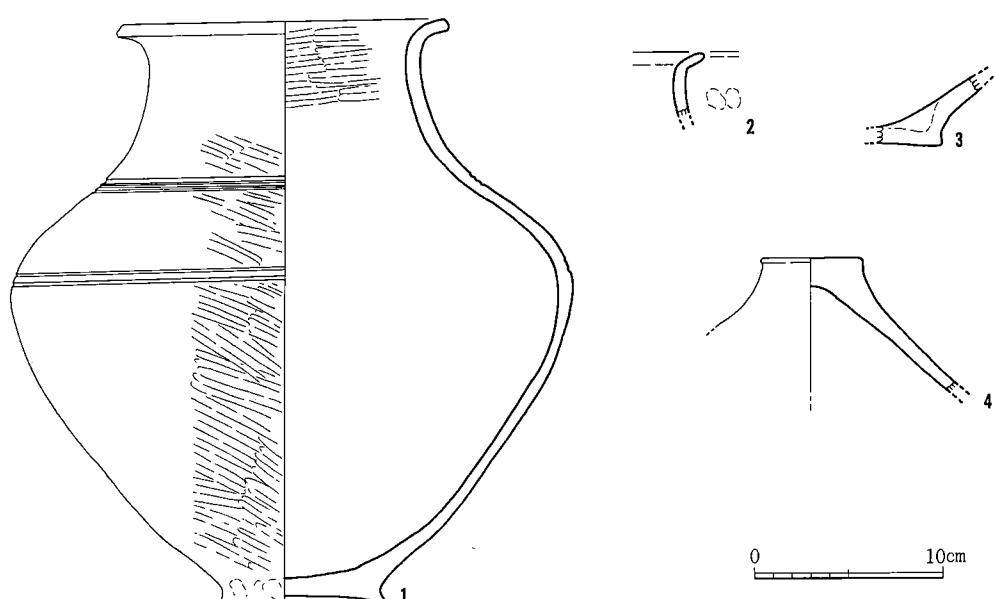
48区に位置する長方形の土壙で、北側のテラスは後世のものである。底面で132cm×98cmを測り、深さは44cmを測る。土器は散在して出土する。

#### 出土土器（第145図・図版37）

1は肩部と胴部に計5条の沈線を有す壺。頸部は内傾して立上がり、口縁部はゆるやかに外反する。肩部及び胴部は張り、底部は横に張り出す形態を呈す。外底面はやや上げ底。調整は、外面が左上がり方向のヘラミガキ、内面頸部上半が横方向のヘ

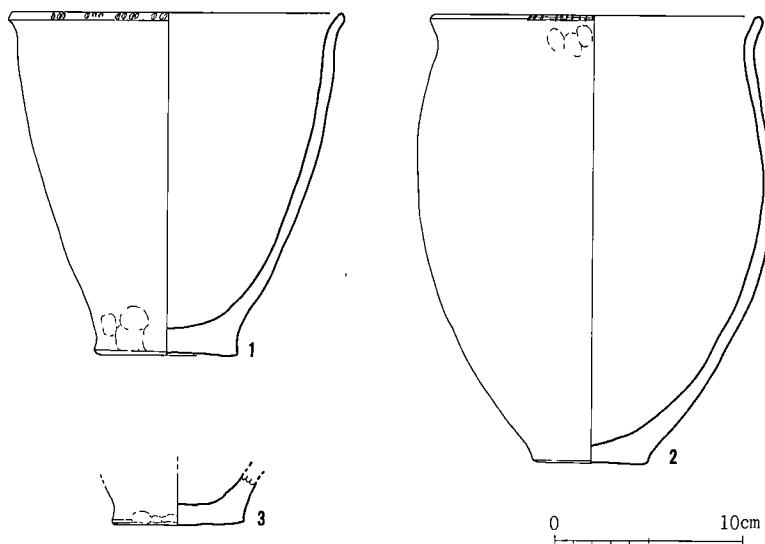


第144図 28号土壙実測図 (1/40)



第145図 28号土壙出土土器実測図 (1/4)

ラミガキ、他はナデである。口径17.7cm、器高30.8cm、底径8.7cmを測る。2は壺の口縁部片で、内傾して立上がる頸部とゆるやかに外反する口縁をもつ。3は壺もしくは鉢の底部片。内外ともヘラミガキ。4は蓋で、内外ともヘラ状工具によるナデが施されている。



第146図 29号土壙出土土器実測図 (1/4)

#### 29号土壙 (付図 1)

50区に位置する長方形気味の土壙で、大半は調査区外。幅は約1.8m前後を測り、L字形のテラスがある。北側ピットは後世のもの。紡錘車出土。

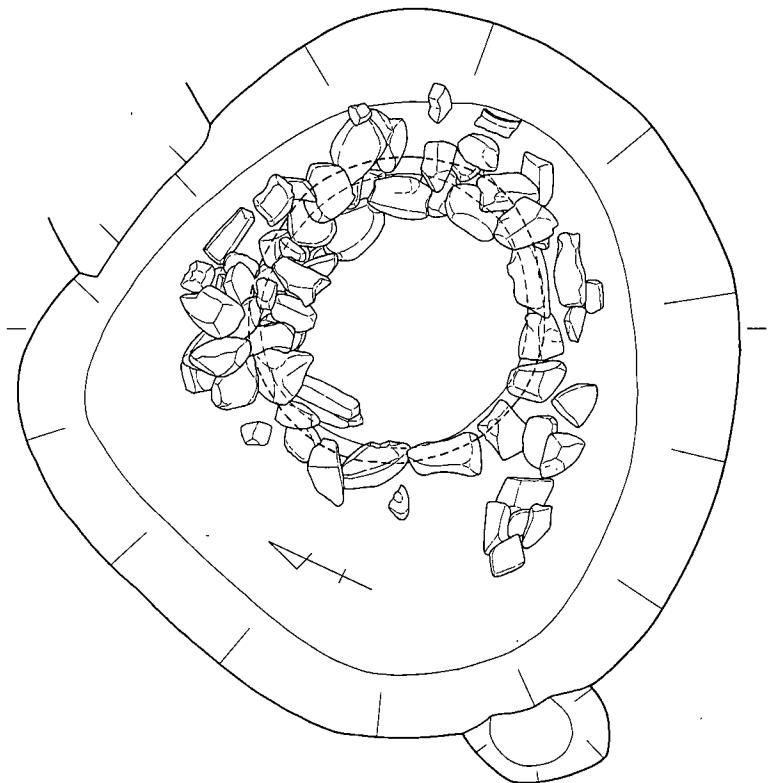
#### 出土土器 (第146図・図版37)

すべて甕。1はゆるく外反した如意形口縁を有し、その端部にはキザミが施されている。胴部は直線的で、底部はやや横に張る。底部周辺には指頭による整形痕が多く残る。内外ともナデ仕上げ。2はゆるやかに外反する如意形口縁をもち、端部にはキザミが施されている。胴部はこの時期の土器としてはかなり張り、特異な形態を呈している。内外ともナデ仕上げ。3は指頭による整形痕を顕著に残す底部片で内外ともナデ仕上げ。

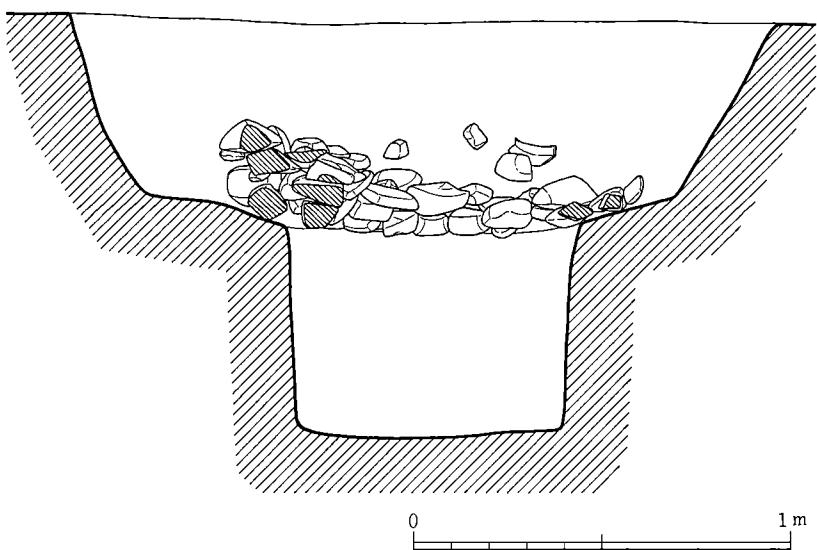
#### (2) 中世から近世にかけての土壙・井戸

#### 30号土壙 (第147図・図版 9)

62区に位置する井戸と考えられる遺構。掘方は上部で径190cm前後を測り、二段掘りされている。井筒部は径78cm、深さ55cmを測るが、井戸側は残存していない。井筒部分は砂層を掘り抜いており、何らかの井戸側がなければ壁を保つことは難しい。竹のタガがわずかに認められた



— 12.50 —



第147図 30号 土壌実測図 (1/20)

ことから、本来桶側があったと考  
える。上部は石組みが認められ、  
石は花崗岩を主に使用している。  
現在の湧水レベルは一段目の中位  
に達し、現在でも活発な湧水が認  
められる。

#### 出土遺物（第148図・図版86）

1・2は瓦質の土器。3は土師  
質土器。4は黄釉の盤。胎土は暗  
黄褐色で細砂粒を多く含む。施釉  
は内面のみ施され、見込には鉄釉  
による文様の一部が認められる。

13世紀から14世紀前半にかけての中国福建省の産。5は李朝陶器で、皿もしくは碗。胎土は明  
青灰色で、細砂粒を若干含む。高台内、外面はケズリが施され、施釉は全面に及ぶ。釉調は明  
青緑色。見込には3ヶ所の砂目の痕があり、高台疊付にも認められる。年代は15世紀頃と考え  
られる。

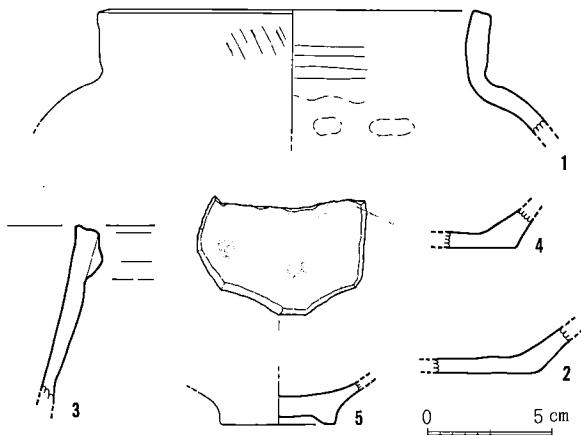
#### 31号土壙（第149図）

44区に位置する井戸で西側を土壙に切られている。上部構造は石組で、高さ70cm強積まれ径  
はおよそ65cm前後を測る。石は大小の礫石、河原石を使用し、石臼の欠損品、陶器片も認めら  
れる。石組は縦一列で、背後のひかえ積みは西側にわずかに認めることができる。桶側と石組  
の接する部分の外側には砂利まじりの粘土が桶側をめぐるように施され、石組の安定や桶側の  
固定、水もれ防止等を計っていると考えられる。

桶側は現状で長さ80cm径60cm強を測る。2段にわたって竹タガによる緊縛があり、上段の竹  
タガは二重に施されている。桶板は19板を数える。桶側と掘形の間には青灰色の砂が充填され、  
桶側の下はさらに20cm程掘り込まれており井筒の一部をなしている。現状で、井筒は長さ173cm  
を測る。石組みが検出されたレベルでは、覆土が図の実線の部分から違いをみせており、一時  
期の井戸の上面をなしていた可能性がある。井戸底面では現在でも激しい湧水が認められる。

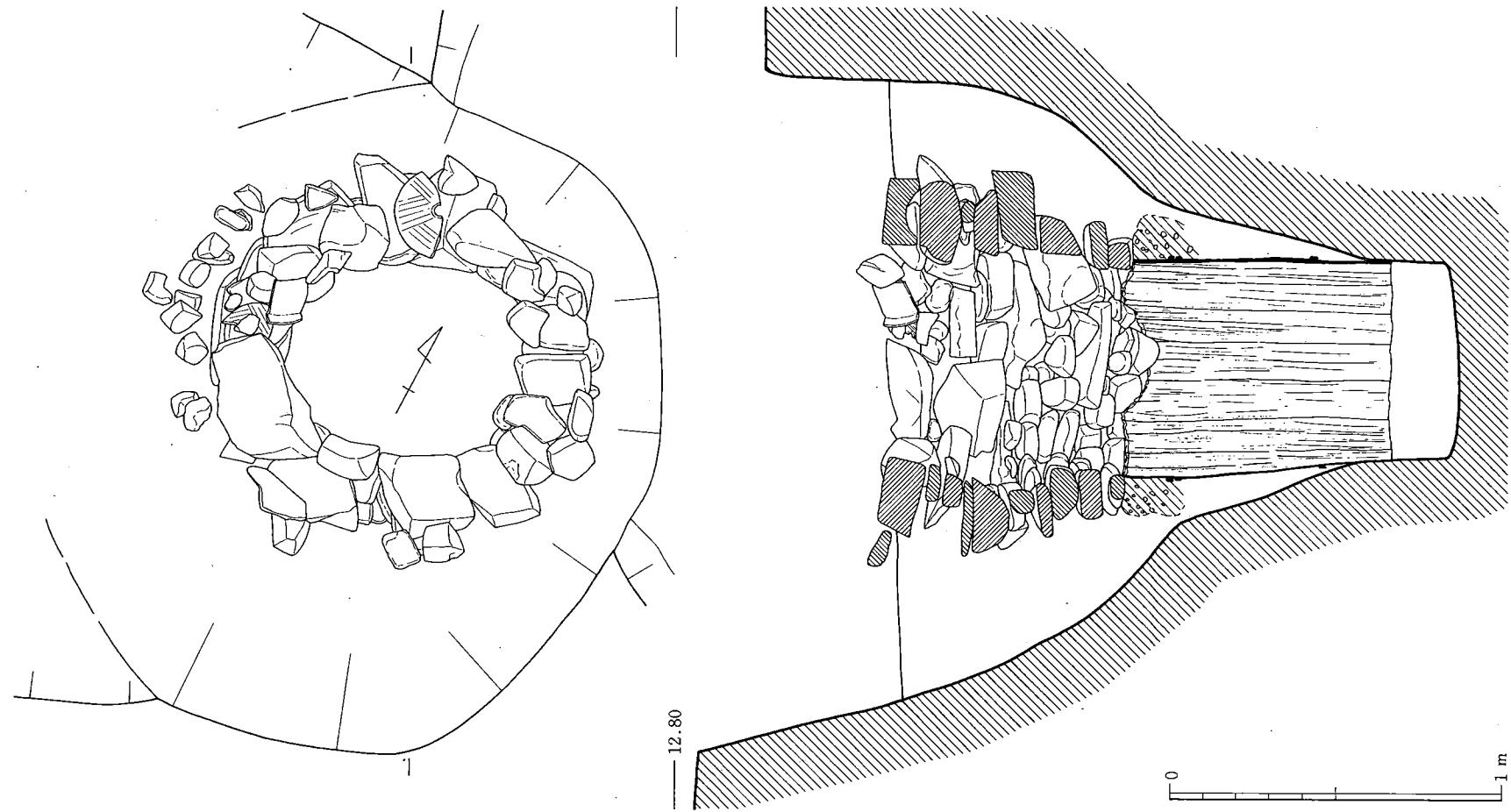
#### 出土遺物（第150図・図版86・87）

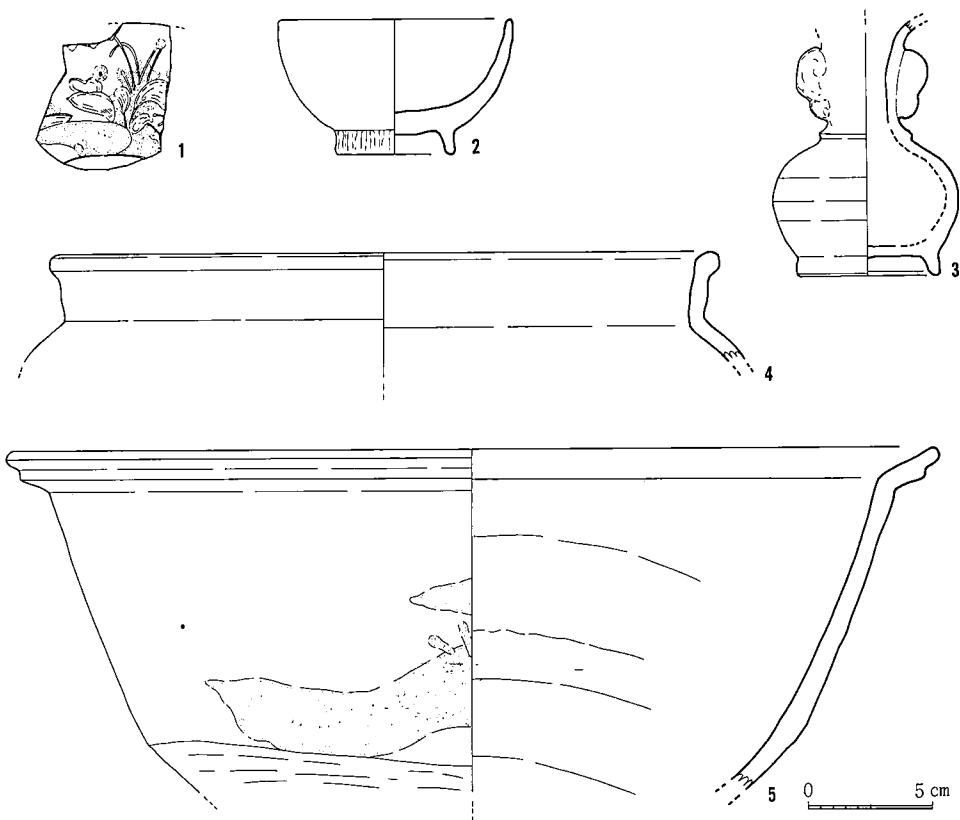
1は肥前の染付碗で文様のみを図示。体部外面には草文が、青色の呉須で描かれる。胎土は  
灰白色。17世紀前半から中葉の産。2は肥前系の磁器碗。半球形の体部をもち、高台はやや高い。  
胎土は灰白色で、高台部のみ焼成不良で赤味がかっている。釉は全面に及び、口縁部には  
鉄釉による口銹が施されている。反転実測図であるが、復元口径9.4cm、同器高5.4cm、底径4.6cm  
を測る。18世紀代の産。3は双耳付きの陶器の花器で、口縁周辺と底部の一部を欠く。胎土は



第148図 30号土壙出土遺物実測図（1/3）

第149図 31号土壌実測図(1/20)



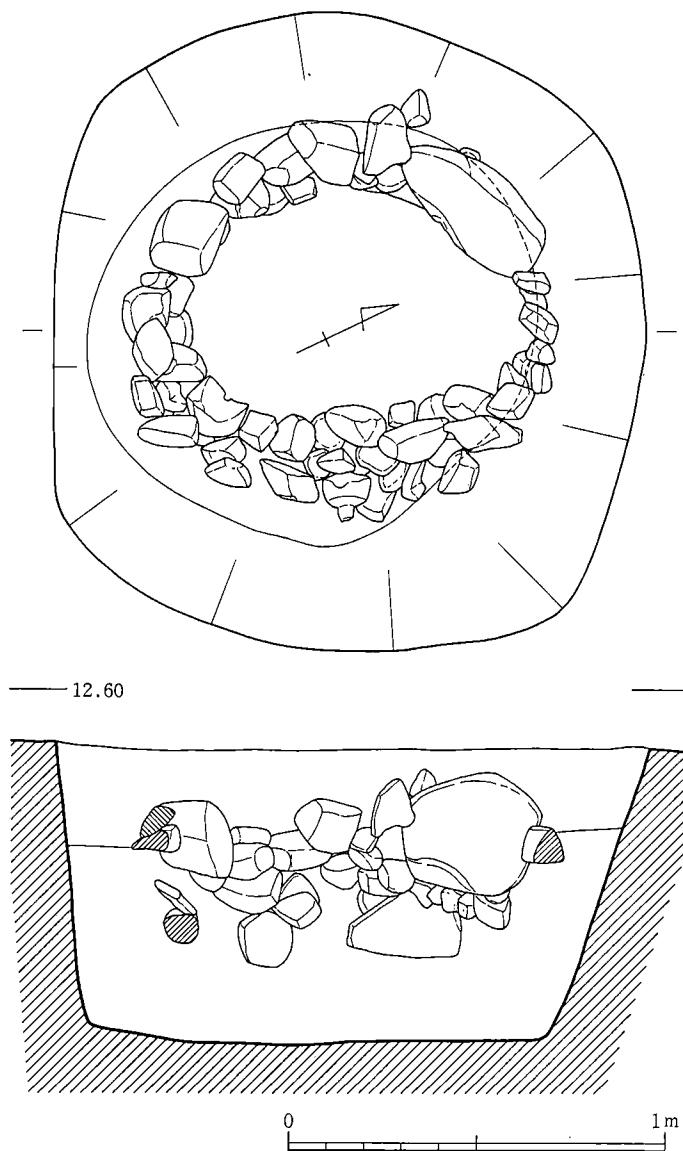


第150図 31号土壌出土遺物実測図 (1/3)

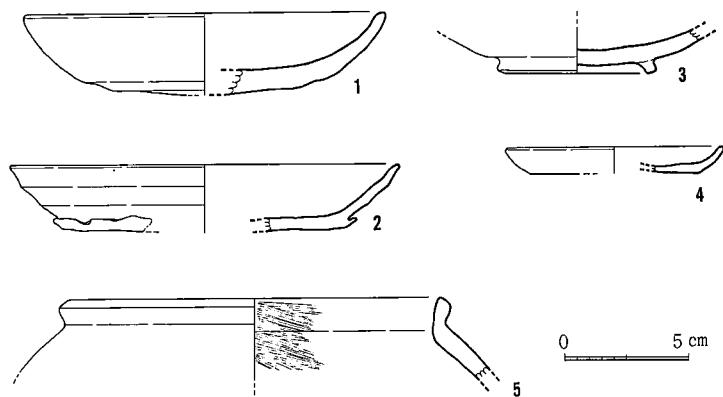
暗青灰色を呈し、釉は黒色の釉の上に茶色の釉を重ね掛けしたものであろうか、焼成後は黒色の部分が部分的に表面に認められる。あるいは窯変か。福岡系統の陶器と考えられ、あるいは高取の可能性をもつ。17世紀末から18世紀中葉にかけての産。4は唐津系の壺口縁部片で、図示以外に肩部の破片も存在する。端部が肥厚し、外傾した口縁をもつ。胎土は暗灰白色で、釉は体部内面までを透明釉、口縁内面から体部外面までをベージュ色の釉で掛け分けている。肩部の破片には鉄釉による装飾が施されている。18世紀頃の産。5は井戸石組みに使用されていた、唐津系陶器の鉢。体部外面は凹凸を残し、内外にケズリの痕が認められる。胎土はアズキ色。釉は、まず鉄泥を器面全体（残存部のみ）に施し、のち乳白色の釉を内面は口縁から下へ3cm、外面は下へ約12cmにわたって施している。外面には緑釉（上位の三角状の文様）、鉄釉（左記の下の2本の線）、白泥（左右に波打つ文様）により松絵らしきものが描かれている。いわゆる二彩唐津の系統の陶器で、17世紀後半から18世紀代にかけての所産と考えられるものである。

### 32号土壙 (第151図)

47区に位置する井戸である。上部構造は石組、下部は何らかの井戸側があったと考えられるが、何も検出されなかった。石組は大小の礫石、河原石を使用し、高さ50cm弱にわたって認められる。しかし、場所によっては極端に低いところもあり、崩壊もしくは抜き取られたと考えられる。石組は径58~87cmを測り、やや橢円形を呈す。石組の下端から底面までは約25~30cm



第151図 32号土壙実測図 (1/20)



第152図 32号土壙出土遺物実測図 (1/3)

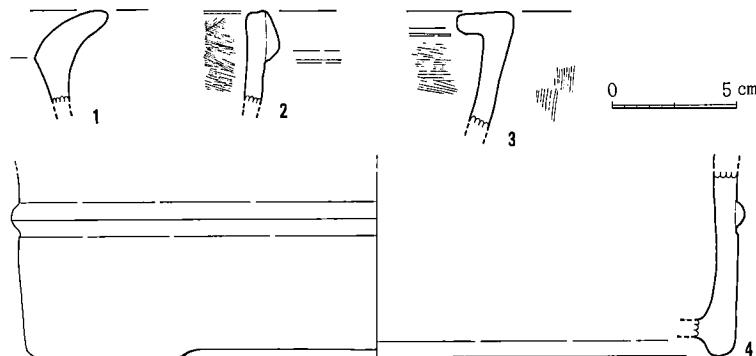
を測り、井戸側が使用されていたならば背の低いものであろう。底面は砂層で現在でも湧水は認められる。

#### 出土遺物（第152図）

1～4は土師質の土器。1は復元口径14.6cmを測る皿で、内面は黒色。2も皿で、内外とも回転ナデ仕上げ。底面には糸切り痕がある。色調は明黄褐色。3は高台付きの椀。5は黒色系の土器で、外面はミガキ、内面は細かい刷毛目の痕が残る。この他に、タタキを使用した施釉の陶器片があるが図化できなかった。

#### 33号土壙（第154図）

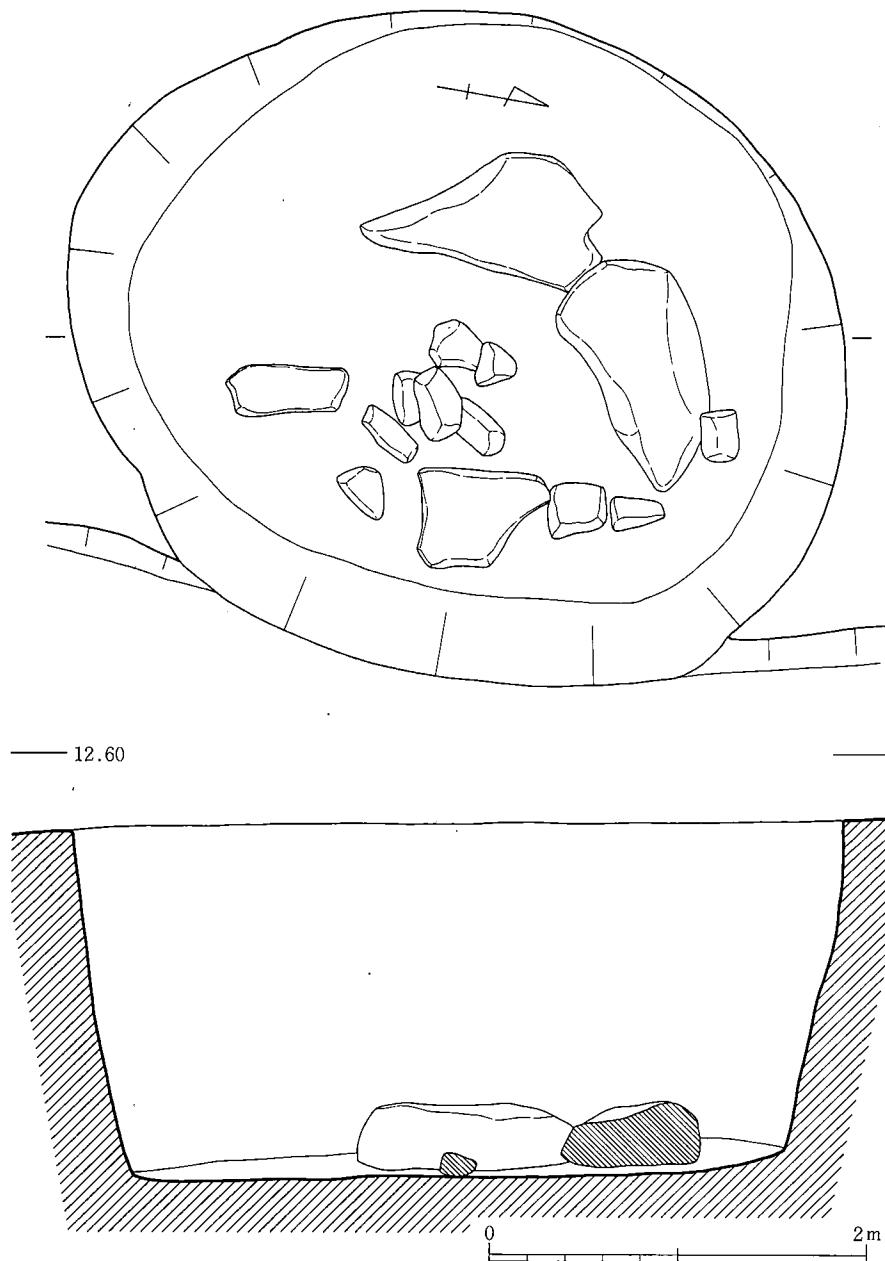
42区に位置する楕円形の土壙で、一部を溝に切られている。底面は径150～172cmを測る楕円形で、深さ94cmを測る。底面上に大小の石が認められ、石材は花崗岩が主である。性格が不明の土壙である。



第153図 33号土壙出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第153図）

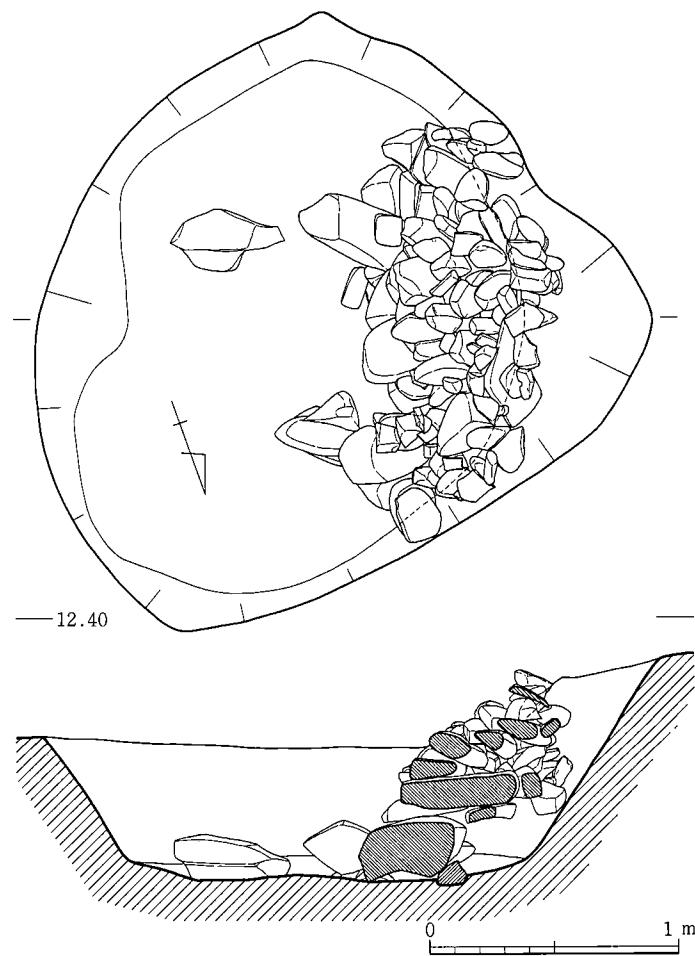
中世と考えられる遺物。1～3は土師質の土器。4は瓦質の土器。



第154図 33号 土壙実測図(1/20)

### 34号土壌（第155図）

43区に位置する不整形の土壌。底面は径159～215cmを測り、ほぼ平坦である。東壁には長さおよそ170cm、幅85cm、高さ84cmにわたって石積みが検出される。石積みの下部は比較的大きな石を使用し、上部は礫石や河原石を縦、横とも重ねて積んでいる。底面は砂層からなり、現在は激しい湧水が認められる。しかし、井戸と断定はできず、井戸としても通常の縦井戸ではなく、横井戸の一種かと考えられる。この場合、石積みはステップにでもなるのであろうか。



第155図 34号土壌実測図 (1/30)

### 35号土壙（第156図）

41区に位置する円形の土壙。底面で径75~80cmを測る。土壙内には瓦や陶磁器類が重なって検出される。図示は行っていない。

### 36号土壙（第159図）

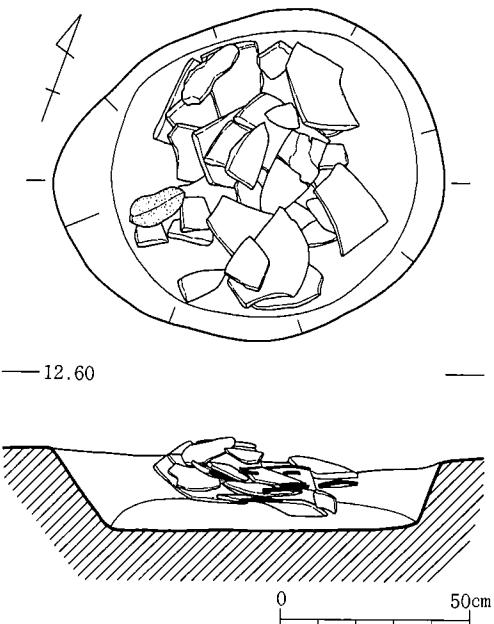
52区に位置する土壙。隅丸長方形プランで南側に長方形の突出部をもつ。土壙内に二段のテラスをもち、北側テラスは上端より10cm低い。土壙中央のテラスは上端面から深さ92~109cmを測り、西へ傾斜する。土壙底は深さ125~128cmを測り、円形を呈す。底面は砂層であり、活発な湧水が認められる。よって当遺構は形態、現状からして井戸と考えられる。井戸側の類いは検出されていない。中世と考えられる、瓦質の土器片が出土している。（第157図）

### 37号土壙（第160図）

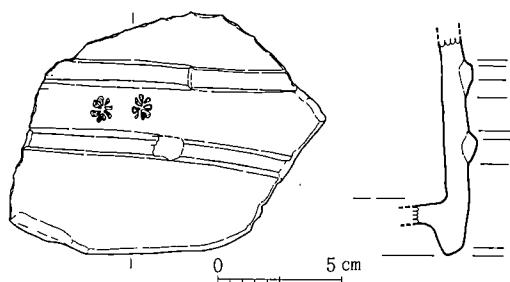
43区に位置する井戸。一段のテラスをもち、土壙中位から下位にかけて石組が検出される。上位ではそれは認められず、抜き取られた可能性がある。底面は径78cmを測る楕円形で、現状で深さ83cmを測る。石組のみで井筒を造る構造の井戸であろうか。現在でも湧水は認められ、底面は砂層からなる。

### 出土遺物（第158図・図版87）

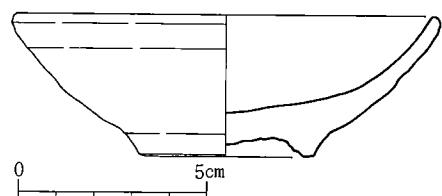
青磁の壺が1点出土。約半分を欠く。底が浅い体部と低い高台をもつ。胎土は暗青灰色で細かく、施釉は全体に及ぶ。釉調は淡緑色を呈し、貫入が全面に認められる。高台には目砂が大量に付着している。



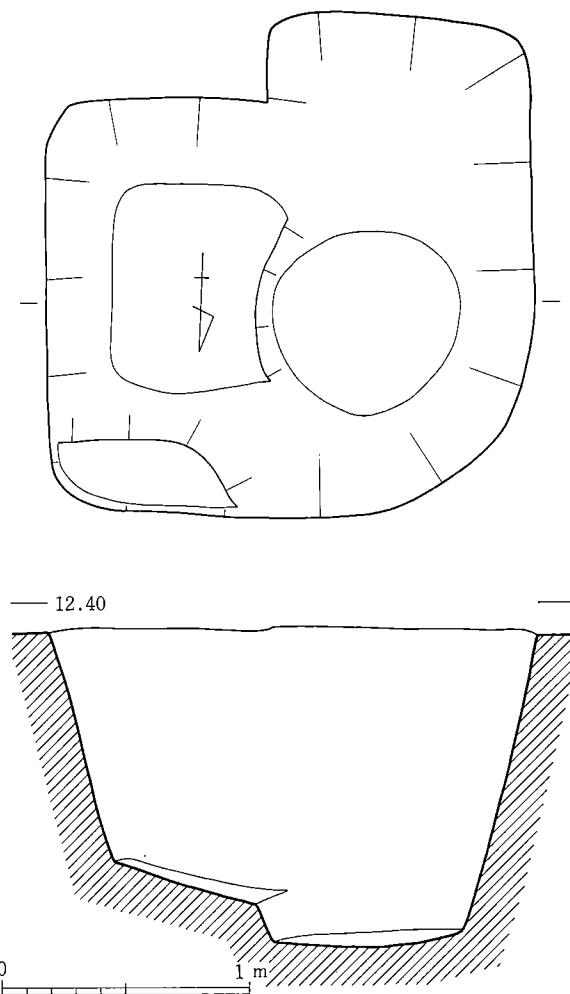
第156図 35号土壙実測図(1/20)



第157図 36号土壙出土遺物実測図(1/3)



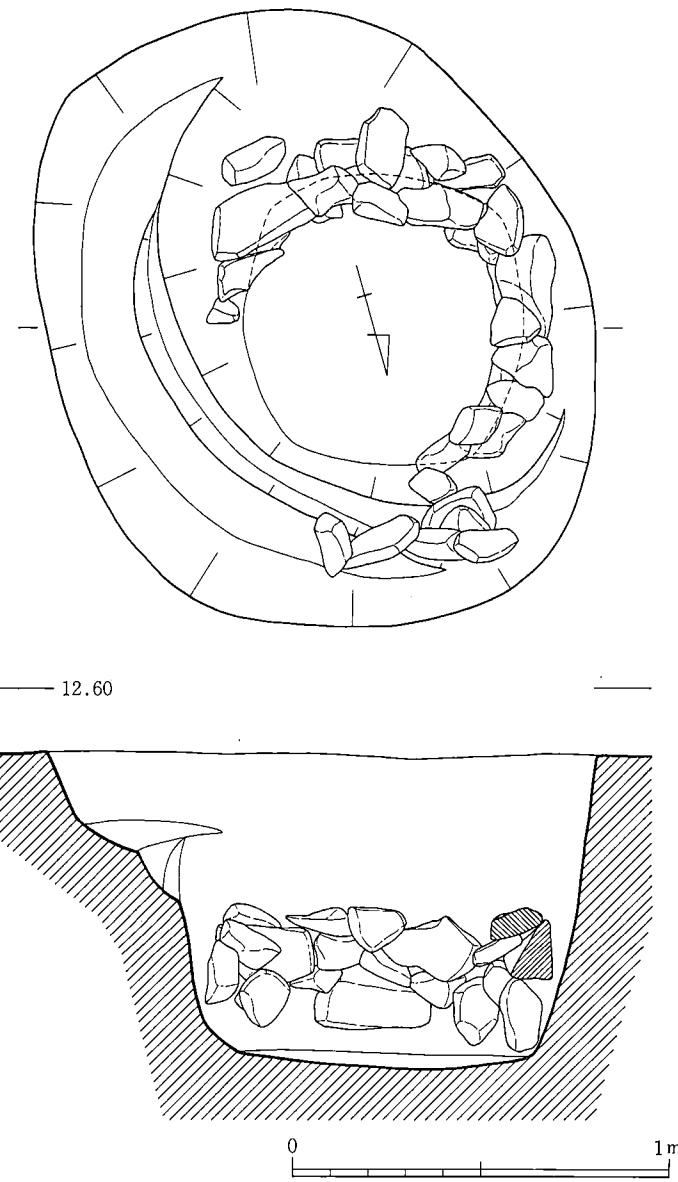
第158図 37号土壙出土遺物(1/2)



第159図 36号土壙実測図(1/30)

### 38号土壙(第161図)

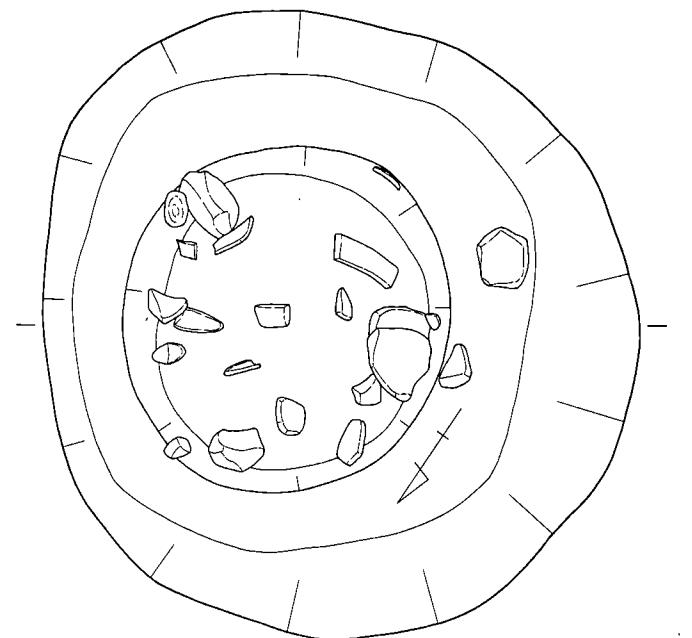
52区に位置する橢円形の土壙。底面は二段になり、二段目で深さ123cm、径76cmを測る。土壙中位やや下には礫石や瓦が認められる。底面は砂層からなり、現在でも湧水が活発に認められる。おそらく井戸と考えられ、分布する石、瓦からして、上部構造が石組、下部が木製の井戸側を使用したとも考えられる。底面が円形のくぼみを残すことから、下部は桶側が使用された可能性は強い。石や桶板は抜き取られたのであろうか。



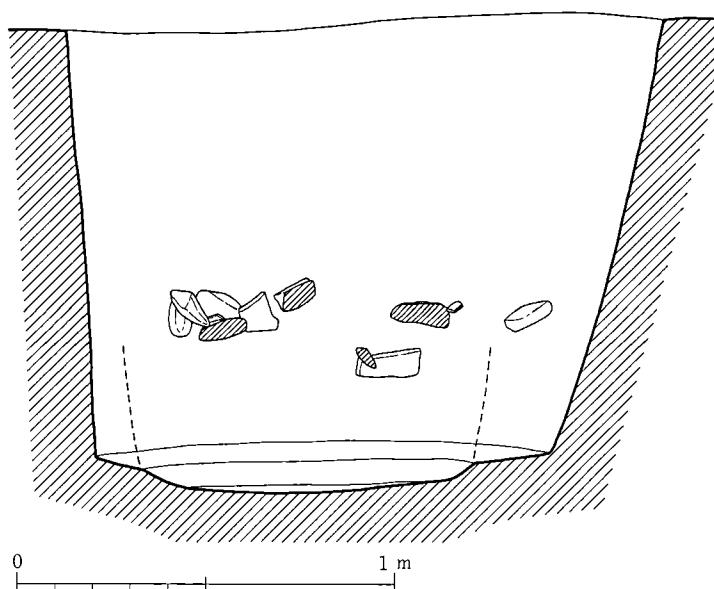
第160図 37号土壌実測図(1/20)

### 39号土壌(第162図)

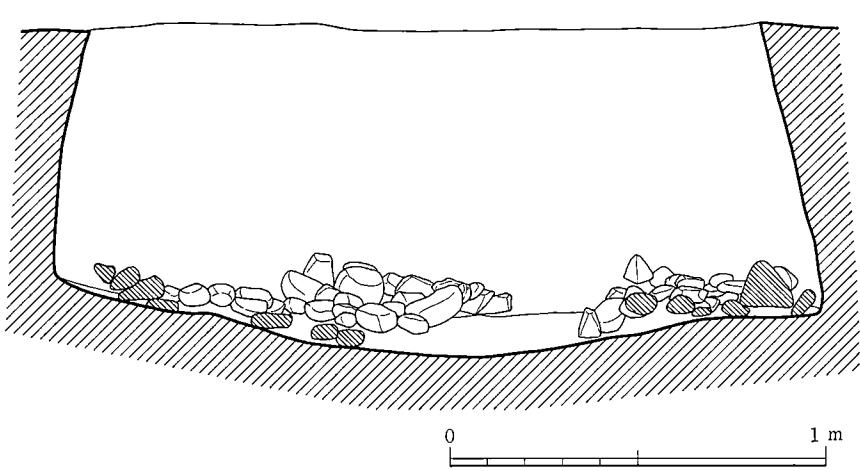
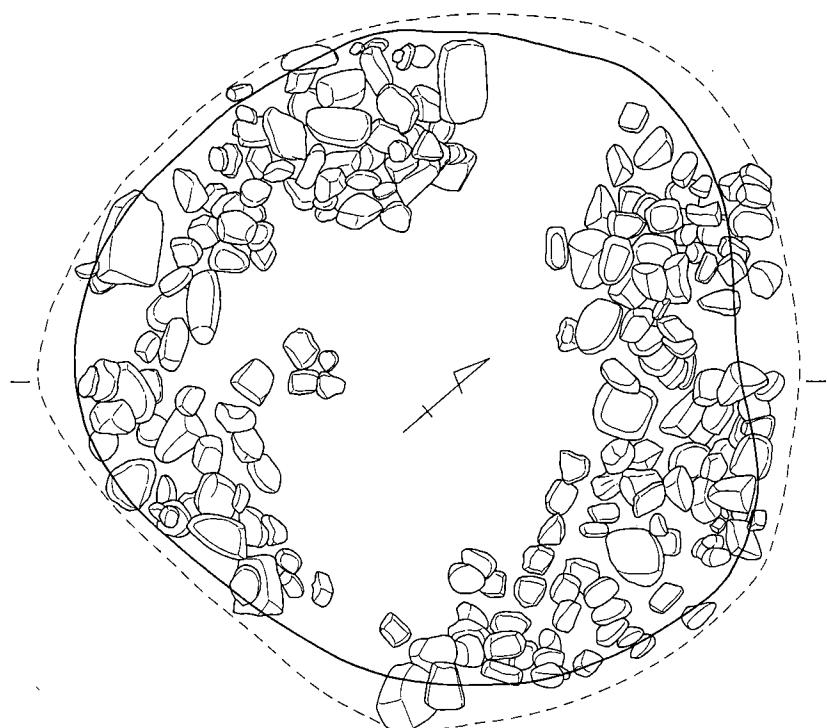
40区に位置する楕円形の土壌。底面は径188~200cmを測り、深さ85cmで中央に向かって傾斜している。底面には河原石、礫石が認められるが、中央付近には分布せず、現在では湧水が認められる。当遺構は井戸と考えられ、底面にある石は敷石か石組が崩壊した跡であろうか。



— 12.40 —



第161図 38号土壙実測図(1/20)



第162図 39号土壤実測図(1/20)

### (3) 溝

大小20条の溝を検出した。時代は江戸時代～現代に至る。ここでは主なものの説明を記す。

#### 10号溝（付図1）

調査区南側を約東西に走る溝。長さは現存で約27mを測る。断面は逆台形状を呈し、幅は3.5m前後を測る。深さは60～90cm前後を測り、標高は西側が最も低い。10号溝は、西側のVI区西にまでは伸びておらず、中途でとぎれるものと考えられる。遺物は弥生土器・輸入青磁・江戸時代の陶磁器がいずれも少片で出土している。

#### 14号溝（付図1）

調査区中央西寄りを南北に走る溝で、長さは約17mを測る。幅は1.5m前後で、東側に一段の段をもつ二段堀となっている。深さは40cm前後で、北ほど標高が高くなっている。遺物は江戸時代の陶磁器類が溝の全面から出土する。溝の位置関係からみると、13号・15号溝との関連も考えられるが、13号溝は14号溝に切られている。また、15号溝は江戸時代より下ると考えられる遺物（明治・大正の磁器）を含むことから14号溝と一連のものとはとらえにくくかもしれない。しかし、15号溝の部分のみを後世に掘り直した可能性もあり、14号・15号溝の関連は十分考えられよう。

#### 15号溝（付図1）

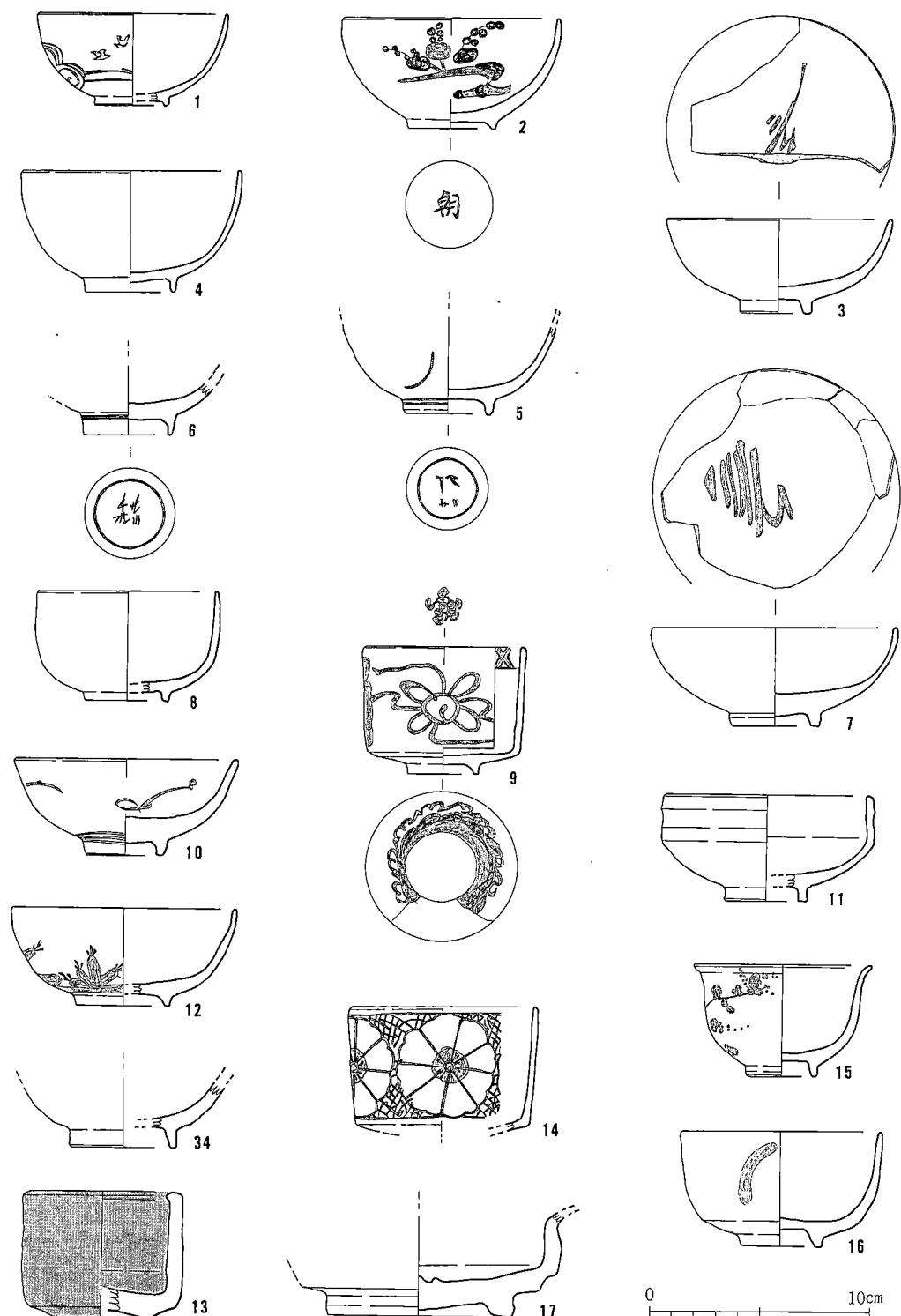
調査区中央から西部にかけてL字形に走る溝で、東西に34m、南北20mの長さを測る。幅は最大で約1.4m、平均50～80cmで、深さは15～50cmを測る。標高は南北に走る部分が低く、東西部分がやや高い。遺物は溝全面から出土し、弥生土器、江戸時代陶磁器、明治・大正と思われる磁器類を含んでいる。14号溝と関連する可能性をもつ遺構である。

#### 13号溝（付図1）

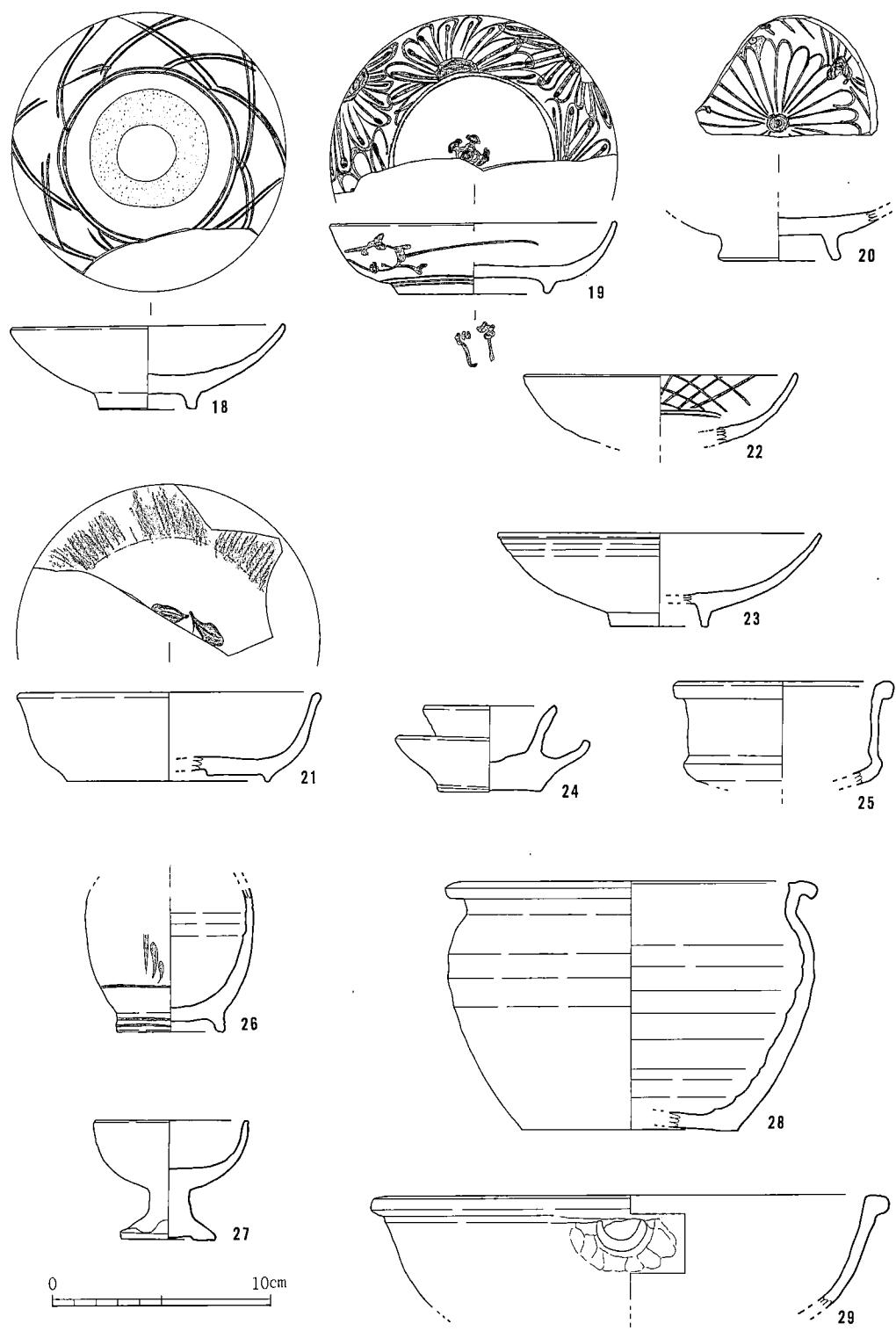
調査区中央から北をL字形に走る溝で、東西約30m、南北約12mを測り、北端は調査区外にまで伸びている。幅は1.2～2.0mを測り、深さは30～70cmで標高は南北部分が低く、東西部分が高い。溝中より、弥生土器、中世土器、青磁少片、江戸時代と考えられる磁器の少片が出土している。14号溝に切られている。

#### 14号溝出土陶磁器（第163～165図・図版78～84・100～105 表7）

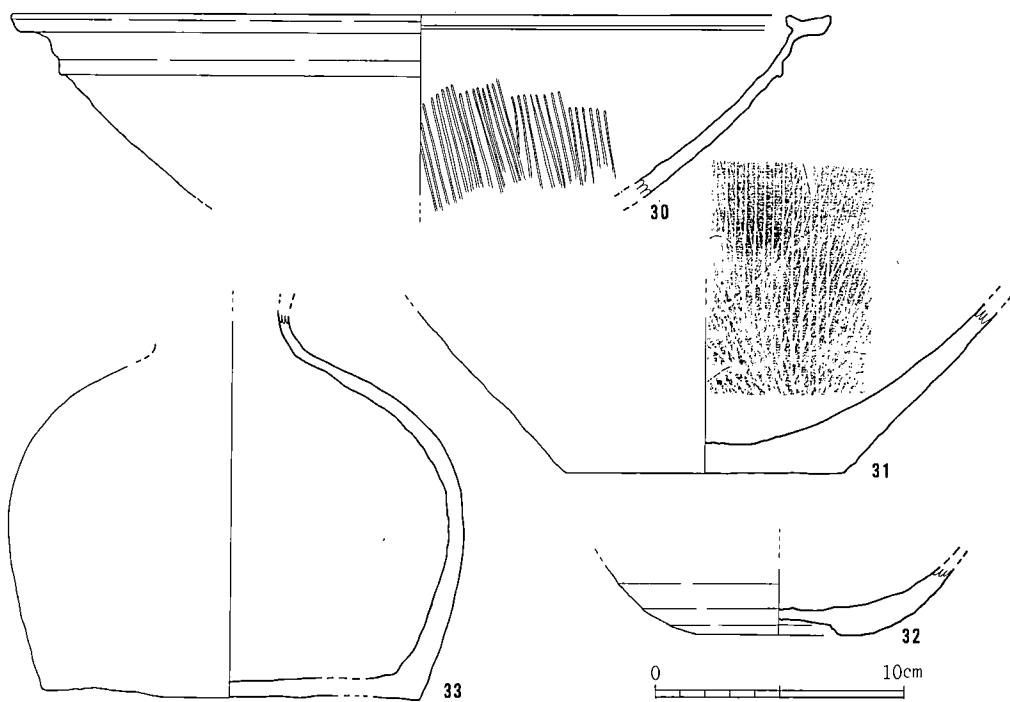
磁器19点、陶器16点を図示。年代は17世紀後半から18世紀末までのものを主とし、19世紀前半のものも含んでいる。磁器では19点中11点が肥前で占められ、他は肥前系のものである。器種は碗、皿、瓶、香炉等があり、特に前二者が多い。碗では、色絵が1点のみあり、他は草花文、菊花文等を具須で描く染付が大半を占める。器形は通常のもの以外に筒形が見受けられ、その前者には「大明年製」の銘を高台内に描くものもある。また1点（2）は高台内に「朝」の銘をもち、久留米市朝妻窯の産と判別できる。文様はコンニャク版使用の例がある。皿は格子文、つる草文、菊花文等を内外に描き、「大明年製」銘や見込にコンニャク版による五弁花文



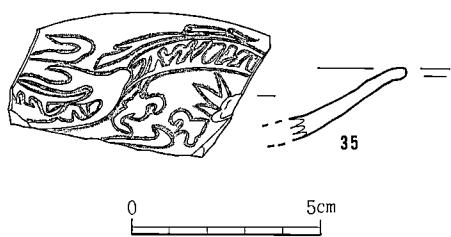
第163図 14号溝出土陶磁器実測図① (1/3)



第164図 14号溝出土陶磁器実測図② (1/3)



第165図 14号溝出土陶磁器実測図③ (1/3)



第166図 14号溝出土陶磁器実測図④ (1/2)

が施されている。見込は蛇ノ目釉剥ぎされたものがあり、蛇ノ目凹形高台も認められる。また、35は型により雲龍文を浮き彫り的に表わす例で、有田柿右衛門窯の所産と考えられる。

陶器では16点中2点が唐津、4点が唐津系、3点が京焼風陶器であり、上野・高取系1点とこの他に福岡系諸窯の産がやや多く含まれている。碗は、京焼風陶器に見込に鉄絵が施されているが、他は多様である。皿は唐津・唐津系には刷毛目の例があり、見込を蛇ノ目釉剥ぎにしたものもある。17の上野・高取系の鉢は釉の重ね掛けを行う例である。33の唐津系瓶は内面にタタキあて具痕を残し、16世紀末から1630年代の産と考えられる。燈明皿、擂鉢は鉄泥を施したのみのものである。図示以外(図版100~105)では、染付磁器の碗、皿があり、陶器では唐津・唐津系の刷毛目を施した中皿、擂鉢の破片がかなりの量で認められる。また、唐津内野山窯の碗、皿の一群も存在している。

表7 VI区東14号溝出土陶磁器一覧

插図内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 樣	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
1	色絵磁器	碗	(8.6)	(4.2)	(3.4)	灰白色	赤絵(鳥と渦) と淡青色の吳須(鳥)	鳥と渦?	肥前	18世紀後半~ 19世紀初頭
2	染付磁器	碗	(9.8)	5.0	(3.9)	灰白色	吳須は青色	草花文、高台 内に「朝」の銘	久留米、 朝妻窯	18世紀前半
3	陶器	碗	(10.0)	4.3	3.2	淡灰褐色で 灰色強い	透明、高台周 辺無釉	見込に鉄絵	京焼風 陶器	18世紀前半 ~中葉
4	白磁	碗	(10.0)	5.5	4.0	灰白色			肥前	17世紀後半~ 18世紀初頭
5	染付磁器	碗			3.8	灰白色	吳須は淡青色	外面にコンニャ ク版、高台内に 「大明年製」銘	肥前	18世紀前半
6	染付磁器	碗			4.0	灰白色	吳須は淡青色	高台内に「大 明年製」銘	肥前	18世紀前半
7	陶器	碗	(11.0)	4.4	3.8	淡灰褐色で 灰色強い	透明	見込に淡緑色 の吳須絵	京焼風 陶器	18世紀前半 ~中葉
8	染付磁器	碗	(8.2)	5.0	(3.8)	灰白色	吳須は濃青色		肥前系	18世紀末~ 19世紀前半
9	染付磁器	筒形 碗	(7.8)	5.8	3.2	灰白色	吳須は青色	虎に七宝文?	肥前系	18世紀末~ 19世紀初頭
10	染付磁器	碗	(10.1)	4.4	3.6	灰白色	吳須は薄い淡 青色、見込は 蛇ノ目粗刻ぎ	草花文?	肥前系	18世紀
11	陶器	碗	(9.6)	4.9	(3.8)	淡灰褐色で 灰色強い	透明		京焼風 陶器	18世紀代
12	染付磁器	碗	(10.2)	4.5	(4.2)	灰白色	吳須は青色	若松文(コン ニャク版?)	肥前系	18世紀後半~ 19世紀前半
13	青磁	香炉	(7.2)	(5.7)	(4.4)	灰白色	淡緑色		肥前	17世紀代
14	染付磁器	筒形 碗	(8.4)			灰白色	吳須は淡青色 口縁無釉(蓋 物)	菊花散らし	肥前	18世紀末~ 幕末
15	陶器	小碗	(8.0)	5.1	3.2	淡茶褐色	内面白化粧土 で、内外とも 透明釉	梅花文?	関西系	18世紀後半~ 幕末
16	陶器	碗	(9.1)	5.2	3.7	淡灰褐色で 灰色強い	透明	外面に緑釉を 垂らす	九州内	18世紀後半~ 19世紀前半
17	陶器	鉢?			8.4	淡茶灰色で 灰色強い	暗緑釉の上に暗青 緑釉を重ね掛け 見込の一部と高台 周辺無釉		上野 高取系	17世紀前半

插図内 番号	陶器・ 磁器	器種	法 量 (cm)			胎 調	釉調・その他	文 樣	系 統	時 期
			口径	器高	底径					
18	染付磁器	皿	12.6	3.8	4.4	灰白色	吳須は淡青緑色、見込は蛇ノ目釉剥ぎ	格子文	肥前系	18世紀中葉～末
19	染付磁器	皿	(13.1)	3.2	(6.9)	灰白色	吳須は淡青色(内面)、青緑色(外面)	見込にコンニャク版五弁花文、周囲は菊花散らし、外面つる草文？高台内に「大明年製」銘	肥前	18世紀前半～中葉
20	染付磁器	皿			(5.6)	灰白色	吳須は淡青色	菊花散らし文	肥前	1640～1650年代
21	染付磁器	皿	(13.8)	4.1	(9.3)	灰白色	吳須は淡青色 高台内蛇ノ目釉剥ぎ、蛇ノ目凹形高台	見込に草文？	肥前系	18世紀後半～19世紀前半
22	染付磁器	皿	(12.6)			灰白色	吳須は淡青緑色、見込は蛇ノ目釉剥ぎ	格子文	肥前系	18世紀中葉～19世紀初頭
23	陶器	皿	(14.8)	4.3	(4.5)	淡赤褐色	内面白化粧土による刷毛目、内外とも透明釉 見込蛇ノ目釉剥ぎ、外面部体部下半以下無釉		唐津系	18世紀代
24	陶器	燈明皿	(5.9)	3.9	4.7	赤褐色	鉄泥、外面底部周辺は素地		唐津系	17世紀代
25	陶器	香炉	(9.6)			赤褐色	外面は白化粧土の刷毛目、のち鉄釉の流し書き、外面下半と内面は素地		唐津	17世紀後半～18世紀
26	染付磁器	瓶			5.0	灰白色	吳須は薄い淡青色	?	肥前	17世紀中葉
27	白磁	仏飯器	6.9	5.4	4.3	灰白色	底部周辺内外とも無釉		肥前	18世紀代
28	陶器	壺	(17.0)	11.4	(9.8)	淡青灰色	外面暗緑色、内面鉄泥		福岡系諸窯	17世紀代
29	陶器	鍋形片口	(23.6)			赤褐色	淡く暗く緑色、口縁端部と体部 外面下半は無釉		福岡・熊本の諸窯	18世紀後半～幕末
30	陶器	擂鉢	(32.8)			淡灰褐色で 灰色強い	内外とも鉄泥		福岡系諸窯？	17世紀代
31	陶器	擂鉢			(11.2)	赤褐色	鉄泥		唐津系	17世紀後半～18世紀前半
32	陶器	土瓶もしくは鍋			6.6	淡灰褐色	外面鉄釉(底部 周辺無釉) 内面 透明釉？の上に 鉄釉を流す		九州系	18世紀後半～19世紀
33	陶器	瓶			15.2	アズキ色	外面透明もし くは鉄泥	内面にタタキ あて具の痕 (青海波)あり	唐津系	16世紀末～1630年代
34	陶器	碗				淡灰褐色	内外とも白化粧土の刷毛目		唐津	17世紀後半～18世紀中葉
35	染付磁器	皿？				灰白色	吳須は淡青色	型による雲龍文	有田 柿右衛門窯	1660～1670年代

#### (4) 石器・土製品 (第167~175図・図版56~60)

##### 磨製石斧 (1~13)

総数13点あり、蛤刃石斧8点、柱状石斧3点扁平片刃石斧2点が出土している。

##### 柱状石斧 (1~3)

3点とも刃部破片で体面は丁寧な研磨が施される。1は現存長7.1cm、幅2.5cm、厚さ3.3cmを測り、刃部角度は約65°を測る。2は刃部の研ぎこみにより両刃形をなす現存長5.0cm、厚さ2.2cmを測り、刃部角度は約65°を測る。3は一部に敲打痕が残る。刃部角度55°を測る。

##### 扁平片刃石斧 (4~5)

2点出土している。いずれも頁岩製である。4はほぼ完形で、基部から刃部にかけて次第に細くなる。長さ6.3cm、幅2.9cm、厚さ1.0~1.6cmを測り、刃部角度57°である。5は基部と刃部の一部を欠損する。また裏面の基部より1/3ほどに浅い抉りを持つ。現存長65cm、幅2.7cm、厚さ1.0cmを測る。

##### 蛤刃石斧 (6~13)

6~11は今山産玄武岩製の大型蛤刃石斧である。6は頂部と刃部の一部を欠損している。7は頂部破片で、敲打痕を残す。8・9は胴部破片で、いずれも体面は入念な研磨が施される。10は厚さ5.5cmを測る。12・13は硬砂岩製蛤刃石斧で、いずれも欠損している。12は頂部に端面を持つ。

##### 石包丁 (14~24)

未製品1点を含み総数11点出土している。破片資料がすべてで、背部、刃部の形状のわかるものについては直線的な背部を呈し、外彎する刃部を持ち両刃である。石材は粘板岩製が多く14・17・19・21・22・24の6点でアズキ色輝綠凝灰岩製15・20・23の3点がある。他は頁岩質16、綠泥片岩製18が各1点である。16は未貫通な浅い溝を持ち、穿孔が加えられている。背部の形状は不明であるが、刃部は外彎刃形態を呈し両刃である。18は未製品である。周縁に調整加工を加えて形状を整え、一部研磨を施した段階で穿孔が試られるが欠損したものであろう。

##### 磨製石剣 (25~26)

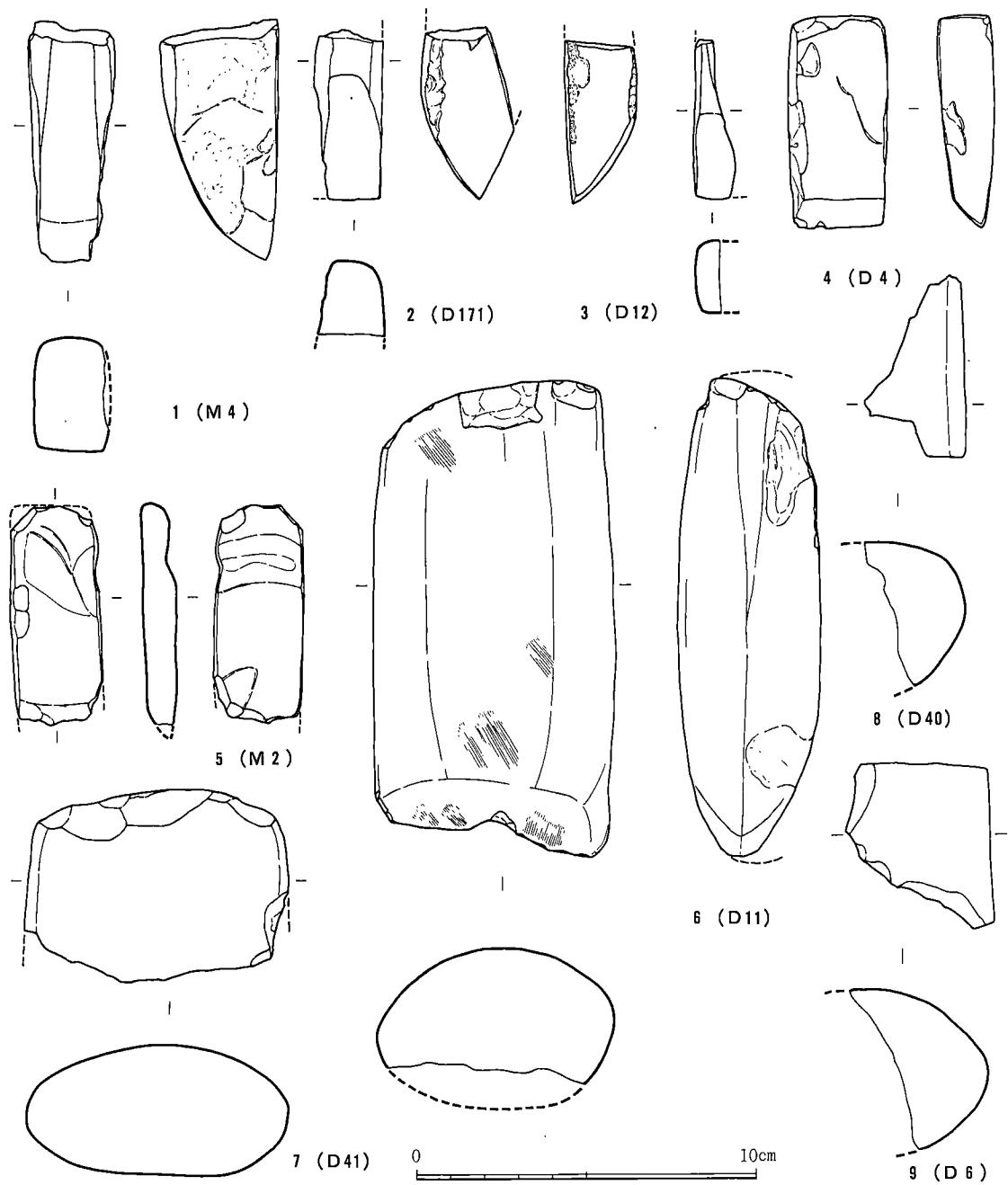
2点出土しているがいずれも破片である。25は粘板岩製で、現存長4.7cm、幅4.0、厚さ1.3cmを測る。26はアズキ色輝綠凝灰岩製で、現存値で長さ6.2cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測る。

##### 磨製石鎌 (32・33)

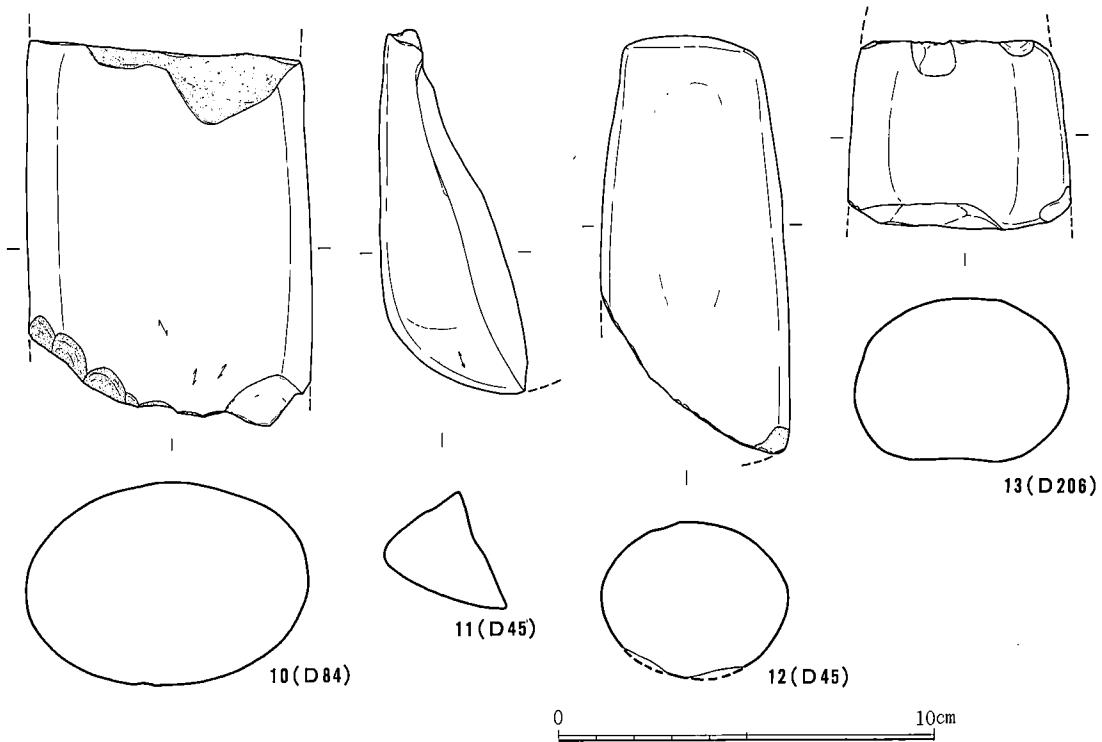
2点とも基部が直線的な形態をとる平基無茎式鎌である。32・33ともに身は扁平であり、全体の研磨後に側縁に刃部を研ぎ出している。

##### 打製石鎌 (27~31)

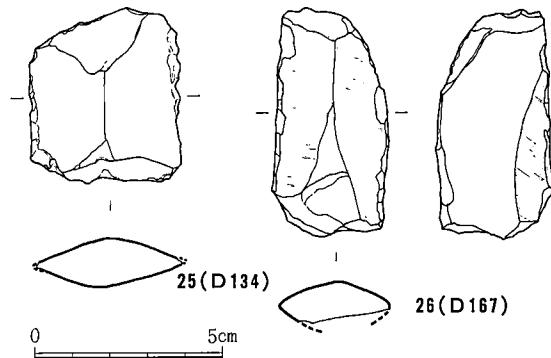
5点出土している。石材は黒曜石27・31、安山岩28~30がある。石鎌の形態は長二等辺三角形をとり、基部に抉りがほとんどないもの、27~29、わずかに湾曲するもの30、がある。27は



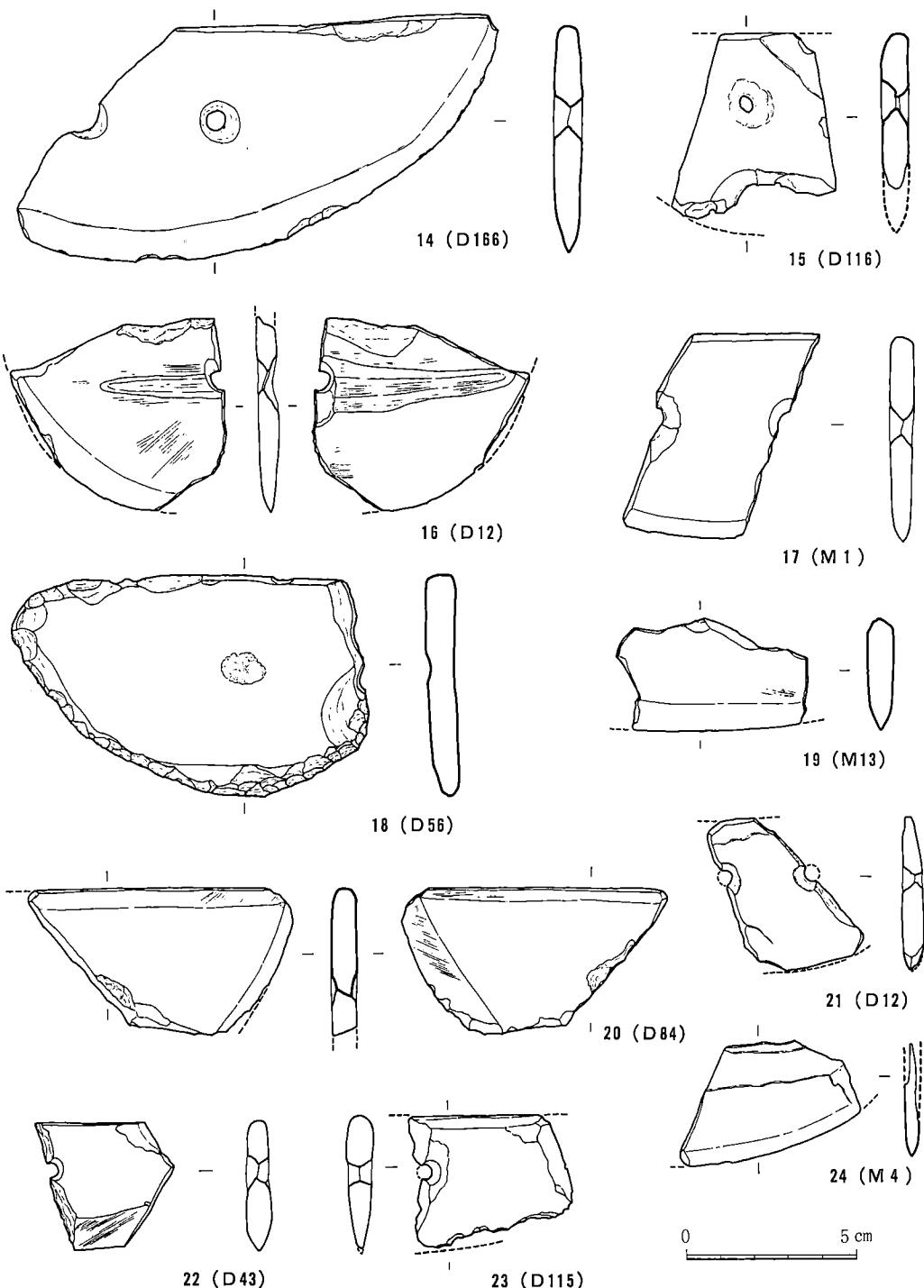
第167図 VI区東出土石斧実測図① (1 / 2)



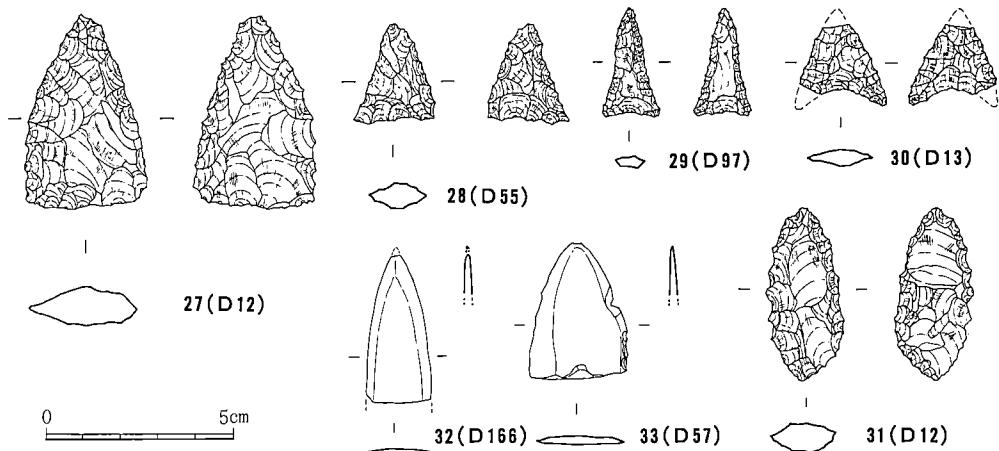
第168図 VI区東出土石斧実測図② (1 / 2)



第169図 VI区東出土石剣実測図 (1 / 2)



第170図 VI区東出土石庖丁実測図 (1 / 2)



第171図 VI区東出土石鎌実測図 (1 / 2)

長さ5.1cm、幅3.2cm、厚さ1.1cmを測る大形鎌である。剝離は全面に行われ、基部は細かい剝離により直線的に仕上げている。29は横長剝片を素材と周縁を細かい調整加工を加える。31は柳葉形を呈する。長さ4.6cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。

#### 不定形刃器 (34~37・39~42)

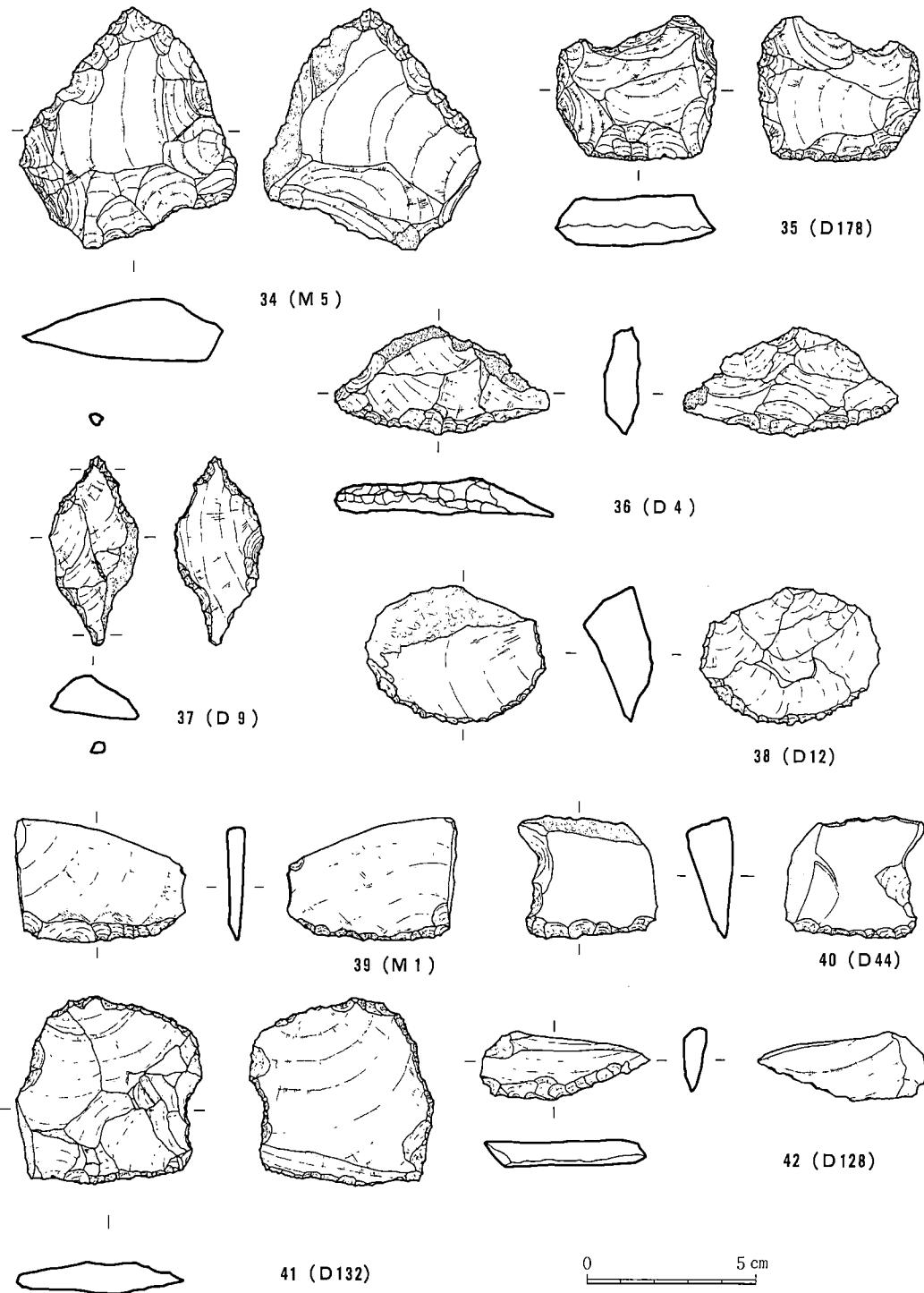
直線的な刃部を持つもの (34・35・39・40) がある。34はサヌカイト製の不定形な剝片を素材とし、表面は刃部以外粗い調整が行われ、裏面は主要剝離面を残すが、刃部部分のみ調整加工を施している。35は、縦長剝片を素材とし、長辺の1つを直線的な刃部として使用している。39は横長剝片を素材とし、打面のある辺を刃部としている。40は、石材の角を利用したもので2辺に自然面を残す。外彎する刃部を持つもの (36・38・42) はいずれも自然面を残す。36は両面加工を施し、長辺を調整剝離し刃部としている。38は部厚い剝片を利用し、頂部端面には自然面を残す。表面は剝片の側縁を利用し、細かい調整剝離を行なっている。裏面は剝離調整により形を整え、側縁に細かい調整剝離を施し刃部としている。42は横長剝片を利用し、表面の一辺に調整加工を施し刃部としている。全周に刃部をつくりだすもの (41) は縦長剝片を利用し、表面は全面剝離が及び周縁に細かい調整剝離を施す。裏面は主要剝離面を残し、周辺に細かい調整剝離を施す。

#### 石錐 (37)

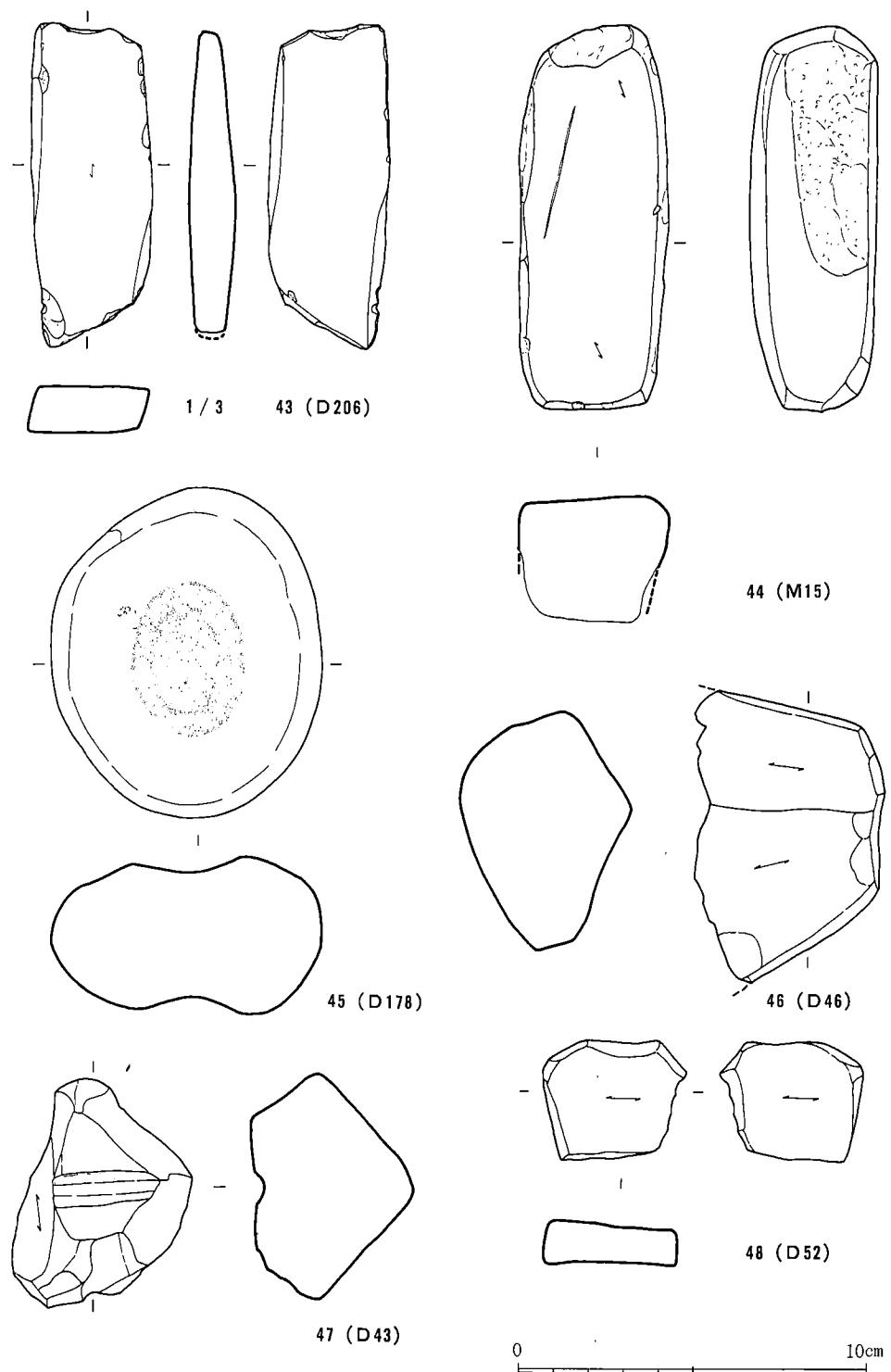
横長剝片を利用し、長軸上の両端を両面からの調整加工によって錐部としている。下端の錐部失端より5mm部分にわずかに磨滅痕が見られ、上端錐部には磨滅痕が見られない。

#### 砥石 (43・44・46~48)

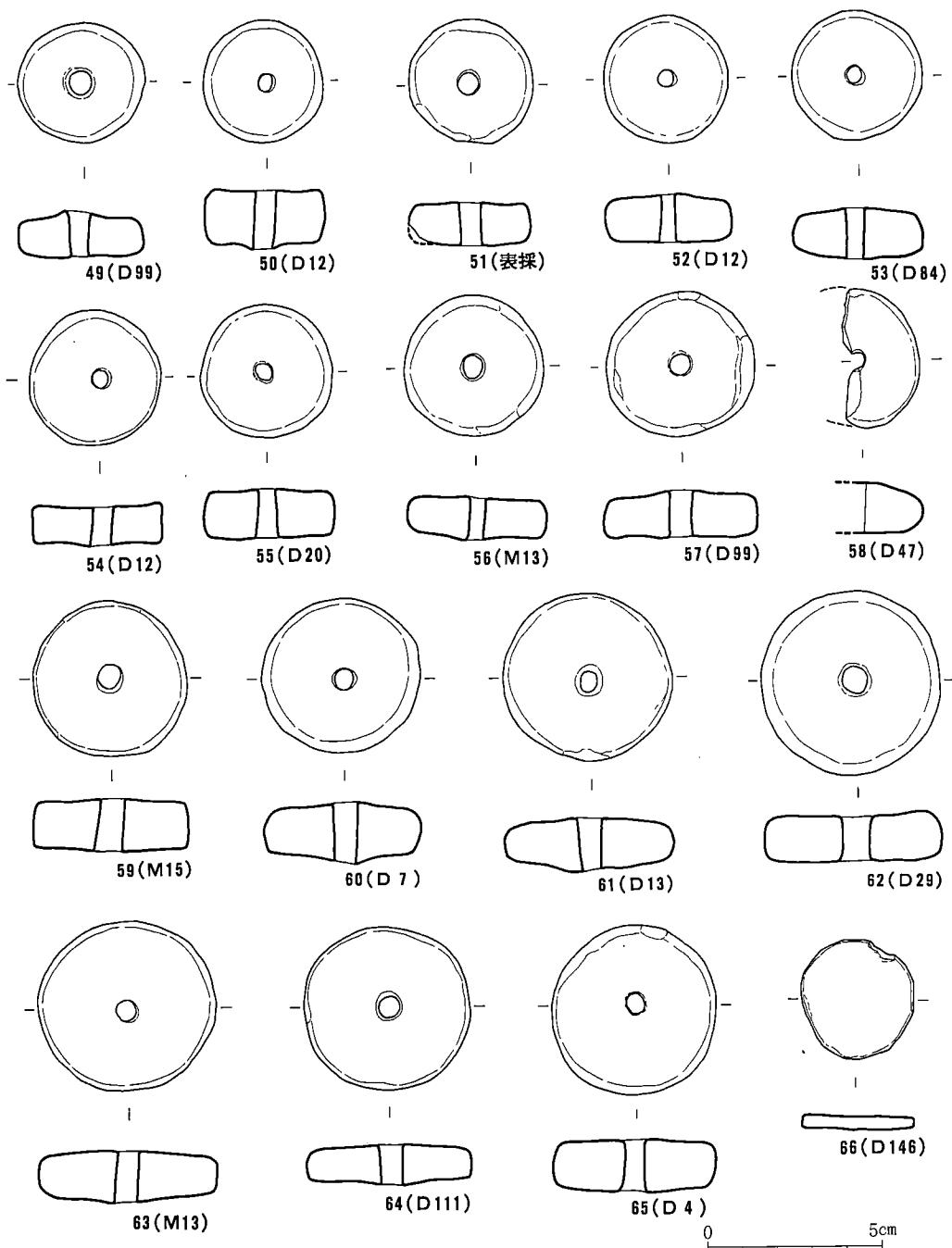
5点出土している。石材は砂岩質 (43・44)、花崗岩 (46・47・48) がある。43は4面に砥面がつくられている。44は全面とも砥面として使用し、全体に火をうける。46は破片である。4



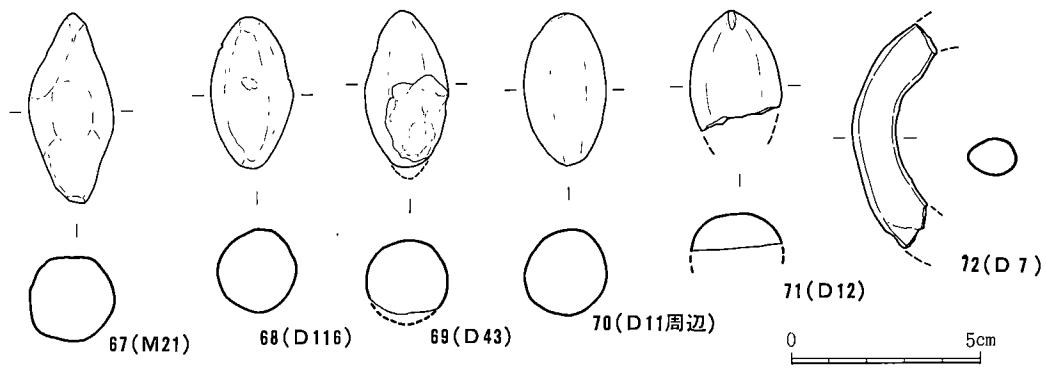
第172図 VI区東出土スクレイパー・錐実測図 (1 / 2)



第173図 VI区東出土砥石実測図 (1 / 2 · 1 / 3)



第174図 VI区東出土紡錘車実測図 (1 / 2)



第175図 VI区東出土土製品実測図（1/2）

面使用している。47は溝状磨痕を持つ。48は破損したので、薄手である。2面使用。

#### 凹石（45）

砂岩製で、凹部は中央部の表裏に敲打によってつくられている。周縁には敲打痕が見られる。

#### 紡錘車（49～65）

総数17点出土している。大きさにより2つに分けられる。直径3.5cm前後のもの（49～58）、4cmをこえるもの（59～65）がある。いずれも手づくねで円盤状に整形し、片面より穿孔している。61～63は砂粒を多く含み精良な胎土。他は細砂粒を含み精良な胎土である。また表面に赤褐色の化粧土をもつもの（49・54・55・57・60・65）、一部に黒色の顔料が付着するもの（64）がある。焼成はいずれも良好である。

#### 投弾（67～71）

すべて土製投弾で、手づくねにより紡錘形に整形・調整している。胎土には細砂粒を含み、焼成も良好である。67・69・71は赤褐色化粧土をもち、68・70は黄褐色を呈す。

#### (5) VI区西・東出土の旧石器（第176図・図版60）

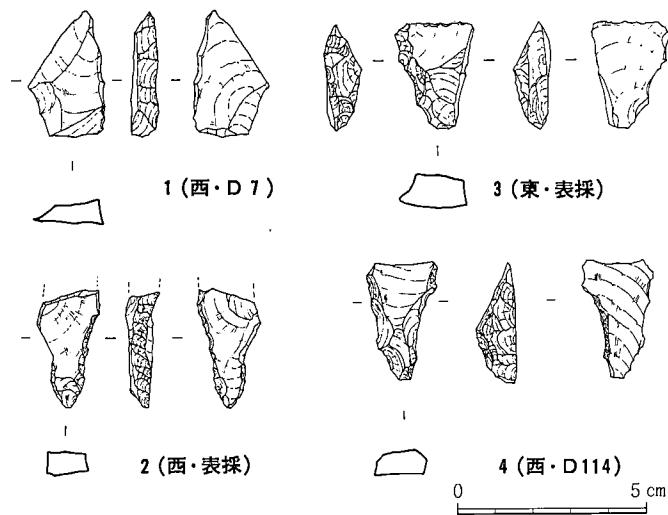
ナイフ形石器2点・台形石器2点が出土している。

#### ナイフ形石器（1・2）

1は縦長剝片を利用し、二側縁加工を施した切出形状のナイフ形石器である。サヌカイト製。2は黒曜石製のもので、刃部を欠損する。縦長剝片を利用し、二側縁加工が施されている。

#### 台形石器（3・4）

3は縦長剝片を利用し、一側縁は切断面を比較的に残すが、他方は主要剝離面からの二次加工が施される。黒曜石製。4は安山岩質の縦長剝片を利用し、二側縁に二次加工を施す。



第176図 VI区西・東出土旧石器実測図 (1 / 2)

表8 VI区東出土石器・土製品重量石材一覧

( )は現存値

出土遺構	器種	重量(g)	石材	出土遺構	器種	重量(g)	石材
D 4	石斧	60.8	頁岩	D115	石庖丁	(20.0)	凝灰岩
D 6	〃	100.5	玄武岩	D116	〃	(29.1)	
D11	〃	688	〃	D166	〃	(100.0)	粘板岩
D12	〃	12.5	頁岩	M 1	〃	(32.6)	
D40	〃	67	玄武岩	M 4	〃	(7.7)	粘板岩
D41	〃	251		M13	〃	(21.0)	〃
D45	〃	340		D134	石劍	29.2	
〃	〃	95	玄武岩	D167	〃	26.7	凝灰岩
D84	〃	713	〃	D57	磨製石鏃	(3.5)	
D171	〃	39.4	頁岩	D166	〃	2.1	粘板岩
D206	〃	199	砂岩	D12	打製石鏃	13.9	
M 2	〃	31.1	頁岩	D12	〃	6.5	黒曜石
M 4	〃	94.1	粘板岩	D55	〃	2.5	
D12	石庖丁	(29.2)	〃	D97	〃	1.0	安山岩
〃	〃	(15.5)	〃	D 2	刃器	13.2	
D43	〃	(12.7)	〃	D 4	〃	17.5	安山岩
D56	〃	(110)	綠泥變岩	D12	〃	31.0	サヌカイト
D84	〃	(37.6)	凝灰岩	D44	〃	21.0	

出土遺構	器種	重量(g)	石材	出土遺構	器種	重量(g)	石材
D46	刃器	15.4	サヌカイト	D20	紡錘車	23.3	土製
D128	〃	7.5	〃	D29	〃	23.0	〃
D132	〃	36.4	安山岩	D47	〃	(13.1)	〃
D197	〃	36.3		D42	〃	21.6	石製
M1	〃	14.6		D84	〃	24.5	土製
D43	砥石	115	砂岩	D99	〃	26.1	〃
D52	〃	27.9	〃	D111	〃	32.5	〃
D63	〃	73.9		M13	〃	24.0	〃
D206	〃	218		〃	〃	41.3	〃
M15	〃	256		M15	〃	38.7	〃
D178	凹石	502		表採	〃	18.3	〃
D4	紡錘車	41.4	土製	D12	投弾	(9.5)	〃
D7	〃	39.5	〃	D43	〃	12.4	〃
D12	〃	22.8	〃	D116	〃	13.8	〃
〃	〃	21.9	〃	D134	〃	18.4	〃
〃	〃	24.1	〃	M21	〃	18.9	〃
D13	〃	35.4	〃				

表9 VI区東出土石器・土製品器種別数量一覧

出土遺構	器種	蛤刃 石斧	方柱 石斧	扁平 石斧	扁平 磨製石斧	石庖丁			石 鎌	石 劍	石鏃		搔 器	石 錐	磨 石	敲 石	砥 石	凹 石	紡 錘 車	投 弾	その 他の 台形	旧 石器 ナイフ									
		玄武岩	その他	状石	刃石	磨製石	頁岩質	凝灰岩			石鏃																				
		玄 武 岩	武 岩	他 斧	石 斧	磨 製	質	凝 灰	岩	他	石鏃																				
D-2											1																				
D-4				1							1									1											
D-6	1																														
D-7																					1										
D-11	1																														
D-12		1			1	1				2	1									3	1										
D-13											1									1											
D-20																				1											
D-29																				1											
D-47																				1											
D-40	1																														
D-41	1																		1												
D-43								1											1			1									
D-44											1																				
D-45	1	1																													

出土遺構	器種	蛤刃石斧	方柱状石斧	扁平片刃石斧	扁平磨製石斧	石庵丁			石 鎌	石 劍	石鏃		搔 磨 器	石 石	敲 石	砥 石	凹 石	紡 錘	投 彈 車	そ の 他	旧石器			
		玄武岩	その他の岩	頁岩質	凝灰岩	その他の岩					磨 製	打 製									台形	ナイフ		
D-46												1					1							
D-52																		1						
D-55												1												
D-56						1																1		
D-57											1													
D-63																1								
D-84	1				1															1				
D-97											1									1				
D-99																			2					
D-111																			1					
D-115					1																			
D-116						1													1					
D-128											1													
D-129																				1				
D-132											1													
D-134								1											1					
D-146																				1				
D-166						1				1														
D-167								1																
D-171		1																						
D-178											1						1							
D-206	1																1							
D-221																			1					
M-1						1					1				1									
M-2				1																				
M-4		1					1																	
M-5											1								1					
M-13							1												1					
M-15																			1					
M-21																			1		1			
表採																		1						
計	6	2	3	2		1	3	7		2	2	5	9	1				6	1		17	5	5	1

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 62	登録番号 13

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－15－

昭和63年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

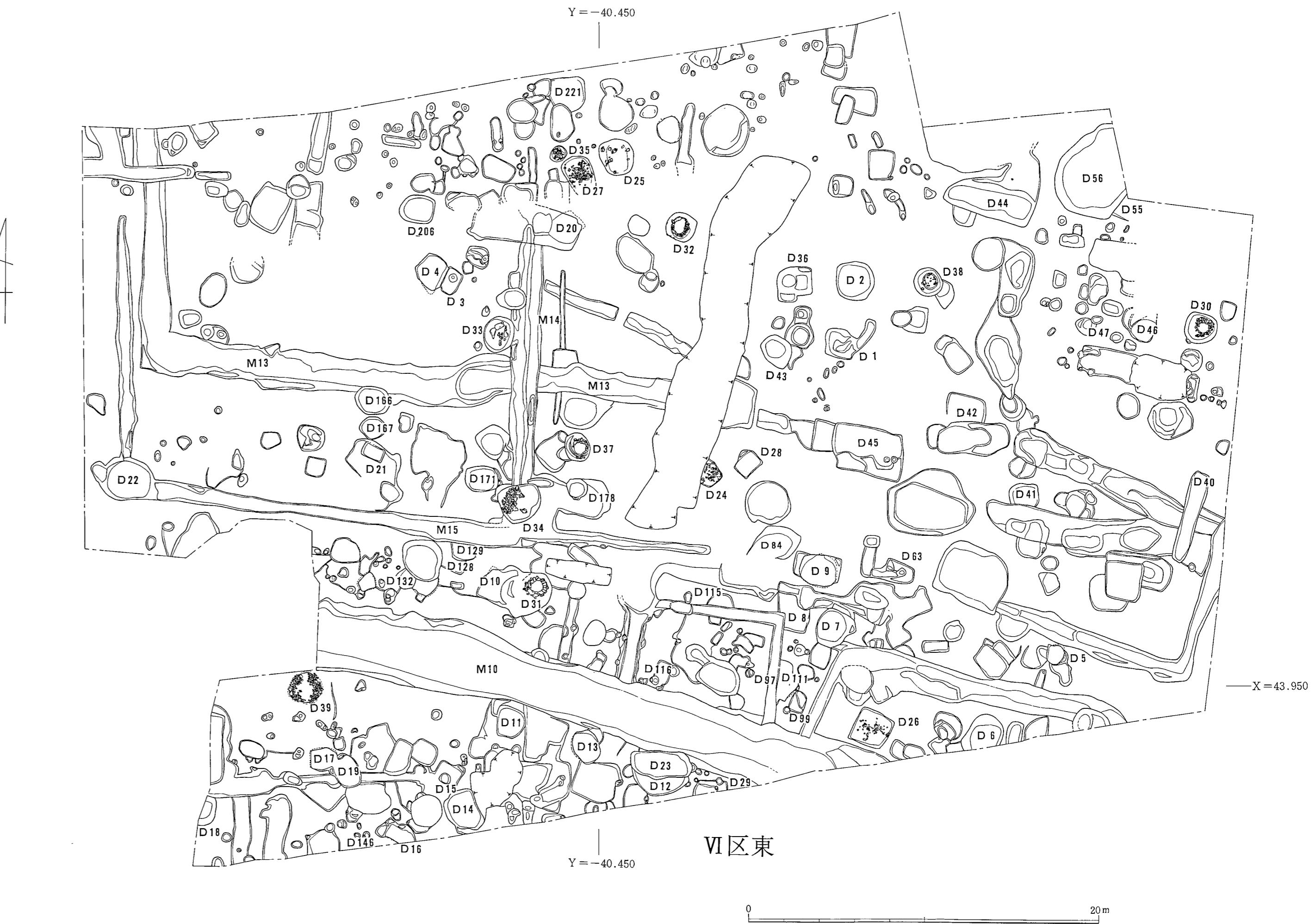
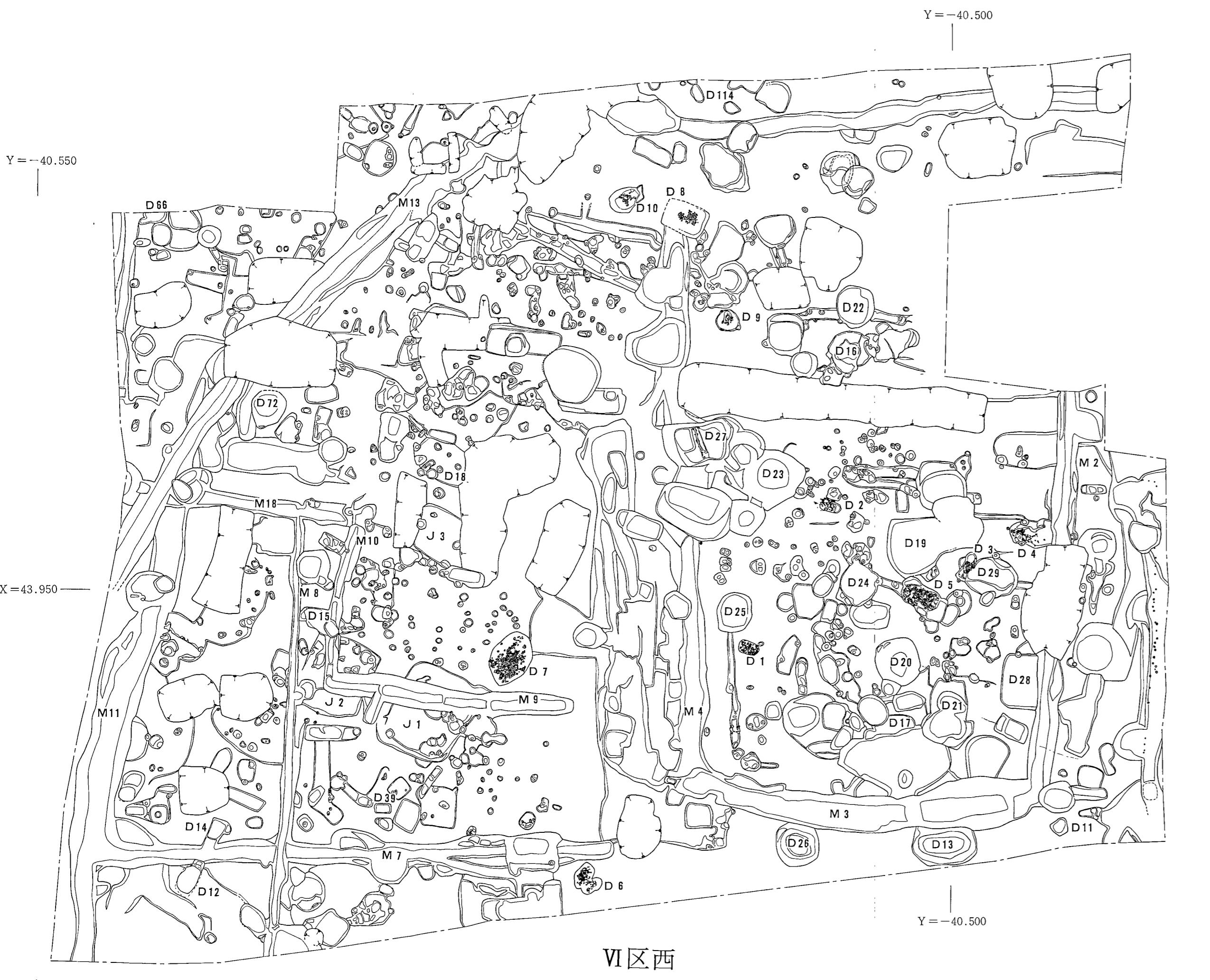
印刷 青柳工業株式会社 印刷部

福岡市中央区渡辺通二丁目9番31号

# **九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告**

- 付図 1 大板井遺跡VI区遺構配置図 (1/200)**
- 付図 2 大板井遺跡VII区遺構配置図 (1/200)**
- 付図 3 大板井遺跡 I ~ III区・V ~ VII区の位置と  
遺構配置略図 (1/1,000)**

**福岡県教育委員会**



付図1 大板井遺跡VI区遺構配置図(1/200)



付図2 大板井遺跡VII区遺構配置図(1/200)



付図3 大板井遺跡 I ~ III区・V ~ VII区の位置と遺構配置略図(1/1,000)